
教授とシャンバラの時計

謳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

教授とシャンバラの時計

【Zコード】

Z5701Q

【作者名】

謳

【あらすじ】

変わり者と名高い歴史研究家のエイン・アンダーソン教授と、メイドで助手のヴィヴィアン・トーマスの、奇妙で切ない恋のおはなし。イギリス、フランス、スコットランドを舞台に、脱出ゲーム風味な話に、歴史の勉強、哲学から量子力学まで入り混じって、正直大学も出ていない、総て独学な私には荷の重いネタでんこ盛りでお届け。この人誰だつけ?と自分で思つてしまふくらい、のんべんだらりん更新です。

序章（前書き）

注

この小説は、国内から一歩も出たことのない筆者によって書かれています。

そのため、ネットで入手出来る情報を整理し、組み立て、盛り込んでいる関係で、参考サイトと表現や文面が似る可能性があります。極力、自力表現方法を模索し、加工した上で書かせていただいてはありますが、無償小説という事で、ご理解をいただければ幸いです。

主に、Wikipediaが参考サイトとなっています。

歴史年号、地名表記などは特に、WikipediaとYahoo!マップに由来します。

シャンバラ

チベットに伝わる伝説上の秘密の仏教王国。中央アジアのどこにあると言われる。

元はイングランドのヒンドゥー教のプラーナ文献やタントラ仏教の『時輪タントラ』に登場する理想郷の名。

ヒンドゥー教では、ヴィシュヌ神のアヴァターラであるカルキの治める国をシャンバラと呼んだ。

一七五五年。

政治思想家のモンテスキューが死に、スコットランドのヒーリンバラ市内でも、その話題をちらほら耳にする。

つい四十年前にイングランドとの合併によって揺れたスコットランドも、今や誰が死んだ、誰が結婚したという程度のゴシップを話題に出来るほど、落ち着きを取り戻している。

街の名に因むヒーリンバラ公の名は、二十九年前に王太子ジョージ一世の長男フレデリックに授けられたが、そのフレデリックも最近は体調が芳しくないと街の噂で聞く。

そんな街の喧騒を尻目に、世界地図を片手に、神話を読む。こんな生活を始めて、どのくらい経つだろう。

歴史学者で大学教授のエイン・アンダーソンは、山積みにした資

料で埋まつた自室の床に座り込み、書物を読み耽つていた。

部屋は机とベッド以外足の踏み場もないほど本で埋め尽くされ、机上ももう少しで本で埋まるという状況にあった。

ベッドは眠れないと困るため、物は置かないよう心掛けている。屋敷には他にも部屋はあるが、他の部屋に書籍を取りに行く時間が惜しいので、全てを自室に入れ、積んだ。

三十も半ばだと言つのに独り身で、その上一日読書を始めると、病的なまでに没頭する。

この辺で一息、と息吐くはいいが、読書を始めてから三日三晩経つて、いるなんてことも珍しくない。

この癖が祟つて、メイドを雇つても長くは続かず辞めて行つてしまつ。

だが自分独りでは絶対に、読書中に餓死などという奇妙な結末を迎えるに決まつていて。

だからメイドは必要だった。

そんな事を考へて、傍から、一昨日の晩、何人目かのメイドが辞めて行つた。

教授仲間に報せを出すと、一日で代わりのメイドを用立ててくれた。

そのメイドが、今日来るらしい。

が、約束の時間を三十分ほど過ぎたが、一向に屋敷の扉が叩かれる気配はない。

否な噂でも広まつていて、『エイン・アンダーソンの家では働くな』などと言われているのかも知れない、とエインがほくそ笑んだ時、扉がトントン、と一度ほど鳴つた。

「はいはい」

よつこらしよと立ち上がり、部屋を出、扉の前でオールバックにまとめた髪をひと撫でし、ずれた眼鏡を直して、玄関を開ける。と、目の前に書類がひらひらとしていた。

そう書かれた書類の向こうで、顔を半分だけ出し、エインを見つめる女性がいた。

「教授Aのお屋敷はこちらでしょうか？」

「抑揚のない、しかしあつきりとした声で、女性が言った。

教授Aとは、エインのあだ名だ。

教授仲間の誰かがつけたらしく、いつの間にかこう呼ばれていた。

エインもアンダーソンもAで始まる事から、命名されたそうだ。

「新しいメイドさんかな？」

エインがにやりと笑うと、女性はこくりと一つ頷いた。

「サンアッシュ教授のご紹介で参りました。

ヴィヴィアン・トーマスと申します。」

ヴィヴィアンと名乗った女性は、そこでやつと書類を下に下ろした。

顔を露わにしたヴィヴィアンは、エインを真っ直ぐ見据えた大きな目が印象的な、品の良い顔立ちをした女性だった。

髪を二つに結い、さらに編み込んで輪にし、ベージュ色のリボンでまとめていた。そのリボンと同じものが、濃いグリーンのハイネックドレスの首元にも巻かれている。

歳はエインよりずっと若いのだろうか。

無表情な顔立ちとは対照的に、頬が健康的に赤らんでいる。

暫し見惚れないと、ヴィヴィアンが口を開いた。

「教授。

中に入つてもよろしいですか？」

「あ、ああ、こめんよ。

取り敢えず、キミの部屋へ案内しよう。」

エインはヴィヴィアンが足元に置いていた大きなボストンバッグを持ち上げた。

ヴィヴィアンが少し慌てる。が、表情は無表情のままだった。

「プロフ…」

「いいよ。メイドと言つてもね、力仕事とか任せんつもりないの。美味しい食事と、美味しい紅茶と、ボクが本に没頭して餓死しそうなときに、肩を叩いてくれれば、それでいいのさ。」

エインはおどけながら言つと、一階への階段を上がって行つた。

ヴィヴィアンに、屋敷の中でも一番見晴らしの良い、一階の部屋を宛がう。

部屋に一歩入つたヴィヴィアンは、相変わらず無表情ながらも、多少動搖した顔をし、エインを見上げた。

ヴィヴィアンの視線に、言わんとする事を察したエインは、ヴィヴィアンに一つ頷いて、にこりと笑つた。

「ボクは下の方が都合が良くてね。

ただ、この部屋が空き部屋なのは勿体無いし…。

遠慮なく使つてくれ。」

そう言つて、ヴィヴィアンの荷物をベッドの上に置いた。

「有難うございます。」

ヴィヴィアンは礼を言つて、窓辺に歩み寄り、外を眺める。

エインの屋敷はエディンバラの郊外の高台に建ち、緑に囲まれた穏やかな風景に包まれている。

それでいて市街地からもそれほど遠くはなく、夜には街の灯りが一望出来る、大変に眺めのよい屋敷として有名だつた。

時折、金に物を言わせて屋敷と敷地を買い取りたいと申し出る資産家が屋敷を訪れるが、エインはこの場所を手放す気はなく、エインの仕事柄の所為でごり押しする事も出来ず、資産家は項垂れて帰

つて行くのが落ちだつた。

この屋敷は、エインがエーティンバラへ越す事にした際、ヴィヴィアンを斡旋したサンアッシュという教授仲間に紹介された物件で、当時は誰の買い手も付かない、只も同然で買い叩かれていた廃屋敷だった。

しかしエインが住み始めてから、途端に辺りの樹木が整備され、あつという間に絶景ポイントとなり、高騰した、というのが成り行きである。

一連の流れを、紹介したサンアッシュも見る目が無かつたと悔しがり、多忙の中でも顔を合わせることがあれば、エインにちくちくと恨み節を叩いては、エインににやりと笑い返されている。

「夏場は日当たりが良すぎて、暑いくらいなんだけどね。

そういう時は、リビングを使ってくれればいいから。

この屋敷では、好きなように振舞つてくれて構わないよ。」

エインはそう言つて、部屋を出て行つた。

残されたヴィヴィアンが、エインの後を追つよつて部屋を駆け出ると、エインは階段を下りていく途中だつた。

うん、と腕を上げ、伸びをしながら、ゆっくりと階段を下りていくエインの背中を、ヴィヴィアンは静かに見つめた。

教授。

私は後何度、あなたのその背中を見送る事になるのでしょうか…。

荷物は少ない。

普段着るドレスと、めかし用のドレスセツト、前掛けと、ブラシと、髪や体を洗うソープ、数枚の下着と、主の癖をメモするための小さな手帳、思い出の本。

ドレスの皺を丁寧に伸ばし、クローゼットに仕舞う。

前掛けを着け、ブラシとソープ、本はベッド脇の棚に置いた。

手帳は枕の下に隠し、下着はバッグの中に残しておいた。クローゼットには、拭き掃除をしてからでないと、仕舞う気になれなかつた。

部屋の中が少し埃っぽいので、ヴィヴィアンは窓を開けた。

高台にあるので、心地よい風が沢山入ってくる。

思いつきり吸い込むと、縁の匂いが体中を駆け巡る。

ヴィヴィアンは、何度も深呼吸をしながら部屋の換気をしたあと、窓を閉め、部屋を出た。

階段を下りながら、辺りを見回す。

外観よりこじんまりとした屋敷だ。

エイン・アンダーソンは、知る者ぞ知る歴史学者で、ヒテインバラでもそれなりに有名だった。

若くして歴史調査のため世界中を回つては、手に入れた資料を自宅に持ち帰り、或いは現地で綿密な調査をし、興味深い研究書を發表する。

エインの唱える説には否定論者も少なくないが、概ね肯定的、好意的に学会でも受け入れられていると聞く。

歴史の中でも文明や神話を専門とする学者で、研究書に負けず劣らず、彼自身も興味深いと言われている。もちろん、好意的な意味で、だ。

だから、学会での地位もとんとん拍子に上がり、収入もそれなり

にあるはずなのだが、それにしてもこの屋敷は小さかった。

「食事の時間は、キミの好きでいいから」

今後の仕事内容などの確認に、エインの部屋を訪れたヴィヴィアンに、エインはにこりと笑って答えた。

エインは床に胡坐を搔いて座り、何冊か本を開き放しにして自分で分を囲うようにして並べていた。

それだけでは足らないのか、さらに新しく作ったと思われる本の山が、エインの脇に聳え立つ。

「三食お摂りになりますか？」

ヴィヴィアンが問う。

無表情なのは、癖のよつだつた。

「うーん、そうだね。

ボクは朝早いけど、夜も遅いし、それで三食食べられれば最高かなあ。」

エインが答えると、ヴィヴィアンが頷いた。

「畏まりました。」

手短に答え、ヴィヴィアンが退廻しきつとした時、エインが呼び止めた。「ああ、ヴィヴィ。」

呼ばれ、ヴィヴィアンが振り向く。

「はい」

「今日はいいよ。

それより、これからフランスへ向かわなければならぬので、キミも支度をしてくれないか

手にしていた本を、ポン、と闇じ、エインが「よつじこしょ」と言いながら立ち上がる。

「私も、ですか？」

「うん。

一緒にフランスに行こう。

美味しいワインが飲めるよ」

「じつと笑って、エインが散らかった机の上から、手紙を手に取り、ひらひらとさせた。

「ちょっとお呼ばれしててね。

是非キミにも来て欲しいんだ。」

机に凭れながら、エインがヴィヴィアンを見つめ、微笑んだ。ヴィヴィアンはエインと見つめ合い、小さく肩で溜め息を吐く。屋敷に着いて早々、フランスへ行く事になるとは…。荷物を解くのではなかつた。

「畏りました。

出発は、何時でしようか?」

「うんとね…」

エインがスラックスのポケットから、懐中時計を取り出し、蓋を開けた。

ヒップ・ハンガータイプのスラックスのポケットは、何が入っているのか、こんもりと膨れ上がっている。

時計の針は午後の一時を指していた。

「実は、今から一〇分後くらいに、迎えの馬車が来ることになつている。

支度はそれまでに頼むよ。

ああ、着替えとかはあまり気にしなくていいからね。

向こうで買えばいい。」

パチンと時計の蓋を閉め、エインが言った。

「…はい…」

ヴィヴィアンは、呆ながら返事をして再度頷き、部屋を出た。自室に向かい、ボストンバッグに必要なものを詰める。着替えの心配はないというので、出かけ用のドレスは置いておいた。

そして早々に部屋を出、玄関へ向かうと、エインも荷造りを終え

て出てきたところだつた。

「お、流石、早いね。」

エインがにこりと笑う。

改めて笑う、と言うより、元々笑い顔なのだ。
にこにこと愛想のよい顔に、小さな丸眼鏡が一層コケティッシュだ。

「荷解きしていませんでしたから……」

ヴィヴィアンが誤魔化すと、エインがうううん、と頷いた。

「取り敢えず、出て置こう。」

そう言つて、エインが玄関を出た。

ヴィヴィアンも続く。

エインが扉の鍵をかけながら、

「この造りの家じや、鍵なんかかけても意味なさそうだよねえ」と言つた。

ヴィヴィアンは返事をせず、辺りを見回す。

着いた時も思つたが、何と辺鄙な場所である事か。

見回りの警官でもいない限り、空き巣の絶好のターゲットだ。

「でもね、ボクの仕事柄のおかげで、この辺、不定期に見回りが来てくれるこことなつててね。

有り難い事だねえ」

他人事のように言つエインを、ヴィヴィアンが怪訝そうに見た。

エインは鍵をかけ終え、足元に置いた鞄に腰掛けた。

エインの鞄は高級な牛革張りの四角いトランクで、革の焼け具合にも、気を遣われている様子が窺えた。

かなり革が焼けているので、相当使い込んでいるのだろう。

しかしその分手入れを施しているのか、革の傷みは見受けられない。

「あとで、ボクの仕事を説明しよう。」

エインは、「船は暇だからね。」と付け加えた。

「はい」とヴィヴィアンが答えると、エインはヴィヴィアンを眩し

そうに見上げた。

暫し、見つめ合つ。

ヴィヴィアンの瞳は、深いブラウンで、見つめるだけで吸い込まれそうだ、と、エインは思った。

エインの瞳は、透明度の高いグリーンで、穢れを知らぬ、人知れぬ湖の湖面のようだ、と、ヴィヴィアンは思った。

だが、お互いその向こうにある思惑には気付く事はなく、エインが視線を外したのを期に、ヴィヴィアンも目を逸らせた。

不意に、ヴィヴィアンの背中で、馬の声がした。

ガシャガシャと車輪の音が聞こえ、振り返ると、緩やかな上り坂を登つてくる、一台のクーペが見えた。

「プロフェッサー・アンダーソン！」

時間通りでさー…

大声で言いながら、運転手が手を振つた。

ずいぶん愛想のよい運転手のようだ。

「ヘンリーさん！　さすが！」

どうやら、運転手はヘンリーといつらしい。

ヴィヴィアンが眉を顰めていると、エインも大声で答えた。

「この辺りは野犬が少ないので、馬車に護衛犬はいなかつた。近くまで来たところで、またヘンリーが大声で言つた。

「おやあ！」

また新しいメイドさんかい！」

何だか見世物のように言われ、ヴィヴィアンが小さく眉間に皺を寄せた。それを見たエインが、あははと笑う。

「この子は大事な子だからねえ。

あんまり怒らせないでね」

言われたヘンリーが、ヴィヴィアンに向かつて、キャップをくいつと持ち上げて挨拶をした。

「悪い悪くしたかい？　すまないね。」

見ると、ヘンリーはずいぶんと年老いた運転手で、深く刻まれた

顔の皺が、余計に笑顔を愛嬌あるものに見せていた。持ち上げたキヤップから覗いた頭は禿げ上がって、巻き髪の白髪がそこはかとなく可愛らしかった。

人が悪い訳ではなさそうで、ヴィヴィアンは「いいえ。お構いなく」と言つて表情を元の無表情に戻した。

クーペに揺られ、一路リースの港へ向かう。リース港から南下し、ロンドン港で休憩を挟み、目先目的地はドーバー海峡を渡った先、フランスのカレー港だ。

道中も本を手放さない、隣に座るエインを、ヴィヴィアンは興味深げに見つめた。

ヴィヴィアンの視線に気付いたのか、エインが本から目を離さず、口を開いた。

「ボクの事は、どこまで聞いてるかな?」
そう言って、ペラリとページを捲る。

目を合わせる気はないようだ。

「プロフェッサー・サンアッチからは、歴史学者で、エティエンバラ市内の教育機関を回る、客員教授とお聞きしております。

歴史学における論文は、他の学者たちの追随を許さず、独創的で、魅力的な文体は読み手を惹き付け、離さない。

『いつそ、物書きにでもなればいいのに』と。」

ヴィヴィアンが言うと、エインがやっと本から目を離し、大笑いをした。

いつぞや、自身もサンアッチに同じ事を言われたのだ。

「どのような研究を?」

ヴィヴィアンが訊ねる。

エインは笑い足りないのか、むふふと含み笑いをしながら、「う

ーん」と言った。

「”先読み”とか、かなあ……」

意味深に言つ。

「”先読み”?」

「うん。まあちょっと違つた。

例えばさ、この間のスコットランドとイギリスの合併ね。

あのとき、この後どうこう事が起ると、混乱になるだろ？、といふのを予測したりね。

今起こうしている自然現象は、あと何年くらいでこうなる、とかね。

先だけじゃなく、今こうこうことがあつたところとは、きっと何年前にはこれはこういつ意味があつたんだろ？、とかね。」「

エインが眼鏡を外し、ハンカチで拭いた。

度はそれほどきつくないのか、レンズは厚くもなく、歪みも少なかつた。

「歴史の観察者」つていう感じだね

「観察」…。」

「うん、観察」

言いながら、「観察」といつか…と、自身で修正を始める。

「監察」、のほうが近いかも知れないな。」

エインは小さな声で呟いて、眼鏡をかけた。

その訂正にどんな意味があるのか、ヴィヴィアンにはよく解らな
いのか、怪訝な顔をする。

そんなヴィヴィアンを横目に見て、エインは再度含み笑いをした。

「時折、風変わりなこのボクの論文を見て、歴史がそう動かないよ
うに軌道を変えようとしてくれる偉い人がいてね。

そういう人たちからしたら、ボクは“監察”、つまり“監督”や

”演出”なんじゃないか、と。

まあそんな感じ。」

笑いながらもどうでもいい事の様に言い、エインは閉じた本をま
たパラパラと捲った。

「歴史を動かしているつもりは、ボクはない。

ただ、これだけはこう動いてはならないだろ？、みたいな事象は
存在する。

それを、気付いているかい？解らない、見も知らぬ人に、ち

よつと訴えたりしてみる。

そんな仕事だよ。」

「評論家みたいな仕事でもあるね」と付け加えて、エインはまた本に見入った。

だが、数ページ読み進めたところで、また本を閉じてしまった。

「でも本当の仕事は、学者でも教授でもないんだけどね」

「？」

見つめ続けるヴィヴィアンを視界の隅に置きながら、エインは馬車の窓に頬杖をついた。

窓の外では、風景が滑るように流れていく。

「本当の仕事は、これから行く、フランスでの仕事。」

そう言つて、手ぶらな左手でポケットを探り、手紙を取り出した。

ヴィヴィアンに手渡す。

「読み給え。」

言われて、ヴィヴィアンは丁寧に手紙の封を開けた。既に封蝋自体は接がれていて、容易く封筒は開いた。

中には、三枚のリーフが折り畳まれていて、開くと清楚な文面が現れた。

「親愛なる、エイン様…」

随分と御無沙汰しております。

御変わり御座いませんか？

教授の楽しいお噂は、海を隔てたフランス、ボルドーの郊外にも伝わつて来ております。

数年、御挨拶を怠けている間に、今年初め、父が亡くなりました。

母も既に亡くなり、屋敷には私と、召使が数名居るのみとなつてしましましたため、屋敷の整理を致しておりました処、不可解な内容の遺言状が見付かりまして、今回このような御報せを差し上げま

した。

相続に関しては、既に弁護人と見届け人の証明する遺言状が有りました、別段問題では御座いませんが、その状には、父からエイン様へ宛てたものも同封されておりましたので、ご連絡申し上げました次第です。

是非、何事かフランスへお越しになる折に、屋敷へもお立ち寄りくださいませ。

「…エイン様にお会い出来る日を、心待ちしております。

アン・ベルトワーズ。」

読み終わり、ヴィヴィアンが「…ベルトワーズ…」と繰り返した。

「心当たりが？」

エインが訊ねる。

「はい。

サン・アッシュ教授のご友人で、手紙の通り今年の初めに亡くなつた方の中に、確かベルトワーズ伯爵という方が…」

ヴィヴィアンが答えると、エインは一つ頷いて、ヴィヴィアンを見た。

「当たり。

アンは、ベルトワーズ伯爵の一人娘で、御歳二二歳。

ベルトワーズ伯爵は享年六〇歳。今年の初めに、患つていた心臓の病が悪化して、他界された。

ボクもロンドンでそれを耳にはしていたけれど、なかなかフランスへ足を運ぶ機会がなくてね…。」

そう言って、エインが窓の外を眺めた。

横顔は、若干の憂いを帯びている。

「ボクの恩師の一人でね。

生前、まだ教授なんて肩書きを貰う前の話だが、大変に貴重な書籍ばかりを集めた館をお持ちでね。

突然お邪魔して、懇願して、数日滞在して、読ませてもらつた事があつたんだ。

見知らぬ他人だというのに、大層可愛がつてくれてね…」
エインはそこで言葉を切つた。

耽る物思いの深さはヴィヴィアンの知るところではないが、恐らく、氏への思い入れは深いものだったと想像出来る。

「今のボクがあるのも、氏のお蔭と黙つて、大袈裟じやないんだ」
そう締めくくつて、エインは頬杖を解いた。

手に持つていた本を無造作に荷物の上に投げ付け、ヴィヴィアンから手紙を取る。

「不可解な遺言状とありましたね…」

ヴィヴィアンが訊ねると、エインの表情が少し明るくなつた。

「氏は、昔からなぞかけがお好きでね。

きっと、変な遺言状なんだろう…」

エインはそう答えると、今度は手紙を本の上に投げ置き、頬杖をついて窓の外に見入つてしまつた。

リースの港に着いた頃には、すっかり日が暮れていた。ここから一晩かけて、一旦船でロンドンへ向かう。

港には一艘のガレオン船が停泊していた。

深い茶のニースが美しく輝く、大きな船だが、吃水の浅いこのガレオン船は、速度も速く、積載量も多いので商船として人気が高いが、同時に転覆し易い危険も孕む。

ガレオン船の向かいには、その四分の一ほどの大きさのキャラック船も停泊しており、安全性の高さならこちらのほうが勝つているのだが、敢えてこの船を取つたのには、エインなりの拘りがあつた。

男の独り旅ならキャラック船で一晩明かすことも構わないのだが、

ヴィヴィアンがいることで、そうも行かなくなつた。女性がいる以上、きちんとした船室を取りたかったのだ。

船員見習いの子供に荷物を渡し、甲板へ上がる。

船の甲板には、折々の乗客があり、見送りの家族や友人に手を振つていた。

エインとヴィヴィアンは、人ごみを縫つて客室へと向かう船員見習いの子供に続き、船内へ入つた。

子供が、一つのドアの前で止まる。

「サー。こちらがお部屋です。」

「ありがとう。」

そう言って、予約していた部屋のドアを開ける。子供が先に中に入り、荷物を部屋の隅に置いた。

「では、ごゆっくり」

と言つて、出て行こうとした子供の手を、エインが握つて引き止めた。

「この船では、チップは違反だつたっけ。」

「ごく稀に、チップを乗船違反とする船がある。」

切欠となつたのは、とある富豪が一隻の旅客船に乗船した折、クルーの一人に法外なチップを渡した事で、他のクルーがその客ばかりに愛想を振り撒き、サービスが偏り問題になつた事だった。

この船も違反と聞いていたのだが、

「降りるまで頼むよ。」

そう言って、エインは子供の手のひらに、僅かな枚数の紙幣を乗せた。

困惑して見上げる子供に、エインが人差し指を口にやり、一つウインクをする。

子供は、ぱつと表情を和らげ、深く一礼して部屋を出て行つた。

「未だにこの行為が、よく解らなくてね……」

ドアの向こうで、子供の足音が聞こえなくなつてから、エインが呟いた。

ヴィヴィアンが首を傾げると、エインは固く狭い寝台に横になり、天井を仰いだ。

「恵んでいる訳じゃないんだ。

ほんの短時間でも、仕事を依頼する、といつ気持ちなんだよね。でも、恵んでいるようにしか見えない。

ボク自身は、そこはかとなく厭な気分なのに、彼にとつては、とても喜ばしい事なんだ。」「

「格差の所為ですか？」

ヴィヴィアンが訊ねる。

「違うね。

もつとこいつ、本質的なものだと思つ……。」「

溜め息混じりにエインが言つ。

そう古くない嗜みではあるものの、チップについては最早常識の範疇にまで風習として息衝いてしまつていて、今更疑問に思つ事自体が珍しい。

「ボクは偽善者なのかもね。」「

さらりと言つて、横目でヴィヴィアンを見た。

ヴィヴィアンは、どつ答えを返したものか考えあぐねて、眉間に皺を寄せた。

「ボクは少なくとも、金に困る生活はしていない。

確固たる職業にも就いているし、社会的地位も得た。

さらに上方々からは可愛がつて貰い、巣戻もしてもらえる。チップをやる事で厭な気分になるのは、ボクがその事に胡坐を擡いでいる証拠なんぢやないか、と思うときもあるんだよね。」「

頭の下で組んだ両手の指を、そもそもと遊ばせて、エインはもつ一度溜め息を吐いた。

「ま、大抵は、渡すときは何も考えてないんだけどね……。」「

特に格差を意識した思考でもなければ、己を過信した故の疑問でもない、しかし答えの出ない疑問を、エインは山ほど抱えているのかもしれない、ヴィヴィアンは思った。

なまじ他人より頭の回転が速く、多智だからこそ、持ち得る悩みなのだろう。

ヴィヴィアンは、エインの向かいにある寝台に越し掛け、丸い小さな窓から外を見た。

灯台の明かりが、深い闇と化した海の上を、踊るように回る。風が強いのか、時折船が大きく揺れた。

出港が近いようで、部屋の外ががやがやと騒がしくなっている。ヴィヴィアンはドアを一度見やり、再び窓に目を向けた。その仕草が、そわそわと落ち着かない様子に見えたのか、エインが薄く目を開けてヴィヴィアンを見た。

「寝給え。横になるのが苦であれば、座つたままでいいから。晩は意外と長いよ。」

「はい」とヴィヴィアンは頷き、何の衒いもなく寝台に横になり、シーツを被つた。

が、不意に上半身だけむくじと上げ、窓際にある燭台の蠟燭を見つめた。

「消していいよ。」

聞かれるより早く、エインが答えた。

ヴィヴィアンは「はい」と返し、蠟燭の火を消した。

再び横になり、ヴィヴィアンは、小さく息を吐いた。

決して寝心地の良くない寝台で、どこまで熟睡が出来るものだろうか。

しかし、ロンドンについた後も、まだこの手の寝台のお世話にはなる。さらにカレーに着いてからは、ボルドーまで馬車に揺られなければならぬ。

長い道程だ。

億劫な訳ではないが、決して心ときめく旅でもない。だから眠れるときに眠つておかないと、こざと言つとき、何の役にも立たなくなってしまう。

ヴィヴィアンはもう一度息を吐いて、目を閉じた。

襲つてこない眠気を、自ら呼び寄せようど、意識を散乱させる。暗闇の中で瞼を閉じ、さうに作った闇に、色とりどりの塵が舞つた。

目が疲れてこるのであらうか。

長く使っていなかつた部屋に舞う埃に、朝陽が反射して降り注いでいるように、その塵はいつまでも舞い続ける。

「ヴィヴィ

突然声をかけられ、ヴィヴィはぱちっと目を開けた。

「はい」

ヴィヴィアンが返事をすると、Hインがくすくすと笑つた。

「やつぱり眠れないか

「そうですね。気が昂ぶつている訳ではないのですが……」

「この寝台の所為だな

Hインが面白わかつて囁つた。

「済まないね。

屋敷でゆつくり休む暇を取れてやれなくて。」

「お気になさいませんよつ。

そう答えた後、ヴィヴィアンは小さな声で、さうに続けた。

「解つておりましたから。」

この言葉が聞こえたのか否か、Hインは「わうだね。」と答え、あつといつ間に寝息を立ててしまった。

ヴィヴィアンは、好くもこの寝台で眠れるものだと感心し、暗闇で声なく、独り笑つた。

「ヴィヴィ。」

すれ違ひ様、声をかけられた。

誰かと振り返れば、同期のショーンだった。

「決まつたんだって、『出発日』？」

本当にいいのかい？

行けば、『帰れなくなつてしまつ』のに…。」

そう言つて、昇つたばかりの朝日を背負い、ヴィヴィを見ながら、ショーンは目を細めた。

溢れんばかりの白い光の中で、ヴィヴィアンは何にも動じない無表情で頷いた。

「ええ。

ショーンは、記録係だったわね？」

ヴィヴィアンが言つと、ショーンが申し訳なさそうに頷いた。

「君より、損も苦労も危険もないポジションだよ。」

「良かつたじやない。

結婚したばかりで一度と帰つて来られない任務なんて、哀し過ぎるわ。」

抑揚のない、しかし決して感情がない訳ではない口調で、ヴィヴィアンがゆつくりと言つた。

ショーンは、先月結婚したばかりだった。

妻となつたのはショーンの幼馴染の女性で、幼少の頃から変わらぬ愛を貫き、先月、ショーンの施設研修明けと同時に、夫婦となつた。

「既婚者は、自動的に『監視役』リストから外される事になつていいからね…。」

ショーンが申し訳なさそうに言い、下を向いた。

当然と言つ顔をして、ヴィヴィアンはもう一度頷いた。

自分が就いた任務には、候補者リストと言つものがあつて、そこに名を連ねるのは、任務遂行能力が足りると判断された者のうち、自身、介護義務のある家族を持たぬ者、扶養者を持たぬ者である。

候補初期段階でリストアップされていても、結婚、或いは止むを得ず任務に就けない状況に陥つた者は、自動的に、無機質に候補から外される。

「当然だわ。

それに…」

ヴィヴィアンは表情を変えずに言つた。

「あの候補者の中なら、例えあなたが残つていたとしても、私が選ばれていたでしょうから。」

犠牲にするものがない者の中で、さうに求められるのは、任務遂行能力である。

今度の候補者として上がつた者の中では、ヴィヴィアンのその能力の高さはばば抜けていた。

誰が残り、誰が抜けていようが、ヴィヴィアンに決まつていたようなものだつたのだ。

「君は優秀だからね…」

「そんな事ないわ。」

ショーンの言葉を、ヴィヴィアンはぴしゃりと遮つた。

「何も捨てるものがないだけよ。」

吐き捨てるヴィヴィアンを、ショーンは少し哀れんだ田で見つめた。

田の前の同僚はいつでもそうなのだ。

幼い頃、両親が事故で死に、親戚や兄弟がいなかつたヴィヴィアンは、軍管轄下に置かれた養護施設に引き取られた。

そこでは、基礎教養を始め、将来的に軍部に席を置ける者、イコール軍人として必要な、在りとあらゆる知識と技術を身に付けさせられる。

何故軍管轄施設に引き取られたかと言えば、それは偶然に過ぎな

い事で、ヴィヴィアンの出身地が、軍関連地だつた事、ただ一つだつた。

ショーンはまるで正反対の生い立ちで、軍官僚だつた両親に十分な愛情を注がれて育ち、使命感の元に、自ら軍部に身を置いた。

その先でヴィヴィアンとショーンは出会つた。

ヴィヴィアンは、何故か笑顔を見せなかつた。
笑顔ばかりではない。

涙、悔しさ、哀しさ…。

全ての感情をどこかに置き忘れてしまつたかのよつに、眉一つ動かさず、その無表情を徹底していた。

しかし、心は澄み、優しく、豊富な知識とチャーミングな顔立ちのお蔭か、彼女が孤立する事はなく、常に誰かが傍にいた。だから、哀しいのだ。

もう一度と『会えなくなつてしまつ』事が。

「ヴィヴィ…」

ショーンが呼ぶと、ヴィヴィが片手を上げた。
「イトダ博士に呼ばれているの。

ごめんなさい。」

そう言つてくると踵を返し、行つてしまつた。

ショーンは、ヴィヴィアンの背中に、ほんの少しの心細さを見た気がした。

これ以上話してしまえば、きっと未練が残つてしまつのだつ。拒否出来ない任務だ。

だから、決まつてしまつたが最期、どうする事も出来ない。

軍人としてのプライドであつ。

覚悟の元で、平静を装つているのだ。

凛々しくもあり、哀しくもあり、そして、頼もしくもあつた。

ショーンがヴィヴィアンを施設で見たのは、これが最期になる。

ゆらりと大きな揺れで、ヴィヴィアンは目を醒ました。小さな窓から入り込む月明かりが、部屋の中を仄かに照らしている。

もう一度、ゆらりと大きく揺れた。

波が高いのか。時代ではいないようだが、風が強いのかも知れない。

ヴィヴィアンは上体を起し、部屋の中を見回した。

隣の寝台では、エインが静かに寝息を立てて寝ている。

ヴィヴィアンは、音を立てないようにブーツに足を入れ、素早く編み上げ紐を結ぶと、すっと立ち上がった。

そしてもう一度エインの顔を覗き、寝ている事を確認して、ドア横に吊るした鍵を手に、部屋を出た。

横に吊るした鍵を手に、部屋を出た。

鍵をして、甲板へと階段を昇る。

その足音に、船員が何人かぎよつとしながら振り向いたが、ヴィヴィアンの姿を確認し、にこりと愛想のいい笑顔を寄越した。

「揺れが気になりますかい？」

若い船員に混じって、一人、随分歳を取った船員がいた。

その船員が、ヴィヴィアンに声をかける。

「いえ。

風はそんなにないんですね。」

海を見ながら、ヴィヴィアンが言った。

「この辺りは、海底がでこぼこしててなア、風が弱くてもこんなに波が高くなっちまうんでさ。

普段からこんなだから、風が強い日なんぞ、大変でさ。」

「でも、この辺で事故が起きるって話は聞きませんね。」

「波の質を理解してる船乗りア、風の強い日は、沖のほうを迂回して進みますからねえ。」

言いながら、船員が指先で海をぐるつとなぞつた。

迂回、と聞いて振り向くと、街灯りがはつきりと解るほど、陸の近くだつた。

「アンタア、先生の弟子かい？」

「はい？」

一度聞き直して、直ぐに質問の意味に気づく。

「いえ。弟子ではありません。

メイドとして、昨日から屋敷に就いています。」

ヴィヴィアンが答えると、船員は、メイドさんかい、と言つて領いた。

「あの先生ア、何度か船で会つた事があつてな。
まあなんだ、色んな事に詳しくてなあ。

この辺の海の事も、俺らより知つてゐる事もあるんだ。

大したお人だなア」

そう言つて、船員がにこりと笑つた。

ヴィヴィアンは笑うでもなく、ただ小さく頷いた。

「研究熱心な方ですから…」

ぽつりと呟き、海面を覗く。

まだまだ、目的地までは長い。

それまであと何度も、この波に揺られ、この言葉を聞くことになるのか。

あと何度も、あの寝顔を覗き込み、そつと部屋を抜け出せばいいのか。

か。

今度こそ、今度こそと思い、繰り返し繰り返し“生きて”来た。

それでも、繰り返さなくとも済む方法は、まだ見当たらない。

海風で冷えたのか武者震いを起こしたので、ヴィヴィアンは部屋に戻る事にした。

往きには気付かなかつた足音が、還りに妙に気になつた。

足音を立てないよう、そつと歩いりつとすると、自然に爪先立ちになつた。

甲板から船腹への階段を下り、壁に手を付きながら廊下に行く。ついさっき出たばかりの部屋のドアの前に立ち、ゆっくりとノブを捻ると、予想より大きな音を立ててドアが開いた。

そつと首を入れ、部屋の中を覗く。と、ヴィヴィアンはぎょっとした。

寝ていると思っていたエインが、起きてベッドに座つて、扉から恐る恐る顔を覗かせるヴィヴィアンに、にやりと笑いかけていた。

「驚いたかい？」

「はい…」

問われて体勢を直し、部屋に入つたヴィヴィアンは、答えるながら「この展開は初めてだつたもので…」と言い出しそうになつた口を、はつとして抑えた。

エインはおどおどとするヴィヴィアンにくふふと笑い、続けた。
「甲板のオジサン、いい人だろう？」
「はい。」

お知り合いなのですか？」「

「うん。何度か船で一緒になつてね。」

腕の良い航海士だよ。」

航海士だったのか、とヴィヴィアンは小さく頷いた。

エインはヴィヴィアンの反応に満足気に頷いて、窓の外に目をやつた。

ヴィヴィアンがさつき見たときより、月が東へ傾いていた。そんなに長い事甲板にいたのだろうか。

「ヴィヴィイ

ぼうつと眺めていると、エインが呼んだ。

「はい。」とヴィヴィアンが返事をすると、エインはちらりとヴィヴィアンを見て、再び窓の外を見た。

「フランスに着くまでは、特に何もないから。

安心して休みなさい。

道中、ただひたすら疲れる旅だ。

着いたら、直に膨大な文字と戦わなければならないだろうしね。
しつかり休んでくれ。」

最後に、「君だけが頼りだから」と付け加えて、エインはヴィヴィアンに歩み寄った。

ヴィヴィアンより頭部一つ分背の高いエインは、ヴィヴィアンを見下ろしながらにこりと笑った。

「はい。教授」

素直に返事をすると、ヴィヴィアンはベッドへ横になつた。

エインはまた満足気に頷いて、ベッドに腰を下ろし、ヴィヴィアンが寝付くまで、じつと彼女を眺めた。

やがて観念したように眠りに着いた、難儀で風変わりな自分について来ようとしてくれる頼もしい助手を、エインは愛おしそうに目を細め、見つめた。

あの人はどう…。
確かこの庭を横切つて…。
恐ろしいほどに花の咲き乱れるこの庭を横切つて…。
茂みの向こうに、湖が…。
湖が見える…。
その湖の畔に…。
深い樹木に囲まれた、小さな湖の畔に…。
足が縛れる。
でも走らなければ。
手遅れに、手遅れにならないうちに…。
間に合わなければ、また…。
間に合わなければ、また…。
ザクザクと芝生を踏み潰す足音に紛れて、ドンと音がする。
一回…。
ドン。
二回…。
無事で、無事でいてくれ。
茂みを潜る。
細い枝が肌を引っかく。
痛い…。
ああ、でも、あの人はもつと…。
手で搔き分けた茂みの先が拓けた。
湖が見える。
この湖の、右の畔…。
ああ…。
また…。
また、間に合わなかつた…。

駆け寄り、横たわる躰を抱き起こす。
小さな、白い顔が苦痛に歪んでいる。
しかしもつ、息はない……。

ああ……。

これで何度もだ……。

何度もだ……。

あと何度も……。

あと何度も、この躰を抱き起こせばいい……。

すう…と、何の突つかかりもなく瞼が開いた。

目の周りの塵を取りながら、眼鏡を探し、かける。隣のベッドを見る。

ヴィヴィアンは、まだ静かに寝息を立てて寝ている。

窓の外を見ると、漸く、東の空が明るくなつて来た頃だ。エインは上体を起こし、出したシャツをボトムに仕舞いながら、手早くブーツに足を入れた。

紐を結び、すっと立ち上ると、もう一度、ヴィヴィアンを見る。

素直な寝顔だ。無表情の普段とは印象の全く違う寝顔に、自然と笑みが戻れる。

エインはふうと一つ息を吐いて、ドア横の鍵を手に、部屋を出だした。

静かに錠をかけ、甲板へ上がる階段を昇る。階段と甲板を隔てる扉を開けると、ぶわっと冷たい風が舞い込んだ。

目を細めて風をやり過ごし、甲板へ出ると、「先生、早いね」と声をかけられた。

振り向くと、老航海士がにこりと笑つて手を振つていた。エインは手を振り返しながら、「寒いね」と言った。

「雲が晴れないんだよ。

上空じゃもつと強い風が吹いてるよ。」

そう言って、航海士が笑つた。

見上げると、雲が勢いよく東へ流れていった。航海士の言つとおり、かなり強い風が吹いているようだ。

「天気悪くなるかな?」

エインが問うと、航海士は空を仰いで、「あー」と唸つた。

「西風が吹いてるからな。

西の方にや、ちょっと濃い雲もあるようだし、風も運氣ついてる。

「一雨あると思つよ。」

言われて風に意識を向けると、少し、海の匂いとは違つ、鼻腔に纏わりつくような匂いがした。

雨に濡れた土の匂い、埃っぽい匂いだ。

「雨か…。困るなあ…」

「もうすぐロンドンだ、先生。

荷の量にも寄るが、出航までそんなに時間はかかるないだろ? よ。

雨になる前に、カレーで着くと済つよ。」

少し調子よべぬつ航海士に、Hインは「それは助かるよ。」と笑つた。

すると突如強い風が通り抜け、張り巡らせた帆をばたばたと靡かせた。

「おつと。」

何かあつたのか、航海士が磁石を取り出し、見るなり慌てて「じやあ、先生。」と片手を挙げて走つて行つてしまつた。

Hインは遅れて、「ああ、また。」と手を振り返して、いつの間にか陽の昇つた空を再度見上げた後、部屋へ戻つた。

鍵を回し、ドアを開けると、ヴィヴィアンがベッドに座つてこちらを見ていた。

「おはようございます。」

先程見た寝顔と打つて変わって、昨日の通りの無表情のヴィヴィアンが、抑揚なく挨拶をする。

そのギャップが面白くて、Hインはくすくすと笑いながら「おはよう」と答え、ヴィヴィアンと向かって腰たてで、ベッドの分だけ腰たてで、自分のベッドに腰を下ろした。

「夜半に、雨になるかも知れないな。」

航海士に聞いた事を、伝える。

「道、大丈夫でしょうか？」

カレーには午後早い時間に着く。そのあとボルドー郊外のベルトワーズ伯爵邸までの舗装されていない野道を、馬車で移動する事になる。

「まあ、大丈夫だろう。」

エインは「土砂降りになる前に着けるだろう」と、どこから沸くのか自信たっぷりに言つ。

「なら良いのですが…。」

思うところがあるのか、ヴィヴィアンが煮え切らない返事をする。

あらゆるものを毅然と真つ直ぐ見つめる瞳が、少し揺れながら、窓の外へ向けられた。

「ヴィヴィ？」

エインが小さく首を傾げ、ヴィヴィアンを呼ぶ。

「はい。」

呼ばれて、視線を戻さず、ヴィヴィアンは返事をする。

「心配は要らないよ。」

無事に着けるから。」

道中、心配する事は何もない。エインが言い切つた。

ヴィヴィアンが眉を顰めて、エインを見る。

見せないのは、笑顔だけか。

そう思い、怪訝な顔をするヴィヴィアンを見ながら、エインはにっこりと笑つた。

暫く他愛もない話をしていると、甲板からカンカンと鐘の音が聞こえた。

どうやら、ロンドン港に着いたらしい。

テムズ川には港ではなく、数箇所ドックがあり、各自目的地に近いドックへ船を泊める。到着したのは、ロンドンよりテムズ川河口方面少し手前にある、ロザーハイズという地域に作られた巨大ドック「ハウランド・グレート・ドック」だ。

予定より数時間早い到着だった。

「夜のうちに風があつたからかな。

いい方向に風が吹いてたんだなあ」

エインが窓の外を眺めながら呟き、ヴィヴィアンを見た。

「港を出るまで、一時間以上は時間があると思つ。

少し降りるかい？」

「教授はどうなさりたいですか？」

「うん、ボクはちょっと降りて歩きたいね。

付き合つてくれるかい？」

エインがわざとらしく腰に両手を当て、軽く仰け反つた。

「お供します。」

ヴィヴィアンが堅苦しく言い、ベッドから腰を上げた。

鍵を取り、部屋を出て甲板へ向かうと、荷揚げの指示をしている

船長と出くわした。

「ああ、教授。おはよござこます」

航海士と同様顔見知りのようで、気さくに挨拶をしてきた船長に、エインも片手を挙げて応えた。

「おはよございます、船長。」

出航まで、時間はありますか？」

問つと、船長は胸ポケットから懐中時計を取り出し、蓋を開けた。短針が七を少し回つていた。

「あー…。」

そうですね。予定より一時間ほど早く着いてますので…」

細かく残り時間を告げようと思つたのか、計算に惑つた船長は言葉を濁した。が、諦めたのか、「出航予定時刻は九時ですから、お出かけでしたら、それまでにお戻り下さい。」と言つた。

エインは苦笑しながら、「一時間半ほどで戻ります。」と言つて、船を降りる為、船員と話し始めた。

ヴィヴィアンは一時エインから離れ、港へと降りる階段付近で待つ事にした。

ぼんやりと行き交う人や荷物を眺めていると、昨夜部屋へ案内してくれた船員の少年が見えた。

少年もヴィヴィアンに気付き、人懐こい笑顔で手を振つて来たので、ヴィヴィアンも手を振り返した。

「昨日の少年だね。」

突然エインの声がして、ヴィヴィアンが一瞬驚く。

「はい」

「優秀な子だ。」

懸命に船仕事をする少年を見ながら、エインは感慨深げに呟き、「さあ、食事でもしよう」と、ドックへ下りて行った。

ヴィヴィアンが慌てて追う。

ドックには大小様々な船が停泊し、早朝にも拘らず倉庫脇には露店が並び、既に大勢の人々が行き交い、活気付いていた。

ロンドンを出、翌々日にはエインの屋敷に辿り着いた。そこからトンボ返りをして、ロンドンへ舞い戻ったヴィヴィアンは、然して珍しくもない光景をきょろきょろと見回し、その様子を眺めた。

「すぐに戻つて来てしまったね。」

ヴィヴィアンの様子を面白そうに眺めながら、エインが言った。

「少し、不思議な気分です。」

「済まないね。」と言いながら、エインがとある露店を指差した。

「あつた、あつた。」

露店に近付き、店主に何か言つ。

露店の周りには小さなテーブルと対の椅子が、何組か並んでいる。

カフエのよくなものだろうか。

一言一言言い終えたエインに、店主が笑顔で一組のテーブルを指差した。

「座ろ。」

ヴィヴィアンに向き直り、エインが言つ。

店主の指差したテーブルに歩み寄ると、エインはヴィヴィアンに

椅子を引いた。

「维イ维イアンが座ると、エインも向かいの椅子に腰掛け、頬杖を突いた。

「こちらに船で着たときは、大抵この店で朝食を摂るようにしていてね。

店主とも顔馴染みなんだ。」

ちらりと横目で店主を見ると、店主は果物の皮を手早く剥いていた。

既に手元にはサンドイッチが用意されていて、店主の脇にある台の上では、紅茶が蒸されていた。

「食器を洗う場所がないので、いつもカップを総て使つたところで店を閉めてしまうんだ。

だから、少し遅いと食事が出来なくてね。」

エインがそう言って辺りを見回す。

维イ维イアンもつられて見回すと、いつの間にか他のすべてのテーブルにも客が座っていた。

「ね。椅子の数、イコール、カップの数。

今日はこれで店仕舞いだよ。」

楽しそうに言いながら、エインが笑った。

「長くロンドンにありますが、港には来ないので、知りませんでした。」

维イ维イアンが言った。

「うん。船を使う人間しか知らないかも知れないな。」

「店主は普段何を?」

「あの店主は、普段は宝石店を営んでいるんだよ。

ロザーハイズ・ストリートに店を構えている。

ロザーハイズには行つた事あるかい?」

「いえ……」维イ维イアンが首を振つた。

ロンドンからテムズ川河口方面へは、足を運んだことがなかつた。

あの辺りは一部スラム化が激しく、治安の悪さが懸念されていて、近付き難かったのだ。

「そうか、この辺は場所に依っては治安が悪いからな……。」

一人納得して、話を続ける。

「あの店主の宝石店のある一角は、大通り沿いという事もあって、それほど治安も悪くなくてね。商業地帯としても開発の進んでいるこの地域に土地だの倉庫だのを持つての商人が、その辺りで仕事の余暇を過ごしたりするんだ。

普段は、それで生計を立ててる。」

やや深いところまで説明をして、エインが背中を伸ばした。

「とはいって、ボクも怖いから、この辺はウロウロしないんだけどね。」

くすりと笑つて、エインが再び店主を見たのと同時に、店主がサンドイッチの乗つた皿と熱いティーカップを持って、二人のテーブルへと歩き出した。

皿には、先ほど剥いていた果物も瑞々しく朝日に照らされながら並んでいて、食欲をそそつた。

皿がテーブルに並ぶと、「さあ、食べてすぐに船に戻るつ」と、エインは素早く同時に取り掛かる。

ヴィヴィアンもサンドイッチを小さな口で頬張りながら、思いの他減っていた腹に、ゆっくり食べ物を流し込んだ。

食事を終えて船に戻ると、先程の少年が出迎えてくれた。

「お帰りなさい。」

「ありがとう、ただいま。」

エインはにこりと笑いながら答え、「キミ、名前は？」と訊ねる。

「カルヴィン・マコーリーです。」

カルヴィンと名乗る少年が応えると、エインはうんと頷いて、「カレーまでよろしく頼むよ、カル。」と言つた。

その後、所用に呼ばれたカルヴィンと別れ、エインとヴィヴィアンは甲板の上に備え付けられたベンチに腰を下ろした。

部屋に戻つてもやる事がないし、どうせ話すなら外の方が心地が良い。

何より今朝は空気がいつもより綺麗に感じ、天気も悪くなかった。

「そういえば、ボクの仕事の説明をする約束だつたね。」

約束という程でもないが、確かに昨日、そんな話をした。

「何から話したものか…」と、エインが顎を撫でながら言つた。エインの顎は、髭痕の薄い、実に綺麗な顎だった。

「ボクは表立つた仕事柄、色々な書物を目にする。

まだ記憶が間に合つくらい最近の書物から、それこそ神が生まれた頃の大昔のものまで、実に幅広い。

だが、研究職は本職じゃない。

研究職で得た知識を使って行つ仕事が、ボクの本職、とボク自身は思つてゐる。」

エインは胸元のポケットから、昨日馬車の中でヴィヴィアンに見せた、アン・ベルトワーズからの手紙を取り出した。

「ボクのところには、頻繁に、このような手紙が届く。

何か調べ物をしないと解決しない、しかも安易に調べる事の出来ない内容であつたり、特別な書物でないとそのヒントを得られないような、そんな状況が発生した時が、このボクの出番であり、ボクの本職でもある。」

エインが、手紙を太陽に透かした。

「不可解な遺言状。しかも、このボク宛と思われるもの。」

大体察しは付くのである。

横顔が、企み事でもしているような、悪戯な笑顔だった。

「ベルトワーズ氏は、ボクの本職に深い理解を示してくれる人だから、大事に出来ないような何かを、ボクにこっそり打ち明けたいんだろう。」

謎を解きに来い。

死後出題された謎には、一体何が隠されているのだろうか。

ヴィヴィアンが手紙を眺めていると、エインがそれを差し出した。

ヴィヴィアンは再びその手紙を手にすると、丁寧に封を開いて中の手紙を取り出す。

手紙は、馬車で見た時よりも、よれている気がした。

何度かエインが読み返したのかも知れない。

「アンはボクの妻になるかも知れなかつた女性でね。」

唐突にエインが言う。

流石に動搖したヴィヴィアンが、視線をエインに向けた。

「丁重にお断りをしたんだが…。」

エインは暢気にいい、ずるりと座る姿勢を崩して、うん、と伸びをした。

会うのは躊躇われるのか。

ヴィヴィアンはエインの様子から、そう悟つた。

空を見上げると、空の色はいつの間にか、早朝の白から、深い青に変わっていた。

今朝方、空を覆つていた雲も、風の所為か散り散りになつて、流

れでいる。

そろそろ出港ではないかと思った瞬間に、カルヴィンが走って来て「サー、そろそろ出港です。お忘れ物はありませんか?」と訊ねて来た。

エインが伸びたまま「ないよ」と笑顔で答えると、カルはこいつこり笑つて走つて行つた。

「良い子だ。」

猫背氣味にベンチに座り直したエインが、カルヴィンの後姿に目を細めて呟いた。

「そうですね。」と、ヴィヴィアンも答える。

「不思議な事に…。」

エインが何か言いかけた瞬間、カンカンカンとけたたましい音が鳴り響いた。

「出港しまーす!」

音に続いて、船員の大声が響いた。その声に、まだドッグをのそのそと歩いていた乗客が、小走りを始めるのが見えた。

「お、出港か。」

エインが、ドッグを見下ろしながら言つた。

ヴィヴィアンは、面白げに小走りの乗客を見下ろすエインの横顔を、怪訝な顔で見つめた。

先程何を言いかけたのか、至極気になつた。

そんなヴィヴィアンの内心を知つてか知らずか、エインは腰を上げた。

「さて、潮風は肌に悪い。部屋に戻つて、少し休もう。」

徐に手を差し出すエインを見上げながら、ヴィヴィアンは手紙を差し出した。返せと言う意味かと思ったのだが、そうではなかつたようだ、エインは苦笑しながら首を振つた。その仕草に意味を理解したヴィヴィアンは、手を握つて良いものか躊躇つたが、エインが即座にヴィヴィアンの手を取り引つ張り上げたので、ヴィヴィアンはきょとんとしたまま立ち上がる事となつた。

「夕方までにはカレーに着くよ。

そこからは一晩中馬車に揺られなければならぬ。

覚悟しておくれ。」

申し訳なさそうに眉をハの字に下げながら、エインが言った。

「存じております。」

ヴィヴィアンはいつもの表情に戻し、静かに答えた。

「有難う。」

そぐわぬ礼を言って、エインがまだ握っていたヴィヴィアンの手をさらに強く握る。

が、ぱっと手を離すと、エインはぐるりと回って船腹への階段に向かつて歩き出した。

「行こう。」

「はい。」

一つ返事をして、ヴィヴィアンも後に続く。

ボルドーのベルトワーズ伯爵邸に着くのは、数日後になる。

それまでに消耗する体力は、並ではないだろう。

昼でも夜でもいいから、寝ておくがいいかも知れない。

ヴィヴィアンはそう思い、極力思考も巡らせない事に決めた。

ドーバー海峡を渡るのに、それほど時間はかからなかつた。

その間、エインはウトウトしながら本を捲り、ヴィヴィアンはじつとその様子を眺めていた。

時折、視線に落ち着かないのかエインがヴィヴィアンに声をかけ、軽く話をする程度の会話はあつたが、概ね無言のまま、時間を過ごした。

やがて、カンカンという音とともに、「カレー、到着！」と叫び、大きな声が聞こえた。

部屋に持ち込んだ荷物を調べていると、ドアがノックされた。

「サー、もうすぐカレーに到着です。」

カルヴィンの声だつた。

「やあ、カル。入つていいよ。」

エインが声をかけると、カルヴィンが恭しくドアを開けた。

「荷物をお運びします。」

につこり笑つて言うカルに、エインも笑つて返す。

「ありがとう。頼むよ。」

「はい。」

そう言い、カルヴィンが整え終えた荷物のうち、エインの大きな皮鞄に手を伸ばした。

すると、「ああ」といい、エインが止めた。

「ヴィヴィアンのボストンバッグを持つてくれないか。これはキミには大きいだらうしね。」

「はい。」

カルヴィンは素直に従い、ヴィヴィアンのボストンバッグを持ち上げ、先頭に立つて部屋を出た。

「時間通りの到着だけど、天候が不安だから、すぐ出航するのかな？」

エインが聞いた。

「そのようです。夜には少し降るだらうって、船長が言つていました。」

「そうだね。風がないから、それほど大きな波は立たないだらうが

……。

重いのか、エインが鞄を持ち直しながら「心配だね」と続けた。

「はい。」

答えるカルヴィンの声も、少し沈んだ。

「まあ、この船の船員は、殆ど知つてゐるけど、皆優秀だから、丈夫だよ。」

エインが笑いながら言つと、カルヴィンが振り返つた。

「有難うございます。サー。」

会話も終わり、甲板に出ると、すぐに船は港に横付けされた。船を降りる階段を降り、カルヴィンがヴィヴィアンにバッグを手渡す。

「ありがとう。」

ヴィヴィアンがお礼を言つと、カルヴィンはにっこりと笑つて「またお会いしましょう。」と挨拶をして走り去つましたが、またもエインに腕を掴まれ止められた。

「カル。」

エインがカルヴィンを呼び、しゃがみ込む。

「誰が見ていいか解らないから、チップは渡せないが、代わりに…。」

「言いながら、きょろきょろと辺りを見回す。

「また、ボクらを港で見付けたら、頼むよ。」

エインが言つと、カルヴィンが大きな笑顔を見せた。

「はいっ！」

そして今度は勢いよく深々と頭を下げ、船へ走つて行くカルヴィンの背中を、エインはふふ、と笑つて見送つた。

「さて、ボクらも急げ。足は手配してあるから。」

「はい。」

ヴィヴィアンが答え、バッグを持ち上げようと屈むと、一瞬早く

エインがヴィヴィアンのバッグを持ち上げてしまつた。

「教授…。」

「いいよ、いいよ。」

少し慌てるヴィヴィアンを尻目に、エインはすたすたと歩いて行つてしまつ。

エインは背丈こそ高いが横幅はなく、か細い訳ではないが筋肉があるとも思えない典型的な痩せ型の体型をしている。その体で、皮鞄とボストンバッグでは、幾らなんでも重い筈だったが、意外とあっさり持ち、足取りも軽い。

一足遅れたヴィヴィアンが、早足でエインに着いて行くと、エイ

ンが顎で一台の馬車を指した。

「あれだよ。おーい。」

エインが声をかけると、馬車の陰から品の良さそうな中年男性が出て来て、エインに向かって一礼した。

そしてさらにもう一人、逆側からも青年が出て来て、同じように一礼をする。

「お待ちしておりました。プロフェッサー・アンダーソン。」

「お迎え、有り難い限りです。アンはお元気ですか？」

この二人はベルトワーズ家の使用人のようだ。

「はい。お体の具合も大分よくなりまして。」

中年男性が答える。

「それは良かった。トンプソンさんもウイリアムズさんもお元気そうで、何よりですよ。」

エインが続けると、二人の使用人は深々と頭を下げた。

「恐れ入ります。」

そう言い、エインは後ろに着く、ヴィヴィアンを見る。

「ボクの新しい助手。ヴィヴィアン・トーマスです。お世話になります。」

エインが紹介すると、使用人たちはまた頭を下げた。そして中年男性が手を胸に当て、「わたくしがトンプソン」、そして青年を手で示し、「こちらがウイリアムズです。」と言つた。

「屋敷まで、ご案内させて頂きます。」

「お世話になります。トーマスです。」

「トーマス様。」

トンプソンが一度繰り返し、覚えましたという意思表示をし、

「さぞ、本日は天候が芳しくありません。屋敷へ急ぎましょ、う。」

そう言つて、出発を急かした。

荷物を一人に預け、クーペに乗り込む。

「ベルトワーズ家の人はたちは皆よい人たちだから、安心していいよ。」

「

こつ手にしたのか、何冊かの本を脇に抱えて座りながら、エインが言った。

「はい。」

ヴィヴィアンも返事をして、しかし本が気になる。もしや、と思つた。

「教授？」

「ん？」

「教授の荷物の中身、まさか本だけでは……？」

ヴィヴィアンが眉を顰めると、エインが大笑いした。

「さすがにその心配はないよ、大丈夫。ただ暇潰しがないと死んでしまうんだ。着くまでかかるからね。キミも読むかい？」

エインがヴィヴィアンに一冊、本を差し出す。

ヴィヴィアンは、確かにそうかと納得しつつ、本を受け取つた。書名は『シャングリ・ラ』。

「伝説の都の本ですか。」

「うん。面白いよ。」

そう言われ、ヴィヴィアンが本をぱらぱらと捲る。すると、一枚の紙切れがひらりと落ちた。

その紙切れを、大層慌てたエインが即座に拾い上げる。

「ごめんごめん。塵が……」

言いつつも、丁寧にポケットに仕舞いこんだ。塵ではないのだろうが、触れてもいけない事であろう。

ヴィヴィアンは無言で、本に目を戻した。

ところどころ、ペンで線や矢印、『?』とメモが書かれていた。

大抵は、『シャングリ・ラ』や『東の大陸』などという、場所を示す単語に印がついていたが、最後のページまでめぐり終わつたところで、ヴィヴィアンの手が止まつた。

そこには、何か書いたらしい上から、それを隠すようにして、ぐちやぐちやと線で塗り潰してあつた。

微かに『?』という頭文字が読み取れる程度で、あとは解らなか

つた。

一連のペンの跡に、ヴィヴィアンはエインの秘密を見てしまったような罪悪感を覚えた。胸が激しく鳴っている。震える手でなんか静かに本を閉じると、「私には難しいようです」とだけ言って、エインに返した。

エインは、メモの事などすっかり忘れているのか、「そうか」とだけ言って本を受け取り、そのまま読書に没頭してしまった。ヴィヴィアンはその横顔を見つめながら、胸の鼓動が聴こえてしまわないようになると、祈った。

初めて見る、あの本の、あの落書き。
どちらの方向へ、分岐したのか…。

カレーは古代ローマの時代から、ブリテン諸島と諸ヨーロッパの大都市を結ぶ中継点として栄えて来た街だ。

カレーのみならず、カレー周辺の都市は港湾都市として造船や貿易によつて栄え、賑わつてゐる。カレーはその中心とも言える街で、大きな船の往来も一層多い。

町はレンガ造りの美しい建物が並び、道も舗装され馬車の揺れも少ないので評判は高い。

「フランスは初めてかい？」

エインはカレーの街を眺めながら、ヴィヴィアンに訊ねた。

「はい。イギリスから出る事はありませんでしたので…。」

「そうか。フランスのワインはイギリスのワインより美味しいんだ。これは個人票だけどもね。」

本当は、ボルドーまで船を使ったほうが早かつたんだが、どうしても、シャンティイー城を見たくてね。

「とても美しい城だよ。一目でも見ておくといい。」

エインが上機嫌に語つた。

「シャンティイー城は、モンモランシー家やブルボン＝コンデ家らが増築改築した城で、特にプチシャトーと呼ばれる一角は本当に美しい建築物だよ。」

森と水に囲まれた様子は、スコットランドの建築物には中々ない雰囲気だね。

スコットランドやイギリスの建築物も美しいとは思うが、ボクはこのシャンティイーがとても好きでね。

パリからそう遠くはないし、ここに寄つた後、パリを経由してボルドーに行くと、船での移動距離と大して変わらないから、ボルドーに行くときは寄ると決めているんだ。」

山間谷間の道だが、馬車で移動出来ない地形じゃないので、と付

け加えて、エインは人差し指を立てた。

「それに、これから行くベルトワーズ邸が、このシャンティイー城を模して作られた建物だから、予習がてら、ね。」

なるほど、とヴィヴィアンが頷いた。

「ベルトワーズ伯爵は、旅好きなお人でね。東も北も南も行っちゃうような人だから、若い頃はあまり家には居付かなかつたらしいんだけど。

ボクが出会つた頃には既に旅行から引退して、若い頃に集めた書物の整理を趣味に過ごされていたよ。」

「いつ頃、お知り合いに？」

「うん、五年以上前になるかな。

フランスの地理には詳しいかな？」

「いいえ。

でも、シャンゼリゼ通りは存じております。」

「そう。正しくそのシャンゼリゼ通りの歴史を調べていてね。メインテーマではなかつたんだが…、知つてゐるかな、シャンゼリゼ通りの名の由来を。」

「確かに、ギリシャ神話から採られた、とか…。」

「そうそう。

ギリシャ神話に記されている”有徳の人々のための死後の世界”エリュシオン『”』を語源としているので、その理由が知りたくてね。当時の文献が残つていなか、フランスまで探しに来たんだ。

そこで、とある古書商人に、伯爵ならお持ちじゃないかと教えられて、ボルドーの邸まで押しかけたのが切欠。

時折ボクの講演を聞きに来てくれたりしていたらしくて、ボクの事をご存知でね。

快く部屋を貸してくれて、好きなだけ滞在してよいかと、許可を下さつたんだよ。」

「研究については…？」

「未だ研究中。」

そう言つて、エインが笑つた。

「中々、田舎の”場所”まで辿り着かないんだ。

色々な方面から遠回りを強いられる研究でね。

まあ、そんな事は横に置いて、それ以降、一度ほど邸にお邪魔しているんだけど。

随分良くして下さつたので、死んでも感謝し足りないよ……。」「

最後はほんの少しきなそうに、締め括つた。

そのまま窓の外に向いてしまったエインの横顔を見、ヴィヴィアンは『シャングリ・ラ』のメモを思い出し、なるほど、未だ研究中のものなのかなと納得する。

「雲が濃くなつて来たな……。」「

エインが独り言を言つた。『そろそろ降るかもな。』

ヴィヴィアンも、自分の横にある小窓から外を眺める。街の隙間から空を臨むと、確かに先程よりも、雲が厚くなつているようだった。

「大雨にはならないだろうけど……。」「

そう言いながら、エインがクーペの前方にある、運転手と会話するために備えられた小窓を開けた。

「トンプソンさん、どうかな?」「

「そうですね……」と通じている様子で、トンプソンが答える。

「そう激しくはならないでしょうけれど、夕方を過ぎた頃に少し降るかも知れません。

その頃には、アミアンに差し掛かるでしょうから、そこで雨脚の様子を見てもよろしいかと。』

トンプソンが慎重に言つた。

「わかった。アミアンで宿を取つ。馬にも無理をさせては行けないからね。』

「申し訳ございません。』

「謝る事はありませんよ。トンプソンさんとヴィリアムズさんも蜻蛉通りの道だからお疲れでしょう。』

ボルドーまでゆっくり向かいましょ。」

「畏りました。」

トンプソンの返事を待つて、エインは小窓を締めた。

「夜にアミアンまでは行けそうだ。
宿を取つて、早朝にアミアン大聖堂を覗こつ。勿論、観た事ない
だろう?」

「はい。」

ヴィヴィアンが頷くと、エインは何故か満足げに溜め息を吐いた。

夕方を過ぎ、一層空が暗くなつた。

それを認識すると間もなく、雨もぱらついた。

馬車は、トンプソンとウイリアムズの二人によつて、慎重に走り、
アミアンを目指していた。

カレーの街を抜けた後は、ずっと田園風景が広がつていた。

「この辺は、ピカルディー地域圏と言つて、さらにアミアン周辺の
地域を除く、ランやボーヴーと言つたパリーヴーを中心とした地域
は、ヴァロワと呼ばれる。

今から八〇〇年ほど前に西フランク王国が断絶して、パリ伯ユーグ・カペーを始めとするカペー朝によつて成立したのが今のフランス王国と言われているが、その四〇〇年弱後にカペー朝シャルル四世が没した後、王座を継いだのがこの辺りを收めていたヴァロワ伯。今から四三〇年前の事だね。

そこから約一五〇年間のフランス王朝を、ヴァロワ朝と呼ぶんだ
けど。

その前のカペー朝時代に建築されたのが、アミアンにある大聖堂
だ。

正式名称を『アミアンのノートルダム大聖堂』と言つて、『アミアンにおける我らが貴婦人（聖母マリア）の大聖堂』という意味ら

しい。

莊厳、優雅なゴシック形式の建築物で、非常に美しい。

ボクがシャンティイーの次に好きな建物なんだ。」

ペラペラと本を捲りながら、エインが喋った。

ヴィヴィアンは、ただ黙つて聞いていた。

「アミアン自体は、カペー王朝時代の名残の残る、纖細華麗な建物の並ぶ街でね。

ボクは見ているだけで楽しいが、派手な特産品がある街ではないので、建築物に興味がないと、つまらないかも知れないな。」

エインはそう続けて、ほんと本を閉じた。

「最近は、イギリスとフランスの間にちょっとした亀裂が生じていてね。

あまり大っぴらに行き来出来ないんだが、貿易だけは盛んだから、それに便乗して海を渡るしかないので、辛いところだね。」

「まあ、すぐに納まるけどね。」と小さく呟いて、エインが窓の外を見た。次いで、ポケットに手を入れ、懐中時計を取り出す。

「大分いい時間だね。

そろそろアミアンの明かりくらいは見えると思つんだが……。」

そう言いながら、ヴィヴィアンを手招きする。

こちらの窓を覗け、という事だと理解したヴィヴィアンは、エインに少し近付いて座り直し、エインの肩越しに窓の外を見やる。

田畠の中には点在する酪農設備と、切り拓いたときに残つたのか残したのか、不可思議に深い小さな森が交互に流れる風景の向こうで、ぼんやりと白い光が見えた。

「ほほう、こんなところから見えるんだね。

見えるかな？ あれがアミアンの街の灯りだよ。」

すっかり夕闇と強めの雨雲に包まれた世界の中に、ぽつかりと浮かび上がるよう光る街灯りは、とても幻想的だった。

街、とまだ判別出来る訳ではないが、この辺りで迷つたならば、間違いくなくあの光を目指して歩いて行くだろうと思う。

「トンプソンさん、もうすぐだね？」

エインが少し大きな声を出すと、トンプソンも同じ程の声で応えた。

「はい。お見えになりますか、アミアンの灯りが？」

「うん、見える。」

「あと、小一時間というところですよ。もう少々ご辛抱を。」

「この先、道も少し悪くなりますので…。」

トンプソンがそう言い終わるなり、馬車ががたりと揺れた。

「この辺りの道は、この辺の住民が時々均してくれるんだけど、土質が柔らかいので、雨に弱くてね。」

この感じだと、ここは結構長く降つてたんだううね。」

エインが楽しそうに言った。どうやら、馬車の揺れを楽しんでいるようだ。

ヴィヴィアンは、窓を覗き込むのをやめて体勢を元に戻し、揺れに備えて座席の縁を強く持つた。

「雨のアミアンも美しいんだよ…。」

相変わらず外を眺めながら、エインが呟いた。

それ以降は無言で、到着を待つた。

馬車の揺れも慣れてしまうと大した事はなく、窓からアミアンの街を認められる程になつた頃、興味本位で窓から道を見下ろしてみると、轍の跡が予想以上に深くて驚いた。

しかし、再び顔を上げた頃には、馬車の揺れも治まつた。

馬車の速度も幾らか緩やかになり、すぐにゴシック形式の建物の谷間が見えた。

道は舗装され、馬車の往来が多い故か、道幅もうんと広かつた。

気付けば道を走る馬車も増え、店の軒先で雨乞いをする人々が目に入った。

「大分、強くなつて来ましたね。」

そう言ってエインを振り返ると、エインは窓辺に頬杖をついて、街並みを楽しんでいた。

「教授。」
「プロフェッサー」

トンプソンが呼びかけた。

「ん?」

「宿はどう?」

「ああ、そうか。」

「この道を、大聖堂の二区画前辺りまで行くと、少し大きめの宿があるんだ。」

看板が下がつてゐからすぐ解ると思つ。

そこ、空いてると思うよ。」

妙な勘が働くのか、實際その通りで、道すがらどの宿も混んでいる様子だつたといふのに、この宿は大聖堂に近いといつ立地にありながら、宿泊客は僅かだつた。

だからエインが、

「部屋、ボクとヴィヴィで別けても大丈夫なくらい空いてると思うけど、どうする?」

と聞きながら店主の顔を見ても、店主はここに笑いながら一つ頷くだけで、相部屋を強いては来なかつた。

「私は…、どちらでも…。」

後で振り返れば、別の部屋でと頼むのが一般的だつたのだろうが、ヴィヴィアンが咳くなり、「じゃあ、一部屋。こちらの男性一人と、ボクら二人」と、エインがさつさと伝えると、上客と思われたのか三階の大きな部屋を宛がわれ、大袈裟な鍵が一本手渡された。

その鍵を一本、トンプソンに渡すと、エインが自分の皮鞄とヴィヴィアンのバッグに手を伸ばした。

「ああ、教授、お運びします。」

トンプソンとウイリアムズが慌てると、「ああ、いいよいよ」と、エインがにやにやしながら言つた。

「お屋敷の外では、気楽にして欲しいよ。」

そう言つて、エインは階段を上がつて行つてしまつた。

三階へ上ると、階段を中心に廊下が左右へ伸びており、右手が大聖堂へ続く大通りを臨む部屋、左手が路地に面した部屋になっていた。

トンプソンとウイリアムズはどうしても路地側の部屋がいいと言つて聞かないので、エインとヴィヴィアンが大聖堂側の部屋を使う事になつた。

部屋には手入れの行き届いた、實に使い心地の良さそうな調度品が並び、客を出迎えた。

既に蠟燭と、オイルランプ、暖炉に火が入れられ、部屋は明るかつた。雨のせいで少し肌寒かつたので、暖炉の火は有り難かつた。

「良い部屋だね。」

そう言つて、エインがソファの脇にカバンを置いた。

そして真つ直ぐ窓に向かい、少しだけ窓を開ける。

「来て御覧。」

エインがヴィヴィアンを手招きした。

ヴィヴィアンが歩み寄ると、エインは窓の脇に少しだけ身を避けて、窓の外を指さした。

「あれが、アミアンのノートルダム大聖堂。」

エインの指先の向こうに、雨模様の夜の中、沢山のランプとガス灯の火りが溢れる大きな聖堂が見えた。

南北に一本の塔を持ち、遠目にも解る正面のポルタイユを抱くその姿は圧巻だつた。

「この分だと、早朝までは降るな。

朝、雨上がりの大聖堂は、それだけで一つの作品のようだよ。

ノートルダム大聖堂はアミアンだけでなく、フランスやベルギー、ハプスブルグ家領の南ネーデルラントなどの各地に沢山あって、大抵は一〇〇年から一一〇〇年後半までには完成している。どれも

古い聖堂ばかりで、このアミアン大聖堂も一一六六年に完成したと
言われている。

アミアンに限って特徴的な事を上げるなら、一一〇一年から一一〇四年までの間行われた、当時のローマ教皇インノケンティウス三世の率いる第四十字軍が、コンスタンティノポリス攻略時に齎したと言われる洗礼者ヨハネの首があると言われている。

このヨハネの母は、イエスの母マリアの親戚とも言われているけど、あそんな古い事は、よく解らないけどね。

外観のみならず、堂内も非常に洗礼された造りになつていて。

一一六〇年頃に建物が焼けてね、建築様式に関する資料は焼失してしまつた。

でも、資料なんてなくたつて、あの建物が残つていてるだけで、十分だね。」

一頻り語り次ぐして、エインは大聖堂を眺めた。

ヴィヴィアンも、エインに倣つて大聖堂を眺める。

確かに、闇の中につつてもその荘厳さをちつとも失わない、実際に美しい建物だと思つた。

「歴史なんて書き留めたつて、そのつが消えてなくなつてしまつんだから。」

暫し見惚れたあと、エインはそう咳こいて、ベッドに身を投げ、いつもにしたのか本を読み始めてしまつた。

ヴィヴィアンは横畠でそれを見た後、静かに窓を閉め、夜風で冷えてしまつた体を温めに、暖炉の前のソファに腰かけた。

エインに解らないように、ふう、と小さく溜息を吐く。それと同時に、エインがペラリと本を捲つた。

「疲れたかい？」

エインが聞いた。

「いえ。」

ヴィヴィアンが短く答える。

「そう。」

そう言つて、エインはまた本を捲つた。

そこで、ドアがトントン、と一度ノックされた。

ヴィヴィアンがすぐに腰を上げて、ドアを開けると、店主がにっこり笑つて立つていた。

「お夕食はどうなさいますか？　すぐにご用意出来ますが。

「ああ、そうか。」

エインががばっと起き上つた。

「食事の事を何も心配していなかつた。

すぐ用意して下さい。」

エインが笑つて頼むと、店主は軽く会釈をして引き上げて行つた。

「ヴィヴィ。

あの二人に、食事の支度をお願いしたから、一階に集まろうと伝えてくれ。」

「はい。」

エインに言われ、ヴィヴィアンも部屋から出て行つた。が、すぐに戻つて來た。

「解りました、との事です。」

ヴィヴィアンが報告すると、エインがうんうんと頷いた。

「よしよし。じゃあ先に一階に下りていよう。

応接スペースがあつたね。」

エインは言いながらベッドを下り、すたすたと部屋を出た。ヴィヴィアンも続く。

軽快に階段を下り、店主のいたカウンター脇にある応接スペースのソファに、ずぼっと腰を掛けると、程無くして店主と、トンプソンとウイリアムズが同時に現れた。

「お食事の用意が出来ました。」

店主が言つと、エインが勢いよく立ち上がり、「食事にしよう」と言いながら店主に続いてダイニングルームへと入つて行つた。

用意されたのは豪華とは言い難い食事ではあつたが、急な宿泊で、昼も食事をしていなかつた状況としては、食えるだけ有り難かつた。

「お気遣い、感謝します。」

と、エインが、ワインを注いで回る店主に言った。

「いえいえ。

今日は今朝からこんな空模様ですから、宿泊客も巡礼者も少なくて、大した支度もしておりませんでした。

「このような質素な食事で申し訳ございません。」

にこやかながらも詫びる店主に、エインは笑った。

「さ、頂こう。」

エインの合図で食事が始まった。

食事中は、各自空腹を満たすため、無言で食事を口に運んだ。時折、天気や道の具合が気になる男三人が言葉を交わすが、特に盛り上がる話題でもなく、すぐに終わってしまう。

食べる事に集中していたのと、食事の量もそれほど多くなかつたせいもあり、食事はすぐに終わった。

長旅の疲れもあるからと、馬の様子を見て早めに寝ると言つたトンプソンとウイリアムズとダイニングルームで別れ、エインとヴィヴィアンは自室に戻つた。

「ヴィヴィ。

早めに寝るといい。明日は早いし、それからはずつと馬車だからね。」

エインに言われ、ヴィヴィアンも「はい」と素直に従う。

そしてブーツを脱いでベッドに横になると、あつという間に眠りに墮ちた。

顔には出さないが、相当疲れていたのだろう。ヴィヴィアンの様子に、エインが小さく笑つた。

ヴィヴィアンが寝息を立て始めたのを見届けて、エインは一人、大きく鼻から息を吐いた。

そして、ベッドの上に胡坐を搔いたまま、窓の外を見る。

「明日は、ちょっと忙しいぞ…。」

独り」と言い、また溜息を吐くと、眼鏡を外して、髪を搔き上

げた。

突然眠りから醒めて、田を開けると、エインが窓辺で、田の出前の朝靄に溶けかかるアニアマンの大聖堂を眺めているのが見えた。もぞもぞと起き上ると、エインが振り返った。

「おはよう。もう少ししゃっくりするかい？」

エインは既に身支度を終えているようで、小奇麗な身なりをしていた。

「いえ。支度します。」

「うん。」

ヴィヴィアンが言つと、エインは「下で待ってるから」と言つて、部屋を出た。

ヴィヴィアンはエインを見送つてからそつとベッドから出、少し皺の寄つたドレスを丁寧に伸ばした。

少しばめかし込みたかったが、エインもシャツを変えただけの出で立ちだったので、拘らない事にした。

髪を整え、部屋に用意された水差しから陶器の大きな器に水を入れ、顔を丁寧に洗つたあと、脇に添えられた顔拭き用の柔らかな布で顔の水を拭き取り、少し曇つた鏡で顔を覗き込む。いつもと変わらない顔色だ。疲れはみえない。

そんなによく寝たのだろうかと思いつつ、ヴィヴィアンは部屋を出た。

一階へ降りると、エインは応接スペースで鼻歌を歌つていた。

エインは、ヴィヴィアンの足音を聞くなり、すつと立ち上がり、「さ。さつそく行こ。」

と詠うが早いか外へ出て行つてしまつたので、ヴィヴィアンは速足で追いかけた。

昨夜エインが言つた通り、ついたままで雨は降つていたらしく、

地面が濡れていたが、水はけがいいのか、水溜りはなかつた。

雨に洗われたせいで空気は澄み、やや寒い。

朝早いせいか、人気はなく、しんと静まり返つてゐる中、エインとヴィヴィアンの足音だけが聞こえる。

靄のアミアンは、昨夜の印象とは打つて変わり、穏やかで厳かな雰囲気の街だつた。

ヴィヴィアンがきょろきょろと街を見まわしていると、エインが振り返りもせずに話しだした。

「この街は、織物産業が盛んで、特產品でこそないが、質の良い織物が手に入る所以、海外からの貿易商も出入りも多い。

部屋の顔拭きを使つたかい？」

「はい。薄手なのに、柔らかな布でした。イギリスではあまり見かけません。」

「うん。

ああいつた、織物といつても細い糸を使って紡ぐ薄手の布の生産にかけては、周辺の地域より少しだけ技術力が高くてね。

街の四分の一が、織物産業にかかわつてゐる。」

言いながら、エインが歩みを止めた。

小さく溜息を吐いて、背筋を伸ばす。

街に目を向けていたヴィヴィアンが、エインの少し後ろで立ち止まって、エインの視線をなぞると、目の前に大聖堂が聳え立つっていた。

宿のある一区画目から見ても相当に大きな建物だと思つたが、やはり間近で見ると迫力は段違つた。

高々と造られたファサードには、聖書の”最期の晚餐”のポルタイユが施され、さらにその周りに聖人たちのポルタイユが並ぶ様は、イエスを守護しているようにも見える。

圧倒され見上げていると、不意に扉が開いた。

「おはようございます。」参拝でございますか？」

老僧が扉から顔を出し、エインとヴィヴィアンに微笑みかけてい

た。

「はい。よろしいですか？」

「もちろん。」

そう言つて、老僧が扉を開けた。

エインが扉の中へ入つて行く。ヴィヴィアンもエインに続いて入つた。堂内はほんの少しのガス灯が灯るだけだが、高い天井付近にある採光用の高窓や、サンクチュアリのあるシュヴェに添えつけられたステンドグラスから外界の光が漏れ、思ったほど暗くはなかつた。

床には正鉤十字が無数に描かれ、柱や壁のレリーフに負けず芸術的だつた。

どこへ行つてしまつたのか、老僧の姿は既になく、目の前のエインは満足げに、身廊のヴォールトを見上げている。

「こここの身廊はフランス内の聖堂の中では最も高い。」

「ここまで天井が高いと、建物の中といふ感覺には程遠いな。」

空ほどに高い身廊の天井を見上げ、エインの話に耳を傾ける。

しかしヴィヴィアンは、エインの声に混じつて、何かこつりとう物音を聞いた。

「……」

エインの話の腰を折るのも憚られ、ヴィヴィアンは無言で物音の根源を探した。

物音は広く静かな堂内のあるこちの壁にぶつかって反響し、四方八方から聞こえる。

説教台は基より、礼拝堂にすら人がいないこの堂内で、何かが一定のリズムで物音を立てている。

エインは聞こえないのか、ずっとゴシック様式の解説をしている。が、やがて、それと解るほどはつきり、こつりという物音が響いた。ヴィヴィアンがその方向を察するや否や、何か黒い影がエイン目掛けて降つて來た。

ヴィヴィアンがエインの前に即座に立ち、左腕を構え影を食い止める。

ヴィヴィアンの俊敏な動きにやや遅れ、ドレスが大きく揺れた。影が体に纏う黒い大きな布も、飛び降りる動きと食い止められた反動で、靡いた。

影とヴィヴィアンの視線が混じる。

ヴィヴィアンは影を睨み、影もヴィヴィアンを睨んでいた。しかし、次の瞬間で影はヴィヴィアンを踏み台に側廊へと飛び跳ね、ファサードへと走つて行ってしまった。

ヴィヴィアンが追おうとするべく、

「ヴィヴィ。

」と、エインが止めた。

「いいよ。放つておきなさい。」

エインの発言にて、ヴィヴィアンが驚く。

「しかし……。」

「いいよ。有り難う。ヴィヴィのおかげで助かった。今日はもう襲つて来ないよ。」

エインが悠長に言うので、ヴィヴィアンが眉を顰めた。

「どういう……事でしようか……？」

ヴィヴィアンが訊ねるが、

「うん？ まあ、そのうち解るよ。」

とエインは一言言つて、かつかつと足音を立てて内陣へ歩いて行つてしまつた。

残されたヴィヴィアンは、ファサードを振り返る。

何もなかつたかのように堂内は静まり返り、扉もきちんと閉められていた。

「一体、何者……？」

扉を睨みつけるヴィヴィアンを、後ろでエインが呼んだ。

「ヴィヴィ。

おいで。ガイドをしてあげよう。」

楽しそうな声に呼ばれ、ヴィヴィアンは仕方なく溜息を吐いて、
エインに駆け寄った。

ペラペラと、アミアンの大聖堂に関するHインの解説は留まると
じりを知らなかつた。

建築様式に始まり、フランス、カトリック派の歴史、建築家、彫
刻家の生い立ちからその生涯まで。

ヴィヴィアンは黙つて聞いていたが、正直少しウンザリもしてい
たし、よくもここまで止め処なく言葉を紡ぎ出す事が出来る、と感
心もしていた。が、それもいゝ加減飽きてくる。

そこへ、天の助けとも言つべき、トンプソンがやつて來た。
「やあ、おはよう。」

悠長にHインが言つと、トンプソンは頭を下げた。

「おはようございます、教授。^{プロフュッサー}」

お取り込み中申し訳ないのですが、空が急に曇つて参りましたの
で…。」

そう言つて、トンプソンが申し訳なさそうに眉を顰めた。

「おや、やつぱり降つてしまつ？」

「はい。

シャンティイーに着く頃には、随分な土砂振りになつてゐるかも
知れません。

西の空が真つ暗ですから…。

本日中にパリまで行きませんと、明後日の朝にボルグーまで辿り
着けません。

お嬢様も心配なさいますでしょ、そろそろ…。」

「そうだね。

アンを心配させではないな。

急いで出発しましょう。」

エインが腰に手をあて言つと、トンプソンが再度頭を下げた。

今朝の道のりを逆に辿り、宿へ向かう。

店先では、店主が一行の帰りを待っていた。

既に馬車は用意され、荷物も運びだされていた。脇にはウイリアムズの姿もある。

「い」出発ですか。

「はい。

お世話になりました。」

挨拶しながら、エインがスラックスのポケットから紙を取り出し、店主に渡した。

店主はその紙を見るなり、目を大きく見開いて首を振った。

反応を見るに、約束手形のようだった。書かれている金額は、店主の予想を遥かに超えるものだったのだ。

「いけません、教授。

「このよつな……。」

言いながら慌てて紙を返そうとする店主を、エインが制した。

「店主。

受け取つてもらわないと、僕の名が廃ります。」

「……。」

にこにこと笑いながらそう言われ、店主は返す言葉が見付からなりらしく、少し俯き、そのまま深く頭を下げた。

そんな店主に、エインが手を差し出した。

店主も、姿勢を正して手を握り返す。

「また寄らせて頂きますよ。」

「いつでもお待ちしております、教授。」

そう言い、挨拶を済ませた二人が手を離したところで、エインがヴィヴィアンに振り向いた。

「さあ、いこうか、ヴィヴィ。

馬車の扉前に立ち、ヴィヴィアンに手を差し出す。エインの手を借りて馬車に乗り込むと、次いでエインも乗り込み、扉を閉めた。

そして小窓を開け、店主に手を振ると、馬車はそそくさと走り始めた。

再び馬車に揺られ、田指すはパリだ。

「雨になるなら、シャンティイーには寄れないな…。

申し訳ないね、ヴィヴィ。」

謝るエインの方が残念そいで、ヴィヴィアンは一瞬面白そうやでてうそをの様子を眺め、そして首を振った。

「教授と一緒になら、また来る機会もあるかと。」

表情一つ変えず、気を遣うヴィヴィアンに、エインがふと満足そうに笑つた。

「そうと決まれば、パリまで直行しよう。

シャンティイーへ寄らなければ、道も少し変わるからね。」

そう言って、前方の小窓を開ける。

「トンプソンさん、今日はシャンティイーへは寄らず、パリへ直行して下さい。」

エインの言葉に、トンプソンが振り返つた。

「恐れました。

昨日の雨で、まだ若干道がぬかるんでおりますから、助かります。

「エインは、トンプソンに一つ頷いて、小窓を閉めると、さつと本を開いてしまった。

そこから暫くは、馬車の車輪の音を聞きながら、各自無言で馬車に揺られた。

ヴィヴィアンは、時折小窓を開け、空や風景を眺めた。

風景はどことなくスコットランデ似でいるのに、風の匂いが全く違う。

厳密な感覚ではなく、至極曖昧なものなのに、風の匂いの印象が、五感の総てに影響しているような気になる。

馬車の音すら違つて聞こえるのは、果たして土が違うからなのか。思いながらも、口は噤んだまま、時間だけが経つていく。無言でいる事は苦にならない。

エインも、一度本に没頭してしまえば、周りに何もないくらいで

内に籠つてしまつ。

しかし、硬い椅子に長時間腰掛け、小刻みに馬車に揺られるのは、少々躰に堪える。ヴィヴィアンは、馬車の揺れに合させて、小さく節々を伸ばしたり、折り曲げたりして時間を過ごし、その合間に小窓を覗くという事を繰り返した。

幾度となく窓の外の空を眺めるが、一向に雲は晴れず、どんよりと曇つていた。

「降らないね。」

退屈していると思われたのか、エインに話しかけられた。
「降りませんね。」

雲は大分、重そうなのですが。」

「シャンティイーは、もうそろそろの分かれ道を左なんだが……。」

言いながら、エインが懐中時計を取り出した。

エインの傍らから時計を除くと、時間は思いの外経つていて、正午をすっかり過ぎていた。

その割りに、外は暗い。やはり雲のせいなのか。

「やっぱり道が悪いなあ。」

エインがそう言つと、馬車が大きく揺れた。

「この辺りも、カレーからアミアンまでの道に似て、水を溜め込んだやうなんだよ。」

森が近いし、水捌けは良さうなんだけれどね。

この分だと、シャンティイー付近はまだぐちゃぐちゃだらうな。

シャンティイーへ行けない事が、余程名残惜しいのだろう。未だ言つている。

「でも、シャンティイーへの分かれ道を過ぎれば、パリまではすぐだよ。」

「この分だと夕方には着きそうだね。」

エインはそう言つてにこりと笑い、懐中時計を仕舞つた。
程なくして道は左右に別れ、馬車はパリへの右の道を進む。そして、エインの言うとおり、日暮れ前にパリに着いた。

シャンティイーを含むモンモランシーの森を抜けると、パリ郊外が見えた。

郊外故、ところどころに未だ田畠の面影の残る風景ながら、緑と石造りの建物が豪華な雰囲気を醸す、成熟された印象の街だ。

「綺麗な街ですね。」

ヴィヴィアンが言うと、「でしょ?」とエインが言った。

「このまま真っ直ぐ行くと、パリ中心街。

パリはセーヌ川を中心線に、こちらとあちらで円形状に広がつて出来上がっている。

郊外にはヴェルサイユ宮殿もあるが、あの辺りは警備が厳しくて近付けないのが勿体無いね。

街 자체は極めて平和なんだが、国民と政府との関係がよくないんだ。最近は、少し暴動も増えて来たしね。

パリで長居はしたくないので、パリを抜けて、少し行つたところにあるコミコーンの宿で休もうと思つ。」

そう言つて、エインが前方の小窓を開けた。

「トンプソンさん、オルレアンのメルヴェイユさんの宿はご存知ですか?」

エインに問われて、トンプソンが振り返つた。

「はい。存じ上げております。」

「そこで今夜は休みましょう。」

あの辺りは自警団がしつかりしているから安全だし、パリよりは静かだ。」

「畏りました。」

そう言つて頷くトンプソンが鞭を一振りすると、鞭の音で馬が頭を上げ、歩速を上げた。

「このペースで行けば、明後日の夕方には、ボルドーに着くだろう。オルレアンは、紀元前五一年にローマ帝国によつて一度滅ぼされたんだが、その後ローマ皇帝のアウレリアヌスによつて再建され、その名が付けられたんだよ。」

その後、フランスが北アメリカを植民地にして、中心地にルイ十五世の攝政だつたオルLEAN公フイリップ二世に因んで、ヌーヴェル・オルLEANなんて街を作つたりしているが。

白い壁の、背の高い建物と、濃紺の屋根の街が綺麗な街だよ。サント=クロワ・ドルLEAN大聖堂という大きな聖堂もあるが、天気も好くないし、アミアンの時のように寄れるかは解らないな。見てみるかい？

ペラペラと喋つた後、エインがヴィヴィアンを見た。

「どちらでも構いませんが、せっかくの機会ですから、時間があれば是非。」

問うてはいるが、本音は『観に行こう』だと悟つたヴィヴィアンがこのように返すと、エインは満足げに頷いて、「時間があるといいねえ」と言いながら、椅子に深々と座り直した。

パリに入つて馬車の速度を少しばらしたものの、抜けた後は再びスピードを上げ、何とか日が変わらないうちにオルレアンに入ることが出来た。オルレアンに入る直前に豪雨に見舞われたが、もの数分で止んでしまう、一時的なものだった。

エインの言うメルヴェイユの宿は、オルレアンの中心から少しだけ離れた場所にあり、街の喧騒を感じない静かな宿だという事だった。

実際宿に着いて辺りを見回すが、木々の間に家が並び、遠くに街の灯りが煌々と輝いているのが見えるだけの、何もない場所だった。夜中の訪問だというのに、店主のメルヴェイユは快く一行を迎えて、温かい紅茶まで用意してくれた。

紅茶には、疲労によりと言つて、ボルドー産のワインをジャム代わりに入れてあつた。

「メルヴェイユさんの宿は、パリを訪れるたびにお邪魔するんだよ。この紅茶は美味しいよ。使つてているワインも絞つて日の浅いものだから、アルコール度もそんなに高くないし、糖度は砂糖代わりになる。

甘くて温かいから、疲れている体にはとてもよい。

ぐつすり眠れますよ。」

エインが言つと、トンプソンがウイリアムズを見てにこにこと笑つた。

「ローランは知らないだろうが、旦那様は生前、こちからお世話になつたという話を聞いて、『メルヴェイユが宿泊を許したなら、問題ない。』と仰つて、それで教授に部屋を。」

「そうなんですか。」

「そ、うなんだ。」

「ウイリアムズが言うと、エインが頷いた。

「ウイリアムズさんがまだ、あの屋敷に来る前の話だけね。」

すると、メルヴェイユが無言のまま奥のキッチンへ向かい、すぐに戻つて来た。手には、真っ白な丸い砂糖菓子が盛られた小皿が乗つている。

「ベルトワーズの旦那様は、これがひどくお氣に入りでした。みなさんもいがですか？」

今からでは夜食もご用意出来ませんが、甘いものは疲れを癒し、脳の働きを活性化させると言いますから。」

そう言つて、砂糖菓子の皿を一行の囲むテーブルの上に置いた。「ボクもこれ好きなの。」

そう言つて、エインが一つ摘んだ。余りに美味しそうに食べるのと、トンプソンとウイリアムズも、そそられて手を出す。若干体に疲れを感じていたヴィヴィアンも、最後に砂糖菓子を摘んだ。

口に入れると、じんわりと溶けて、粒も残らずなくなつた。

後味は軽く、仄かにミントのような香りが鼻を伝つて行つた。

各々心地よく味わつてゐる中で、ヴィヴィアンはただ一人、その味に古い記憶を思い出し、メルヴェイユを見た。

メルヴェイユはにこにこと笑つてゐたが、ヴィヴィアンと視線が合つて、周囲に解らないように口に指先を当てた。

ヴィヴィアンが思い出している事を悟り、『言うな』という意思表示だつたが、それを理解するなり、ヴィヴィアンは焦つた。

そんなやり取りに気付きもしない男三人は、紅茶のせいか、疲れのせいか、うとうととし始めたようだつた。

苦笑するメルヴェイユに案内され、各自部屋へと散る。

今回は基本個人部屋の宿であつた事もあり、エインとヴィヴィアンは別の部屋になつた。

エデインバラのHインの屋敷から出て、そういうえば独りになる事はなかつたように思つ。

オイルランプの灯る部屋は、馬車よりは広いが、エインに宛がわ
れた部屋よりは狭い。

滞在数分という状況だったのに、エインの屋敷が恋しくなった。
そして、ずっと一緒にだからか、独りになつて、エインも恋しくな
つた。

読書に耽つていない間の、あのお喋りにはウンザリもするが、な
いとないで耳が寂しい。

ベッドに横になると、壁の向こうから「トントントントン」という音が聞こえた。
隣はエインだ。何かしているのだろうか。

耳を澄ますために、目を閉じる。

窓の外からは雨音がする。弱いが、まだ降っているのだろう。
ふと、先程の砂糖菓子の味が蘇つた。

あの味。あの味が、ここにある訳がない……。

それに、店主のあの仕草は、何を意味すると書つのか……。
「あの人……。

何を知つているというの……。」

呴いて、目を開けたとき、ドアの向こうで廊下を歩く足音が聞こ
えた。

ヴィヴィアンは起き上がり、足音を消してドアに歩み寄った。
ドアに耳を当てると、エインの声が聞こえた。

「……大丈夫だよ。心配ないから。」

「エイン。あの人は心配だ。

よくない。」

もう一つ声がした。声は、メルヴェイユのようだ。

「エディットも心配性だなあ。大丈夫だよ。
彼女は心配ない。」

「エイン……。

「あの人はよくない。あの人は軍の……。」

メルヴェイユが言いかけて、止めた。遠くから、ドアが開く音が
聞こえたためだ。

次いで、とても小さく、

「どうなさいましたか、教授…？」

と、トンプソンの声がした。

トンプソンの部屋は廊下の突き当たりで、Hインとヴィヴィアンの部屋からは随分離れていた。声が小さいのも、距離のせいだろ？
「ああ、済まない、トンプソンさん。煩かったかい？
お疲れのところ、ごめんなさい。」

こちらは大丈夫ですよ。」

「そうですか。ならばよいのですが。

それでは、おやすみなさい。」

「おやすみ。」

「おやすみなさいませ。」

Hインとメルヴィンの声に見送られ、トンプソンがドアを閉めたようだつた。

「…Hイン。」

トンプソンのドアが閉まつた後、暫く無言になり、しかしメルヴィンが繰り返した。

「大丈夫だよ。ちゃんと解つてる。心配ない。」

声を殺しながらも、おどける様子を含ませて、Hインが答えた。
メルヴィンは諦めたようで、「解つたよ」と呟つと、階段を下りて行つたようだつた。

Hインは暫く佇んでいるようだつたが、やがて小さく溜め息を吐いて、部屋へと戻つて行つた。

そして、壁の向こうからベッドに勢いよく倒れ込む音がし、すぐに静かになつた。

「…。」

身動きせず、息をも殺していたヴィヴィアンは、重たい溜め息を吐いてドアから離れ、ベッドに腰掛けた。

「何を…、知つているの…。」

呴いて、沈黙をする。鎮まり返る部屋に、雨音が響く。

二つの間にか、雨は強くなっていた。

トントンといつ、ドアを叩く音で田が醒めた。

「ヴィヴィアン、起きてるかい？」

ドアの向こうで、エインの声が聞こえた。

「……はい。」

起き掛けのしゃがれた声で答え、田元だけ整え、ドアを開けると、エインが立っていた。

「申し訳ないね。

昨日遅かったのでゆっくりさせてあげたいんだが、雨が止まないので、早めに出発したいんだ。」

「解りました。」

眉を下げて吉川エインに頷いて、ヴィヴィアンが答えると、エインも頷き返して「下にいるから」と階段を下りていった。

雨に濡れて、大して体も拭かぬまま眠り込んでしまった昨夜だったが、体調は特に変わりなかつた。

念のためと、少し気持ちが悪かつたので、洗顔用の布を濡らし、首から胴回りにかけてを手早く拭いた。

一頻りの身支度を済ませ、足早に階段を下ると、店主とエインが手形のやり取りをしていた。

「済まないね、ヴィヴィ。」「

「いえ。」

そう答え、店主を見る。

昨夜の事が気にかかり、店主の様子を伺うが、出会った時と変わらぬ様子でヴィヴィアンににこりと笑つた。

「まだお待ちしております。」

「……お世話になりました。」

妙な緊張感を覚えて、ヴィヴィアンは慎重に返事をした。カバン

を持つ手が、じんわりと汗ばんだ。

そんなヴィヴィアンの様子を悟つたのか、エインが「早くしよう」と声をかけ、馬車へ向かつた。早く立ち去りたかったヴィヴィアンも、エインに続く。

外は霧雨が降つていた。風が吹くと、雨粒が体に纏わり付く。

「また来ます。メルヴェイユさん。」

馬車に乗り込み、小窓から手を振り、エインが言つと、メルヴェイユが無言で頷いた。

手短な挨拶を終え、一向は早々にオルレアンを出発した。ゆっくりと街を見る事が出来ないため、小窓を開けて外を臨む。暫く走ると、オルレアンの街を二分するロワール川を渡る直前に、左手遠方に大きな建物が見えた。

「あれがオルレアン大聖堂だよ。

サント＝クロワ・ドルレアン大聖堂。オルレアンの聖十字架大聖堂といつ。

一五〇年ほど前に、一度壊れてしまつたのを再建したんだ。

ジョーン・オブ・アークは知つていてるかな?」

ヴィヴィアンの後ろから小窓を眺めていたエインが、問うた。

「イングランドで”魔女”と異端視されているジャンヌ・ダルクの事ですね?」

「うん。

一四二九年に、ここオルレアンを、当時占領していたイングランド軍から解放し、長らく不在だったフランス国王の座に、シャルル七世を即位させるためフランスに貢献したんだ。

だがその半年後、未だイングランド支配下にあつたパリ奪還を主張した事でブルゴーニュ軍に捕らえられてしまつ。

その時、イングランド軍からの街開放という恩恵を受けたここの中市民たちが、身代金を支払つてゐるが、結局イングランド軍に身柄を預けられ、そのまま異端審問裁判にかけられてしまつ。

シャルル七世即位のきっかけとなつた聖女カトリーヌやマルグリ

ット、大天使ミカエルの声が聞こえたという主張や、男装を好んでいた事が理由だが、実際は、オルレアンやその周域を奪還されたブルゴーニュ公やイングランド軍の腹いせと、用無し故に処理に困ったシャルル七世の差し金に因るものだったという事を証明する文献が見つかっている。

実際、オルレアンから保釈のために支払われた身代金は、シャルル七世に没収されているしね。彼女は、宮廷内では用無しと疎まれていたらしい。

彼女は、判決直前に自らを異端と認め、カトリックへ改宗を誓つたが、その後すぐに監禁されていた塔内で、禁じられた男装をして、結局火刑になつた。

それでもオルレアンの人々は、彼女を讃え、大聖堂までの道は、ジャンヌ・ダルク通りと名付けられた。

エインが話し終えたとき、田の前に、今の道に垂直に交わる大きな通りが広がつた。

「この道ですね。」

ヴィヴィアンはそう言って、道の向こうの大聖堂を見つめる。

遠く離れていてなお、道の先の大聖堂は大きく高く聳える。

主要施設は石造りやレンガ造りではあるが、主立て木造りの民家の並ぶ街並みの中では、大聖堂はジャンヌ・ダルク同様、少々異端に見えた。

「そう。

彼女は、フランス軍やオルレアンのように、関わりを持った事のある都市の民衆には人気が高いが、フランス全土でみるとそんなに知られた存在ではない。

逆に、イングランドでは未だに、彼女は”魔女”であり、”異端”であり、嫌われ者だね。

ヴィヴィアンの後ろから大聖堂を覗いていたエインが、少し溜め息を吐いた。

「まあそんな事があつた以降は、元々古代から盛んだつた商業を中

心に、この街は復興を遂げて発展の一途を辿っている。

昨夜は雨も降っていたし、暗かつたので見えなかつただろうけど、この周りの農業も、ルイ一世のお蔭で活性化した。特に料理の香料や衣類染めに使う染料サフランの栽培が盛んで、この街の発展に大いに貢献している。

さらに、これから渡るジョルジュ橋は、通行料が必要でね。この金も、この街の貴重な収入源だ。

田を追う毎にどんどん潤う。街並みの印象とは対照的に、この街は非常に裕福なんだよ。

ロワール渓谷のほうには、この辺りを旅する富裕層のための施設や住居も充実している。

オルレアン大学という、今から五〇〇年も前からある大学があるんだけど、ここに通う生徒も富裕層の子供が多い。

歴代の生徒の中には、後にフランス国王に即位する者までいる。貧富の差は然程もないが、裕福な中にいて尚生い立ちの格差が障害になるケースもある、厄介な状況だけね。」

エインが話を一区切りすると、川の中洲前で馬車が止まつた。道は棒によつて一時的に塞がれ、何やら人が寄つて來た。それを見たエインが馬車を降りる。

そして、ヴィヴィアンには聞き慣れない言葉で話し始め、暫くして、エインがポケットに手を入れ、硬貨を幾らか渡した。

どうやら、先程のエインの話に出てきた、橋の通行料を支払つたようだつた。

戻ってきたエインが馬車に乗り込むと、道を塞いだ棒が取り払われ、先へ行く事を許された。

ジョルジュ橋の架かるロワール川はとても大きく、中州から橋の端まで走るにも、十数分を要した。

小窓から振り返ると、川と街の挟間には高い防壁が建てられていた。

「大きいから、川が氾濫するんだ。

そのための堤防だよ。戦争中は、防御壁としても使えたが。エインの解説に、ヴィヴィアンが頷いた。

「さて、橋を渡ると街を抜けるにそう時間はかかるない。

ここからは外を見ても田園風景。山も谷も徐々に少なくなつて、道も平坦になる。若干下るけどね。」

言いながら、エインは前方の小窓を明け、トンプソンを呼んだ。

「ロワール川に沿つてトゥールを目指してください。

早く出たけれど、雨もあるし、川沿いだから何があるか解らない。

夕方を過ぎた頃にトゥールに着ければ予定通りかな。

そんな感じでお願いします。」

「畏まりました。

この辺りは道の整備もきちんとしてあるので、大丈夫だと思いま

すよ。」

「それはよかつた。お願いします。」

そう言つてトンプソンに道を任せ、エインは椅子に座り直して、さつさと読書を始めてしまつた。

ヴィヴィアンはそんなエインに、小さく溜め息を吐いた。

日に日に会話も少なくなる。語る事も少ないし、街の周辺以外では変わつたものもない。

これならまだ、船旅の方が退屈は凌げただろうと思つ。

だが、同時に船旅でなくて良かつたとも思う。

エインの色々な顔を見た。

仕える者として、主の特性や嗜好を知るのは早い方がいい。

船旅では、今までに立ち寄つた先で見聞きしたような話は聞けなかつた事だらう。当然、エインに対しても知らぬままになつてしまつていただらう。

横目でちらりとエインを見ると、エインは周りに何もないかのように、夢中で本の文字を追つている。

何度も何度も読み返したよつて、角が折れ曲がり、よれよれになつてしまつた本だ。

手にした時、既に古かつたか、エイン自身がそこまでしたのか解らないが、本を持つ手は丁寧に添えられ、本に対する愛情も感じし、拘りも感じる。

ヴィヴィアンは、胸いっぱいに息を吸うと、ゆっくつと吐き出しへ、エインに声をかけた。

「眠っていてもいいでしょうか？」

「いいよ。」

ヴィヴィアンの問いに、エインは即答した。

「朝早くからね。済まなかつたね。」

エインはそう言い、一瞬だけ本から目を離してヴィヴィアンを見、そしてまたすぐに本に没頭したので、ヴィヴィアンは構わず、馬車の側面に凭れて目を閉じた。

そしてすぐに、眠りに落ちた。

カタカタと小刻みな振動で目が醒めた。

目を開けると、あらゆるもののが真っ赤に染まっている。

驚いて目を開けると、声をかけられた。

「やあ、お目覚めかい？」

振り向くと、ヴィヴィアンに、にこにこと笑うエインがいた。ヴィヴィアンは改めて辺りを見回す。

真っ赤な風景などなく、揺れる薄暗いクーペの、見慣れた内部が見えるだけだ。

だが、脇の小窓を覗くと、夕日によつて真っ赤に染め上げられた田園風景が広がっていた。

いつの間にか雨雲は晴れ上がり、雲の欠片も残つていらない空は、端を黒くしながらオレンジ色に燃えていた。

そこで初めて、夕方まで眠り込んでしまったのだと気付いた。それほど疲れているという自覚はなかつたが、夢も見ずに眠つていたと言つ事は、思いの外に疲れていたのだろう。

「すみません、長々と…。」

ヴィヴィアンが詫びると、エインは一層にこにことした。

「いいよ。まだ眠ければ寝てもいいけど、夜眠れないかも知れない。もうトゥールを過ぎて、ポワティエまであと一息というところだが、ポワティエで止まらず、そのままボルドーまで走つてしまおうかと思つてる。

夜は見えるものがないから、つまらないかも知れないし、我慢して起きていて、夜また眠るのをお薦めするけど。」

「…そうですね。」

暫く起きている事にします。」

「うん。」

ヴィヴィアンの言葉にエインは頷いて、手に持つていた本を閉じ

た。もう何冊目なのだろう。もしかすると、鞄の中は本しか入っていないのかも知れない。

「読書、お好きなのですね。」

「うん。

サン・アッシュ教授から聞いてなかつたかい？」

「お聞きしてはおりましたが、それ以上でしたので…。」

ヴィヴィアンが言うと、エインがくすくすと笑つた。そして、少し開けた小窓から外を見、頬杖を突いた。外側に開く小窓でも、中途半端な開き方では、ヴィヴィアンのいる場所から外を見る事が出来ない。細い隙間からは、ただ何とも判らぬ物が次々流れる景色が見える。

「知らない事があると、不安でね…。

何でも知りたい。

知らないと…。」

そう言いかけて、エインは口を閉ざしてしまつた。視線は遠い風景を見つめ、少しも動かなかつた。

「…？」

ヴィヴィアンが続きを待つて黙つていると、エインは自嘲気味にふと笑い、そして「ごめん」と呟いた。

「助けたい人がいる。

助けたい…ではない。生かしたい。死なせたくない人がいる。

その人を生かすために、死なせないために、必要な事を探してい

る。」

その言葉に、ヴィヴィアンの鼓動が少しだけ早くなつた。次いで体の末端の血の気が引き、冷たくなつてしまつた。ぎゅっと手を握ると、拳が震えた。

何に緊張したのか判らなかつた。

だが、ヴィヴィアンは今、緊張している。

口元さえ震えているのが判り、それを悟られぬよう、ゆっくりと声を出す。しかし気をつけても、声は震えてしまつた。

「…どひのよひな…。」

言葉すら、途中で途切れてしまう。

そんなヴィヴィアンに一瞬驚いて振り向いたエインは、尚表情だけは平静を保とうとするヴィヴィアンに、優しく笑つて頷いた。

「僕がこの世で一番愛している人。」

その無邪気な言葉と笑顔を受け、ヴィヴィアンの中に、複雑な想いが溢れた。そして直後、大きな動搖で胸がいっぱいになった。しかし、こんなに感情が震えているというのに、今度は先程とは一転して、表情が動かなかつた。

戸惑い、言葉すら出ないので、エインをじつと見つめる風になつた。

当のエインは、ヴィヴィアンの気など氣付かぬのだろう、微笑んだまま、ヴィヴィアンを見つめていた。

「似合わないと思つかい？」

「…いえ…。」

訊ねられ、応える声を、締め付けられる喉元から無理矢理出した。

「ご病気か、何かなのですか…？」

「うん？

いや、病気…というのかな…。

ちょっと、複雑な事情があつてね…。」

そういう、エインがヴィヴィアンから視線を外した。

あつという間に太陽が沈み、馬車の中はすっかり暗い。

その暗がりの中で、エインの横顔は少し切なそうに見えた。

「方法が、見当たらないんだ…。」

そう言つたきり、エインは無言になつた。

ヴィヴィアンはエインの横顔を、ただじつと見つめた。動搖はなかなか治まらず、しかし妙に思考は冷静だつた。

出発の時、暇潰しにと手渡された本が脳裏を過ぎる。

シャングリ・ラだつたか。

思い出し、一瞬後、ヴィヴィアンは目を見開いた。

何故、エインがある本を持っているのだ…？

そんな、そんな筈はなかつた。動搖が、さらに増した。

エインがそんな物を持っている筈がないのだ。あつてはならない。何故なら…。

ヴィヴィアンは冷静に動いていた思考が、動搖によつてバラバラに散らばつて行くのを感じた。

必死に繋ぎとめ、理論を組み立てようとすると、ままならない。

内心を悟られぬよう、ヴィヴィアンは表情を固め、下唇を噛んだ。

教授…。

あなたも、何かご存知なのですか…？

夜中にポワティエを超えて、何度か馬を休ませた以外は、ほぼ不休でアングレームとローヤックの中間地点を通る道をひた走る。

馬を休ませるたび、各人も凝り固まつた体を解すため、馬車から降りた。

ヴィヴィアンも流石に疲労し、やや気も回らなくなつていた。が、エインやトンプソン、ウインストンに関しては特別気を遣う必要もなく、何よりこの馬車旅では、メイドとしての仕事も少ない。

ポワティエからボルドーまでは元から勾配の少ない地域ではあるが、馬の足のため、なるべく起伏も少なく、土質の柔らかい、若しくは草の茂る平坦な道を選んで進む。だが、この辺りは古くから田畠の多い地域で、土も緑も豊かで柔らかいので、殆ど予定のコースを外れる事無く、進む事が出来た。

とは言えど、やはり道程は遠く長く、未だボルドー近郊のコミューンすら見えぬ辺りだと言うのに、すっかり夜を迎えてしまった。

「この辺りの風景は、夕方が一番綺麗なんだけどね。

ベルトワーズ邸の辺りと似ているから、そこでゆっくり見るといい。

因みに、畑の多くは葡萄畠だが、ソーテージに使うハーブの栽培も盛んだよ。

ボルドーを越えた先、大西洋の内海アルカションで獲れる牡蠣もなかなかに旨い。

ボルドーの街から海側は風が強いから、農園より酪農地帯という感じになっている。

真つ暗な風景の解説を、形式とばかりに簡素にまとめてエインが簡単に話した。

オルレアンを出て以降は、ヴィヴィアンが寝てしまつていたり、エインも本に没頭してしまつていた事もあり、エインの解説を聞く

のも久しぶりな気がする。

「ベルトワーズ伯爵のお屋敷は、ボルドー市内を越えた先なのです
か？」

「いや。

ボルドー市手前の森を右側へ、ガロンヌ川に沿つように少し行つ
たところだね。

残念ながら海は見えないが、お屋敷の川辺の庭は美しいよ。

ああ、そうだ。ボルドーと言えばカヌレだね。

アンのカヌレは、焼き菓子の名人以上と言つても過言ではないく
らいに素晴らしい。きっと美味しいカヌレを用意してくれている事
だろう。」

エインはそう言って、にこにこと笑つた。

ヴィヴィアンはその様子に、あの一言を思い出し、また指先が冷
たくなるのを感じた。

嫉妬とも、憂いとも違つ、何か底知れぬ不安のよつたものが、胸
の中を蠢くのを感じる。しかし、この感情がなんと表現されるのか、
ヴィヴィアンには判らなかつた。

一方、押し黙つたままのヴィヴィアンを、エインは疲れが溜まつ
ているのだと誤解をして、苦笑した。

「到着まで、あと数時間。

疲れていたら、休んでいいよ。夜中のうちに着くが、大分明け
方に近くなつてゐるだろうから。」

「……はい……。

申し訳ありません……。」

「謝る必要はない。寧ろ、謝らなければならぬのはボクの方だ。
急な長旅をさせてしまつて、申し訳なかつたね。」

「いえ……。」

詫びるエインに、ヴィヴィアンが訂正をしようとするが、前方の
小窓が叩かれた。

「教授。」

トップスンだつた。

「はいはーい。」

気楽に返事をして、エインが小窓を開ける。

「どうかしましたか?」

「はい、そろそろボルドー手前の森が見える頃ですので、お知らせを。」

「おや、もうそんなところまで来ていたのか。」

「有難う。」

そう言い、エインがヴィヴィアンを振り返って、指で小窓を指した。

ヴィヴィアンが指示通り小窓を開け、前方を見ると、暗がりの中に一層闇に沈む区域があった。だがその向こうには、ぼんやりと光が浮かぶ。ボルドーの街の灯りだろう。

「あれがボルドー手前の森だね。森と言つても小さなワニコーンは沢山あるが。」

ボルドーの説明をしよう。

ボルドーはケルト系ガリア人によって、今から一〇〇〇年近くも前に創設された街だ。

場所柄、創設された当初から活発に船の往来する港町で、ローマに占領された事を期に、貿易、交易の中心地ともなった。

古来からワイン生産が盛んで、土も豊かだから、ゴート人やバイキングなど、異国人の侵略をよく受けた場所だが、先のヴァロワ朝フランス王国とランカスター朝イングランド王国の戦いでイングランドが破れ、フランスに奪還された。

しかし、イングランド支配下で自治などある程度を享受していたこの街は、それ以降から八十年ほど前まで、フランスに反逆していた。今でもちらほらと、フランス自体を嫌っている人もいるが、逆にイングランドに親しみを持つてくれているので、市民とは付き合い易いと思うよ。」

街を二分するガロンヌ川は流れが速く幅も広いので、渡るには苦

労するんだ。ベルトワーズ邸は、川のこちら側なので渡らないが。

街と言つても、田畠の多いところだが、それでもパリに匹敵する

程の大きな街だから、夜でも灯りが見える。よい道しるべだ。」

ヴィヴィアンの後ろから窓を覗きこんで、エインが言つた。

「モンタンドルを過ぎたところか。

森を曲がつたら馬の速度も少し落とすだらうから、ここからだと、伯爵邸までは六時間と言つたところかな。」

エインが、言いながら座り直した。そして少しだけだらしなく姿勢を崩して、「ボクは寝るけど」と言つて笑つたので、ヴィヴィアンもそれに倣つ事にした。

「私も、休みます。」

「そうしなさい。」

エインはもう一度ヴィヴィアンに微笑んで、前方の小窓を開けトンプソンに後を託すと、早々眠つてしまつた。

ヴィヴィアンは、エインの寝の早さに呆れつつ、小窓の外を再度眺めた。暫し夜風に当たりながら、考え事をする。

先程の気持ちはすっかり消え、しかし仄かに残つてゐる不安の残骸のようなものが、相変わらず指先の血の気を引かせてゐた。

何かに脅えているようだと、思つた。何に脅えているのだろう…。思ひを廻らすが、心当たりなどある筈もなかつた。

夜風に当たると、思考のみならず、心まで冷めていく様だつた。海が近いからだろうか、心持ち、風は冷たい。そして土と樹木の匂いに混じつて、微かに、船上で嗅いだ潮の香りもする。

指先を擦る。先程より、若干血が通つたようだ。

そう思つと、急に心が穏やかになつた。

ヴィヴィアンは小窓を閉め、目を閉じて椅子に凭れた。これまで苦痛にすら感じていた馬車の揺れも、眠るには心地好いと気付く。

視界を遮り、暗闇に沈み、カタコトと小走りする馬車の揺れと馬の足音に耳を傾けると、どんどん思考が研ぎ澄まされていく。まるで、脳に記憶されている情報が、次々繋がり、全ての事を理解出来

て行くような感覚だ。そして、回路が構築されていく毎に、心の底から光が溢れ、道が出来ていく。

そうか。と、ヴィヴィアンは目を開けた。

ゆっくり、隣のエインを見る。すやすやと、歳にそぐわぬ無垢な寝顔で、規則正しい寝息を立てるエインは、何者であるかなど関係なく、護るべきものに思つ。

ヴィヴィアンは静かに、エインに頷き、小さく溜め息を吐いて、再び小窓を開けた。

先程より、ボルドーの街の灯りは、はつきり感じられる。着々と、目的地に近付いていく。

目的を果たそう。そのために、ここにいる。

決意をして暫し、無心で外を眺める。

やがて、大きな影であった森を森と認識出来る位置まで来たとき、馬車が右へと曲がった。

左に森を臨み、すっかり隠れてしまつたボルドーの街の方角の空を見上げる。

よくよく見ると、空は濃紺で、丸い月が浮かんでいる。若干欠けているが、もうすぐ満ちる月だつた。

月の脇には小さく強い光を放つ星が散る。

ロンドンにいる時より、ずっと星が綺麗に見えた。

空気が澄んでいたのと、辺りが暗いせいではあるが、今のヴィヴィアンには、違う理由のように思える。

暫くは、この星空の下で過ごせる。

そう思つと、無表情の下で、心が躍つた。

大分、月が東へ傾き、空が薄白んだ頃、隣で眠っていたエインが目を覚ました。

エインは体いつぱいに伸びをしながら、ヴィヴィアンを見た。

「おはよう。

もうベルトワーズ家の敷地だね。

屋敷もそろそろ見えるよ。」

そう言いながら小窓を開け、外を見るなり、ヴィヴィアンを手招きした。

エインに近付き、ヴィヴィアンも小窓を覗くと、ゆっくりとカーブする道の向こうにポプラの並木が見えた。その並木のさらに向こうに、暗闇の中、さらに翳る建物が見えた。

西側に大きな背の高いシャトーが聳え、東側には細く背も低いプラシャトーを並べた母屋という姿の屋敷だ。

「あれが、ベルトワーズ邸。

グランシャトーで見えないけれど、シャトーの裏手に少し太いプラシャトーが建っていて、そこが書庫になつていて。ボクが使わせて貰つていたところだよ。」

指を指しながら、エインが説明した。その後ろで、ヴィヴィアンがじつと屋敷を見つめている。

「シャンティイーを模して作られた、と仰いましたね。」「うん。

シャンティイーも、建物の方角は違つけれど、あの形にそつくりだよ。

もう少し大きいけれどね。」

そこまで聞いて、ヴィヴィアンが座り直した。

エインも小窓を閉め、前方の小窓を開けてトンプソンとヴィリアムズを呼ぶ。

「長旅、お疲れ様でした。」

言われて、トンプソンとヴィリアムズは振り返り、申し訳なさそうに首を振った。

「教授も、お疲れ様でございました。

もう少し早く到着出来れば、お休みになる時間もありましたでしょ、うに、申し訳ありません。」

「いやいや。

寄り道を頼んだのはボクだから、気にしないで下さい。

暫く滞在するので、数日間、引き続きよろしく。

「承知致しました。御用があれば何なりと。」

会話の最中も、馬車は屋敷へ走り、一息ついてヴィヴィアンが小窓を開けた頃には、遠目に見えたポプラ並木を潜っているところだつた。

そろそろ花の咲く季節なので、葉もしつかりと付いているのが、暗闇でもよくわかる。姿も冬の時のそれと違つて、若干ボリュームがある。

辺りを見回すと、広大な敷地に小さな森がいくつかと、葡萄畠と思しき畠の他、藁を積み上げて整備中の区画に、厩舎やサイロ、大きな納屋と言つた建物が点々と建つてゐる。

「ここは、かなり広いよ。数日探検しても、回り切れないくらいだ。小さな湖のある森もあるから、息抜きに回らう。」

エインがつっこりと笑うので、ヴィヴィアンは素直に頷いた。

やがて、馬車の速度が落ち、止まつた。

馬車の外で、トンプソンとウイリアムズが下りる音がし、次いで、エイン側の扉が開いた。

「到着致しました。」

恭しく降車を促す一人に、エインは一つ頷いて馬車を降りると、ヴィヴィアンに手を差し出した。

差し出された手のひらに片手を乗せ、ヴィヴィアンはドレスを少しあし上げて、クーペの脇に添えられた足場に慎重に足を置く。暗く段差が少しだけ怖かったので、足が土を感じた瞬間に、ヴィヴィアンは勢いよく降りた。

そんなヴィヴィアンを、エインは手を引いて馬車から離した。ヴィヴィアンの後ろでは馬車の荷台からウイリアムズがエインとヴィヴィアンのカバンを取り出した。

「お運びします。」

そう言いながら歩き出したウイリアムズの向こうで、屋敷の灯りが灯つた。灯りはエントランスと二階の一部に灯っている。恐らく出迎えのためと、二階の灯りはエインとヴィヴィアンの寝室になる部屋だろつ。

屋敷からウイリアムズに視線を戻すと、不意にエントランスの扉が開いた。

大きな三つ又の蠅燭立てを片手に持つた執事と思しき男性に続き、女性の姿が見えた。肩に大袈裟なほどに大きなストールを巻き、白くシンプルなレース使いの寝着を身に付けた女性は、エインを見るなり、エインに向かつて走り出した。

「お嬢様！」

声を殺しながらも叫び嗜める執事にも構わず、”お嬢様”と呼ばれた女性は、エインに駆け寄り腕を掴んだ。

「エイン！ お待ちしておりますのよ！」

「おはよう、アン。遅くなつて、申し訳ありません。」

「お嬢様、お体に障ります。」

アン・ベルトワーズ。ベルトワーズ伯爵の一人娘で、エインに手紙を出した本人だつた。

「アン、夜風は体に悪いですよ。」

エインが言うと、執事も頷いた。

「お嬢様、お体に障ります。」

言われて、アンが俯いた。が、すぐにエインの後ろのヴィヴィアンに気付く。

「……どなたですか？」

声には一つの嫌味もなく、純粹に、誰かと問うていた。

「アン。また昼にでもゆっくり紹介しますが、彼女はヴィヴィアン。ボクの助手です。」

「助手の方です。」

「アン・ベルトワーズです。よろしくお願ひいたします。」

スツールに隠した手を、アンが差し出した。その手は暗闇の中で、

白々と光るほどに白く、細い。

ヴィヴィアンは、恐る恐る握手した。

「冷えますわね。中へ入りましょうか。

お部屋の用意は出来ておりますのよ。

夜明けまでも少し時間はありますから、休んでくださいな。」

アンはそう言って微笑むと、さっさと屋敷に入ってしまった。

残されたエインとヴィヴィアンを、執事が誘導する。中に入った

頃には、既にアンの姿は見えなかつた。

特に不快という顔をしていた訳ではないが、執事がヴィヴィアンに言った。

「申し訳ありません。

お嬢様はお体が弱く、睡眠不足も体調に影響いたします故、早々に自室へ失礼させていただきました。」

「お気遣いなく。大変ですね。」

ヴィヴィアンが言うと、執事もアンと同じように微笑んだ。

「ここのは、アンダーソン教授がお見えになるので、元気にしておられたのですが、昨日から咳をなさるようになります…。」

呼ばれたエインは、苦笑した。

「無理をしたのでしょうか。暫くはお邪魔しますから、慌てずとも良かったのに。」

「そうですね。

ああ、ワインストン。そこにある箱を持てますか？」

エントランスを過ぎ、屋敷の中央にある大階段を昇つたところで執事に言われ、屋敷に入つてからエインとヴィヴィアンの後ろを歩いていたワインストンが、執事の指差す箱を持ち上げた。カバンは、付き添いのメイドたちが持つていて

そのまま三階へ上ると、左右に同じ長さだけ、廊下が伸びていった。窓と扉が向かい合つて並ぶ廊下の幅は、人三人分と言つたところか。部屋は、屋敷の南側に並んでいる。

右手の廊下の突き当たりになる、プチシャターの一室が、アンの

自室だといつ。東側の、口当たりと眺めの良い部屋だと、エインが言つた。

エインとヴィヴィアンは、東側のエリアにある一室を、それぞれ宛がわれた。

客人と言えど、メイドであるには変わらず、ヴィヴィアンは従者たちと同じ部屋にして欲しいと頼んだが、それはエインによつて拒絕された。執事も同様に、首を横に振つた。

エインの部屋とヴィヴィアンの部屋は隣同士で、執事曰く、部屋の中でも一部屋は繋がつてゐるという事だつた。

荷物を持つメイドを連れ、部屋に入る。

南向きの部屋には、天井まである大きな窓があり、そこからテラスへ出る事が出来た。執事の言つとおり、窓の脇には、隣のエインの部屋に通じていると思われる扉があり、申し訳程度に窓のカーテンで隠されていた。

予想以上に広い部屋を与えられてしまい、少々途方に暮れていたヴィヴィアンに、メイドが声をかけた。

「お荷物は、こちらに置かせて頂きます。」

言いながら、メイドがクローゼットの前にカバンを置いた。

「有難うござります。」

ヴィヴィアンが礼を言つと、メイドは深々と頭を下げた。

「御用の折は、執事のクリーブスか、私たちにお声がけ下さい。」

そして、メイドは出て行つた。

独りになつたヴィヴィアンは、窓に歩み寄ると、錠を外してそつと窓を開けた。ふわりと冷たい風が吹き込む。

田の前には穏やかな田園風景が広がり、どことなくエインの屋敷から見た風景に似ていた。

「風邪をひくよ。」

突然声をかけられた。振り向くと、エインがテラスに出でていた。

「海に近いから、風もイングランドとは違う。」

それに夜明け前の風は、考へてゐるよりずっと体を冷やしてしま

うものだよ。」

「はい。」

従おうと窓を閉めかけて、ヴィヴィアンはエインを見、
「教授は、お休みにならないのですか?」

と言つた。エインは「うん? ボク?」と驚いた後、悪戯っぽく笑つて、

「ボクは、ヴィヴィが寝たのを確認したら寝る。」
と答えた。

それを聞いたヴィヴィアンは、何故かとても恥ずかしくなつて、
無表情を作つたまま一礼し、窓を閉めた。

そしてカーテンを閉めると、闇の中で寝着に着替え、ベッドに横
になつた。

道中、ベッドで休む事はあつたが、そのどれとも違つこの屋敷の
ベッドは、ヴィヴィアンの睡魔をすぐに呼び起^レしてくれた。
久しぶりに、心地の良い夢が見られそうだった。

カーテンの隙間から差し込む朝陽が、じんわりとヴィヴィアンの瞼を照らし、自然な目覚めを促してくれた。

目を開けると疲れも眠気もなく、しかし目覚めのまどろみに身を沈めながら、ヴィヴィアンは寝返りを打つた。

良質なベッドのお蔭か、短時間で十分深い睡眠を摂る事が出来たようだった。

「ふう…。」

ヴィヴィアンは小さく溜め息を吐いて仰向けになると、思い切り伸びをした。

縮まつた躰が伸びていく。

体のバネが戻ったところで、ヴィヴィアンは勢いをつけて起き上がり、部屋の中を見回した。

広い広い客室だ。大きなクローゼットに、大きなベッド、ベッドの向かいにはドレッサーと洗面台があり、大きな水差しが置いてあつた。近付いて覗くと綺麗な水が並々と汲んである。エインの部屋と繋がるドアは、ドレッサーのある壁の端に、ひとつそりと佇んでいる。

廊下へのドアの真正面には一面に窓が広がり、朝陽の射し具合からして、窓は真東を向いている筈だ。

非常に広い部屋だ。

窓に歩み寄り、カーテンを開ける。夜では気付かなかつたが、重く大きなビロードのカーテンは三重になつていて、日の光を完全に遮断していた。

ヴィヴィアンはカーテンを少しだけ開けたまま、水差しの水を洗面台に入れ、顔を洗つた。そして傍らに置いてある拭き取り用の布で水気を拭き取る。布は、アミアンの宿にあつたものと同じように、薄手なのに柔らかく、使い心地が良かつた。

次いで結つた髪を一度解き、丁寧に脂を拭き取つた後、再び丁寧に結い直す。最後に布を軽く水に濡らし、汗を搔いた箇所を拭き取つた。

今夜には風呂を使わせて貰えそうだが、それまで不快な思いを我慢する必要もない。

身支度を終え、ヴィヴィアンはカーテンを開け放つた。窓の外にはどこまでも田園が広がり、地平線からそれほど離れてはいない陽は、小さな森の影を長く伸ばして田畠に映していた。

風景に見惚れ、暫くぼんやり眺めていると、隣の部屋の窓が開いた。

「おはよつ。」

振り向くと、エインが腰に手を当てて立っていた。

「よこ景色でしょ？」

血潮^{ハヤシ}に言ひ。

「はい。」

教授のお屋敷からの風景も、素晴らしいですが。」

「うん。でも、スケールが違うからね、比較にならない。」

ボクんちの景色も素晴らしいが、こちらの景色も素晴らしい。」

エインがそう言つと、少し強い風が吹いた。仄かに潮の香りがする。

「風が潮を含んでいるから、当たりすきると体がベトつく。注意しない。」

「はい。」

エインに忠告され、ヴィヴィアンが頷く。

「さて、もう九時になる。」

「そろそろ下に行つても良い頃かな。一緒に来るかい？」

エインはびつやり、部屋を出るタイミングを見計らつていたようだ。九時という時間であれば、屋敷も朝の支度を終えて落ち着いている頃だろう。

「い」一緒にします。」

ヴィヴィアンが再度頷くと、Hインは「よし」と黙つて部屋に入つた。

ヴィヴィアンも部屋に戻り、窓を閉めると、廊下へ出た。同時に、Hインも出て来た。

「さあ、行こう。次いでだから、ちょっと外に出よう。」

そう言つて、階段へ歩き出したHインに着いて、ヴィヴィアンも歩き出す。

廊下は長く、広い。部屋へ案内されたときには暗闇に溶けて見えなかつた廊下の端は、日中でもやはつはつきりとは見えないくらいに遠い。

つい数時間前に歩いた階段は、屋敷の真ん中を走つていて、天井には大きなシャンデリアが吊り下げられている。そのシャンデリアを釣るワイヤーを中点にした円形の天井の周りを、ステンドグラスを施した天窓が囲い、色とりどりの光を階段や周辺の壁へ注いでいる。中には、壁に飾られた絵画と光が、まるでこの状態が完成であるかように、見事に重なり合つているものもある。その絵画はキャンバスにいっぱいに花びらの舞う花畠の風景画で、ステンドグラスの緑色の光は、まるで薫や葉のように花々と重なつていた。

足元の赤い絨毯には、金と銀で優雅な植物の刺繡がされ、踏むのが惜しいくらいだった。

「お目覚めですか。おはようございます。」

声がして振り向くと、一階の階段前で、Hインとヴィヴィアンを見上げにこつと笑う執事の姿が見えた。

「おはようございます、クリーブスさん。

勝手についひひひとせて貰つてます。」

Hインが言つと、クリーブスは一層笑つた。

「もうすぐ朝食の「用意をいたしますので、あまり遠くへお出になりませんよう。」

「用事が済みましたら、大広間まで起こしドセ。」

「はい。ちょっと、ぶらりととりますよ。」

「 いってらっしゃ いませ。」

「 深々と頭を下げるクリーブスに見送られ、メイドが開けてくれたエントランスから外に出る。

正面には、闇の中潜ったポプラ並木の小道が通り、屋敷前の広場との境目には背の高いゲートが聳え立つ。ゲートには大きな可愛らしいカウベルが下がり、時折、風を取り込み「ぼう」という太い唸り声を上げている。そのゲートに連なり、屋敷の周りを背の低い真つ白な柵が囲っていた。

エインが、ゲートの真下に立ち、ヴィヴィアンを手招きした。

ヴィヴィアンが駆け寄ると、エインは屋敷を正面に向き、腰に手を当てた。

「 階段の天井に、大きなステンドグラスがあつただろう? 」

「 はい。」

「 屋敷の中からだと、少し解り辛いんだけど、あの屋根、実は背の低い円錐形になつていて。

ちょうど、階段の一段目の真ん中を中心としたシャトーになつていて、その真上の天井が、円錐屋根になつていて。

円錐は八面になつていて、ステンドグラスは、屋根に沿つて八枚。シャトーの壁にも八枚、絵画が飾られている。

ある特定の日の特定の時刻、快晴であれば、その陽の光を受けた特定のステンドグラスは、各々決まった絵画と重なり、一つの作品を作り上げる。

今の季節は、グリーンのステンドグラスなんだ。ちょうど階段を下っている頃の時間が、その完成形が見られる時間だつたんだよ。」

エインに言われ、ヴィヴィアンが頷いて「気になつて、見ておりました。」と答えると、エインが満足そうに笑つた。

「 さすが、ボクの助手だね。

あんな風に、何かと何かを組み合わせる、という方法で、単体でも完成形に見えるけれど、組み合わせる事で真の完成形を作り上げる、そんな細工を施したものが、この屋敷には山程ある。

退屈したら、屋敷を探索するといい。ただ、絵画とステンドグラスのように、時間や日付が決められているものもあるから、そういうものは残念ながら、この滞在中では見られないけどね。」

そして言い終えるなり、エインは笑顔をふつと仕舞いこんで「それから…」と言い、屋敷から西側へ伸びる小道を指差した。道の向こうには、小さな森が見える。

「いいかい、ヴィヴィアン。

あの道は、絶対独りでは歩かない事。

特に、あの道の先にある小さな森へは、絶対に近付かない事。」

怪訝に思い、指先からエインへ視線を移すと、エインは真っ直ぐヴィヴィアンを見ていた。表情は硬く、険しく、微かに哀しそうだつた。

「約束してくれ。」

念を押すように言われ、ヴィヴィアンは戸惑いつつも何も聞かずに頷いたが、それを見ても尚、エインは不安げに森へと目をやり、暫く動かなくなってしまった。

「…教授？」

心配になつて、ヴィヴィアンが声をかけると、エインは「うん」「うん」と返事だけして、目を閉じて深呼吸をした。それからやつとヴィヴィアンを見て、微笑んだ。

「お腹空いたね。」

言葉と表情とは裏腹に、声には若干の不安を含み、エインはヴィヴィアンの返事も聞かぬまま、屋敷へと歩いて行つてしまつた。ヴィヴィアンが慌てて追いかけると、今度はすっかり先程の様子など伺えぬほど普段どおりににこりと笑いながら、エインが振り返つた。

「食事が済んだら、君を紹介しなければね。」

そして再び見た前方には、クリーブスが一人を迎えるべく、立っていた。

クリーブスに案内された大広間は、煌びやかな装飾のあしらわれた調度品を所狭しと並べた、優雅な部屋だった。東側の大シャトーノ一階にあり、東から南にかけて大きな窓が並び、西側の壁には沢山の絵画が飾られている。

広さはヴィヴィアンやエインに宛がわれた客室の数倍はあるだろうか、部屋はさりげなく一分され、入って手前には大きな丸いダイニングテーブルの一式が、奥にはソファセツトが置かれていた。故ベルトワーズ伯爵の意向により、貴族などが愛用する長いダイニングテーブルではなく、より賑やかに食事の出来るこの大きな丸いテーブルを用意したのだと言つ。

各テーブルの端には細かな装飾が施されていたが、料理や食器、飾られた花花を邪魔しないよう配慮されたデザインである事は明確で、調度品などに明るくないヴィヴィアンにも、伯爵の人柄を捉える事は十分可能だった。

そのテーブルに並べられた料理は、まさしく今出来たばかりと湯気を立て、エインとヴィヴィアンを出迎えていた。

ヴィヴィアンは、クリーブスとエインに窓の脇の席を薦められた。頷くと、エインが椅子を引いてくれた。腰を掛けると、その隣、窓を真正面に見る席にエインが座り、クリーブスが料理を取り分け始めた。

料理は、道中、食事も簡単で質素なものが多かつた事を見越し、胃が驚かないよう、野菜を中心とした軽いものが多いようだった。

「今は最低限の使用人しかおりませんもので、大した御持て成しも出来ません。

『ご容赦ください。』

そう言いながら、クリーブスが細く短くスライスしたラティッシュをここんもりと乗せた皿をヴィヴィアンの前に置いた。

食材に施された作業はどれも丁寧で、詫びられるようなものではない。

「葡萄の香りがしますね。」

ヴィヴィアンがラディッシュに少し鼻を近づけ、言った。

クリーブスがにこりと笑う。

「お解りになりますか。

屋敷の畑で取れたラディッシュを、絞り立ての葡萄果汁で数日間浸けこんだものです。

今からお掛けするソースにも、葡萄果汁を混ぜ込んであります。ラディッシュの下にはじやが芋と豆のポタージュがじゅごいます。ラディッシュと葡萄のソースと、総て混ぜて畠し上がってください。

「頂こう。」

クリーブスの説明を受け、エインがスプーンを手にし、食事が始まった。

頃合いを見ながら適度に出される料理は、どれも気兼ねなく口に運べ、胃に流れるものばかりだった。

朝から出された肉ですら柔らかく叩き崩され、葡萄果汁で甘く香りづけをし、少量のバルサミコ酢で仕上げたすつきりとした料理で、軽々平らげる事が出来た。

眠気はないが睡眠不足ではある体に対して、きちんと食事が出来ると言うのは、有り難い事だった。

一通り平らげ、腹も満たされたところで、傍らのグラスに紫色の液体が注がれた。

「ワインではございません。」

料理にも使用した葡萄果汁に、リンゴと、オレンジやレモンなどの柑橘類の果物を浸けこんだ飲み物です。」

言いながら、クリーブスがエインを見、悪戯気味に笑った。

「教授が申されますには、朝から飲酒は脳に宜しくないそうで。」

言われたエインも笑い返す。

「そうですよ。朝はジュースに限るね。」

二人の会話を聞きながら、ヴィヴィアンは一口、ジュースを口に

含んだ。甘酸っぱい柑橘類の風味と、葡萄の渋みが面白い味だった。

「いかがですか？」

不思議そうにグラスを眺めるヴィヴィアンに、クリーブスが笑つた。

「素敵ですね。」

「有り難うござります。」

ヴィヴィアンの性格を見抜いているのだろう。無表情にして簡潔な感想に、クリーブスは満面の笑みを浮かべた。

「さあ、あちらのソファへお移りください。

昨夜、とてもよい洋梨が手に入りましたので、シェフがフルーツケーキを焼いたのです。

食後のデザートとしてお運びしましょう。

お嬢様も、じきにいらっしゃいますので。」

そう言って、クリーブスが一度奥へと消えた。

エインとヴィヴィアンがソファセットへ移ると、最小限の音を立てながらメイドが食器類を片付け始める。

きびきびと動くその様子に、ヴィヴィアンは少し、後ろめたくなつた。元来、自分の位置づけは、彼女らと一緒に。

「気にする事はない。」

横目でメイドを見るヴィヴィアンに、エインが微笑んだ。

「君には、ボクを手伝うと言う仕事がある。

彼女らと君は、似て非なる者。ここでの君の役割は、彼女らと同じではないよ。」

「…はい。」

エインに言われて返事をして、ヴィヴィアンは窓の外へ目をやつ

た。朝陽は相変わらずさんさんと部屋へ注がれ、少し肌寒い部屋をほんのりと温めている。

「おはようござります。お二人。」

いつの間にかメイドも引き、暫し無言になつた二人だけの空間に、アンの声が響いた。

振り向くと、薄いピンクのドレスに身を包んだアンが、朗らかに笑っていた。後ろには、ワゴンを押すクリーブスを従えている。ワゴンには、ティーポットとティーソーサーを乗せた大きな銀のプレートと、先ほど言っていたフルーツケーキを乗せた大皿が並んでいる。

アンの姿を見るなり、エインが立ち上がり、アンに歩み寄った。ヴィヴィアンも、エインに倣つて立ち上がり、しかし歩み寄りはせずに振り向くだけにした。

「おはよう、アン。」

エインがアンの手を取り、部屋の一一番奥にあるソファへ誘導した。そして、ヴィヴィアンに振り向き、「改めて紹介をしなければ。」

と言つた。

ヴィヴィアンも頷き、アンへ挨拶をする。

「ヴィヴィアン・トーマスと申します。」

他に言つ事もなく、名乗るだけにすると、エインが補足した。

「ヴィヴィは、ボクのところに来たその日に、スコットランドを出る羽目になつたんですよ。」

「まあ、それは大変でしたのね。」

「ごめんなさいなさつていつてくださいな。」

わたくしはこんな体ですので、あまりお目にかかるないかも知れませんけれど、屋敷の中は自由にお使いくださいね。

困つた事があれば、そのクリーブスをお探し下さい。」

「ああ、教授でも大丈夫ですわね。」

言いながら、アンがエインを上目遣いに見た。

エインが苦笑する。

「アンは、生まれつき胸の病気を患つていてね、外に出るのもままならない。」

時々、部屋へ行って、話し相手になつてあげておくれ。」

エインが言つと、「お待ちしてますわ、ヴィヴィ。」とアンが笑

つた。

胸の病か。

田の前のアンは、昨夜の青白さより若干の生氣はある肌色ではあるけれど、昨夜と同様に華奢で、触ると折れてしまいそうなガラス細工のようだつた。昨夜と違つて結い上げた髪も、美しいブラウンではあるものの、どこかに病の氣を感じる艶が見てとれるのは、思い込みによるものだろうか。

ヴィヴィアンより若い歳にして、ピンク色のドレスが似つかわしくないのも、同様なのだろうか。無理をして明るい色を着た。そんな印象だった。

頬はふっくらとして愛らしいのに、赤みがない。田もくつくらりと大きいのに、見つめられると田を背けたくなる。

ヴィヴィアンは、「はい」とだけ返事をして、アンに解らないよう、唇を噛んだ。

「お一人とも、お座りになつて。

シェフがフルーツケーキを焼いてくれたそうですわ。」

アンが、ヴィヴィアンの後ろにいたクリーブスを見て、着席を促した。

クリーブスはいつの間にか、フルーツケーキを切り終え、紅茶も注ぎ終えていた。

「洋梨の焼き菓子でござります。

昨夜手に入りました洋梨と、屋敷の畠で採れた葡萄とオレンジを日干ししたもの、近くの森で採れる木苺を入れて焼き上げてあります。

ラム酒の代わりに、ワインを使用しております。」

「若干強めですが、問題ないでしょ。」と付け加えて、エインをちらりと見る。

「お嬢様が昨夜、カヌレを焼きましたので、添えさせていただきました。」

クリーブスの言つとおり、彩色豊かなケーキの隣に、蜜蠍の照り

が残る小さなカヌレが乗つていて。昨日だつたが、エインが言つていた、”アンのカヌレ”とはまさにこれの事だらう。

配られた皿の菓子に、アンとエインがフォークを刺すのを待つてから、ヴィヴィアンもカヌレをフォークで切り分け、口に入れた。なるほど、確かに焼き菓子職人も顔負けをするほどの中である。フルーツケーキもクリーブスがわざわざ洋梨と付けるだけあって、洋梨の味を存分に出した素晴らしい味だった。

少し雑談をしながら、菓子を食す。料理を一通り平らげて、に、まだ口に運べるほど、デザートの味も良かつた。

甘いものを食べた事で満たされたのか、ようやく腹もいっぱいになり、そのタイミングを待つていたのか、エインが突然切り出した。

「さて、アン。

早速、本題に入りましょう。」

アンもそのために顔を出したようで、エインに言われるなり、即座に一つの封筒を取り出した。

「これが父より預かったものです。」

アンが封筒を渡すと、エインは、受け取った封筒を丁寧に開けた。中にはきちんと折り目をつけて三つ折にされた数枚の手紙と、もう一つ、封筒が入っていた。中の封筒はきつちりと封蝋がしてあり、開けられていない事を物語っていた。封筒の表には、エイン・アン・ダーソンへと認められたベルトワーズ伯爵のものと思われる直筆が見えた。

「手紙は、私宛のものです。

封筒は、教授宛のものようですね。」

アンが言つと、エインが手紙を開こうとして、手を止めた。

「読んでも?」

「どうぞ。」

アンの返答を聞くなり、エインは手紙を開き、読み始めた。あつという間に一枚目、二枚目と読み進め、そして手紙を折り畳んで仕舞うと、アンにそれを返した。

次いで、エイン宛と書つ封筒を手にし、封蝋を弾くよにして封を開けた。

中にはアン宛の手紙と同じよう、きちんと折り目をつけて三つ折に畳んだ手紙が数枚、収められていた。

エインは折り目山を丁寧に崩しながら手紙を広げ、今度はじつくりと読み始めた。手紙を捲る指先にまで神経を遣つてゐるかのように、動作もゆっくりとしている。

ヴィヴィアンは、エインの表情をじつと見た。出会つてからここまで道中、常に動いていた口は、今はきつく結ばれている。伏目がちの目許からは、抱く憂いが滲み出、しかしこはかとなく、懐かしさに浸つてゐるようにも見える。

大層な時間を使って手紙を読み終えた後、エインは手紙を一度折り畳み、なにやら封筒を裏表に引つ繰り返して見たあと、ヴィヴィアンに読むよう仕草をしながら手渡した。

ヴィヴィアンは指示通り、手紙を受け取り、丁寧に開き、熟読をした。

手紙の内容は、何の変哲もない、内容だった。

死去する随分前から心臓の病を感じていた事、今の医療では助かる見込みはないという行で始まり、エインへの感謝と、尊敬を込めた言葉の数々と、遺す娘アンの身を案じ、彼女を託す文章が綴られていた。

ヴィヴィアンは、読み終えた手紙を丁寧に折り畳み、封筒へ仕舞う。

と、手元できちんと持つていた筈の封筒がずれた。ヴィヴィアンが驚いて封筒を裏返してみると、受け取った時には気付かなかつたが、手紙を三つ折にしたのと同じ大きさの、一枚のメモが重なつていた。

メモには、不可思議な文が記されていた。

こんにちは だんなさま
ぼくを愛してゐつてほんと?
ほんとのかい?

あら 違いますのよ
感違いなさつてますよ
でもこちらへどうぞ まあいいけど
わよつなら娘さん またね

何かの詩だらうか。
何を表してゐるのだらうか?

「
…?
」
微かに眉間に皺を寄せ、ヴィヴィアンがエインを見ると、エイン
は何かを含むように笑つていた。
どうやら、エインに宛てられたアンの手紙にあつた『不可思議な
遺書』とは、このメモを指す様だ。

「アン。

有難う。手紙は受け取りました。
ところで、この不可思議を解明するために、『図書館』をお借り
したいのですが、よろしいですか?」

エインが言つと、アンはにっこりと笑つた。

「あの『図書館』の書物は教授のものですよ。

お好きに使ってくださいな。」

アンの言葉に、エインが笑つた。

「何を言つたと思えば。

あの書物は、父君の大事な遺品ですよ。

とは言え、少しお借りしなければなりません。そのためにボクも
ここへやつて来ましたし。

自由に使わせてもらいますよ。」

言つなり、残つていた紅茶を啜り、エインが立ち上がつた。

すると、クリーブスが歩み寄つて、エインに何かを差し出した。

「鍵で」)ぞこます。

もう随分締め切りにしておりますので、埃が積もっているかも知れません。

掃除が必要でしたら、お申し付けください。」

「有難う。」

そう言いながら、鍵を受け取ったエインは、ヴィヴィアンに配配をして、「では」と言って大広間を出て行つた。

恋する太陽と月 3（前書き）

詩原文、フランス語表記内には、PC機種依存文字があるやも知れません。

慌てて追いかけて来たヴィヴィアンから手紙を受け取って、エインはメモだけを残し、尻のポケットにしまった。

そして歩きながら、メモを眺める。

半歩下がってエインを追うヴィヴィアンが、要領を得ないといふ表情で自分を見ている事に気付き、エインが振り向いた。

「これね、ドイツとフランスの詩なの。」

「？」

「ドイツとフランスは、長く、いがみ合っては歩み寄るという歴史を繰り返して来た国でね。」

「この原文は、こうなんだ。」

そう言いながら、エインは手紙を入れたのとは別の尻のポケットから、一枚のメモを取り出し、ヴィヴィアンに手渡した。

Bonjour, ma cousine !
 Bonjour, mon cousin german !
 On m'a dit que vous m'aimiez . . .
 C'en'est pas la v?rit? !
 Je n'm'en soucie gu?re . . .
 Je n'm'en soucie gu?re . . .
 Passez par ici . . . Et moi pa
 r - l? . . .
 Au r'voir ma cousine, on s're
 verr a !

「Cousineとcousinは、親しい男女が互いに呼びかけるときによく使われるフランス単語。

男女が言葉を掛け合いながら、歩み寄り、また遠ざかる。

その詩は、永遠にループする。

「これが、アンの手紙にあつた『不可思議な遺書』なのですか？」

「ヴィヴィアンが訊ねると、エインが笑つた。

「そう。

それが何を意味するかは、『図書館』に行けば解る。」「

「何故、『図書館』に？」

ヴィヴィアンがさらに訊ねると、エインが立ち止まつた。大広間からエントランスを抜け、大広間の大シャトーを横田に歩いて来た。

田の前には、エインが昨夜馬車の中で教えてくれた、大シャトーの裏手にあると言つていたもう一本のシャトーが聳え立つている。八角形の塔は屋敷の二階くらいの高さで、少し背の高い円錐の尖がり屋根が空を貫かんとばかりに付いている。

入り口は観音開きのオーク木の大きな扉で、三段ほど階段を昇る。エインはその階段を昇り、クリーブスから渡された鍵を差し込んだ。手入れがされているのか、使つていないと言つていた割りに、鍵はすんなりと開いた。

重いのか、エインが肩を添えて扉を押し開けると、ギイと小さな音を立てて扉が開いた。

扉の隙間から、暗闇と、少しインクの香りが漂ってきた。

徐々に開いていく扉の隙間からは、しかし中の様子を伺う事は出来ない。

やがて、扉を完全に開け放ち、エインが一步中へ入つた。

扉の前は、階段の踊場のようになつていて、装飾の施されたオーク木の手摺りを境に、先は闇に覆われている。脇に階段があるので、『図書館』自体は地下になつているのだらう。

「何故、『図書館』か？」

エインがヴィヴィアンを振り返つた。

そして、腰に手を当て、扉から少量の光を取り入れ、暗闇の薄ま

つた『図書館』を眺める。

「その手紙が、ボク宛だからだよ。

ボクと伯爵は、『図書館』によつて出会い、『図書館』によつて交流を育んできた。

言いながら、エインは手摺りを掴み、地下の『図書館』を見下ろした。ヴィヴィアンも、隣に並んで見下る。

『図書館』は随分と下まで掘り下げた地下になつていて、薄暗闇の中見える限り、三十台近い大型の本棚が並べられていた。並べ方には規則性があるのかないのか、あるものは斜めに、あるものは扉と並行に、あるものは直角に並んでいる。

壁際にも棚が立てられているが、こぢりは二台ほどを縦に積み重ね、壁に備え付けたストッパーのようなもので固定してあった。

「まず灯りを付けよう。」

そう言って、エインが扉の脇にあつたオイルランプに火を点けた。ぼうとした灯りが、闇をもう少しだけ払拭した。

「扉を閉めてくれ。

本が傷むといけないから。」

エインは言いながら、階段を下りていった。ヴィヴィアンは言われたとおり扉を閉め、ゆつくりとエインの後を追う。

一つ踊り場を経て、辿り着いた地下から、先程までいた入り口の足場を見上げると、随分高い位置に見えた。

次いで周りを見回す。入り口の足場の下にも本棚があつた。置ける限り本棚を置いたようにさえ思える。

本棚には、分厚い辞典などのものから、薄く小さな物のまで、大小様々な書物が並べられ、置き切れなかつたのか本棚の上にも積まれている。ふと足元を見ると、床にまで積まれている書籍さえある。

「さて。

まずは、このメモの謎を解き明かさなければ。

手伝つておくれ、ヴィヴィ。」

エインはそう言って、本棚の脇や壁際にあるオイルランプに灯を

灯して行つた。

火事を気にしたが、オイルランプの下には水淹れが置いてあり、エインはランプに灯を灯すと同時に、水淹れにも水を汲んで行つていた。

ランプの置き場所は計算されているようで、全てに火を灯すと、『図書館』は影も気にならないほど明るくなつた。

明るくなつて気付いたが、『図書館』には本棚のみならず、様々なオブジェが所狭しと並んでいた。

大きな地球儀のようなものから、女神のよつた木彫りの像、槍を持つ細身の枝のようなものまで、種類は多種多様だ。床には真っ白なタイルが張り巡らされ、ところどころに溝が走つてゐる。

「ちょっと根気のいる作業でね。

」このメモのヒントが、この書物のどこかに隠されている筈なんだ。

エインがヴィヴィアンに振り返つて、シャツの腕を捲くつた。

つまり、一冊ずつ開けて中を確認せよ、といつた事のようだつた。

ヴィヴィアンが理解したと言つ表情をすると、エインは一つ頷いて、

「済まないね。キミのペースで頼むよ。」

と言うなり、さつさと奥の本棚へ歩き出し、端から書物を五冊ほど抜いた。そして、床に座り込み、読み始めた。

なるほどと思ったヴィヴィアンは、エインが選んだ本棚の二つ左隣にある本棚へ歩み寄り、一番上の段の左端の書物を抜いた。

「これはフランスだと言つのに、書物の表紙には英語が書かれていた。隣の書物も見てみるが、やはり英語だつた。隣の本棚の書物も、やはり英語だ。

どうやら、この『図書館』にある書物は全て、英語で書かれていると見ていいようだ。

ヴィヴィアンは、鼻から短く息を吐き出して、辺りを見回した。

と、壁際の本棚用か、オーク木で出来た脚立を見付けたので、それを本棚の前に移動させ、登つた。一番上の段に座ると、本棚の最上段の書物を取るのになんと好かつたので、ヴィヴィアンはこれを椅子代わりに、書物を読む事にした。

とは言え、手当たり次第に読んで行くのでは、ヒントに辿り着いても見過してしまいかねない。

ヴィヴィアンが本棚越しにエインを覗くと、こちらを見ていたエインと目が合つた。ヴィヴィアンは一瞬、ぞきりとする。
「無作為に書物を選んでも、時間がかかるばかりだと思ったね？
キミはやっぱり優秀だな。

この『図書館』の本棚は、向いている方角によつて、収納されている書物が区分けされている。

例えば、東を背にしている本棚には、お伽噺や創作物語の書物が収められている。南を背にしている本棚には、歴史研究に関する書物。

そして、このシャターの入り口は真南から東に向かつて四十五度傾いている。

意味ありげな説明をして、エインが口の端を上げた。
ヴィヴィアンは辺りを見回す。全ての本棚が、きつちり東西南北を向いている訳ではない。

だとしたら、その一見半端な向きすら、何か意味があるのだろうか。

脚立を降りて、壁際の本棚を見上げる。

積み上げた本棚すら、意味があるのだろうか。

そう思つと、自分が覚悟している以上に、途方もない作業であると認識出来た。

ふう、と溜め息が漏れる。

そして諦めて、再び作業へ戻つた。

どのくらいページを捲つただろつか。

何も見付からぬ書物をただ捲るだけの作業は、心が折れるにはならないまでも、徐々に杜撰になつてくる。

日の光が入らないせいで、どのくらい時間が経過したのかも、把握出来い。

下を向きつぱなしの首が凝り始めた。ヴィヴィアンは背筋を伸ばし、首を回す。

エインを見ると、取り出した書物を仕舞いもせずに、黙々と読み進めている。ヴィヴィアンと違うのは、何かを探してページを捲るのでなく、書物そのものを読んでいる事だった。その割りに、目を通し終え横に積み上げた書物の山は、ヴィヴィアンよりも高い。これだけの作業、一つでも見落とせば、厄介な事になる。

何か、他にヒントはないものか。

そう考へていると、『図書館』の扉が開いて、クリーブスが入つて來た。

「お疲れ様で、」

クリーブスが声をかけると、エインが立ち上がつた。

「やあ。相も変わらず素晴らしい蔵書量で、早くも音を上げてありますよ。」

そう言つてエインが笑うと、クリーブスが

「実はそろそろ昼食のお時間ですので、お呼びに上がりました。」

と言つた。

「おや、もうそんな時間だつたのか。」

エインが驚いてポケットに入れた懐中時計を取り出した。

「本当だ。よい時間ですね。

ヴィヴィ、休もう。」

「はい。」

二人の会話を聞いて、クリーブスが扉を開け放つた。

書物に日の光は良い物ではないが、風は通さねば腐つてしまう。

微妙な調整をするための行為であろう。クリーブスは、一人が『図書館』から出るなり、素早く扉を閉めた。

「参りましょう。

お嬢様も、今日は『氣分が良いので、同席いたします。もうお席に着いておられますよ。』

エインとヴィヴィアンを先導しながら、クリーブスが言った。

「そうですか。

余り無理をしてはいけないが、無理をしないための無理も良くな

いですからね。

それに、食事は大勢の方が楽しい。』

そう言いながら、通りがけた大シャトーの大広間を覗くと、奥のソファに腰掛けたアンが、レース編みをしていた手を止めて、手を振つて来た。

その手は、エインにのみ振られているようで、ヴィヴィアンは気付かない振りをして、畠の方へと目を向けた。

空はすっかり青々と染まって、太陽はちょうど真上に昇つている。空の青は濃く、雲一つないが、遠くの方で雨雲がくすぶつているのが見えた。

畠と、小道と、小さな森と、遠くに見える低い山と丘、集落以外に、何も見えない景色は広大すぎて、解放されすぎてしまわないかと、ヴィヴィアンは少し不安になつた。

「ヴィヴィ？』

不意に呼ばれ、振り向くと、エインがエントランスの前で立ち止まって、ヴィヴィアンを見ていた。いつの間にか、ヴィヴィアンの足は止まつていて、ずっと景色を眺めていたようだ。その様子を、エインは心配したのだろう。

無言のまま、振り向くだけで動きもしないヴィヴィアンに、エインが歩み寄つた。

「景色に飲まれないように注意しなさい。

ここは余りに広すぎて、ボクもたまに『行き過ぎて』しまう。だ

から、ここは好きだけど、苦手な場所でもあってね…。

早く仕事を終えて、スコットランドに帰ろう。」

エインがそう言って、笑つた。そして、すぐに踵を返す。お戻りになつて、よいのですか…？

ヴィヴィアンは、エントランスへ歩いて行くエインの背中に問いかけた。

アンの傍にいる事を望まれているのではないか。ふと、馬車の中で聞いた言葉を思い出す。

『アンはボクの妻になるかも知れなかつた女性でね。』

『生かしたい。死なせたくない人がいる。

その人を生かすために、死なせないために、必要な事を探していく。』

『ボクがこの世で一番愛している人。』

断片的にしか情報を手に出来ていない。エインの事を知らなければ、守れないかも知れない。

だが、根堀葉堀聞く事は躊躇われる。

もどかしさを拭いたくて、ヴィヴィアンはエインに走り寄つた。エントランスを抜け、大広間へ戻ると、今度はアンがエインに走り寄つた。ヴィヴィアンは反射的に、エインから身を離す。

「おかえりなさい。教授、ヴィヴィ。すぐ食事の用意をさせますわ。」

そう言つて、アンがエインの腕を取り、クリーブスを呼び付けた。呼ばれたクリーブスは、一礼をして奥へと消えて行つた。

「朝はどの席にお着きになりましたのか？」

「きっと、ヴィヴィはその席ですね？」

アンはエインの腕を引きながらヴィヴィアンを見、今朝ヴィヴィ

アンが座っていた席とは違う席を指差した。今朝と同様にエインの隣ではあるが、反対隣だった。言動から察するに、今朝、ヴィヴィアンが座った席は、アンの特等席なのだろう。

何となしにこのやり取りで、アンの性格を見た様な気がして、ヴィヴィアンは心の底に黒いものが溜まるのを感じた。

「教授はいつもの席ですわよ。

わたくしも。

ヴィヴィイ、朝食はいかがでした？ お口に合いまして？

席に着くなり、アンに訊ねられ、ヴィヴィアンは一瞬たじろぎつつも、冷静に答えた。

「はい。

とても素晴らしいお食事を頂きました。

有難うござります。」

アンはヴィヴィアンの返事に満足したのか、にこりと笑った。今朝より少しだけ、血色が良くなっていた。

「良かったですわ。

スコットランドの方は、時々こちらのお料理の味が合わないようなのです。

ワインの違いのせいですかしら？

教授は好き嫌いがないので、困りませんけど。」

そう言って、アンはエインを見て笑った。

当たり障りのない世間話や、アンの身の上話、積もり積もつてゐる様子の「生きベルトワーズ伯爵の思い出話をしながらの昼食は、案外あつといつ間に終わってしまった。

料理は相変わらず軽めに仕上げられていたが、朝に比べると若干量が増えていた。それでも平らげる事が出来たのは、腹が減つてゐるからというより、シェフの気遣いのお蔭と言つ方が相応しそうだった。

アンと別れ、エインとヴィヴィアンは再び『図書館』へと戻つた。午前中と変わらない作業を再開する。

そして、何も発見出来ず、時間だけが過ぎてゆく。

ややぼうつとして来た頭に空氣を入れるべく、ヴィヴィアンは深呼吸をした。

本棚の三分の一まで読み進めたが、手元にある結果はその事実だけだ。

もう一度、今度は小さく息を吐いて、読み終えた本を横に積む。初めの内はいちいち戻していた本も、いつの間にか横に積み上げるようになってしまった。

「息抜きをして来ていいよ。」

エインが、本棚の影からヴィヴィアンに声をかけた。

「しかし…。」

ヴィヴィアンが言い濁ると、エインはひょいと顔を出して苦笑した。

「じゃあ、一緒に休憩しよう。」

一緒に、と言われると断り辛く、それならばとヴィヴィアンは頷いた。

立ち上がり、少しあスカートを叩いていると、オイルランプを持つエインが歩み寄つて來た。

ヴィヴィアンが顔を上げると、エインは一つ頷いて、入り口へと歩いて行く。エインの後を追いながら、改めて本棚を見回す。

本当に、多種多様な書物が並び置かれている。

「蔵書は、ベルトワーズ伯爵がお集めになられたのですか？」

「ヴィヴィアンが問うと、エインが振り向きもせず答えた。

「うん、大体はね。

あとは物好きな友人からの贈り物だつたり、元々屋敷にあつたものだつたり。

屋敷の中にも書物はあるけど、あまり貴重ではないものになる。」

言いながら、階段を昇り、エインが入り口の扉を開けた。外へ出ると、空の色は少し薄まつていて、西の方は早くもピンク色に変わっていた。

エインは『図書館』のシャターを北側に周り込むように歩いて行つた。

ついて行くと、シャターに隠れて見えなかつた景色が広がる。屋敷を囲う白い柵の向こうには、正面と同じように田畠が広がり小さな森が点在してゐる。どこを見ても田畠と森と、遠く低い山々だ。

「寂しいところだと思わないか？」

エインが柵に手をついて、言った。

ヴィヴィアンは隣に並んで、もう一度ぐるりと辺りを見回す。

確かに、同じものしか見えないという意味では、寂しいかもしれない。ヴィヴィアンが無言でいると、エインは小さく鼻で笑つて、続けた。

「ここへ初めて来た時、伯爵はボクの事を知つてゐると言つて、こう続けたんだ。

『『いすれこの書物は君のものになる。

そういう決まりなんだ。』』と。」

「決まり？」

「そう、決まりらしいんだ。

そのうち、アンとの婚姻の話が持ち上がった。

乗り気ではないボクに、伯爵はまた『これを決まりだと思って、受け入れた方がいい』と言つた。

それ以来、この場所は、素晴らしいと思つ反面、寂しく嫌な場所だとも思う。

来るのはいいが、すぐ帰りたい。

でも…。』

エインが肩を竦めた。

「帰るには、秘密を解かなければ。」

「必ず、解かなければならぬのですね？」

「うん。』

ヴィヴィアンの問いに、短く答え切るエインを、ヴィヴィアンが見据えた。

「それも決まりですか？」

ヴィヴィアンを、エインが真つ直ぐ見詰める。

そして、暫し無言になつたあと、微笑んだ。

「決まりから逃れる為に必要なものを、手に入れる為、だよ。』

その答えに、ヴィヴィアンが眉を顰めると、エインは一層優しく微笑んで、徐々にピンク色からオレンジ色に染まつて行く西の空を眺め、溜息を吐いた。

「決まりに従つたら、ボクは何度も、この空を眺めなければならなくなるからね…。』

ヴィヴィアンがこの言葉の、眞の意味を理解するのは、ずっと後の事になるが、今この瞬間はただ、アンの婚姻を拒否した事、ここに暮らす事への抵抗を意味するのだと、理解した。

休憩を挟んで『図書館』へ戻つて、しかしすぐにクリーブスが、夕食だと迎えに来た。

今日の作業はこれで終わり、明日続きをやる事にし、オイルランプの炎を消して、エインとヴィヴィアンは『図書館』を後にした。この辺りは野犬もいなければ、盗賊といった輩もいないが、念のために鍵を掛ける。

久しぶりに外気を吸い込んだ『図書館』は、一晩という短い時間だが、また眠りに就く。

大広間に戻ると、アンが出迎えた。

「お疲れでしょう。すぐお食事にしましょうね。」

アンの言葉を合図に、クリーブスとメイドたちが夕食を運び込み、三人の前に並べてゆく。

「だいぶお腹も食べ物に慣れて来ましたでしょう？」

今日はボルドーで牛の品評会がありました。うちの雌牛も何頭か出したのですけど、その序でに、従者がとてもよい仔羊を仕入れましたのよ。」

アンの説明に合わせるように、メイドがエインとヴィヴィアンの目の前に、メインディッシュを並べた。メインディッシュは仔羊のローストだ。

朝食にも出たラテイッシュとスライスオニオン、何種類かのハーブが飾り付けられ、盛られている。

脇にはコンソメスープと柔らかく焼いたミルクパン、グリーンリーフなどの葉野菜を盛りつけたサラダに、赤ワインが並ぶ。

「さあ、召し上がってくださいな。」

ヴィヴィアンを見てにこやかに言うアンの頬は、昼よりさらに赤みを帯びていた。

かなり体調がよいのか、それとも既にワインでも口にしたのか。気にはなったが、エインが「頂こう。」と食事を始めたので、ヴィヴィアンも食事を始めた。

昼とは違い、黙々と食事をする。

ナイフやフォークが皿を擦る音を聞きながら、野菜や肉を口に運ぶ。最初はぎこちないが、すぐに慣れて、味を楽しむようになった。

仔羊の肉は、アンが言つとおり、とても柔らかく、臭みもなく、旨かつた。

「ヴィヴィイは、フランスは初めてですか？」

アンに問われ、ヴィヴィアンが小さな口をナフキンで拭く。

「はい。イギリスから出た事がありません。」

「まあ！ ではこちらへの旅はかなりの冒険でしたのね。」

今日はお疲れ？ お疲れでなければ、私の部屋にいらっしゃいません？

少しお話がしてみたいのです。」

そう言いながら、アンがエインをちらりと見た。視線の合ったエインが、首を傾げると、アンが悪戯気味に「出来れば、女性同士で」と言った。

エインが肩を竦める。

「どうぞ、お構いなく。」

ボクは部屋で読書をする事にします。」

「そうして下さいな。」

「ね、ヴィヴィアン、いらっしゃるわね？」

ヴィヴィアンを覗き込むアンの瞳は、キラキラと輝いていた。純真無垢で、罪悪感など何もない。そんな瞳だ。

ヴィヴィアンは居心地の悪さを覚えながらも、「是非。」と答えて頷いた。

そのヴィヴィアンの反応に満足したのか、再び無言になつたアンが食事を再開した。ヴィヴィアンも途中まで切り進めた肉に、再びナイフを入れ、口へ運ぶ。

しかし、先ほどまで旨いと思っていた肉が、突然不味くなつた。だが残す訳にも行かず、ヴィヴィアンは無理矢理口に運んだ。時折エインを見ると、エインの食事のスピードも落ちていた。エインを見つめるヴィヴィアンの視線に気づいたエインが、ヴィヴィアンにそつと苦笑する。

「ヴィヴィイ。体調が悪いなら、無理をしない方がいい。」

シーフの方には申し訳ないけれど、無理に食べて明日に障るよういいからね。」

エインの言葉に、アンが顔を上げた。

「無理をする必要はないですよ、ヴィヴィ。

「すみません。とても素敵なお料理なのですけど…。」

俯くヴィヴィアンに、アンが微笑んだ。

「気にする必要はありませんのよ。シーフも承知の上ですわ。

お口に合わなかつた訳ではない事で、十分ですよ。」

ヴィヴィアンは、一気に罪悪感で胸が一杯になつた。

田の前の真っ白なアンと、自分が抱く感情の処理に手間取つていた。

エインはそれを察知しているようで、ヴィヴィアンをじつと見つめている。

ヴィヴィアンは何か気丈に振舞おうと、手にしていたナイフとフォークをゆつくり下ろしたが、手が震えて皿を鳴らしてしまつた。それを見たエインが、立ち上がつた。

「ヴィヴィ。来なさい。

アン、よいですね？」

その口調はどちらにも有無を言わせぬ強い口調で、アンも思わず驚いて無言で頷くしかなかつた。

エインに誘導され、ヴィヴィアンは部屋に戻つた。

ヴィヴィアンがベッドに座り込むと、エインは後ろ手にドアを閉め、ついでに鍵も掛けた。

「ヴィヴィ。

名だけ呼んで、見上げるヴィヴィアンを直視する。そして、ヴィ

ヴィアンが溜息を吐きながら俯いた。

「申し訳ありません、教授…。

急に、落ち着かなくなつてしまつて…。」

アンを理由に、とは言えず、そこで言葉を切つたヴィヴィアンに、

エインが笑つた。

「アンは、子供過ぎるんだ。ボクでも時折怖くなる。」

「…。」

言い返せず、ヴィヴィアンは無言になつた。
未だ震える指先を、自分で握つては擦る。ついでに、馬車でも
こんな事をした。

「申し訳ありません…。」

謝罪の言葉しか出ない、ヴィヴィアンの隣に、エインが座つて、
「明日には終わるさ。」

早くスコットランで帰るわ。」

と言うと、すぐに立ち上がり、静かに部屋を出て行った。
残されたヴィヴィアンは、頭をあわせと歯み、そのままベッドに
倒れ込んだ。

瞼が突然開いた。

辺りは薄暗闇に染まり、見慣れない天井が見えた。
驚いて起き上がり、辺りを見回す。

ベルトワーズ伯爵邸の、自分に宛がわれた部屋だ。
エインが部屋を出てからベッドに倒れ込み、いつの間にか、寝てしまっていたようだ。

時計がないので時間が解らないが、外はまだ若干の明るさを保つている事から、それほど夜も更けていないようだ。

ヴィヴィアンはベッドから折り、部屋のオイルランプを点けた。
ドレッサーを覗き込み、自分の顔を見る。

不意に、夕食の時を思い出し、ヴィヴィアンは鏡から勢い良く身を離した。

自身でも信じ難い。

あれほどまでに、動搖した事がなかつた。

思い出すと、恥ずかしくなつた。顔が火照つてしまつたので、ヴィヴィアンは窓に歩み寄り、カーテンを思い切り開けた。すると、ドアがノックされた。

ヴィヴィアンは深呼吸をして、「はい」と答えた。

「アンです。」

そう言って、アンがドアを開けた。

「教授は、こちらにはいらっしゃらないのね。やつぱり『図書館』かしら…。」

何か事情を知つてゐるかと訊ねるアンの視線に、ヴィヴィアンは首を傾げて答えた。

すると、「まあ、いいですわ。」と言つて、アンがにこりと笑つた。

「ヴィヴィ。私の部屋にいらっしゃいません事?

お話ししましょう。」

言われて、夕食の時の感情が溢れた。しかし、ヴィヴィアンはそれを胸元でぐっと押さえ込むと、アンに解らない様に肩に力を入れ、頷いた。

「はい。」

「よかつた。参りましょ。」

「わあ。」と言つてドアを開け放ち、アンは東側のシャトーにある浴室へと歩いて行つた。

ヴィヴィアンも後に続く。隣のエインの部屋を過ぎ、さらに部屋を三つほど過ぎた先の廊下は行き止まりになつていて、他の部屋とは違つ、両開きの大きな扉があつた。

脇にはメイドが一人立つていて、アンの姿を確認するなり、扉を静かに開けた。

「お入りになつて。」

アンに促され、ヴィヴィアンはアンの部屋に入った。八角形の部屋は北、東、南の方向に大きな窓があり、西側の壁には、今潜つた扉ともう一つ、両開きの扉が並んでいる。

「そちらは衣装部屋ですよ。」と、アンが言つた。

「お好きな椅子にお座りになつて。

お茶をお淹れしますわ。」

扉の前で部屋を見回すヴィヴィアンに、アンはそう言つて、部屋の中央にあるソファセツトを指差した。そして、くるりと回つて窓の脇に置かれたティーポットから、湯気の立つ紅茶をカップに注ぎ出した。

言われたとおりに、ヴィヴィアンがソファに腰を下ろすと、アンがその前にティーソーサーを置く。そして、自身の前にも置き、ヴィヴィアンの向かいのソファにどさつと座つた。

「ご迷惑じゃありませんでした?」

「え?」

突然の問いかに、ヴィヴィアンが一瞬驚く。

「ヴィヴィアンは表情があまり変わりませんもの。お呼びした事、怒つてませんの？」

「いえ。全く。」

ヴィヴィアンが短く答えると、アンはぱっと笑顔を作つて、深く頷いた。

「良かったですわ。

私、このような体ですから、外出も満足に出来ません。ボルドーの街まで行ったのも、もう何年前になるか…。

お勉強も、家庭教師にお願いしていましたし、ご覧の通り屋敷の周りに家はありません。

小さな頃は、それでも屋敷の従者の子供が時折出入りして相手をしてくれましたけど、みな結婚したり戦争で亡くなつたり…。

今は、話し相手がみな私より年上で、毎日顔を合わせる者ばかりですのよ。

不満という事ではありませんけど、知らない方とお話しするのは、これから的人生、あと何度ある事か。」

妙な罪悪感を抱くのは、この身の上が理由なのではないかと、ヴィヴィアンはほのかに思った。対面にいる自分やエインは、好きなときに好きな事をし、好きな場所へ行ける自由さがある。位置関係と同じように、真正面で対照的なのだ。

同情する訳ではないが、言葉にすれば、同情になつてしまつ。「胸の病と、お聞きしました。」

「ええ。

生まれつき。赤ん坊の頃は、二十歳まで生きりれるかどうかと言われたそうですわ。

でも、何の奇跡か、余分に生きておりますのよ。

そのお蔭で教授にもお会い出来ましたけど。

私と教授のお話はお聞きになりました?」

「はい。」

ヴィヴィアンは、膝の上で重ねている両手を握り締めた。

「教授はお受けして下さるませんけど、父は教授と初めてお会いした日に、私にこう言いましたの。」

『アン、彼との婚姻は、決まり』ことなんだよ。』つて。』

また、決まり、だ。

「…決まり、ですか。」

「ええ。

何が何やら解りませんわね。決まりと言われてしまつと、『運命』と解釈いたしますけど。

どちらにしても、教授はお受けして下さるませんけれど。』

そう言って、アンが愉快そうに笑つた。

「決まりは、守られなければならないと思つていますわ、私。』

この言葉に、ヴィヴィアンはどきりとした。

笑顔は実に純粋で、美しいのに、言葉の端々に棘があるように思つた。

それが純真さから来る、何にも包まれていらない感情を含むからなのか、意図してのものなのかまでは、ヴィヴィアンには解らない。どうにも答えようがなくヴィヴィアンが黙つていると、アンはぱつと話題を変え、次々に色々なものを取り出しては、見せたり語つてくれたりした。ヴィヴィアンは生い立ちなどを聞かれた。
「生まれてすぐに両親が亡くなりましたので、孤児院に引き取られて育ちました。」

そう説明するなり、アンは困惑した表情を浮かべ、話題を切り替えてくれたので、それ以上聞かれずに済んだ。

その後も取り留めのない話は続き、意外なほどあつといつ間に、時間は過ぎた。

そして話は、クリーブスが扉をノックしたのを合図に、終わった。

「お嬢様、そろそろお休みになりませんと。」

「まあ、もうそんな時間ですの？」

「残念ですか、ヴィヴィイ。」

アンが立ち上がり、ヴィヴィアンの隣に座り、手を握つてきた。

「ゆつくりお休みにならなければ。

明日またお話出来ます。」

ヴィヴィアンが言うと、アンはこりと笑つて「やうですわね」と言い、クリーブスを見た。

「ヴィヴィをお部屋にお送りしてね。」

「承知致しました。」

クリーブスが頭を下げ、ヴィヴィアンが立ち上がった。

「では、ヴィヴィ、また明日。」

「おやすみなさいませ。」

廊下に出て振り返り、アンに挨拶をすると、クリーブスについて部屋へと戻る。

「教授はすつとお部屋でしょか?」

先程お声をおかけしたのですが、お出にならなかつたものですか

ら。

「てつくりお嬢様のお部屋にいらっしゃるのかと。」

「部屋で読書をする、と先程は……。」

確か夕食の時、そんな事を言つていた。

「左様でござりますか。」

きつとお疲れで、すでにお休みなのでしきつね。」

会話を終えた頃、ヴィヴィアンの部屋の田の前で、クリーブスが何やら思いついたようで、「そうでした」と言つながらヴィヴィアンを振り返つた。

「まだ、お風呂を使われておりませんね?」

「そういえば、風呂の事など忘れていた。」

「はい。」

「ご案内しましょ。」

そう言つて、クリーブスが階段へと向かつた。

浴場は屋敷の一階の、大広間と反対端にあつた。正面からでは見えなかつたし、裏手の『図書館』のシャトーへ周つた際も意識して見なかつたので気付かなかつたが、屋敷の東端から一本、北へ向か

つて細い通路があり、その先に浴場がある。

浴場に着くと、二人のメイドが立っており、ヴィヴィアンを見て一礼をした。

「ご自由にお使いください。

今お召しになつてているドレスはクリーニングも出来ます。ご所望であれば、そのメイドにお申し付けください。」

「有難うござります。」

自分もメイドなのがと内心思いつつ、ヴィヴィアンはクリーブスに例を言つて、浴場へ入つた。

中は広々としているが、いっぱいに湯気が立ち込め、ほんのり薔薇の香りがした。

フランスは洗顔や入浴をしないと聞いていたが、郊外の大きな屋敷には浴場を備え付けているところが多く、特にスコットランドやイギリスの影響を大きく受けたボルドー周辺では、風呂を好む者も多いと風の噂で聞いていた。

期待していたが、その通りの風呂で、ヴィヴィアンは無表情ながら満足だった。

ドレスを脱ぎ、裏表に返しながら汚れ具合を見る。雨の中でも着ていたせいか、裾が大分汚れていたので、クリーニングを頼む事にした。

扉越しに、外のメイドに声をかけると、ドレスはそのままそこへ置き、代わりに入り口脇に掛かっている白い部屋着を着るよう言われた。朝には、ヴィヴィアンのドレスは乾いているので、部屋まで持つてくれるそうだ。

「わかりました。」

と返事をして、ヴィヴィアンはドレスを丁寧に畳んで床に置き、もう一枚の扉で仕切られた風呂場へと入つた。

風呂場の中は、薔薇の香りが少し強めに香つていた。

嫌いではないが、少し強いと感じる。

浴槽の脇には垢すりの布と、水受けがあり、さらに美しい丸い形

の白い固体物があった。ヴィヴィアンは固体物を手に取り眺めた。
どうやら、石鹼のようだ。少し水をつけてこすると、泡立った。

ヴィヴィアンは垢すりの布を一度綺麗に濯ぎ、石鹼を擦つて泡を
こんもりと立て、体を擦り始めた。

一通り体を擦り、一度湯で流すと、妙に体が軽くなつたような気
分になつた。

もう一度湯を体にかけ、浴槽へ足を入れる。
むんと薔薇の香りが立ち、少し呑た。

湯は丁度いい温度で、ヴィヴィアンはゆっくりと湯に体を沈めた。
ここまできちんと風呂に入れるとは思わなかつたので、思わず溜
め息が漏れる。

湯気で覆われた天井を見上げ、もう一つ溜め息を吐く。
そして、アンとエインの言葉を反芻する。

『決まり』。

決まりとはなんだ？

エインはこれから逃れたいといつ。

自分にも、この決まりが何があるのだろうか。

そう思い、過去を何度も思い出す。

本当に長い事、戦ってきた気がする。

ここで終わりにしたい。

終わりにする『決まり』事があるなら、手に入れたい。

ヴィヴィアンは、湯を片手で掬つた。さらさらと流れ落ちる湯は、
今まで過ごして来た膨大な量の時間のように思えた。
沢山の時間が流れてしまった。

この時間が、無駄にならなければいい……。

あの湖は、どこの湖だつただろうか…。

もう何度も何度も見てきた場所なのに、いつ、何を理由にして訪れた場所なのか、思い出せない。

エインは床に座り込んで、手にしている書物の最後のページを捲つて、溜め息を吐いた。

「…あれは…どこだつただろう…。」

大事な事なのに、思い出せない。

否、”元々記憶にないから”かも知れない。

西の森だと言う強い記憶は残つてゐるが、見た限り、あの森は少し小さい気がした。

夕食の最中、様子のおかしくなつたヴィヴィアンを部屋に送つた後、自身も食事などする気にならず、そのまま『図書館』へ来てしまつた。

エインにとつて書物に囲まれ、静かに文字の世界に沈み込んで仕舞う事は、現実から逃れる唯一の方法だつたし、同時に現実を思い知らされる方法でもあつたが、総じて居心地の良さを感じる場所である事は明確な事でもあつた。

しかし、その居心地のよい場所を与えてくれた恩人であるベルトワーズは、一体何を思つてあのようなメモを遺したのだろう。

尻のポケットから、遺書とともに納められていたメモを取り出す。そして、反対の尻のポケットからも、同じサイズのメモを取り出す。こちらには、遺書のメモのフランス原文が書かれている。謎を解かなければ、スコットランドに帰れない。

『決まり』から、逃れられない。

逃れられなければ、また繰り返さなければならない。

また、失わなければならない…。

「前は、どこだつたっけ…。」

本を閉じて、傍らに投げ置きながら、エインは本棚にぐつたりと凭れ掛かつて、天井を仰いだ。

目を閉じると、体がふわりと軽くなつた。

疲れている。

早く、終わりにしたい……。

ふと目が醒めた。

ぼんやりする頭を振り、辺りを見回す。『図書館』の中だ。どうやら眠つてしまつたようだ。

懐中時計を取り出し、時間を確認すると、九時を指していた。

九時……。眠つてから、数時間というところか。

そこまで眠り込んでいた訳ではなさそうだ。

「よいしょ」と声を出して立ち上がり、尻の埃を落とすと、外気を吸おうと外へ出ることにした。

が、『図書館』の扉を開けて驚いた。

燐燐と太陽の陽が注いでいる。

眠り込んでいないなど、とんでもない事だった。すっかり一眠りしてしまつたのではないか。

「……」

呆然としながらも溜め息を吐くと、屋敷の陰からヴィヴィアンがやって來た。

ヴィヴィアンは、エインの姿を見るなり、少し目を見開き、すぐ

に何もなかつたかのような無表情に戻つて歩み寄つて來た。

「おはようございます。」

「おはよう。」

「お早いですね。」

「うん。」

そう言つて、エインは腰に手を当て、仁王立ちになり、

「夜通しここにいた。」「

と言つた。

「…クリーブスさんが、心配しておつました。

部屋に声をかけても、お返事がない、と。」「

「そうか、あとで謝つておいつ。

食事は済んだかい?」「

「はい。お戻りになりますか?」「

大広間は片付けてしまつたが、戻れば何かしら用意はしてくれるだろう。

しかし、エインは首を振つた。

「ううん、ボクは食事は要らない。

じゃあ、続けようか。」「

「はい。」「

ヴィヴィアンを連れて、『図書館』へ戻る。

「ヴィヴィは、昨日の本棚がまだ終わつてなかつたね。」「

「はい。続きからやります。本も出しつぱなしですかり…。」「

昨日、ヴィヴィアンが調べていた本棚の床には、綺麗に積まれた書物の山が出来ていた。それも、積んだまま戻せば、元あつたように並ぶように積まれている。

本棚を見ると、半分ほど、空いていた。

「あと半分か。今日で、この棚は終わるという事だね。」「

「そのつもりです。」「

ヴィヴィアンの返事に、エインは頷いて、「じゃあ」と言つて立ち去つた。

ヴィヴィアンは目印となる次の書物を抜き、今床にある書物を棚へ戻す作業を始めた。分厚い書物が多いため、四冊ほどを持って脚立を登り、右端から順に戻す。

何往復かその動作を繰り返し、一頻り戻し終わつたら、再び抜き取つた書物を手に脚立に座り、ページを捲る。

黙々と書物を取り替えてはページを捲つてゆく。

その間、一度クリーブスが様子を見にやつて来た。

昼食の時間が近付いた事を伝えるためだつたが、エインはそこで軽食を運んでくれるよう頼んだ。

「何か、手軽に食べられるものがいいです。」

「畏まりました。何か、ご用意いたしましょう。」

「お願ひします。」

クリーブスは快く引き受け、屋敷へ戻つて行つた。

何も聞かれなかつたが、ヴィヴィアンにとつても都合は良かつた。昨日の動搖は今朝も若干あり、出来れば籠つて作業をしていたかつた。

礼を言おうか迷つたが、何も言わずエインが書物に視線を戻したので、ヴィヴィアンも何も言わず作業を続けた。

やがて、クリーブスが大きなバスケットを持ってやつて來た。

「夕方頃、取りに伺います。」

「お手数をおかけします。」

短くやり取りをした後、クリーブスはバスケットをエインに渡し、去つて行つた。余計な気遣いなどをしないクリーブスも、ヴィヴィアンには有り難い人間だ。

「お腹空いたかい？」

クリーブスを見送つていたヴィヴィアンに、エインが訊ねた。

「いえ、まだ…。」

「じゃあ、もう少ししてからにしよう。」

言しながら、エインは床に積んだ書物を棚へ片付け始めた。

どうやら、本棚一つ終わつたようだ。手早く本を仕舞い終え、ヴィヴィアンの隣の本棚の書物を取り出した。そして床に座り、楽しそうにページを捲る。

素直に書物の内容に目を通すならば、ヴィヴィアンが一ページ捲る間に、エインは四ページ捲つていた。読み進める速度が速い上、内容の把握もしているようだつた。

脚立の上からその様子を眺めながら、ヴィヴィアンは改めて、エ

インの本好きを悟る。

三冊読み進めたところで、空腹に気付いたヴィヴィアンは、同時にエインのページを捲る音が聞こえない事に気付いた。

ちらりと横目で見ると、エインは本棚に凭れ掛けかり、眠っていた。脚立を降り、しゃがんでエインの寝顔を見て、ヴィヴィアンは呆れた。が、夜通し『図書館』にいたと聞いたので、徹夜で読書をしたのだろうと思いつ込み、仕方がないとも思えた。

『図書館』の中は陽が入らない分、少しひんやりとしている。その上、床に座つていれば冷えもするかも知れない。きょろきょろと見回すと、クリーブスが持つて来たバスケットの上に、ひざ掛けが置いてあつた。

クリーブスの気遣いだろう。

ヴィヴィアンは足音を殺してバスケットに近付き、ひざ掛けを取ると、そつとエインにかけた。

そして、改めて寝顔を見る。

眼鏡を外し、手はその眼鏡を持ったまま床にだらりと落ちている。少し傾いた体勢が、眠りの深さを表しているようだった。

ふ、と笑いが段れた。

なんと無防備な寝顔をするのだろう。

ヴィヴィアンは小さく溜め息を吐いて、脚立の上へ戻った。座つて本を開くと、エインが『ごそごそ』と動いたので、ヴィヴィアンはさつさと無表情に戻つた。

起きたエインはひざ掛けに気付き、ヴィヴィアンを目だけで見上げて、笑つた。

ヴィヴィアンは、知らぬ顔をしている。

エインが傾いていた体勢を戻すと、そこで、ヴィヴィアンが、

「風邪をひきますよ。」

と言つた。声もぶつきら棒で、素つ氣無い。
照れ隠しなのか、その様子がおかしくて、エインはくすくす笑い
ながら答えた。

「有難う。」

エインの昼寝が終わったところで、一人でバスケットの中身を平らげた。

固焼きのブレッドにチーズとソーセージといつシンプルな中身であつたが、手が汚れない事、片手で食事が出来る事を考へると、クリーブスとシェフに頭の下がる思いだった。

食事を終え、それぞれ定位置に戻る。エインは少し気になる書物があつたようで、別の本棚へ行ってしまった。そして書物を手にするなり、いつも通り床に座り込んだ。

ヴィヴィアンのほうは、もう脚立のいらない段まで読み進めてしまつたので、今度は身を屈めて次の本を手に取つた。体を起こすと、風も立つていないので、オイルランプの炎が揺れた。

その時、本棚の一部に妙な影が出来た。

「？」

ヴィヴィアンが顔を近づけると、本棚の左隅に『X』と文字が掘つてあつた。

右端も見てみると、『XI』と掘つてある。もしやと思い、エインに声をかける。

「教授。

棚に、文字が彫つてあります。」

それを聞いたエインが、にやりと笑つた。

「なるほど。」

立ち上がって、凭れ掛かっていた本棚を見回す。

「お、あつた。

『EIE』か。多分、ヴィヴィの棚には『X』と『XI』じゃな

いかな?」

振り向いて笑うエインを、ヴィヴィが睨んだ。

「ご存知だつたのですか？」

知つていてもつたといふつていたか？

「ヴィヴィ。キミの本棚の左右の棚を見てご覧。恐らく文字は彫つてあるが、一つだけのはずだ。

ちなみに、ボクの棚の両隣には、左隣の本棚の右端に『エエ』、右隣の本棚の左端に『エエ』と彫つてある。」

言われて見てみると、確かに両隣の本棚には中央に一つずつしか文字が彫つていなかつた。左は『エ』、右は『エエ』だ。

「時計だね。これは知らなかつたな…。」

エインが呟いた。

「数字は全部で十一だらう。

東が『エエ』か。」

言いながら、エインが二つ隣の本棚に歩み寄り、上から書物をなぞつていぐ。そして「…あつた。」と言つて、一冊の書物を取り出した。

ヴィヴィアンが近付くと、エインはヴィヴィアンに書物の表紙を見せながら呟いた。

「『カインとアベル』。」

見せられたヴィヴィアンは、怪訝な顔をする。

「この東の棚は、植物に関する書物が収められている。その中で、それに当て嵌まらない書物は、これだけ。

恐らくこれが正解だらう。

さて…。」

そう言つて、エインが書物をパラパラと捲る。

「『カインとアベル』は、旧約聖書『創世記』の第四章に登場する兄弟で、カインが弟のアベルを殺した後、エデンの園の東にあるノドへ逃げた物語だつたね…。」

ページを捲る手を止める事無く、エインが話し始めた。

「『人間が吐いた最初の嘘』を吐いたカインは、神から『カインが耕作を行つても作物は収穫出来なくなる』事を伝えられ、呪いをか

けられる。

だが同時に、人を殺し、嘘を吐いた自分は殺されるのではないかと恐れたカインに、『彼を殺す者には七倍の復讐がある』と伝え、救いもしている。

話しながらページを捲る指が、止まった。

見ると、捲るページがなくなっていた。だが、エインはその指先をじっと見つめている。

「やっぱり最後か。その辺は安直だね。」

鼻で笑いながら、エインが言った。

そして、開いている書物の最後尾のページをヴィヴィアンに見せる。

ヴィヴィアンが見ると、そこには直筆で、何やら書いてあった。

『equinoxe printanier』。

「『春分点』、ね。」

エインは顎を一撫でし、にやりと笑うと、尻のポケットからメモを取り出した。そして、再度にやりと笑うと、うんうんと頷いて、ヴィヴィアンを見た。

「春分点は、別名を『白羊宮の原点』といつ。これは十二星座の『おひつじ座』を意味する。紀元前二世紀に、黄道十二宮が整備された時、『おひつじ座』に春分点があつたからというのが理由なんだが、春分点自体は天球上では一五八〇〇年周期で西へ移動している。

キリスト教では、イエス・キリストが生まれた時、春分点が『うお座』にあつた。だから、キリスト教では『うお座』は神聖な星座とされている。ちなみに、今も春分点は『うお座』にあるんだよ。

春分は、一般的には昼と夜の時間が均等である日とされているけど、実際は違う。一日の間にも太陽の黄経は変わるため、春分がその日のいつかにより昼夜の長さに差が出てしまう。キリスト教を始め、国際的とまで言つていいほどに、今は春分が三月二十一日と定められているが、実際には、昼と夜の長さの差が最も小さくなるのは、この四日程度前になる、というのは豆知識。」

一息に喋つて、エインが書物を閉じた。

「これがルールだろう。

解り易く東西南北で行こうか。次は、『V-E』の南だね。歴史研究に関する書物、以外のものがアタリだ。ヴィヴィイは『IX』へ行って、探してみてくれ。西の本棚は人類や文明、文化に関する書物を収めてあるから、それ以外のものだね。」

そう言つて、エインは先程までいた本棚へ歩き、本を指でなぞり始めた。ヴィヴィイも言われだとおりにする。

中央に『IX』と彫られた本棚の前に立ち、左上から書物を見てゆく。

『エジプトに見る発展の秘密』、『歩き始めた人類』、『東の国々』…。上段、中段、その下、となぞり、一番下の段の中央で、ヴィヴィアンのなぞる指が止まった。

『ブッシュマンウサギの生態』。

これが…。

ヴィヴィアンは書物を抜き取り、ぱらぱらとページを捲る。そして、やはり最後のページに、メモはあった。

『Le soleil』。

そして、『La lune』。

「ありました。」

ヴィヴィアンが声をかけると、エインも「こつちもあつたよ」と答えた。

「南には『Lumière d'espace dans la fenêtre』とあつた。

西には、『Le soleil』と『La lune』…。」

癖なのか、エインがまた、顎を撫でた。

『Le soleil』。これは、太陽という意味のフランス語だけど、太陽は、フランスでは男性冠詞の『le』を使う。つまり、『だんなさま』は太陽なんだろう。

このルールで行くと、『娘さん』は『La lune』、月だね。

問題は『Lumière dans la fenêtre』の、『窓の隙間の光』か…。

「まだ、北を見ていませんね。」

「そうだね。」

そう言つて、北に位置する『X-II』の本棚へ近付き、すつと書物を取り出すと、手馴れた手つきでページを捲り、やはり一番最後のページで止まつた。

「あつた。」

エインはそう言つて、次いでくすくすと笑つた。

ヴィヴィアンが首を傾げると、エインが書物を仕舞いながら、面白そうにヴィヴィアンを見た。

『『Je vous aime.』。』

「?」

ヴィヴィアンがなおも首を傾げると、エインはヴィヴィアンに歩み寄りながら肩を竦めた。そして、ヴィヴィアンの真正正面に立ち、顔を近づけると、徐に「愛してる」と言つた。

一瞬、ヴィヴィアンが目を見開いた。が、すぐに表情を戻す。その様子を、エインは面白いものを見るように眺め笑つた後、「これは、ヒントではなく、答えかな。」

と言つて、懐中時計を見た後、西の『IX』の本棚へ行き、上から下までを目でなぞつて、「あ、そうか」と独りごとを言つた後、近くにあつた脚立に登つて、一段目に重ねられた本棚から素早く一冊の書物を取り出した。背表紙には、『Je vous aime.』と書かれていた。

すると、本棚の後ろから一筋、光が挿した。

「おおつと…。」

ヴィヴィアンが近付いて覗くと、抜いた本の裏にだけ、隙間が開いていた。よく見ると、長細い窓だつた。

『『窓の隙間の光』…。』

「なるほど。」

エインがにやりと笑つてオイルランプに近付くと、つまみを捻つて火を消した。別のランプも消して行く。次々消して、最後のランプの火が消えたとき、窓からの光は、何かを指す光の筋になつた。光は『図書館』の真向かいにあるオブジェの銀の部分に反射し、斜め下向きに折れ曲がつた後、反対側の壁際に、そのオブジェと真正面に向かい合つて立つ同じ形のオブジェの銀の部分に当たり、さらには折れ曲がつていた。

「めんどくさい事、考えたな…。

まさか、この日のために用意したわけじゃないだろ? な、コレ…?」

ぼそぼそと呟きながら、エインが筋を追つた。
何度か銀色の何かで折れ曲がつた光の筋は、『IX』の棚の目の前に、平行に並ぶ本棚のとある本を指していた。

近付いてみると、その書物にも『Je vous aime.』と書いてある。

「と言う事は。」

ヴィヴィアンの手元を覗き込んだエインが、その書物のあつた本棚と背合わせに並んでいる反対側の本棚を見た。そして、ヴィヴィアンが抜いた書物があつた場所とぴったり一致する場所から、一冊抜き取る。

「これも『Je vous aime.』。どうやら、『Je vous aime.』は全部抜くようだな…。

…が…。」

エインがくるりと振り返る。そこには、ルールに基くなら同じよう並行に並んでいるはずの本棚が、不思議な角度に斜めになつて置いてあつた。隙間を少し開けて、隣の本棚は、それとは別の角度をつけて斜めになつている。

そして、光の筋は、その本棚の脇に当たつて、途切れていった。念のために調べるが、光が差したいものは、それではない事は明白だった。

「つべづくめんどくさい。」

そう言つて、エインが苦笑した。

「どういう事ですか？」

「ヴィヴィアンが訊ねると、エインは首だけで振り向いて、腰に手を当てた。

「光の筋は、『Je vous aime.』を辿つていくようだ。そして意地の悪い事に、『Je vous aime.』という本は他にもあるという事。今抜いた二冊の『Je vous aime.』には、どちらにも近くに『Je vous aime.』という本が複数あった。恐らく探せば、あの窓も、もう幾つかあるだろうと思つ。

光は、その先で今みたいに障害物に当たつてはいけないから、光が何にも当たらず真っ直ぐ射すべき物に当たる瞬間を見つけなればならない。そして、光の向きは、日や時間帯によつて大きく異なる。

「その正解を示すものが、このメモ、という事。」

エインは尻のポケットからメモを取り出し、ひらひらとさせた。

「本の場所が入れ替わるという危険は……。」

「勿論あるね。」

その場合、この遺書もメモも、意味を為さない。

ここは、伯爵が亡くなつて以降、完全に立ち入りが禁止されている。元よりここには古い書物しかないし、金田のものは有名だったから、変な賊が荒らす事もない。

掃除は不要となれば、クリーブスさんを始めとして、他の従者が入ることもなかつただろう。

でも、それでも誰かが入るときは入るし、誰かが偶然に、重要な書物の位置を変える事だって有り得ない事じゃない。その時は、ボクへ渡すべき物、ボクが探すべき物は諦めるよつて、という意味もあるだろうと思うよ。

『奇跡的にこの状態が維持されていた場合のみ有効な遺書』、と

いう事だね。」

一息序でに、エインが溜め息を吐いた。

「変わり者だよ。

そしてボクの運命を試している。

『奇跡』が起きなければ、ボクに『決まり』に従うようこと、いつ意味があるだろ?と思つよ。」

「意地の悪い人だ……。」と言つて、エインが困ったような顔で微笑んだ。

ヒントを見付けた事で、『図書館』に籠る必要性は低くなつた。エインの提案で、部屋に戻る事になつた。

『図書館』を出る際、エインはヴィヴィアンにバスケットを持つよつ言い、自身は書物を何冊か抜き、持ち出した。外はもうすぐ夕暮れという頃合で、強いオレンジ色の太陽が、世界を照らしていた。

屋敷に戻ると、エントランスの花瓶の手入れをしていたクリーブスに、バスケットを渡す。

「夕食はいつも通りでよろしいでしょ? うか?

お嬢様はお部屋でお取りになる予定ですが、教授とトーマス様のお食事は大広間にご用意いたします。」

クリーブスが言つと、エインがにっこりと笑つた。

「お願いします。

アンは熱ですか?」

「はい。

喉も痛むとおっしゃつていますので、風邪をひかれたかも知れませんが……。

今、ウインストンが街へ医者を呼びに向かつております。」「そうですか。

部屋でゆっくりがよいでしょうね。

診察が終わつたら、二人で顔を出しますよ。」

「お気遣い有難うござります。

是非、お部屋をお尋ねください。

お支度が済みましたら、大広間でお待ちください。」

そう言つて、クリーブスは脇にいたメイドに花瓶の手入れを託し、奥へ消えた。エインとヴィヴィアンも階段を昇り、各自自室へ戻つた。

ヴィヴィアンは整えられたベッドに倒れ込み、寝転がつたまま窓を眺めた。

空は左から右へ徐々に闇が迫り、強い西日がカーテンと窓の影を長く伸ばして床に写している。

ふうと溜め息を吐くと、ドアが一度叩かれた。

「はい。」

返事をするが、何も言つて来ない。

ヴィヴィアンは起き上がり、ドアを開けた。目の前に、エインが立つて、笑つていた。

「食事に行こう。」

「はい。」

エインはヴィヴィアンの返事を聞いて、すぐに階段へと歩いて行つた。

ヴィヴィアンも慌ててドアを閉め、エインを追う。

「食事が終わつたら、そのまま大広間でさつきの続きをやろう。」

そう言つエインの手には、先程『図書館』から持つて来た書物があつた。

大広間の前で立つていたクリーブスが、エインとヴィヴィアンの足音を聞くなり振り向いて、扉を開けてくれた。

礼を言い大広間に入ると、既に食事は並べられており、つい先ほどバスケットの中身を平らげた胃袋に空間を開けるほどの芳しい香りと、見事な湯気を立てていた。

さすがに量はどれも少量で、簡単に口に出来る物ばかりだった。

「わがままばかりで、申し訳ありません。」

エインが苦笑しながら言うと、クリーブスが笑った。

「お気になさいませんよ!」

「ありがとう。」

ヴィヴィアンの椅子をひきながら、エインはもう一度苦笑して、奥のソファを指さした。

「食事が終わつたら、奥のソファを使いたいのですが。」

「ご自由にお使いください。食後にお茶をご用意いたしましょう。」

「お願ひします。」

そう言つて席に着き、「頂こつ。」とスープに手を付けた。

続いてヴィヴィアンも食事を始め、クリーブスは一旦奥へと去つて行つた。

スープは初日に出たじやがいものポタージュで、今夜のものにはカリカリに焼いたクルトンが塗してあつた。

他には、細かく刻まれてゼリーで美しく固められた野菜に、薄ピンク色の味の濃いソースをかけた物と、少し厚めに切つたローストビーフが数枚、軽くソテーした洋梨とオレンジが並んでいた。

「クリーブスさんは、昔から人の腹具合を鋭く計る人でね。」

エインがローストビーフを切りながら、話し始めた。

「こちらがお腹が空いていないつもりでいても、次の食事までの間にどのくらい空腹になるかを予想して、適量の料理を用意してくれるんだ。そして好きな時に食べろと言つて渡してくれる。

仕方がないのでその時食べるんだけど、そのあと次の食事までは空腹感を感じず、食事時にちゃんと空腹になる。

「凄い人だよ。」

「でも、教授が読書を始めたら、二日は飲まず食わずになるのでは?」

しかも、風の噂では、お声をかけても聞く耳を持たないと。」
ヴィヴィアンが意地悪に訊ねると、エインがナイフの手を止めて笑つた。

「そんな事もあつたな。それだと、さすがに二日分は無理だな。外にいる時は意識をするが、屋敷に一歩入ると生活する事に無精になる。」

「ボクの命は、ヴィヴィにかかりっている。」

エインが肉からフォークを外し、軽くヴィヴィアンを指した。

「心得ております。」

クリーブスさんにも、学びませんと。」

「頼むよ。」

お気楽に言うエインを、ヴィヴィアンが上目遣いに見た。

エインは楽しそうに肉を切つている。

そういえば、屋敷に来てからを除いて、こんな風に一人だけで食事をしたのは、ロンドン港以来だ。という事は、出会つてそろそろ一週間になつてしまつ。

時間が経つのは、早い。

月齢、日の出時間などは、計算サイトを使わせていただいております。

食事を済ませ、ソファへ移ると、クリーブスがメイドを連れて大広間へ戻ってきた。

クリーブスはメイドに片付けを指示すると、ソファへ紅茶とデザートを運んできた。

「ガトーショコラはお嫌いですか？」

「大好きです。」

クリーブスの問い掛けにエインが即答すると、クリーブスは「存じております」と苦笑して、ヴィヴィアンを見た。

「…好きです。」

ガトーショコラは大好物だった。だから、何となくそう答えるのが恥ずかしく、控え目に返事をしたが、クリーブスは見通したようで、満足げに一つ頷くと、エインより大きめにカットしたものをヴィヴィアンの皿に置いた。

その序でに、エインがテーブルの上に置いた書籍の山をちらりと見、

「ご用がおありでしたら、お呼び下さい。」「

とエインに言った。

「有難う。」

「ああ、そうだ。アンの診察が終わつたら、教えて下さい。」

「かしこまりました。」

クリーブスは一礼をして、大広間を後にした。

「さて。」

片付けのメイドもいなくなつたあと、エインはソファの上に胡坐を搔いて座つた。

「やううか。」

そう言って、尻のポケットからメモを取り出す。

そして、ソファの近くにあつた書類棚からインクと羽ペン、厚手

の紙を取り出すとわざりと書き出していく。

「『娘さん』は、月。」

『だんなさま』は太陽…。」

太陽は月に訊ねる。『ぼくを愛してるのはんと?』

その間に、月は首を振る。『感違いなさつてますよ』

だが月は『こちらへどうぞ』と太陽を招き、しかし太陽は『さよ

うなら娘さん』と去ってしまう。

「娘さんがもつたいてぶつて、だんなさまを勘違いさせてしまう。でも本当は、勘違いさせている訳ではなくて、それが本心なんだ。でも素直ではない。」

だから、『まいいいけど』と書いて、だんなさまに近くに来るよう言うが、だんなさまも素直じゃないから、『さようなら』と去つて行つてしまつ…。

という歌なんだけど、歌本来の意味と、伯爵が持たせた意味は違うんだろう。

思つに、月と太陽の位置を歌つてているのだと思つ。この歌を解けば、正確な『窓の隙間の光』を導き出せる。』

「月と太陽の位置…?」

「そう。」

太陽も月も、日と時間」とにいる場所が変わる。それも、刻々と。

月と太陽が、歌の通りの位置関係にある時に、正解の窓から差し込む『窓の隙間の光』が、正解の『愛してる』を指すんだろう。『エインが頬杖を突いた。

「ヴィヴィは、どう思う?」

問われて、ヴィヴィアンはメモを見つめた。

時々自身を無感情と思つヴィヴィアンは、詩的な表現は苦手だ。

「月と太陽が、見つめ合つ時。満月でしううか。」

太陽が東から昇つた時に、月が西側へ沈む日…。」

困惑気味に、ヴィヴィアンが呟いた。

「見つめられたら、勘違いするもんなあ、男は。」

エインが笑つた。ヴィヴィアンは、尚も困惑氣味に、首を傾げた。

「でもそれだと、太陽が『わよつなら』といつのは、おかしいですね…。」

ヴィヴィアンがそつまつと、Hインはこつこつと笑つた。

「そう。

太陽は立ち去らなければならないんだ。」

「では、逆でしあうか…。

月が東から昇り、太陽が西へ沈む日…。

西へ消えようとしている太陽に、月が東へ戻るようになつてているのでしょうか。でも、太陽は東へ向かう訳に行きませんから、『さよなら』と…。」

言つていて、妙な氣分だ。

「太陽が東へ戻るのは簡単だ。次の朝を待てばいい。

ちなみに、余談だが、月の出と日没は、いつも同じ感覚で行われている訳ではない。

日没は日々一分から三分の間隔でずれる程度だが、月の出は日々四〇分から一時間単位でずれる。昨日と今日で、月の位置はまるで違つんだ。そして、月の出がない日もある。厳密に言つと一日が始まつた時には既に月は出でていて、その日は月は沈むだけ、という日が存在する。だが、絶対に月の沈まない日はない。

関係ないだらうけどね。」

「…。」

「まあ、『わよつなら』と言つてはいる以上、日の入り直前の話だと思つ。

だから、月の位置が重要なだな。

そして、月は太陽を招いている。

男は見つめられるのにも弱いけど…。」

エインが言葉を切つて、ヴィヴィアンを見た。

「傍に寄られるのにも弱い。」

「近くにいる、といつ事ですか。」

「そう。」

そう言いながら、エインは紙に絵を描き始めた。

横棒を引き、上に家が建つた。さらに家の脇には木が立ち、星が空に散つた。その空に、丸を二つ加える。

「娘さんは、素つ氣無い。」

ちらりと太陽を向いているように、もつたいぶるように、太陽の光を少しだけ反射する…。」

なんとも言えぬ柔らかな笑みを浮かべながら、エインが片方の丸の内側に円弧を何本も足し始めた。

「太陽が出ている時に、月が出て来て、一日を過ぎる。月の廻りの方が早いから、太陽が沈む前に、月が太陽に近づく。もう少しこちらにくれば、隣合える距離。でも、太陽は一足先に、去ってしまう。」

片方の丸が、細い細い三日月になつた。

「新月直前の月、ですか…？」

「多分。月齢で言つと、〇・五からハといったところかな。」この形の月で、且つ、日没と月没が近しい日を探せばいい、と思う。」

エインが、ペン先を紙に丁寧に擦つてインクを落とした。

「少し冷えるな…。」

「大丈夫かい？」

「はい。」

問われて、頷いたものの、若干指先が冷えていた。肌寒くはあるが、堪えられない訳ではないので気にしなかつたのが正直なところだ。

「この時期のフランスは、朝晩はまだまだ冷え込むんだ。室内で暖炉を焚いていても、暑いと思わないほどにね。」

温かい紅茶を用意してもらおつ。」

そう言って、エインは立ち上がりクリーブスを呼びつけた。

「お呼びですか。」

「紅茶を入れ直してもらえますか。」

あと、ヴィヴィに何かひざ掛けを。」

「承知致しました。すぐご用意いたします。」

頭を下げてクリーブスが去つた後、エインは振り向き様、窓の外を眺めた。ヴィヴィアンも釣られて見ると、ガラスに小さな水滴が付いていた。

「雨か。」

フランスはとにかく雨が多い。天気予報なんて当てにならない。急に暑くなったり急に寒くなったり、急に雨が降つたり……。」

言いながら、エインがヴィヴィアンを見て肩を小さく竦めた。「ワインストンさんが、お医者様を迎えて見に行つていきましたね。道は大丈夫なのでしょうか?」

「大丈夫だろう。もうそろそろ着くと思うよ。」

そう言つたタイミングで、クリーブスが温かい紅茶とチョコレート菓子を少し持つて來た。左腕の肘には、ひざ掛けがかけてある。クリーブスは紅茶を一度テーブルに置くと、ヴィヴィアンにひざ掛けを見せて、「冷えは女性の敵です。」と言ひながら手渡した。

「有難うございます。」

「他にお入用のものはござりますか? 暖炉に火を入れましょつか?」

「そこまで寒くないよ。大丈夫。」

「畏りました。」

そして、紅茶を注いで、去つて行つた。

「さて、仕事をしようか。」

エインがパン、と手を叩いた。

や位置を詳細に記したカレンダーのよつなものだつた。

予めこれを持ち出したという事は、エインは『図書館』でのヒントを見た時点で、大凡答えを見出していた事になる。それなのに解釈を求めたのかと、ヴィヴィアンは少し不機嫌になりつつも、渡された書物を開き、今日に近い『日没と月没が近しい日』を探してページを捲つた。

書物には一ページに一日、日の出と日の入り、月の出と月の入り時間が書かれ、方角と月齢が図で掲載されている。

エインが先程、月齢が〇・五からハと言つていたので、ヴィヴィアンは月齢を注視し、ページを捲つた。

一七五五年四月一日、月齢一〇・五。
一七五五年四月三日、月齢一一・五。
一七五五年四月四日、月齢一二・五。
⋮。

一七五五年四月十一日、月齢一九・五。

一七五五年四月十一日、月齢〇・八。

⋮ あつた。

「ありました。」

ヴィヴィアンが声をかけると、エインがにこりと笑つて、ヴィヴィアンを見た。

「四月十一日です。月齢は、〇・八。」

「日出時間、六時一五分。月出時間、六時五八分。日没時間、一九時四一分。月没時間、一〇時三四分。」

前日は、月が太陽を追い越して先に沈んでしまうし、翌日は月齢が好くない。

書物も見ずに、エインがすらすらと言つた。

「ご存知だったのですか？ 答え。」

苛立ちを隠せず、ヴィヴィアンがついムツとして聞くと、エインはヴィヴィアンの内心を悟つて、

「『めん』『めん』。月齢までは覚えてなかつたんだ。」

田の出や月没時間は、大体把握をしていたんだけどね。」
と言ひ訳をした。が、すぐに表情を戻して顎を撫でながら、

「十一日。明々後日か…。」

と呟いた。するとそこへ、クリーブスがやつて來た。

「教授。お嬢様の診察が終わりました。」

「おや。いつの間に。」

エインは大袈裟に驚いて、胡坐を搔いていた脚を解いた。

「お手隙でしたら、是非お嬢様にお声掛け下さいますと…。」

テーブルの上の書物を見たクリーブスが、恐縮して低頭姿勢で言うと、エインは一瞬ヴィヴィアンを見て、そして頷いた。

「そのつもりです。すぐに向かいますよ。」

「有難うござります。」

クリーブスが頭を下げるが、エインがヴィヴィアンを見て言つた。

「少し休憩をしよう。」

「はい。」

ヴィヴィアンが頷くと、エインは立ち上がり、足早に大広間を出て行つた。エインの背中を見送つたクリーブスが、ヴィヴィアンを見る。

ヴィヴィアンはヴィヴィアンで、行くべきか、行かぬべきか判らず、腰を上げられないまま、クリーブスと見つめ合つた。

クリーブスは、ヴィヴィアンの戸惑いを察して、にこりと笑つた。
「お嬢様がお待ちです。」

「お邪魔では…？」

無表情でも氣弱な心境を声で悟つたクリーブスが、ゆっくりと首を振つた。

「行つて差し上げて下さい。」

クリーブスの言葉に、ヴィヴィアンが重い腰を上げた。そして、すれ違いざまクリーブスに会釈をして、アンの部屋へ向かつた。ヴィヴィアンを見送つたクリーブスは、一人、ヴィヴィアンの背中を見つめ、苦笑した。

『運命は、変えられない。』

誰の言葉だつただろうか。恐らく無名の、哲学者の言葉だつたに違ひない。

無名には無名の理由がある。この旅を始めてからすぐに、そう思つたものだ。

病弱の”姫君”の元へ向かう足取りは、重い。

何度、この廊下を歩いただろ。何度、あの塔へ入つただろ。品の良い素振りは得意なのに、結局自分の思うがまま運命を動かそつとするあの手付きを見る度、胸が締め付けられる思いをし、そしてその都度、哀しい思いをする。

もう終わらせたい。

何度も何度も、繰り返し願つた事だ。

『運命は、変えられない。』

変えてはならぬものだと教え込まれ、忠実に従つて来た。しかし、心に嘘は吐けなかつた。だから、意のままに旅をする決意をした。

どうあつても、『そなうらない』運命を見つけてみせる。

中央階段を上がつて、長い廊下を行くと、突き当つてエインがこちらを見て立つっていた。

待つていたのだろうか。

表情を変えぬまま、首だけを傾げると、エインはこいつと笑つて、アンの部屋の扉を叩いた。

「どうぞ。」

扉の中から声がして、次いで扉が開いた。中にはメイドが一名、いるだけだった。

「お嬢様は、奥にいらっしゃいます。」

そう言つて部屋の中へ招かれ、そのままベッドルームへ通された。ベッドルームは、アンの部屋の奥の螺旋階段を上がつた先にある、シャトーの屋根上にある。

オイルランプが二つだけひつそり灯るベッドルームは踏み込む事に躊躇する程に暗く、その奥にどんと置かれた天蓋付きの大きなベッドは、不釣合いなほどに煌びやかで奇妙なものに見えた。

「アン。」

エインが声をかけると、ベッドに入つて沢山のピローに凭れ横になつていたアンが「来て下さいましたのね。」と返事をした。カーテンで顔が見えないが、声はいつも通りだった。

「ヴィヴィも来てますの?」

「おります。」

「お顔を見せて頂戴。」

エインではなくヴィヴィアンの顔を真つ先に見たいという言葉に、やや居心地の悪さを感じつゝも、ヴィヴィアンはアンのベッドへ歩み寄つた。

「ヴィヴィアンです。」

声をかけながらカーテンを退けると、暗がりで微笑むアンが、ヴィヴィアンに向かつて手を差し出していた。

その様子に、ヴィヴィアンは一瞬、どきりとする。

「…アン…。」

「ヴィヴィ、手を取つて下さいな。」

差し出した手を握れというアンに、ヴィヴィアンはそこはかとなく恐怖を感じた。何故かは解らない。暗いせいで、アンの手が青白く見えたからかも知れない。

ヴィヴィアンが恐る恐る手を握ると、アンがにこりと笑つた。

「ご加減は、いかがですか…?」

「大丈夫、有難う。少し風邪をひいたようですのよ。ヴィヴィアン。」

「そう言つて、アンはヴィヴィアンをぐいと引き寄せ、顔を近づけて呴いた。

「運命には、逆らえませんのよ…。」

ヴィヴィアンははつとして、アンの顔を見た。アンの顔は思つて以上に近くにあつて、香水なのか、薔薇の香りがふわりと鼻を掠めた。ランプの明かりがヴィヴィアンによつて遮られ、光の当たらない中で、きらりと光るアンの瞳が怖かつた。

「…。」

突然の事に頭が真っ白になり、身動きが取れないヴィヴィアンの手を、アンがぎゅっと握り締め、すぐには離した。

束縛が解かれたように、ヴィヴィアンの体も動くようになり、ヴィヴィアンはよろよろとアンから後退りをして離れた。

エインを見ると、彼は悲しそうな顔で闇の中に立つていたが、ヴィ

ヴィアンの様子を見、すぐに部屋から出るよつ言つた。

ヴィヴィアンは躊躇いもなく、逃げるよつに部屋を出た。アンには、挨拶もしなかつた。

ヴィヴィアンが去つた後、エインがベッドに近付くと、アンが微笑んだ。

「どうかしまして？」

問うアンは、まるで死人のよつに白い顔をしていた。時折思つ。既に、死んでいるのではないだろうか、と…。

「ヴィヴィに、何を？」

エインはにこやかに、穏やかに問うた。しかし、心の底では、黒いものが蠢いている。

何を、した？

「『運命は変えられない。』と、教えて差し上げました。」

アンもにこやかに、穏やかに答えた。

「アン…。」

「父の言いつけを、護つて下さるのでしょうか、教授？ 私はそう聞いておりますのよ。」

「アン……。」

「教授。教授の居場所は、ここですよ。フランスです。スコットランドではありません。ボルドーです。よ。エティンバラではありませんの……！」

「この屋敷ですよ！」

穢やかは装いだつたのか、アンの言葉が徐々に強くなつて行つた。尚も言葉を発しようと、アンが息を吸い込んだのを見て、エインがアンを睨んだ。

アンにこのような顔を向けるのは、出会つて初めてだつた。エインの視線に、アンの表情が強張つた。

「アン。

「何度、この話をしたでしょ？ 」

「何度も、しましたね……。」

私の気持ちは変わりません。

私の居場所はここではありません。

私の居場所は……。」

自分の居場所は……。元より、どこにもない。

「ここではないんですよ。」

エインの視線が、言葉とともにアンを射抜いた。アンは強張つた表情のまま、所在無沙汰になつていていた手を、膝の上で握り締めた。

「三日後、伯爵の遺言の謎が解けます。」

そうしたら、すぐにスコットランドに帰る予定です。

あと三日、お世話になりますよ、アン。」

エインがゆつくつと言つと、アンは俯いて、くつと小さく頷いた。

「クリーブスにも、お伝えになつて下さいな……。」

「解りました。」

そう言って、エインが踵を返すと、アンが呼び止めた。

「教授。」

呼ばれて、エインは肩越しにアンに振り返った。

「…。」

「…。」

何を言おうとしたか、アンがエインの表情を見て、口を噤んでしまった。

暫し沈黙が訪れ、居た堪れない空気が一人を包む。やがて、エインが背筋を伸ばして呟いた。

「運命は、変わるんですよ…。」

『運命は、変えられない。』

誰の言葉だつただろうか。恐らく無名の、哲学者の言葉だつたに違いない。

無名には無名の理由がある。この旅を始めてからすぐこ、そう思つたものだ。

病弱の”姫君”の城を出、月明かりの照らす廊下で、手のひらを見つめる。

まだ、姫君の手に握られているような感覚が残つてゐる。冷たく、骨ばつて、か細い手…。

何も手に入れられない、富だけに溢れた彼女の言葉に、何度も喉元が熱くなつただろうか。

生まれた時から何もなかつた自分の胸に、彼女の言葉は深く突き刺さる。

何度も何度も突き刺さつた。

そろそろ、傷も癒えなくなつて來た。もう、終わらせたい…。

翌日、アンは朝から伏せついて、部屋から出て来なかつた。クリーブスの話では、熱が下がらず咳も酷いらしいが、風邪が悪化しただけだと先に医者から処方された薬を飲み、眠り続けているという事だつた。

天気は快晴で、薄い煙たい青空が、遮蔽物のない農園地域を覆つていた。

エインは朝食後すぐにヴィヴィアンに暇を出し『図書館』に籠つてしまつたので、ヴィヴィアンは独り屋敷の辺りを散歩に出かけた。昨夜の雨もすっかり乾いた小路を、当てもなくうろつく。

空気は澄んでいて、時折風に乗つて森の匂いが漂つて来た。その中に、甘い匂いを感じた。

どこかに花畠でもあるのだろうか。農園が集まる場所だから、あつても可笑しくはない。

ベルトワーズ邸に着いてからというもの、本の臭いしか嗅いでいなかつたから、花の香りでも吸い込みたい気分だつたので、ヴィヴィアンは香りを追つて彷徨つた。

よい散歩と言う程にあちこちにある森を入つたり、川を眺めたりして花を探したが、どうにも花畠には辿り着けない。風は北から吹いていたので、ヴィヴィアンは屋敷の北側の森を探索する事にした。北側にある、屋敷に一番近い森は他の森より少し大きく、川に面しているようだつた。その上、何やら森の木々の上からは、青い屋根らしきものが見える。誰か住んでいるのかと、ヴィヴィアンは歩みを速めた。

小路は真つ直ぐ森へ伸びている。近付くにつれ、森の木々の間を縫うようにベルトワーズ邸の周りにあるような匂いが立てられていのが見えた。森に入る際にはアーチを潜る様になつていて、その先へ行くと、手入れをしていないのか木々と茂みが行く手を阻んで

いた。それを無理矢理抜けると、突然森が拓け、花の咲き乱れる小さな庭が姿を現した。がさらに茂みに覆われた道は続き、そこを抜けると池ほどに小さな湖が現れた。

湖は透明度の高い水が風で小さく波打ち、日の光を受けてきらきらと輝いていた。湖の向こう、木々の間にちらりちらりと花畠が見えたので、奥へと進むと、今度は大きなロッジのような建物が現れた。

白い壁に、大きな窓、縁と花花の咲く大きな庭とレンガで造られた人工の川に囲まれ、川には小さな可愛らしい橋がかかっている。橋を渡り、庭へ入る。

建物の向こうには木がないらしく、ヴィヴィアンはやや興奮気味に建物の奥へと進んで行った。

見た事のない植物と花の生い茂る庭を横切り、橋のかかっていな川を飛んで渡り、植木が隠しかけた細い細い隙間を抜けると、ぱつと視界が開け、強い風が舞つた。

一瞬目を閉じ、ゆっくりと開けると、ヴィヴィアンは田を見開いた。

田の前には少し幅の広い草地が延々と左右に伸び、その向こうには大きなガロンヌ川と、先に海が広がっていた。崖になつてているようで、近付かなくても高い崖だと解るほどに、手前の川が下の方に感じられた。

こんなに海に近いとは、解らなかつた。屋敷の方は、こちらより少し下がつてゐるのだろうか。

ドレスを大きく揺らす風には、少しも潮氣を感じず、さらさらと頬を撫でて行く。

何故だろう、ヴィヴィアンは不思議なほどにこの場所が気に入つた。

少なくとも、まだ三田はボルドーにいる。明日もここへ来よう、などと珍しく心が躍る。

空を見上げると、屋敷を出た頃より少し陽が高くなつていた。

エインが心配しやしないか。否、エインは時間も忘れて読書に耽つてゐるに違いない。ならば、困るのはクリーブスか。

色々考え、ヴィヴィアンは一時屋敷へ戻る事にした。時間があれば、また来ればいい。

そう思い、踵を返し、植木の間へ入り込んだ時だつた。腕に何か冷たい感覚が走つた。葉にでも触れたかと思い、何事もなかつたかのように庭を抜け、元来た小路を戻る。そして屋敷のアーチを潜つた時、『図書館』から出て来たエインがヴィヴィアンを見て険しい顔をした。エインは速足でヴィヴィアンに近付くと、腕を力いっぱいつかんでヴィヴィアンを引き寄せた。

「どこへ行つていた？ 何をしていた？」

初めて見るエインの表情に、ヴィヴィアンは大いに戸惑い、森の中の建物や庭の事など聞く説明出来ず、口籠つた。何をそんなに怒つているのかと眉を顰めると、エインはヴィヴィアンが何も気付いていないと理解した。

そして、握つていた腕をヴィヴィアンの目の前にぐいと上げる。自分の腕を見たヴィヴィアンは、今日一度目、目を見開いた。

肘の横辺りに細く切られた痕があり、傷口はぱつくりと割れ、血が出ていた。出血は酷く、何故気付かなかつたのかと、自分自身で驚いた。

余りの状態に、ヴィヴィアンが言葉を失つていて、エインがヴィヴィアンの手を曳き、屋敷に入るなりクリーブスが慌ててエントランスへ駆けつけると、未だかつて見た事のない形相のエインと、腕を血まみれにして啞然としているヴィヴィアンがいて、彼も大層驚いた。が、すぐに一人を大広間へと誘導し、傷の手當に取りかかつた。

出血は酷いが傷は浅く、ヴィヴィアンは事なきを得た。しかし、エインは怒りが收まらないのか、今日はこれから一時も屋敷から出ではならないとヴィヴィアンに指示し、食事をそそくさと済ませて自室に籠つてしまつた。

エインの様子に、無表情ながらもすっかり怯えてしまったヴィヴィアンは、言い付けに従い、まだ半日もあると言つのに自室に入つて鍵をかけた。

ベッドに横になり、包帯を撒かれた腕を見る。

本当に、何故気付かなかつたのだろうか…。一体いつ、切れてしまつたのだろう。植木の間を通つた時か？ そう言えれば、何か冷たさ感覚があつた気がする。

しかし、葉によつてこの様な傷を負うか？ 何か刃物でもあつたのだろうか。何故、調べようと言つた気が回らなかつたのか…。いつもの自分なら有り得ない状況に、ヴィヴィアンはまだ啞然としていた。

幼い頃、両親が事故で死に、親戚や兄弟がいなかつたヴィヴィアンは、軍管轄下に置かれた養護施設に引き取られた。

そこで、基礎教養を始め、将来的に軍部に席を置ける者、イコール軍人として必要な、在りとあらゆる知識と技術を身に付けさせられた。

そんな生い立ちであるから、この傷は有るまじき失態による傷である。

何故、気付かなかつた…？

ヴィヴィアンは、怪我をしていない腕を目の上に被せ、目を閉じた。

視界を暗くすると、どつと疲れが押し寄せた。風に吹かれたせいか、ショックによるものか。

思考の巡りもゆるまぬまま、ヴィヴィアンは眠りに落ちた。

あの人はど…。

確かこの庭を横切つて…。

恐ろしいほどに花の咲き乱れるこの庭を横切つて…。

茂みの向こうに、湖が……。

湖が見える……。

その湖の畔に……。

深い樹木に囲まれた、小さな湖の畔に……。

足が縛れる。

でも走らなければ。

手遅れに、手遅れにならないうちに……。

間に合わなければ。

間に合わなければ、また……。

ザクザクと芝生を踏み潰す足音に紛れて、ドンと音がする。

一回……。

ドン。

一回……。

無事で、無事でいてくれ。

茂みを潜る。

細い枝が肌を引っかく。

痛い……。

ああ、でも、あの人はもつと……。
手で搔き分けた茂みの先が拓けた。

湖が見える。

この湖の、右の畔……。

ああ……。

また……。

また、間に合わなかつた……。

駆け寄り、横たわる躰を抱き起こす。

小さな、白い顔が苦痛に歪んでいる。
しかしあつ、息はない……。

ああ……。

これで何度もだ……。

何度もだ……。

あと何度も…。

あと何度も、この躰を抱き起こせばいい…。

耳元で、じうとういう轟音が聞こえ、驚いて目を醒ます。眼球だけを動かして部屋を見回す。カーテンの隙間から光が差し込み、窓の外からは小鳥の轉りが聞こえる。

屋敷の中はしん、と鎮まり返っていて、物音が聞こえない。ゆっくりと起き上ると、肘辺りにちくりと痛みが走った。目をやると、捲り上げられた袖の下から、白い包帯が覗いている。ベッドから降り、のそと窓に歩み寄る。カーテンを開けると、東の空が明るくなっていた。

寝てしまつたのか。それも日が変わるほど長時間。窓に手を触ると、ひんやりと冷たい。そこでやつと、部屋も冷え切つている事に気付いた。

何もかもが麻痺している気分だ。

ふうと溜め息を吐く。

こんな感覚は、”初めて”だ。

何か、”変わった”のだろうか。

”今まで”になかつた、方向へ進んだのだろうか。

”先”が見えなくなつた。

この道は、”どこへ”続くのか…。

不意に、ドアが叩かれた。

「はい。」としゃがれた声で返事をする。昨日の風で、喉をやられたのだろうか。

ヴィヴィアンの返事を受けてドアがゆっくり開き、中を窺い見る。Hインが隙間から部屋を覗いた。顔には、いつもの微笑みが浮かぶ。

「…教授…。」

「おはよ。」

おはよと言われ、改めて今が朝である事を確認する。

「…おはよう…」ぞこます…。あの…。」

「ん？」

部屋に入り、後ろ手にドアを締めるエインに向かって、ヴィヴィアンが俯いて何か言いかけた。だが、そのまま何を言つたらいいか解らなくなつて、黙り込んでしまつた。

「傷は？」

エインに問われて、ヴィヴィアンは首だけを振つて応えた。

「何があつた…？」

昨日も聞かれた事だ。だが、やはり答へよつとすると、言葉が詰まらない。

「…。」

「答えたくない？」

ヴィヴィアンが首を振る。

「答えられない？」

今度は首を縦に振る。

「解つた。聞かない事にする。」

エインの言葉に、ヴィヴィアンが驚いて顔を上げた。

「無理には聞かない。

まとまつたら話なさい。

ただし、危険な事はしない事。」

「いいね？」と釘を刺すエインは、相変わらず優しく微笑んでいた。ヴィヴィアンはこくりと深く頷いて、エインを見据えた。言いたいのだ。でも、何も言葉にならない。

昨日見た森の庭も、花や橋の事も、海の事も。その時怪我をしたのだという事も、何もかも話したいのだ。なのに、単語ばかりが浮かんでは消え、文章にならなかつた。

でも恐らく、エインはヴィヴィアンの内心に気付いているのだけ

た。

ふと、罪悪感が込み上げる。この屋敷に来てから、自分の様子がおかしい事に自身で気付いていた筈だし、それを包み隠すべく様々な訓練を経てエインの元を訪れた筈なのに、何一つ満足に行えていない。

ただ”居る”だけになってしまっている。

それでは、”居る”意味がない。

ヴィヴィアンが唇を噛んだ。だが皮肉にも、こう言つ時に限つて、自分の表情筋は動かない。

そんな内心すら氣付いているエインは、仕方なさそうにヴィヴィアンに苦笑すると、ドレッサーの椅子を持ち上げヴィヴィアンの目の前に置いた。そしてベッド脇にあつた椅子をその横に置くと、かつたるそうに座つて片脚を上げ、膝を抱いた。

膝に顎を乗せ、重い頭を支えると、窓の外を見つめる。

まだまだ陽は登つて来ないが、空には太陽より一足先に昇つた月が、白く細く輝いていた。

「ボクも孤児でね。

とある施設に保護されて、幼少期を過ごした。」

エインが、突如身の上話を始めた。そんなエインを呆然と見つめながらも、ヴィヴィアンはエインが運んだ椅子にゆっくりと腰を下ろす。

「友達は沢山いたし、愛情も満足に注がれていたのに、表情を操る能力がなくて。

成長して知識を身に付けて行くにつれ、それが自分の内部にある心の闇のせいだと気付いた。

ボクは自分自身に誇りを持てなくて、いつも何かに脅えていた。でも何に脅えているのかボク自身には解らないし、ボクの周りの人たちも、ボクがそんな闇を抱えているなんて思つていなかつた。どうすればいいのか頭で考へても解る訳がない。そこで、ボクは啓き直る事にした。

好きな事をして、自分がしたい事だけをして。勿論他人を敬つたり、尊ぶ事を蔑ろにはしなかつたけど、それ以外なら何でもやつた。悪い事も悪い事も。

ある時、一度とその施設に帰れないと言つ仕事を与えられた。棄てるものはなかつたのに、ボクはそこから離れたくないと思つていた。

その時、ボクは何に脅えていたのかを知つたんだ。
ボクには、拠り所がなかつた。

「拠り所…。」

繰り返すヴィヴィアンを、エインが見て笑つた。
「ボクには護りたいものがなかつた。」
護りたいもの…。

「それは意図的に作れるものではなかつたし、かと言つて必ず見付かるかも解らない、不安定なものだつた。

だから、それを作り出す事が出来るか解らないボクは、ボク自身の自信のなさに脅えていた。

確固たる何かが足りなかつたんだ。

だから、ボクは仕事を請けることにした。
護りたいものを探せる自分を探しに。」

窓を向いたエインの横顔が、ふと黄昏た。視線は窓の外の、ずつとずつと遠くを見つめているようだ、心はここにはない。しかし、不思議とヴィヴィアンは、エインの心と隣合わせにいる気がした。部屋は相変わらず寒いのに、いつしか寒さの事など忘れ、二人の間に不思議な空気が満ちて行く。

「仕事は、勿論好きな事だつたんだ。ずっとやりたい事だつたし、これが叶えばどんなに光榮かと思つていた事だつた。

施設を離れるのに多少の勇気は要つたけど、ボクはそれ以来、ずっとその仕事をしている。

「否…。」

エインが自らの言葉を否定した。そして、不思議な一言を呴く。

「もうその仕事は、終わったかも知れないけどね…。」

ヴィヴィアンが首を傾げると、エインが膝の上に頬杖を突いた。

「ずっと旅をして来た。

当てもない旅。呼ばれては出向き、見付けては調べ…。

そのうち、見付けたんだ。

”^{彼女}護りたいもの”を。

エインが目を細めた。

「彼女に会つて、初めてボクは自分の心と表情をイコールにする事が出来た。

彼女が生きてさえ居てくれれば、それだけで十分だつた。そのためなら、命なんて要らないと思った。」

そう言つエインの手元が、きらりと光つた。昇り始めた太陽の光を受けて、何かが光つたのだ。

注視すると、エインの左手の薬指に細い銀のリングを見付けた。それはエインの指に食い込んで、手に同化してしまつてゐる様に見えた。

しかし、指輪を見ても、ヴィヴィアンの心は何故か凧いだまま、穏やかだつた。いつぞやの様に動搖もしなかつた。

エインが、立ち上がつた。

「誰にも話した事がない話。」

口に指を当てて”内緒”と言つエインを見上げて、ヴィヴィアンはゆつくり頷いた。

エインはヴィヴィアンににっこりと笑うと、「またあとで。」と言つて部屋を出て行つた。

ヴィヴィアンはエインの背中を見送つて、昇る太陽に振り向く。ヴィヴィアンは太陽に向かつて一つ頷くと、腰を上げて体が千切れるほど目いっぱい体を伸ばした。

護りたいもの。

何があつても揺らがないのは、それが正解である証だ。

エインが出た後、部屋にいても退屈だと大広間を田舎していると、エントランスでクリーブスと出くわした。

「おはようございります、トーマス様。

お怪我はいかがですか？ 包帯を替えましょう。大分緩んでしまつていますから。」

「有難うございます。お願ひします。」

ヴィヴィアンが言うと、クリーブスは大広間で待つよう言い、小走りで奥へ消えた。

大広間に入ると、奥のソファセットのテーブルに紅茶のカップが一つ、ぽつんと置かれていた。恐らく、エインに用意されたものだろう。だが、エインの姿はない。

しかし、窓の外に人影が見えたので覗き込むと、エインが西の方を向いて立っていた。

「トーマス様。」

クリーブスが包帯を持ってやつて來た。

クリーブスはヴィヴィアンをソファに座るよういい、ヴィヴィアンの脇に膝をついてしゃがむと、解け掛けた包帯をゆっくりと腕から解いて行く。

包帯の下の薄いガーゼは赤茶に汚れていた。ガーゼを剥がすと、まだケロイドにもなつていない傷口が露わになる。

「痛みますか？」

「いえ。大丈夫です。」

言葉を交わしながらも、クリーブスは手際よくガーゼを換え、新しい包帯を巻き直す。傷口には、クリーム色の軟膏を塗ってくれた。ヴィヴィアンは、ふと気になつて、クリーブスにあの建物について訪ねた。

「…北の方の森に、綺麗な庭のある建物を見付けました。」

ヴィヴィアンが言うと、クリーブスは包帯を巻く手を止め、ゆつ

くりヴィヴィアンを見上げた。暫し視線を交わし、クリーブスは小さく笑いながら、再び手を動かす。

「あの建物は、亡きご主人様が、”海の見える家”と呼んでおられました。

ご主人様の御祖父が若い頃に所望されて建てられた建物で、潮に強い植物を庭に埋め、人工の川に水を浄化しながら流せるよう特殊なポンプを設置したそうです。

体の弱かつた奥様のために建てられた建物だとか。

「湖がありました。」

「あの湖も、人造湖なのですよ。庭の小川の水は湖と庭を循環しております。」

「そうなんですか。」

「もう長い事手入れをしておりませんでしたので、道もないようなものになってしまっているのです……。」

クリーブスが寂しそうな顔で笑った。確かに、道には草が生い茂り、通るのに不便を感じた。

「あそこに出入りする方はもういないのですか？」

ヴィヴィアンが訊ねると、包帯を巻き終えたクリーブスがすっと立ち上がり、にこりと笑った。

「はい。教授も森へは立ち入りませんから、ご存じないのではない

かと。」

「そうなんですね。綺麗なお庭なのに。」

ヴィヴィアンが俯くと、クリーブスがふふと笑った。

明日にはこの屋敷を去れる。

そう思ふと、エインは胸が軽くなる思いだつた。

このまま何もなればいい。

ヴィヴィアンの傷も、ただ不注意で出来た傷であればいい。

視線を感じて振り返ると、大広間の窓からヴィヴィアンがこちらを見ていた。影になつて見難いが、腕の包帯が綺麗になつていた。巻き直してもらつたのか。

エインは一步一歩踏みしめながら窓に近付くと、ヴィヴィアンと真正面に向かい合つた。硝子越しに見るヴィヴィアンは、硝子の歪みのせいで異空間にいるような不思議なぼやけ方をしていて、しかし、とても美しかつた。

スコットランドに帰つたら、少しばかり出来るだらうか。

エインはふと、ヴィヴィアンを手招きした。

ヴィヴィアンは一瞬きょとんとしたが、すぐに踵を返して大広間を出て行つた。

暫くして、コッコッといつ足音が聞こえ、ヴィヴィアンが駆け足で現れた。

無表情なのに、走つてゐるせいで頬だけがほんのり赤くなつてゐるその様子が、なんとも愛らしく思える。

ヴィヴィアンはエインの目の前まで走り寄つて、ちょうどよい距離を開けて止まつた。その測つたようなちよづきよさも、エインには心地好い。

実は、然して用はなかつた。ただ、窓越しでは物足りなかつたのだ。

エインは少し考えて、この辺りの事を説明し始めた。

エインが突然何かしらの説明をし出すのにも慣れてしまつたヴィヴィアンは、何の疑問も持たずにエインの話を聞く。忙しなくあちこちを指差すエインの指先を見つめながら、時折、質問をする。

話が反れたり、元に戻つたり、妙なトリビアが出て来たり、耳を掠めるお互いの声を体全体で取り込みながら、この時の心地好さに身を委ねる。

これがずつと續けばいいのに。
どこかで必ず、途切れてしまつ。

ふらふらしているうち、結局『図書館』に籠る事になり、エインはシャトーに入るなり本に夢中になってしまつし、ヴィヴィアンはやる事がなかつたので、エインに倣つて読書をする事にした。本を扱い慣れてしまつたからか、読書も耽つてしまつと時が経つのを忘れる。

夕方だとクリーブスが呼びに来るまで、二人は黙々と読書をしていた。

驚くべき事に、エインは『図書館』の書物の殆どに目を通していくつて、残るは入り口付近の本棚数台のみ、という事だった。

「元々読んじやつた本だからね。」

そうは言つが、それでも一冊一冊丁寧に読んでいたり、時折声を殺した笑い声が聞こえたから、やはり隅々まで目を通しているのだろう。

野菜中心の夕食を済ませ、ヴィヴィアンが大好物だからと言つて食後のデザートにガトーショコラを用意され、紅茶を飲みながら食事の余韻に浸つていると、また窓を雨が叩き出した。

「明日の朝は晴れるといいんだけどね…。」
「そうだ。」

明日ついに、あの詩の秘密が解ける。

翌朝。

待ち合わせを六時頃と決めていたエインとヴィヴィアンは、示し合わせたかのように同時に起床し、同時に部屋を出た。

廊下で出くわすと、エインが声を殺して腹を抱えて笑った。

「行こう。」

エインが小さな小さな声で言つた。

屋敷の者はもう既に何人か起きて仕事をしているようで、時折何かしらの小さな音が聞こえた。

エントランスを出、空を見上げると、東の方に少し雲がかかっていた。

「まずいな……。」

今日は方位角七七度の方角に太陽が昇る。真東よりも少し北側なんだ。」

東の空、やや北側にも薄雲が伸びていた。日の出の妨げにならなければいいが。

しかし、一方で雲は結構な速度で南へ向かつて動いてもいた。
「あの速さだと、それなりに強い風が吹いてるだろ？。ぎりぎり、雲が散つてくれればいいんだけど。

取り敢えずは『図書館』に行こう。」

そう言って、エインは『図書館』へ向かった。扉を開ける時、「あ、鍵掛けんの忘れてたよ。」などと呟いたが、そんな事などどうでもいいかのように扉を開け、脇にあつたオイルランプに火を灯した。

『図書館』は相変わらず真つ暗で、ランプ一つでは殆ど役に立たない。それでも、何度も入った場所だ、足の運び方などは体が覚えていた。

エインは階段を下り、右手へ曲がった。そして東の『エエエ』の

棚を通り過ぎ、隣の『エエ』の棚の前で止まった。

近くにあつた脚立を登り、二段目に重ねた本棚の一、二段目から一冊、書物を抜き取る。窓があるようで、後ろからほんのりとした光が溢れた。エインは脚立を下りて、ヴィヴィアンに書物を手渡した。

『Je vous aime.』

『愛している』という意味のフランス語を刻んだ書物は、この『図書館』に何冊もあつた。その中で、一番最初に光を取り込む正解の窓があるのが、北東を背に立っている『エエ』の本棚にあつた、この書物なのだった。

「さて、一先ず後は、光が差すのを待つだけ…。」

『じそじそ』とスラックスのポケットから懐中時計を取り出すと、『あと十分か。』と呟いた。

ヴィヴィアンは、数日前にこの『図書館』で見た単語を順繰りに思い出していた。

『春分点』。『太陽』。『月』。『窓の隙間の光』。

そういえば、一つ何も使用していない事に今更気付いた。

「教授？」

「ん？」

『春分点』というヒントは、どこで使うのですか？

「ああ、あれはね、この”後”なんだ。」

「後？」

「そう。軽いひっかけだね。」

エインはそう言って、脚立に座った。

「この時点での『春分点』を組み込んでしまうと、真っ先に狂うのは実施日になる。そうすると、少なく見積もつてもその先数カ月は、今日みたいな日は訪れない。

それに…。」

エインがヴィヴィアンに手を差し出した。本を寄越せと言つ事だらう。ヴィヴィアンは渡されていた書物をエインに返した。

エインはそれをパラパラと捲りながら、

「あの『春分点』に関するでは、きちんととしたタイミングが必要なこの段階では余りに曖昧すぎる。」

と言つて、ヴィヴィアンにこやつと笑つて、開いていた書物をヴィヴィアンに見せた。

そのページには、”おめでとう、エイン！ ベルトワーズより”というメモと、ある一文にだけ線が引いてあった。よくよく見ると英文なので読んでみると、『彼女に告げようにも、今考えた言葉はきちんととしたタイミングが必要なこの段階では余りに曖昧すぎた。』と書いてある。しかも、ページの隅に書かれた章のタイトルには『春分点』とあるではないか。

ヴィヴィアンが眉を顰めると、エインは少少嘲笑氣味に鼻で笑つて、

「意地悪いだろ？ 伯爵はなるべくボクに秘密を解かせたくないんだ。」

と言つて、ぽんと音を立てて書物を閉じた。

「そろそろだな。猶予は五分も無いから、先に説明してしまおうね。

光は恐らく、先ずこの真正面にある変な枝が持つてる槍の先に当たつて反射する筈だ。あの槍の先は光の角度から三十度北に向いている。しかも斜め上に傾斜までついている。だから次に光が差すのは、あれだ。」

と言つて、エインが北北東の方角の天井付近を指さした。そこには、天井から吊るされた、これまた妙な形のオブジェがあった。少し光つてゐるので、恐らく銀か何かで出来てゐるのだろう。

「昨日、ボクが磨いておいたの。埃被つてね……。」

ケロリとエインが言い、説明を続ける。

「その後なんだが、どうやらこのあいだ予想したみたいに『Je vous aime.』を順々に辿つて行く訳では、ないようなんだ。あればボクの早合点だつた、と思う。」

そう言つて、エインはヴィヴィアンに脚立に登るよう言つた。そつは言つて、エインはヴィヴィアンに脚立に登るよう言つた。そ

ンが座つたままの脚立を登ると、エインは腰を上げてヴィヴィアンと視線の高さを揃え、ある本棚を指さした。

そこには、棚上に積まれた書物に隠れて、手鏡ほどの大きさの鏡が置かれていた。鏡には脚が付いていて、上下に首を振れるようになっていた。鏡は少し下を向いている。

「あの鏡に反射した光は、本棚スレスレに北西へ向かう。そして北西の女神像の胸元に当たつた光は、本棚の僅かな隙間を縫つて、直進する。」

『図書館』に来た初日にしか意識をして見なかつた女神像の胸元には、クリスタルが埋め込まれていた。そのクリスタルは微妙な角度で削られていた。まるでこの謎のために作られたかのように、女神は月を天高く掲げている。

「行こうか。」

エインが脚立を下り、光の終点と思われる場所へ向かつて歩き出した。

北西の真正面。それはすなわち、南東にある入口の真下だ。ヴィヴィアンも後を追うために脚立を一步下つた。

その時、すっと光が顔を掠めた。

振り向くと、細い細い光が、エインが抜いた書籍の隙間から差し込んでいた。

日の出だ。

光はエインが今し方説明したばかりの順を正確に辿り、折り曲がりながらも決して交差する事無く、エインがたどり着いた南東の本棚の、一冊の書籍にぶつかつた。

急いでヴィヴィアンが向かうと、エインが光の指す書籍を抜き取る。そして、近くにあるランプに灯りを灯すと、書籍を照らした。

『月と太陽の物語 ペガスス・著』…。

「これはね、ベルトワーズ伯爵が『ペガスス』というペンネームで書いた、最期の絵本だよ。」

言いながらエインが書籍を抜き取ると、近くでかちりと音がした。

「ふむ……。」

エインは鼻を鳴らしながら顎を撫でた。そして突然、抜いた書籍の間を覗き込んで、妙な表情を浮かべた。

「動くのかな?」

咳きながら本棚を押すと、見た目の重さよりずっとスムーズに本棚が奥へ引っ込んだので、エインは本棚の足元にしゃがみ込んだ。ランプを翳すと、細い溝があり、本棚には車輪が付いていた。溝はさらに、左に折れ曲がっている。

「まだ動きそうですね。」

ヴィヴィアンが言つと、「うん。」と返事をして、エインが本棚を左へ動かす。

すると、本棚の奥に空間が現れた。

そこには、薄っぺらく叩きのばした鉄のよつた素材で出来た、無数の穴の開いた球体があつた。球体の下は若干大きめの穴が開き、その下にはランプが置いてある。球体自体は四本の脚が付いていて、床にしつかり固定されている。

エインは手にしていたランプを遠ざけると、球体の下のランプを点けた。ランプの灯りは球体の穴から溢れ、壁、天井、本棚……、そこかしこに光の点を映した。その様子は、宛らプラネタリウムのようだつた。

エインはランプを灯した後、動作を一切止めてしまった。床に胡坐を搔いて座り、頬杖を突いて呆つとしている。まさか、これで終わりではあるまいなどヴィヴィアンが思つていて、エインがヴィヴィアンを手招きした。

並んで座る様にという仕草のようだったので、ヴィヴィアンはエインの隣に座つた。

「『春分点』。」

春分点とは、南から北へ通る黄道と天の赤道が交わる点を言い、黄道座標の原点で、これは地球の歳差によって西向きに移動する。地球の軸と言うのは少し斜めに傾いていて、すり鉢状を描くようにな

回転している。これを歳差運動と言つて、地軸が地球の公転面に垂直な方向にある、黄道北極と黄道南極と言つて點を中心に円を描いているように見える。この円上に於いて、地球の地軸と天球が交わる点が天の北極とか天の南極と言つていて、この天の北極に向かって窄んで行く延長線を持つてゐる星座がある。

それが、伯爵のペンネームでもあるペガスス座。

このペガスス座には、ギリシャ神話で面白い喻えがあつてね。

ペガスス座は 星マルカブ、 星シュアト、 星アルゲニブ、 アンドロメダ座の 星アルフェラツツという四つの星によるやや上辺が窄まつた台形のような四辺形をしてゐるんだけど、ギリシャ神話ではこの四辺形を神が天から地上を覗き込む窓と、そして、この四辺形の内部にある星を、窓を覗く神の目と呼んだ。

ちなみに、このペガススの南にはうお座がある。うお座は一匹の魚を紐で繋いだ形をしていて、西側の魚の胴体を象るアステリズムを、イギリスでは『サークレット』と呼んでたりする。

このあいだも話したけれど、今、春分点があるのもうお座だが、正確に言つと、ペガスス座とうお座のもう少し下にある。

関係ない話になるが、うお座はギリシャ神話にある、アフロディーテとエロスがテュポンから逃げる時に魚になつたという話が元になつてゐるとされているが、実は古来メソポタミア文明に由来する星座で、ギリシャ神話では明確には語られていない。

メソポタミアは旧約聖書と深く関わる土地という指摘もあつて、エデンの園はメソポタミアの都市を、バベルの塔はジックラトを、ノアの洪水は、多くの川で囲われたメソポタミアの土地で頻繁に起つていた、川の氾濫による洪水を元にした逸話だと言う説もある。だから伯爵は、このヒントを『カインとアベル』に書いたんだろうね。そしてカインは嘘吐きだから、日のタイミングを『春分点』を含めて考えると見当違ひの結果が出てしまつゝと。

話し終わるなり、エインは「さて。」と言つて、両腕を後ろに突いて天井を見上げた。

「「」の光の星の中に、ペガスス座がある筈だ。

さつきも言つたように、ペガスス座は少し歪んだ四辺形のアステリズムを持っている。」

『図書館』中に映し出された星星は、ランプの炎が揺れるたびに瞬き、『図書館』をあつという間に宇宙にしてしまった。

細かな点から溢れる星は、一見無秩序に見えて、きちんと正しい位置あつた。

まるで高山で夜空を見上げるが如く、二人は無言で星空を見上げる。

やがて、ヴィヴィアンが何かに気付いた。

「教授。」

エインを呼び、階段横にある本棚を指す。

「あれでは……。」

ヴィヴィアンが指した本棚の脇には、隣の本棚との間に少し隙間が開いていて、後ろの壁が見えている。そこに、大きな星が四つ映っていた。四つの星の下には、本棚が邪魔をして映る場所が微妙にずれて判り難いが、歪な円を描く星が映っている。その下、ちょうど本棚で隠すように、オイルランプが置いてあつた。エインもヴィヴィアンもこのランプには気付かず、今まで火を一度も入れた事がない。

「間違いなさそうだね。」

エインはそう言つて立ち上がると、ランプに近付いた。よく見ると、ランプの内側に細い細い紐のような物が通されていて、その紐は何かに引っ張られているようにピンと張つてている。辿つてみると、丁度、ペガススの四辺形の辺りの壁に埋め込まれていた。エインが引っ張つてみたが、紐は抜けなかつた。

「今、春分点はちょうどこの辺りの位置にある。」

言いながら、エインがランプに火を入れると、ランプの炎が紐を焼き切つた。

一分された下の紐はだらりと落ちていき、上の紐を辿つて炎が登

つていく。

そして、炎が壁に触れたとき、壁が青白い強烈な光を放つた。

「！」

慌てて視界を覆うが間に合わず、暫し目が眩んだ。
目を覆う時、何か鋭いものに引っ掛け、エインは右の肘辺りを傷めた。

焼き付きの残る視界で光った辺りを見ると、壁には煙を立てながら網を張るように埋め込まれた、黒く細い何かがあった。エインは黒い何かを剥がし、指先ですり潰した。それはさらさらともざらざらとも似付かぬ感触を指先に残し、粉々になつて床に崩れていった。
「マグネシウム…違うな、アルミニウムかな。マグネシウムでいいのか。」

何やら眩いで、エインが発光と発熱によつてボロボロになつた壁を、少し強引に崩した。発光した部分だけが周りの壁とは違つ素材で封をされていたようで、壁は簡単に崩れた。

そして、網の向こうに片手を入れて精一杯なほどに小さな穴が現れた。

エインが穴に手を入れると、手のひらに何かが触れた。
掴んで引き摺り出すと、それは封筒だった。

「手紙…ですね…。」

ヴィヴィアンが言つてエインを見ると、エインの顔には普段から浮かべっぱなしの笑顔がなく、鋭い目つきで手紙を見つめていた。
エインは暫く手紙を凝視した後、それを尻のポケットに仕舞い、階段へ歩いて行つた。

「行こう。この手紙が、あの詩の答えだ。」

屋敷に戻るなり、エインは自室に籠つてしまつた。
手紙を読んでいるのだろうが、ヴィヴィアンにはエインの態度が

気になった。

例えるなら、田舎てのものが出て来なかつた時のような、不満げな態度というような。

昼を迎え、大広間に行くと、食事を運んで来たクリーブスが言った。

「教授は召し上がらないようですので。お嬢様もお休みですから、お独りのお食事になつてしまいますが、ごゆっくり。」

ヴィヴィアンの椅子を引き、手際よく食事を並べ、クリーブスは足早に大広間を去つた。残されたヴィヴィアンは、胸の内に燐る疑問を食事とともに飲み込み、ソファに音を立てて座ると、背に凭れて田を閉じた。

気分が晴れないでの、散歩をする事にする。
そうだ、思い出した。

北の森に行こう。

そう思い立つて屋敷を出ると、真っ直ぐに北の森に向かった。
花が咲き乱れ、小川がせせらべあの庭へ行けば、気分も晴れるかも知れない。

小路はいつも通り小石がじろじろとしていて歩き難い。
森までは歩いて十分くらいだ。

時間はたつぱりあるので、ゆっくり歩く事にした。

時々空を見上げると、薄霧雲のかかった少しぼやけた青空が広が
っている。

風には少し潮が混じつていて、初夏が近いからか、少し生温い。
この道を歩くのは、何度もだけ。ふと思い記憶を辿るが、どれ
がどの記憶が不明瞭で、すぐ止めた。

歩いた過去の記憶はみな、”間に合わなかつた記憶”だ。

記憶から消し去りたい”過去”だ。

気が重くなり、慌てて頭を振ると、再び青空を見上げ、小さく溜
め息を吐いた。

夢を見て、目を醒ました。

悪い夢だ。何度も見る、悪い夢。

何度も何度も、あの人の倒れた躰を抱き起こす夢。

夢…？

夢ではない、あれは、”過去”だ。

そしてその”過去”に脅える自分が、自身に見せていく悪夢だ。

繰り返したくない。もう一度と。

そう思つて、何度、泣き崩れた事だろう。

部屋の空氣が重く、廊下に出ると、執事のクリーブスと出くわした。

「北の森に向かうのを見ましたが。」

と言われ、心臓が物凄い速さで鼓動を打つ。

駄目だ、行つてはいけない。

屋敷を駆け出し、森へ向かう。

あの森へ行つてはいけない。

また、また間に合わなくなつてしまつ。

もう一度と、泣くのは嫌だ。

深々と生い茂る雑草と生きを踏み潰して、植木の隙間を抜けると、湖が見える。

相変わらず美しい湖だ。

長い間手入れをしていないのに、何度も見ても美しい湖畔だ。

湖の畔にかかる小さな桜橋にしゃがんで、湖を覗く。

風が吹き、音がした。

ザザザ…。

草を擦る音が聞こえた。

ザザザ…。

誰かが歩いているのか、風の音なのか。

そんな事は、どうでもいいか。

立ち上がり、振り返ると、視界に黒い人影が映つた。

驚いて目を見張る間もなく、影は真っ直ぐに突進してくる。

脇に光が見え、寸でのところで避けると、素早く踵を返した影が

光を目に向けて突き出して來た。

それも仰け反つて避けると、反動で振り上げた右腕が影の腕に当たつた。肘のあたりが、痛んだ。

光がカシャリと音を立てて落ちた。

ボトン…。

少し重たい水の音がした。光が落ちたのだろうか。

確かめる余裕などなく、影との間を空けるため、一度背を向けた、

その時。

走らなければ。

手遅れに、手遅れにならないうちに…。

間に合わなければ。

間に合わなければ、また…。

森に入り、ザクザクと茂生を踏み潰す足音に紛れて、ドンと音がした。

これは、銃の音だ。

ドン。

一回…。

無事で、無事でいてくれ。

茂みを潜る。

細い枝が肌を引っかく。

痛い…。

茂みを抜けると小さな庭に出る。

確かこの庭を横切つて…。

恐ろしいほどに花の咲き乱れるこの庭を横切つて…。

茂みの向こうに、湖が…。

湖が見える…。

その湖の畔に…。

深い樹木に囲まれた、小さな湖の畔に…。

足が縛れる。

でも走らなければ。

再び茂みを潜る。

右の肘が痛い。

夢中で手で搔き分けた茂みの先が、拓けた。

やつとの思いで茂みを搔き分け這い出た先には、何度も何度も見たあの湖があつた。

その湖の畔の草に紛れて、深緑色の何かが風に揺れた。

「…ヴィヴィ…！」

エインは駆け寄ると、そこにはヴィヴィアンが苦痛に顔を歪め、倒れていた。見れば右脇腹に、少し血が滲んでいる。

「ヴィヴィ…！」

またか…、また間に合わなかつたのか…！

そう思い、首筋に指を添えると、微かにだが脈打つ感覚を捕らえた。

生きている…。

エインは唇を噛み千切りかねないほどに強く噛み、ヴィヴィアンの躰を抱き起こすと、湖の先にある屋敷へ向かって歩き出した。屋敷に鍵はかかっていない。

手入れをしていないとは言うが、クリーブスが密かにたまにやつて来ては、埃を払っているのを知っている。

エインは一階の奥にあるゲストルームを開け、置いてある大きなベッドにヴィヴィアンを寝かせた。

そして後先も考えず血の滲む脇腹付近のドレスの布を引き千切ると、傷の様子を確かめる。

出血量にすぐわざ、傷は若干深いが擦り傷のようで、命に別状はないと思えた。

エインはぐつたりとベッドに座り込み、眼鏡を無造作に外して項垂れた。

不意に武者震いをする。ぐつしょりと汗を搔いたシャツが体に纏わりついて、熱を奪つて行つていた。

今になつてこめかみを伝う汗を袖で拭い、ゆつくりビヴィヴィアンを振り返る。

痛みの余り氣絶したのだらう。銃の音がしたから、恐らく傷は弾が擦れて出来たのだらう。

エインはヴィヴィアンの頬に手を伸ばし……しかし手のひらを見ると汚れていたので、手を引いた。

そして老人のよう立上ると、クリーブスを呼ぶため、ベルトワーズ邸へ向かつた。

邸に着くと、偶然にもアンの診察に訪れていた医者と、それを見送るクリーブスがいた。

「クリーブス！」

名を呼びながら走つて来るエインの様子に只ならぬ状況を察したクリーブスは、医者に着いて来てくれるよう頼んだ。

医者も雰囲気は感じ取つたよつて、一つ頷いて走つて来るエインを見た。

事情を話し、森へ向かつ。

クリーブスはメイドに所用と言付けをしなければならないと言つて、後から向かうと言つた。

道中、状況だけを説明し、早足で森の屋敷へ向かつ。

茂みを抜け、湖を通り過ぎ、庭に出る。

いつの間にか若干の赤みを帯びて来た空の色を受けてか、花々の色は少し薄く見えた。

鍵の開いた扉を開け、ゲストルームのドアを開ける。

医者はそこに横たわるヴィヴィアンに駆け寄ると、脈と体温を測り始めた。

「安定していますね。」

一言だけ言って、いそいそと診療カバンを開けた。

「これから服を脱がさねばなりません。お部屋の外へ。」

エインは頷いて、部屋を出た。

この建物はゲストルームと大広間、主用の大きなダブルベッドを置いた部屋が二つと、シングルベッドを置いた小さな部屋が三つほどある。それ以外はキッチンであつたり、荷物部屋である。身の置き場所を悩んだ末、エインは大広間にいる事にした。

そこへ、クリーブスがやつて来た。クリーブスは後ろにメイドを二人ほど従えていた。

「ゲストルームに寝かせています。」

クリーブスに言つと、彼は頷いてメイドに医者の手伝いをするよう言つた。メイドは直ちに向かい、クリーブスはキッチンへ向かつた。

それを見送り、大広間に入ると、一寸も痛んでいない大きなソファに崩れるように座つた。

眼鏡を外し、脇のテーブルに置く。崩れるように肘掛けに凭れて、視界を手で覆う。

長く重い溜め息を吐くと、全身の力が抜けた。

安堵と、自責と…。そして久しぶりに走つたせいか、氣力の総てが抜け落ちてしまった。

「お使いください。」

突然、目の前でクリーブスの声がした。

氣だるく見上げると、クリーブスが湯気の立つ布をエインに差し

出して いた。

「… ありがと…。」

のそ そのそと起き上 がり、布を手に取つた。じんわりと温かい布の熱が、手のひらを伝つて体全体に広がる。

「ゲス トルームにありますので、何かありましたら。」

そう言つて、クリーブスは立ち去つた。

早々にいなくなつてくれた事に、エインは感謝した。今は誰とも口を利きたくなかった。

汗と埃でべたべたになつた顔を、布で拭いた。顔から布を離すと、ひんやりと冷たい風が顔を包む。

布が少し汚れたので、折り畳み直して、今度は手のひらと腕を軽く拭き、布はテーブルの上に投げ置いた。

再びソファの肘掛に凭れると、尻のポケットで、くしゃくしゃと紙の音がした。

そういう えば、今朝見付けた手紙を、ポケットに入れ放しにしていたのだった。

エインはポケットから手紙を取り出した。

癪だつたので、封も切らずにポケットに捻じ込んだ手紙は、しわしわになつていた。

裏を返すと、薄く小さな封蠅がしてあつた。丁寧に外して封を開け、便箋を取り出すと、エインは封筒をテーブルに投げ、ソファのもう片方の肘掛に膝をかけるようにして横に座り、読み始めた。

手紙は、予想より遙かに長く綴られ、”期待はずれだつたもの”の割りに興味深い内容であつたために、クリーブスが声をかけるまで夢中になつて読んでしまつていた。

「お世を悪くなさいますよ。」

クリーブスは言いながら、蠅燭を立てた蜀台をテーブルに置いた。

すっかり夜になり、室内は真っ暗闇だつた。

手紙はあと数行残すところまで読み進めていたが、一先ず読むのをやめた。

「生憎、ランプのオイルを失念しておりまして…。」

申し訳なさそうに言つて、クリーブスが謝つた。

「いえ。すみません、ご迷惑をおかけして。」

エインは姿勢を正した。

「ご無事で何よりでした。」

当たり前の事だが、クリーブスは自分の事など一の次二の次などで、そんな事より、とも言つたのように言つた。

「クリーブスさん、相談が。」

「はい。お召し物の事でござりますね？」

見上げるエインにこりと笑つて、クリーブスが言つた。

「心配は不要にござりますよ、教授。」

トーマス様は細い方ですが、流石にお嬢様のお召し物は難しいでしょから、奥様がお召しになっていたドレスを何着か持つてまいりました。

着て帰られても問題ない物と言われておりますので、ご自由にお使いください。」

「有難うござります…。」

つづづく手回しの良いクリーブスに頭が上がらない思いだつた。

「今夜はどうなさいますか？ お屋敷へお戻りになりますか？

私は、今晚はこちらにおります。メイドも一人泊まる予定でありますので、トーマス様の身の回りの心配はございませんが…。」

「それでもご心配でしょう。」と言つクリーブスに、エインが苦笑した。

朝、手紙を見つけてから二三までで、やつと今日初めて笑つた気がする。

「教授がお泊りになる準備もしておりますので、お好きになさつて下さい。」

食事はもうそろそろ、従者が屋敷から運んで来る頃ですよ。クリーブスはそう言つて、「ちよつとゲストルームを見て参ります」と去つて行つた。

一人になって、一本だけ立つ蠅燭の炎を眺める。そして、再び手紙を手にし、最後の数行を読む。

運命は変えではならない。

運命は委ねるものだ、エイン。

だが私は、君の心も十分理解している。

この手紙が、君の心の傷を少しでも癒せる事を、祈つている。

アルネスト・ベルトワーズ

読み終わり、改めてぐつたりとする。

手紙は、”期待はずれだつたもの”ではあつたが、それを半分ほど満たしてくれる内容でもあつた。

暗闇の中、仄かな灯りを瞼に焼き付けて、そつと目を閉じる。こんな夜を迎えるのは、初めてだ。

ふと思い、はつとする。

希望は、叶えられ掛けているかも知れない。

『運命は、変えられない。』

誰の言葉だつただろうか。恐らく無名の、哲学者の言葉だつたに違ひない。

無名には無名の理由がある。この旅を始めてからすぐには、そう思つたものだ。だが同時に、今までずっと失敗をして來た。

『運命は、変えられない。』

確かにそうかも知れない。否、今までだつてそう思わなかつた事はない。

だが、抗う余地があるのなら、取り戻したいものもある。
思い出してしまった恐怖。絶望。悲しみ。孤独。。

長い事、答えを探して来た。これがどうしても変わらぬ答えなら、
受け入れなければならない。

だが、それもこれが最期だ。

どういう結論が待つても、受け入れなければならない。

そして、旅も終えなければならない…。

屋敷からメイドが運んで来た、少し冷めてしまった食事が、大広間のテーブルに並んだ。

ヴィヴィアンはまだ目を醒まさず、クリーブスは医者を屋敷へ送ると出て行つてしまい、仕方なく独りで食事をする。

屋敷の備えが偶然足りておらず、ランプ用のオイルが工面出来なかつたと言つて、クリーブスは蠅燭をもう一本足してくれたが、それでも夜の闇には勝てず、暗い中の食事になつた。

こちらの屋敷を出る前に、医者が傷の様子だけ教えてくれた。出血の度合いほど傷は深くなく、多少の火傷が見られるから、割と近い距離で銃によつて撃たれた事は明確だろうが、擦れただけなので、心配はしなくてよい、という事だつた。

胸を撫で下ろすとともに、どつと疲れが出た。

だから食事も、色々な事が重なつて疲れている体を考えて作つてくれたのだと言う事はよくわかるメニューであつたが、あまり積極的に胃には入つていかず、のそのそと食い、なんとか食事を終えた。そして、消化不良でも起こしたようにぐつたりとソファに凭れ、手紙をもう一度読み返す。

全く、嫌味な人だと思う。

この手紙一通、べらりと渡せないものだつただろうか、と。

思いながら、苦笑する。

まあ、いいか、と…。

思い耽りながら、また読み返す。そんなに特別素晴らしい事は書かれていない。だが、何度も読み返さずにはおれない。

ペラペラと手紙を捲つていると、蠅燭の炎が揺れた。

蠅燭の向こうの闇の中に、水色のレースのドレスが現れた。着心地が悪いのか、着慣れないから落ち着かないのか、指先をもぞもぞ動かしながら、もう一步近付いた人影は、ヴィヴィアンだつ

た。

「申し訳ありません、教授……。」

暗闇でいつもより陰影が強く付いた顔には、苦痛に歪む表情が浮かぶ。

傷の痛みもあるだらうが、それ以上に、申し訳ないとこゝ気持ちでいっぱいなのだらう。

説びる必要など、ないのに。

「うん。」

「大丈夫かい」とか「謝る事はないよ」とか、そんな在り来たりな言葉は、相応しくないと思つた。

「……。」

これ以上、この件については何も話す事は、少なくとも今のエインにはなかつた。が、ヴィヴィアンは何か言いあぐねているようで、俯いて、言葉を搜してゐるようだつた。

「……ヴィヴィ。」

エインが呼ぶと、ヴィヴィアンは顔を強張らせてエインを見た。怒られると思ったのかも知れない。

その様子を見て、エインが笑つた。

「生きててくれて、嬉しいよ。」

エインが言つと、ヴィヴィアンは拳を固く握つて、俯いてしまつた。

こゝやかに、優しげに言つエインの言葉に、ヴィヴィアンは闇の中で必死に込み上げて来る何かを堪えていた。拳を握ると、指先がじんと痺る。

様子を悟つたエインが、立ち上がりつて、ヴィヴィアンに近付いた。やはり蠟燭の灯りだけでは、満足にお互いの表情を窺う事は出来ない。エインはヴィヴィアンと正面に向いて立つと、ふと微笑んだ。

「明日の昼頃に、屋敷を出発しよう。

帰りは、ボルドーから船を使う事にするよ。

それから、帰りにちょっとロンドンに寄らう。

優しく笑うエインと、暫し視線を交わらせる。指先の痺れも和らいで、不思議と心鎮まる。

さつきだつて、決して負の感覚によるものではない。悔しさでも情けなさでもなかつた。“護る”ためにいるのに、役に立つていない悔しさは当然ある。不注意ではないとは言え、不甲斐無さの結果だ。

だが、本当の事など知らないエインは、何も聞かず、全てを飲み込んで流してくれる。

そんなエインに甘えていふと言えばそうかも知れない。それでは“護る”には不十分だという事も承知している。

それでも、心は鎮まつてしまつ。

何故かは自分でも良く解らない。

喻えようにも、眞く喻える言葉を持ち合わせていない。しかし、敢えて自分が知つてゐる感情で喻えるなり、一番近いのは、”幸せ”だつた。

「うん…。」

ひつそりと内心漫るヴィヴィアンを見ながら、エインが呟いた。
「温かい紅茶でも出してあげたいところだが、生憎勝手がわからな
い。

クリーブスさんが戻るまで…。」

エインが少し申し訳なさそうに言つうと、ヴィヴィアンの後ろの闇の中から「お目覚めですか。」と声がした。

驚いて、二人揃つて振り向くと、クリーブスがにっこり笑つて立つていた。穏やかな笑顔だが、闇の中では少々不気味だ。

「…『迷惑を、おかげしました…。』

まだ若干驚きつつも、ヴィヴィアンが頭を下げるとき、クリーブスはテーブルに歩み寄り、オイルランプをとんと置きながら言つた。
「とんでもございません。大したお怪我ではなくて安心いたしました。

教授が血色を変えて屋敷へ走つて来た時は、流石の私も驚きました。

たよ。」

そう言つて笑うと、ランプに火を入れた。

「古いランプが一つだけ納屋にございましたので、持つて参りました。」

そしてエインに向き直り、

「明日出発でございましたね？」

と聞いた。

エインは「はい。出来れば」と頷きながら、俯き気味に訊ね返す。

「アンの具合はどうですか？」

「あまり良くありません。」

クリーブスが首を振った。

「どうやら、風邪をこじらせてしまつてゐるようだ。

お医者様のお話では、寝ていればじき良くなると言つた事でしたが、教授やトーマス様のお帰りも近いのでお氣を落とされておりまして、少し消極的になられていて、心配をしております……。」

エインは少し困惑したようで、「そつですか……。」と声のトーンを落とした。

元々体が弱いから、少しでも体調を崩せば大事にもなるだろ。エインとヴィヴィアンという元々の来客を迎えるも浮付いた状況で、でも体が儘ならないというのはどれほどの苦痛だらうかと思つ。

ヴィヴィアンは、昨夜のアンの寝室での出来事を思い出した。

あの時は、アンの全身から溢れる憎悪のよつなものに、恐怖や驚きなどとは比べ物にならない何か得体の知れない不安を感じ、アンとは顔を合わせたくないと思つたのだった。

しかし同時に、境遇を知れば知るほど、蔑ろにする事への罪悪感は大きくなる。

エインは、アンとの婚姻を拒みこすれ、アンの傍にいる事それ自体は拒む氣はないように見える。

それが、アンが感情を断ち切る事を阻んでいるのではないかと思える。

一步退いた闇の中でエインとクリーブスのやり取りを眺めてそんな事を考えていたヴィヴィアンを、クリーブスが見た。

田を細めてゆつたりとした微笑みを浮かべながら、ヴィヴィアンの足元から頭上までを見たクリーブスは、うんうんと頷きながら、「よくお似合いですよ。亡き奥様を思い出されます。でも少し大きかったでしょうか。」と言つた。

ヴィヴィアンの着ている水色のドレスは、クリーブスがエインに言つたようにベルトワーズ伯爵の妻マリエレンのものだつたが、ヴィヴィアンには少し大きいようだつた。

袖はブカブカとするほど余裕があり、身頃もコルセットで胴体を締め上げて細く見せ着るドレスなのに、コルセットを着けていないヴィヴィアンには、全くきつくない。

が、そのような事は関係なく…。

「すみません、お借りしてしまつて…。」

「いえいえ。

お嬢様は奥様のお召し物はお使いになりませんし、ずっと部屋に眠つたままになつておりました。

そのドレスは奥様がお屋敷に嫁いで来られた十五年目の日に、旦那様が高名な縫製師を招き寄せて作らせた特注品でござります。レースもパリ市内から特別に取り寄せたものですから、とても良いもの。それを美しく着て頂けるのは、私ども従者にとつても嬉しい事でござりますよ。

今、トーマス様のお召し物は修繕をしております。明日の出発までには直りますが、そのドレスでお帰りになるのも構いません。「でも…。」

クリーブスの言葉に、ヴィヴィアンが少し声を大きくした。そう言つたものを、安易に受け取る訳に行かないだろうと思つた。

「これは、アンのお母様の大事な形見でしおうから、置いて行きます。

色々と有難うござります。」

「そうですか。戻りました。」

恐縮する、ヴィヴィアンに、クリーブスはさらに微笑んで、思い出したように「ああ」と言った。

「そろそろお休みになられた方がよい時間ではございませんか？」

まだ起きていらっしゃるようなら、紅茶をお淹れいたしますが。」

「紅茶を頂こうかな。ボクはまだ起きているし。ヴィヴィはどうする？」

エインに訊ねられ、ヴィヴィアンは少し考えて、一つ頷いた。

「氣絶とは言え、今まで寝ていたので余り眠くなかった。」

「じゃあ、一人分、お願ひします。」

「畏りました。」

クリーブスは一礼すると、早々に奥へと消えた。

改めて一人となつた大広間は、ランプによる灯りが灯つた事で、心持ち広くなつた。

喻え難い空白のようなものを感じ、どのソファに座つたらいいか、迷う。

突つ立つたままのヴィヴィアンに、エインが一つのソファを指さした。それはエインが座つていたソファと窓辺で向かい合つもので、どうやら、元から庭を一人で臨むために置かれているようだつた。ソファに腰かけ、夜の庭を見る。

木々と花花は闇に紛れ、窓から微かに漏れる灯りに、存在だけを浮かばせる。

ふと、脇腹が気になつた。傷が塞がり始めたのか、痛痒い感じが不快だつた。長らく感じていらない痛みだ。

ヴィヴィアンの様子を見て、向かいに座つたエインが訊ねた。

「無理をしない方がいいからね。」

「はい。有り難うございます。」

紅茶を頂いて、少ししたら、休ませていただきます。」

「うん。」

エインは笑つて、庭を見た。ヴィヴィアンも、庭に視線を戻す。暫し一人で、無言で庭を眺める。目が慣れて来たのか、月明かりも加わって、庭の様子が少し鮮明に見えはじめる。

そこへクリーブスが戻つて来た。

「これで、キッチンの火は落とさせて頂きます。

一杯ほどは、お召し上がりになれますよ。」

手にしていた紅茶のセットを乗せたプレートを一旦テーブルに置き、紅茶をカップに注いで、ソファの近くに小さな台を持つて来たと、カップをそこへ置く。

「私は一度屋敷へ戻ります。また戻つては参りますが何時頃になるかは判りませんので、お急ぎの御用があれば今のうちに。」

クリーブスが言うと、エインがヴィヴィアンを見た。ヴィヴィアンが小さく首を振ると、エインはクリーブスを見上げ、「大丈夫ですよ。」と言つた。

「畏りました。

それでは、お休みなさいませ。」

「お休み。

「お休みなさい。」

二人に見送られ、クリーブスは出て行つた。二人は、庭を横切る彼の後ろ姿を見えなくなるまで見つめた後、紅茶を啜つてまた無言になつた。

エインは脚を組んで、肘掛けに頬杖を突いてだらけた。

「『図書館』で見つけた手紙はね…。」

ヴィヴィアンが黙つてエインに視線を移す。エインは庭を見つめたまま続けた。表情には、ほんのり微笑みが浮かぶ。「ボクが欲しかったものではなかつたんだ。

数日掛けて頭を使って、その結果が望んでいなかつた物だつたといつたのは、中々堪えるが。

いつだつて、氏はそうだつたと、見つけた手紙を読みながら思つたよ。

氏はボクが何を知つてゐるか、常に問いを寄越して來た。ボクがそれに答えると、次、次とどんどん問い合わせて来る。

そして、最後に言うんだ。

『エイン。キミの悪い癖は”諦める”と言つ事を知らない事だ』つて。

仕方がない、と悟る事で見えてくる幸福があるんだそうだ。ボクもそれは承知しているけど、氏曰く、それは”つもり”なだけなんだそうだよ。

手に入れる事の出来ない、仮ならない現実がある事を悟るべきだと、ボクにいつも言つていた。

そんな氏を、ボクは時折、疎ましくも思つていた。アンとの婚姻を『決まり』と言つた時も。あの『遺書』も。人としては、ボクは氏以上に尊敬する人はいないし、頼りにしている人もいない。本当に大切な人だが、その反面、決してマイナス面の感情を持たなかつた訳ではない。

だから、”見返してやりたいんだ”。

『運命は変わるんだ』とね…。

言い終わつたエインの顔からは、いつの間にか微笑みは消え、少し翳になつた瞳が月明かりを反射して鋭く光つていた。

選んだ言葉よりもう少しだけ、ベルトワーズへの”反抗心”は強いのかも知れないと、ヴィヴィアンは思った。

だが、ヴィヴィアン自身としては、エインに同意しない訳に行かない事情がある。

自身も、『決まり』からの開放を求めているからだ。

「私も…。」

小さな声で呟くヴィヴィアンに、エインが振り向いた。

「私も、そう思つています。」

それを願つてここまで來た。そうだと信じてここまで來た。

エインを真つ直ぐ見つめるヴィヴィアンに、「有り難う。」とHインが笑つた。

護るべき者を見つけ、その人を護るための、護り続けるための『決まり』に反した道を探り続けて来た。

その旅が今度こそ終わりであればいいと、願いながら。

今度こそ、終わって欲しい…。

翌朝。

昨夜は他愛もない事を少し話し込んで、そのまま眠った。朝起きると、ベッドの脇に修繕された深緑色のドレスが掛けられていて、ヴィヴィアンはいつも通りそれを着る。

丁寧に修繕してくれたようで、破れた痕や血は残つておらず、新品のようだった。

起きる時間が早かつたのか、大広間に出ても誰もいなかつた。エインはまだ寝ているのだろうか。そう思いながらテーブルを見ると、紅茶のカップは綺麗に片付けられていた。クリーブスが戻つてから片付けたのだろう。そして、カップの代わりに、一冊の書物が置いてあつた。

手に取ると、『月と太陽の物語』と書かれていた。昨日『図書館』で見つけた、ベルトワーズが書き記した書籍だと言つていたか。

ヴィヴィアンはソファに腰かけ、丁寧にページを捲つた。中には、文字とともに纖細な絵が描かれていた。

月と太陽の物語

太陽に照らされる事でしか輝く事が出来ない月は、自らを哀れみました。

おのれの力で美しく輝きたいと願う月。
でも輝けません。

やがて月は、自らを卑しい存在と思い始めます。
光を乞うだけの存在であると。

月は恥ずかしくなつて、その姿を徐々に隠してしまいました。
ついに太陽の光が当たらなくなり、月の姿も消えてしまつたあ
る日。

太陽が喰きました。

「ああ、あなたの姿を見るのが、私の最高の喜びなのに。
私が照らす事で、あなたが美しく輝くなら、私は幾らでも光り
輝くのに。」

例え対の別れとなる、この身の滅ぶほど光が必要になつても。
あなたが輝くなら、私も輝くのに。」

月は太陽の言葉に、また姿を見せ始めます。

「本当ですか？」

「私のために輝いているのですか？」

ならば、あなたの光で輝けるように、この身を晒しましょう。

月と太陽は暫し、見つめ合ひ、想い合ひののです。

しかしまた、月は自らを蔑むのです。

「ああ、私は何故、自ら輝けないのか。」

私は何故、あなたを照らせないのか……と。

それでも太陽は月を照らしたいと、何度も何度も想いを伝える
のです。

あなたの姿が見たいのだ、と。

「旦那様の著書で『ござりますね』」

読み終わるタイミングを見計らつてか、ちょうどよい頃合にクリーブスが声をかけてきた。

「素敵なお本ですね……。」

ヴィヴィアンが言つて、クリーブスはこいつと笑つて「ありがとうございます」と言つた。

「胸を悪くされましてからは、ずっと『趣味だった旅をやめて、書を認める事に熱中してあります』。

時折余りに夢中になられるもので、息抜きをお奨めして散歩に出ますと、道中、私に言つのです。

『私の本は、一冊一冊が誰かのために書かれているのだ。だからその本を手にすれば、これは自分のものだと必ず判るのだ。』と。旦那様は、アンお嬢様と教授を誰の事より心配しておられました。さつと著書の多くは、お嬢様と教授に宛てて、書かれた本なのではと思つておりますよ。』

なるほど。そう言わればそのようにも捉える事が可能だ。

月と太陽のように対照的なエインとアンは、ともに歩めばこの様な事を何度も繰り返すような気がする。

エインは否定をするが、やはりアンの事は気がかりであろう。ここに残り、アンに寄り添う事を拒否する事は、エインにとっては『愛していない』という事ではないのかも知れない。

昨夜、エインから聞いたベルトワーズの言葉を思い出す。

諦める事で、決まりに従う事で、見えてくる幸せがあるので。

そう。運命は変わると信じている一方で、別の道を歩む事で気付く幸せがある事も解つていい。

今までだつて、考えなかつた訳ではない。

「……そうですね……。」

反芻した言葉に納得するようになくとも、クリーブスは自分の言葉

に賛同したと思い込み、にこりと笑つて一礼をし、食事の支度をす
ると、言つて立ち去つた。

クリーブスを見送り、再び書物に目を落とす。

ゆつくり、一枚一枚ページを捲る。

『運命は変わる』と鋭い眼差しで眩いたエインの顔を思い出す。
黄昏で窓の外を見ると、いつの間にか庭にエインがいた。庭の端
に立ち、腰に手を当てながら、植木の向こうに見える海を見つめて
いる。

白いシャツが海風に揺れ、はためいている。眼鏡を外しているの
か、普段とは違う後ろ姿に、ヴィヴィアンは少し困惑する。
エインの周りには、沢山の『運命』がある。
彼は、"どれ"を、変えたいのだろう。

食事を終え、屋敷に戻る事になつた。伯爵の遺言状の謎も解けた
事だし、ここに長居をする理由はなかつたから、荷造りをして出發
するためだ。

屋敷には昨夜の医者が来ており、ヴィヴィアンの傷を再度診てく
れた。医者は、これならすぐに傷も消えてなくなる、と頷き、つい
でにアンの様子を診て帰つて行つた。

アンは相変わらず伏せついて、今朝はベッドから起きられない
どころか、人とも会えない状態だと言つので、エインだけがアンの
部屋を訪れ、少し話をした後、挨拶を済ませて出て來た。

そしてエインとヴィヴィアンは手早く荷物をまとめ、クリーブス
と従者たちに見送られて屋敷を出た。

ここへ来た時と同じように、トンプソンとウインストンが操る馬
車に揺られ、目と鼻の先、ボルドーへ向かう。

昼前なので、まだだいぶ風は冷たく、空も白い。

窓の外には、豆粒ほどに小さくなつてしまつたが、ベルトワーズ

邸が見える。

見送り際のクリーブスの顔を思い出す。

少し、切なそうに笑っていた。

話し込む機会はなかつたが、何故か全てを知つたような、すぐ傍にいてくれるような安らぎを覚える人だつた。従者とは、そうあるべきであろうか。

隣を見ると、エインが鼻歌を歌つて窓の外を眺めていた。鼻歌の旋律とは違つて、横顔は少し哀しそうだ。エインはヴィヴィアンの視線に気付くと、にこりと笑つて尻のポケットから手紙を取り出した。

「『図書館』で見付けた手紙はトリガー。」

「トリガー？」

「あの手紙を見つける事で、本当にボクが受け取るべきこの手紙を得る事が出来る。」

エインが窓辺に頬杖を突いた。

「氏は、『図書館』での手紙を入手出来た時、この”本物の遺書”を渡すよう、アンに預けていた。

アンは、手紙の内容を知らされてはいなかつたが、手紙のある一文だけを本物か偽者かを見極めるための条件として教えられていた。氏がボクに遺した本物の遺書は、コレ。」

そう言って、エインは手紙をヴィヴィアンに差し出した。

「読み給え。」

言われて、ヴィヴィアンは手紙を開けた。

綺麗な封蝋でシーリングされた手紙は、長い年月を経たように茶色く黄ばんで、インクも少し擦れていた。

エイン・アンダーソン。

この手紙を読んでいると言う事は、私は死んでいて、あの手紙を手に入れたという事なのだろう。

つぐづぐ、君の想像力と勘には、溜め息が出る。

アンにこの手紙を託したのは、私の最期の抵抗だ。そして、私の最大の願いでもある。

繰り返し言つて来た我が娘との婚姻を、君はどうしても受けないだろう。

だが、君の夢のために、この屋敷は必要になるであろうと思つ。だから、君をまずアンの代理人とする事に決めた。そしてアンが亡くなつた暁には、あの屋敷の後継人が君であるよう手続きをした。それまでは、財の一切をアンに委ねる。

屋敷、土地、人間、ボルドーのあの地にある全てのものが、アンが死ぬまでアンのものである事を、ここに記す。

君の手に入るのは、アンが遺した全てのものだ。

もしかすると、それら一切は債権になつてゐる事だつてあるかも知れない。私の娘に限つて、そのような事はないだろうが…。

アンが死んだ時は、君はアンを弔い、私の墓の隣に埋めてくれ。そして、時折あの海辺の屋敷を訪れ、太陽と月とで並び、居間で私たちを思い出して欲しい。

アルネスト・ベルトワーズ

手紙の最後には、ベルトワーズの名と、アンの名、そして、この遺書を正式なものとするための、ベルトワーズ家と懇意にしている法律家の名が記されていた。

「何故、こんな回りくどいやり方をするのか、結構腹立つんだけどね。」

エインが鼻で溜め息を吐いた。

「屋敷を渡す事が、目的のようですね…。」

「文面からすると、ね。」

「そのために、婚姻を獎めていたのですね。」

「それはどうなんだつ。」

エインが少し愉快そうに言った。

「あれはあれ、これはこれ、な気もするけどね。

まあ、何はともあれ、これでアンも暫くは安心して暮らせる。」

「…？」

ヴィヴィアンが首を傾げると、エインはふふと笑った。

「アンが氏から受け取った遺書は、本物じゃない。

これを読んだ後に気になつたので、さつき見せて貰つたんだが、確かにベルトワーズ伯が書いたものだが、第三者の書名がなかつた。遺書としては無効だ。」

「… そうだったのですね…。」

「アンは無知ではないが、法律については知る事も少ない。況してや、父親がそんな賭け事のような事をしているとも思つてなかつただろう。

相当驚いていたよ。」

「これを、アンの手元に置いておかなくてよろしいのですか？」

そう言つた事情があるなら、これこそアンが持つていなくてはならないものなのではないのか。

「うん。

ボクが代理人である以上、この書類はボクの手元にあつた方がいい。

クリーブスにも言つてあるから、アンが何かに困つていれば、必ずボクに連絡が来る。」

その時、ボルドーとヒーリンバラという距離では、すぐに駆け付けられないではないか、とは思つが、エインの今までの言動を見ていれば、フランスに身を置く事は何があつても考えられない事なのだろうと思う。

ヴィヴィアンは手紙を元に戻し、ゆっくりエインに返した。

「あとは、これと一緒にアンが預かっていた、法律家への委任状を投函すれば、ボクの仕事は終わり。

そしてそれは、クリーブスがやつてくれる。
「 そういう事で…。」

言いながら、エインが手紙を手にしてポケットに突っ込んだ。

「 ちょっと、ボルドーで美味しいワインを入手しつつ、旧友に会いに行く。」

付き合つておくれ。」

エティンバラまではどうあつても同行なのだから、断る必要もないのだが、エインは何をするにも了解を得てくる。否、言うだけでは有無を言わせずという状況を理解しての事ではあるづが。

一方で、出た当初言っていた、赴任早々に旅をせねばならなかつた状況を、未だ気にかけているのかもしれない。

「 はい。」

ヴィヴィアンが、短い思案の後、いつも通りの抑揚のない返事をすると、エインは満足そうに窓辺に頬杖を突き直し、鼻歌を再開した。

旧友と会うのは、胸が躍るよつだった。

ボルドーは、紀元前二〇〇年頃、ケルト人によつて設立された街だ。元の名をブルティガラと言い、紀元前一世紀にローマに占領された事で主要な交易港が作られ、ワイン生産を基盤に産業地として栄えた。五世紀のローマ帝国の崩壊を受け、その後凡そ五〇〇年に渡りケルマン民族であるゴート人に支配され、さらにはイベリア半島からやって来たアブド・アル・ラフマーンのイスラム軍に占領されたり、ノルマン人によるヴァイキングの侵略を受けたりしている。七世紀にフランスの前身であるフランク王国であるメロヴィング朝の良王と言われるダゴベールによつてアキテヌ公領が創られ、ボルドーはやつと、都市として栄え始める。

一時、アキテヌ地域圏の女公エリアノールが後にイングランド王となるヘンリー二世と結婚した一一五四年から約三〇〇年にかけてイングランド支配下に收まるが、フランスとイングランドによる百年戦争末期に、イングランド軍の敗北によりフランスに奪回された。イングランド支配下にあつた当時、自治を確立していた恩義もあり、その後一〇〇年余りはフランスに反逆していたが、時間が経つにつれフランス支配を受け入れ、ここ最近は西インド諸島との貿易やワインの輸出などで急成長を遂げている。主にフランス植民地から仕入れた砂糖やコーヒーなどの嗜好品を始め、奴隸などを扱い、ドイツやオランダの諸都市に売る中継貿易によつて大いに潤つている。

あまり栄えていないガロンヌ川右湾は、ベルトワーズ邸付近と同様に森と葡萄畠が広がり、川を挟んで左湾に街が広がる。

ガロンヌ川は大きな河川であるため架橋工事が難しく、未だ左湾と右湾を行き来するに船を使つてゐる。

左湾へ渡れば一変、美しく歴史ある建造物が立ち並ぶ、まさに世を謳歌し、さらに栄えんばかりに活気溢れる街に変貌する。

三日月型に湾曲する港を持つため月の港と呼ばれ、左湾の湾曲部ほぼ中央の川縁には、四〇年前にわずか五歳でフランス国王に即位したルイ一五世の騎馬像を囲う宝石箱をイメージした王国広場と宮殿の建築が進む。この工事は六年前に落成し、ボルドーの繁栄のシンボルとされている。

ここまでが、ボルドーに入りトンプソンとワインストンと別れ、ガロンヌ川を船で渡る間にエインから説明を受けた内容だった。

相変わらず潤滑油の成分を知りたくなるほど饒舌に語り尽くすエインを脇目に、ガロンヌ川上から見るボルドーの港は、船が所狭しと停泊する賑やかな港だった。

話に出た王国広場には、木による足場が組まれた宮殿も見える。港に降り立ち、宮殿を左手に見ながら西へ進むと、コメディ広場と呼ばれる大きな広場が見え、その向こうにあるトゥルニー広場まで抜けるトゥルニー通りには、偶数番地側にのみ、口ココ様式の裝飾形式を持つルイ十五世様式と呼ばれる柔らかな曲線が特徴的な軽快、優美な様式の建物が並ぶ。

このトゥルニー通りは、一七四二年にボルドーへやつて来たトゥルニー候ルイ・ユルバン・オベールの「ボルドーは、均整も便宜も無視した醜い家が、ごちやごちやと固まり、その間をきちんと直角に交わることのない、狭い通りが縫つている。」という嘆きにより整備された。

エインの旧友はこのトゥルニー通りの一角に住居を構える、ボルドー大学の教授だそうだ。

クリーム色の石を積み上げて、統一感を持つて整備された街並みは、人工的ながら実に柔らかで美しく、気品ある様子だった。

暫く歩いていると、区画の間の路地から現れた一人の男が、エインを見るなり大袈裟なほど大きな身振りで手を振った。

「おや…。」

エインが溜め息を吐きながら苦笑した。そして、手を振る男を指差し、「あれがボクの旧友。」と言つて、エインも手を振り返した。

すると男はすぐさま走り寄つて來た。

「エイン！ 良く來た！！」

そう言つ彼は、西洋人特有の彫の深い角ばつた顔に、大きな瞳をキラキラを輝かせ、横に口をひきにかつと笑い、まさに陽気を絵に描いたような顔でエインの肩を叩いた。

一方でこじんまりと整つた顔のエインは、彼と比べると全く西洋人のように見えない。

「済まないね、ご無沙汰をして。」

エインが言つと、男はこれまた大きく首を振り、「全く構わないさ」と笑つた。そして、ヴィヴィアンを見、一転して柔らかな優しい微笑みを浮かべ、

「立ち話をして済まなかつた。さあ、我が家へ案内しよう。」

と言つて、手で元いた路地を示した。

案内された家は、男が出て來た路地を少しガロンヌ川へ向かつて歩いた場所にあつた。

一階建てのこじんまりとした家だが、偶数番地なのでルイ一五世様式の美しい裝飾を施してある、大変優雅な様相の家だつた。

中へ通され、二階の一室へ案内される。

部屋の窓は路地に面していて見晴らしも悪くなく、陽もそこそこ当たつて明るかつた。

調度品は氣を遣つて選ばれたようで、シンプルではあるがさり気無く植物をあしらつたシルエットの柔らかな裝飾が施されたものが並んでいる。

部屋に入るなり、エインと男は窓辺に立ち、あちこちを指さして話し始めてしまつた。ヴィヴィアンは取り敢えずドアの脇に移動し、少しだけ体を縦に細めて立つていた。

すると、ドアが開き、銀のティー・セットを持つた女性が入つて

來た。女性はヴィヴィアンを見て「あらあら」と言つと、プレートを部屋の真ん中にあるテーブルに置き、腰に手を当てて男に言つた。

「あなた。お客様を放つておくなんて、失礼ですわよ。」

女性に言われ、エインと男が振り向きヴィヴィアンを見て、申し訳なさそうに苦笑した。

「すまん、ヴィヴィ。」

「申し訳ない。女性を独りにしてしまつなんて、紳士の風上にも置けぬ無礼をしてしまつた。」

二人に詫びられ、然して氣にもしていなかつたヴィヴィアンは、眉を顰めて肩を竦めた。

「…いえ…。お気になさらず…。」

ヴィヴィアンが言うと、エインがヴィヴィアンに歩み寄り、二人に紹介をした。

「すまん。紹介すらまだだつた。」

ヴィヴィアン・トーマス。つい先週、ボクの屋敷へ來たばかりのサポート役です。

ヴィヴィ、こちらはイトダ夫妻。

夫がボクの旧友のアルフォンス。こちらが奥さんのエリーズだよ。

「エインが各々紹介すると、アルフォンスもエリーズもヴィヴィアンに歩み寄り、握手を求めた。

ヴィヴィアンが握手に応じると、二人は無表情のヴィヴィアンに優しく笑いかけ、席に着くよう椅子をひいてくれた。

他の三人も席に着き、エリーズが紅茶を淹れてくれ、即座に話に花が咲く。

「アルは東洋人なんだよ。ああ、東洋と言うのは、ずっと東の端にある地域だ。そこの、二ホンという国から、学生の頃にフランスへ来て、成績が優秀だつたためにそのまま大学に残り、そろそろ五年ほどボルドー大学で教鞭を振つてゐる。」

エリーズとはボルドー大学で知り合つて、生徒だつたエリーズが

アルフォンスに一目惚れをして、結婚したんだ。」

「親の猛反対を受けてね。殆ど駆け落ち同然。姉は時々手紙をくれるけど、両親はもう駄目ね。」

アルの仕事が大学教授でなかつたら、とつぐに父親に連れ返されているところだけだ。」

「何とか俺が大学での地位を維持しているから、この生活が成り立つていてるんだ。」

エインとは、ボルドー大学の学生になる前に出会つてね。

一時の出会いかと思つていたら、俺らが駆け落ちした直後に、本当に困つていてる時に再会したんだ。

それ以来、フランスへ来たら、我が家へ寄つて貰う事にしているんだよ。」

三人の説明に、ヴィヴィアンは要所要所に頷く。

「手紙で、メイドが次々辞めて行つてしまつと聞いて、心配していたんだ。

まだ一週間ほどかい？」

「はい。」

「でも、屋敷に来たその日にフランスへ出てしまつたから、まだ家の事は何もした事がないんだ。」

「あら。落ち着かない旅になつてしまつたのね。体は大丈夫？」

「大丈夫です。有り難うございます。」

「ヴィヴィとエリーズは、歳が近いんじゃないかな。」

「まあ、そうなの？ ヴィヴィはおいくつ？ 私は今年で二十六になります。」

「二十五です。」

「あら、良かつた。殆ど同じ年ね。」

「俺らも同じ年だからな。今年で三十六か。」

そう言つて、アルフォンスが陽気に笑つた。エリーズもふふと笑う。

「変わり者だが、悪いヤツじゃない。」

長くいてやつておくれ。」

アルフォンスの言葉に、エインが苦笑した。そんなエインを、ヴィヴィアンは真っ直ぐ見つめて頷いた。

「そのつもりです。」

ヴィヴィアンが言うと、エインがふわりと笑い直した。

「そう言えば、お一人ともお食事は？」

「ああ、そう言えば、ベルトワーズ邸で朝食を摂った後は、何も。「なんだ。俺らもまだなんだ。」

「一緒にどう？ これから支度ですけど。」

「うん。お言葉に甘えようかな。」

エインが言うと、エリーズが席を立った。

「では、手早く準備しますわね。」

そう言ってドアへ向かうエリーズに、ヴィヴィアンが声をかけた。

「お手伝い、します。」

エリーズは振り向いて、エインを見た。エインの了解を得なればと思ったのだ。

エインが頷くと、エリーズはにこりと笑つて、「お願い」と言つた。

「行つてまいります。」

ヴィヴィアンが席を立つと、エインはヴィヴィアンを見上げて言った。

「行つておいで。」

ヴィヴィアンとエリーズが出て言つた後、暫し沈黙が訪れた。

エインは、ヴィヴィアンの出て行つたドアをじつと見つめ、アルフォンスはそのエインを見つめていた。

やがて、アルフォンスが椅子の背凭れに凭れ、腕組をして溜め息

を吐いた。

「彼女と出会ったのは、偶然か？」

アルフォンスの問いかけに、エインが浮かべていた微笑みをすつと消した。そして虚ろな目でアルフォンスを見ると、小さく首を振った。

そんなエインに、アルフォンスはさらに溜め息を吐いた。

「またか…。

何故だ、お前はあれだけ失敗をしたのに、何故また繰り返すんだ

？」

「ベルトワーズ伯爵にも言われたよ。

『諦めろ』と。」

「当たり前だ。俺だつて言うよ。」

アルフォンスが少し語氣を荒げて言つと、エインは哀しそうに笑つて、俯いた。

「ここまで来たんだ。最後までやりたいんだ…。

でも…。」

「でも？」

「それも、これで最後かも知れない。」

「…？」

「もう、”流れられない”。」

エインの言葉に、アルフォンスも俯いた。

そしてそのまま少し頃垂れた後、首をかつたるそつに持ち上げて、窓の外に目をやる。

「”シユレー・ディングガーの猫”は、否定された筈だ。
俺たちが生まれるずっと前に…。」

「オレが”観て”いるのは、猫じゃない。」

「じゃあ…ツ！？」

静かに否定するエインを、アルフォンスはキツと睨みつけ、そして即座にはつとした。

エインの横顔は、出会つて初めて見る、深い悲しみに沈んでいた

からだ。

アルフォンスは息を整えるために、少し口を開いた後、小さく
ゆっくり呟いた。

「”バンブー”を観測したと聞いて、それを”渡つた”と聞いた時
は、俺だって驚いたさ。

驚いたと同時に、施設を裏切つたお前を憎みもした。

勿論…。」

言葉を止めたアルフォンスを、エインが横目でちらりと見た。
エインの視線をアルフォンスも横目で受け止め、

「…同情もした。」

と続けた。

「でも、その哀しみを受け止めるのが、”人間”じゃないのか？
俺たちは神じゃない。

超えてはならない領域がある。その中でさらに入り組めておべべきル
ールがあるだろ？」

俺たちが守るべきものは、”それ”じゃなかつたのか？」
その問いかけに、エインは何も反応を示さなかつた。

ただ俯いて、疲れたように椅子に凭れ、虚ろに空を見つめている
だけだ。

「…お前の心の中は、ぐちゃぐちゃなんじゃないのか…。」

静かに、しかし吐き捨てるようにアルフォンスが言つと、エイン
は少しだけ笑つて、目を閉じた。

「そうかもしれない…。

だから。

だからこそ、最後までやつてみたいんだ。
最後まで、縋り付きたいんだ…。」

いつだつて冷静で、笑顔を絶やさなかつた男が、と思つと、アル
フォンスにはエインが惨めに見えて仕方がなかつた。
尊敬もし、心を啓いた友人には違ひない。勿論、この先もエイン
が困れば手助けを躊躇う訳もない。

だが、心中に闇の渦巻く友人は、闇へとここん潜ると誓つ。

その先に、同じ哀しみが繰り返し待つていようと。

覚悟とも、ある種諦めとも取れるその決意が、いつ友人の心を壊してしまはうかと、気が気がではない。

「『運命は変わらない』、なんて、素朴実在論は、お前には不要ないな……。」

アルフォンスが少し嫌味を言つと、Hインは俯いたまま、目を閉じたままにやりと笑つた。

施設から与えられた任務のための出発を明日に控え、エインは友人へ挨拶に回っていた。

施設は広大で、たつた十人あまりの友人の研究室を回るだけで、一日終わってしまいそうだつた。

三人目の友人への挨拶を終え、四人目の友人の研究室へ続く白く長い廊下を歩いていると、向かいからまさに四人目の友人が、都合良く歩いてきた。

「バーニイ！」

エインが声をかけると、白衣のポケットにだらしなく両手を突っ込んで歩いていた友人は、にこりと笑つて歩みを速めた。

「明日、出発だつて？」

「ああ。みんなに会つて回つてる。」

エインが言うと、バーニイが「そりや大変だ」と苦笑した。

目の前のバーニイとは、三年前に知り合つた。バーナード・ドゥルーと言つて、歳は同じ。数年前に同職のナタリーと言う女性と結婚したが、二年後に生まれた子は原因不明の不治の病にかかり、たつた数日でその生を閉じた。その後、互いの心労が祟り、妻とは離婚した。

エインと似て、冷静でいつも笑顔を絶やさない男だつた。趣味も、割かしとおつとりとした性格も同じ、あつという間に意氣投合し、今では親友の一人である。

「重要任務だな。仲間内から選ばれるとは、誇らしい。」

バーニイが言つた。

「本当は、祝杯でも挙げて一晩みんなで飲み明かしたいが……。」

「お互い忙しい身だからな。」

エインが言うと、バーニイが肩を竦めて頷いた。

「これで、少しでも人間の寿命が長引けばいいけどな。」

生半可なエコがこの地球を救うなんて言つてたやつらに、外の空気を吸わせてやりたいよ。」

「医者ならぬ発言で。」

斜に構えるバー＝イに、エインがはにかみ笑つた。

「コウも次の試験を受けるつて言つてた。」

エインが言つと、バー＝イが俯いて苦笑した。

「次々、いなくなるな。ここから…。」

「仕方がないな。こうなつた以上は。」

言つエインも、哀しく苦笑した。

「いつか、迎えに行けるようにするから。」

そう言つて、バー＝イが手を差し出した。エインはその手を握りしめると、力強く頷いた。

「期待してるよ。」

二人は頷き合つて、別れた。

永遠の別れではない。暫しの別れだと、確認をして。

六人目、七人目と挨拶を終え、最後にもう一人の親友であるコウ・イトダの研究室を尋ねる。

「コウは代々この研究施設で幹部を務める優秀な研究者を輩出しているイトダ家の次男で、自身も次期歴史研究部門の最高顧問として名を挙げていた。

「コウの研究室の外で声をかけると、すぐに陽気な声が帰つて来た。『どうぞ～！』

ドアを開け、中に入ると、コウが机に座つて、入つて来たエインを見て笑つた。

「挨拶回りか。」

「ああ。」

「俺もそのうち行くぞ？」

悪戯っぽく笑うコウは、先祖のどこかで西洋人の血でも混じったかと思う程に彫りの深い顔立ちで、大きな目が印象的な青年だ。だが、実際西洋系の血が混じった事はなく、純血アジア人種だった。

「待ってるよ。」

それだけ言うと、もう話がなかつた。

話し込む事は普段からしているが、『こういった』『いざ』と言つ時にする話は持ち合わせていなかつた。

付き合いが深いせいで、改めてお別れとか、過去を振り返るとか、そんな事をする必要性もなくなつてしまつた。

『顔を見れば解る。』

それが總てだつた。

「見送りには行けない。」

「ああ。独りで行くよ。」

「無事で。待つてろよ。」

そう言つて、コウが拳を突き出した。エインも拳を挙げ、軽くぶつける。

「お先に。」

この時、エインはまだ心と感情はバラバラなままで、微笑みも哀しみも、知識だけでその表情を作つていた。

それでも友人たちは自分の大事なものであり、何にも替え難い存在には違ひなかつた。

帰つて来られる。また会えると信じて疑わなかつた。

だから、この先自分がこの場所に帰らないと言つ選択をするなどという事も、考えもしなかつた。

エリーズの食事の支度を手伝い、キッチンを右往左往する。

不器用でもなく、料理が出来ない訳でもない。気転が利かない訳でもないが、エリーズの手際の良さに、自分の必要性を見出せなか

つた。

だから、ヴィヴィアンはただ言われた事をする事にした。

予め仕込んであつたスープを温め、これまた予め仕込んであつたチキンをオープンに入れる。

食事はまだ、と言つていたが、恐らくエインやヴィヴィアンの到着を待つてくれていたのだろう。

エリーズはテキパキと余念なく動き、ヴィヴィアンの手が空かぬよう指示をする。

三十分余り経つたところで、チキンが香ばしい香りを立て始めた

頃せどする事がなくなつた

「お聞いでもよろしくですか？」

笑つた。

「何でも、何個でもどうぞ。」

「ご主人のアルフォンス様は、いらっしゃる前は東洋の故郷にいらっしゃったのですか？」

「ええ、そのよ、うよ。

私も出会う前の事は話くらいしか聞いた事がないけれど、何故?

聞い返されて、ヴィヴィアンが一瞬口籠つた。
「ええ。

二十九

“イトダ”という者がおりまして。

「東洋の方にも色々な名前があるのに、偶然同じ名前のお知り合いがいるなんて。」
「あら。」と語って喜んだ。

エリーズは楽しそうに言いながら、オープンを開けた。重い熱い空気が溢れ、後からふわりとチキンの香りが漂う。

「親戚かしら……？」
「ファーストネームは？」

”アキ”です。 ”アキ・イトダ”。 男性です。

叔父に当たる方の名前も聞いた事があつて……。

確か…、”「ウ”、…だつたかと…。」

「アキ…。」「ウ…。」

再びオーブンの蓋を閉じ、エリーズは唇を人差し指で叩きながら名を繰り返したが、思い当たらぬようで、ヴィヴィアンを見て肩を竦めた。

「聞いた事ないわ。

アルから家族の話も聞いているけど、お父様もお母様もお祖父様も、確かに従兄弟たちも違う名前だつたわね。

残念。知り合いだつたら楽しかつたのに。」

そう言つて、くすりと笑う。

ヴィヴィアンは、何故か少し落胆をして、俯いた。

「そうですね…。済みません、変な話を。」

「いいのよ。

何でも話してね。うちの主人も変人だつて言われているけど、教授Aも相当変人だと言つし。

苦労も多いと思うのよ。今までのメイドさんもすぐ辞めて行つてしまつたしね。」

「今まで教授のお屋敷に入つたメイドを」存知なのですか？」

「ううん。直接は知らないのよ。

でも、噂はね、聞こえて来るから。

あなたが思つていてる以上に、教授は」高名だし。

意外なところに知り合ひがいるのよ、あの人。

ベルトワーズ伯爵もそつだし。ロンドンの」友人も、セレクトシヨップをやつていらっしゃる女性とか、大学とは無縁の方が多いそういうのよ。

とつても奇妙よ。」

エリーズが笑つた。口調には言葉ほどの悪意はないので、恐らく

冗談でお互いを貶し合える関係なのだろうと思つ。

ヴィヴィアンには、何年経つても気付けない関係だと思つ。

思案に暮れていると、エリーズが「でも…。」と言つてヴィヴィ

アンを覗き込んだ。

「あなたはかなりのお気に入りのようね。

教授が誰かを旅に同行させるなんて、なかつたもの。」

そう言われて、指先がじわりと痛んだ。

ベルトワーズ邸での一件でも感じた感覺だ。

”幸せ”という感覺…。

今まで感じた事のない感覺だ。

道が変わっている、と信じられる感覺であれば、尚いい。痛む指先を擦つていると、チキンの香りが再び立つた。エリーズがオープンを開けたのだ。

「出来上がり。いい色付いてるわ。

やつぱり下茹ですると焼き上がりが早くていいわね。」

エリーズはヴィヴィアンを振り返つて満足げに笑うと、チキンを手早くオープンから出し、プレートの上に置いた。

「さ、お食事にしましょ。

お待たせして、ごめんなさいね。」

「いえ…。済みません、大したお手伝いも出来なくて…。」

言つている傍から、エリーズにスープを入れた大きな器を渡される。エリーズは焼きあがつたばかりのチキンのプレートと、ミルクパンの乗つた籠を器用に持ち上げてにこりと笑つている。

「ううん。

あなたは十分お役に立つたわ。自分を余り過小評価しない事よ。この調子で、教授のお食事もよろしくね。」

ヴィヴィアンは少し恥ずかしくなつて、俯きがちにエリーズを見、頷いた。

そして、男どもは話が弾んでいるだらつから、と足音を少しだけ消して二階への階段を昇る。だが、賑わつてゐると思われた部屋からは何の音も漏れて来ず、歩みを進める」とエリーズとヴィヴィアンの足は重くなつた。

不思議に思い、部屋の前に着くなり、エリーズがドアに耳を近づ

けた。

「静かだわ……。」

そう呟いて、遠慮がちにドアをノックする。

中からは、一呼吸も二呼吸も置いて、夫のアルフォンスの声がした。

「どうぞ。」

ドアを開けると、苦笑しているアルフォンスと、笑い切れていいエインがいた。

二人の間には妙な空気が漂っていて、取り繕う笑顔が余計に空気を助長していた。エリーズも当然気付いていて、逆にそれを察め出す。

「まったく、これから食事だつて言つのに、重い空気作つて！」

「済まないすまない。」

怒られ、アルフォンスが笑う。

「どうせ、主人が変な事聞いたんでしょう？」「めんなさい、教授。」

「いや……。ボクも、ね……。」

珍しく言葉を切れ切れに吐き出して、エインが苦笑した。

そして、ヴィヴィアンが手にしているスープを見、微笑んだ。エリーズもアルフォンスも、その視線に話題を切り替える。

「さあ、食事だ食事。」

「ヴィヴィはとってもお料理上手ですよよ。教授。」

「おお、それは素晴らしい。」

「少しほはれれるな。」

「太る必要はないだろう。」

「でも、教授は少し細すぎません？」

「そうかなあ？　これでも筋肉はまだあるんだよ？」

「ガリの怪力男つて言われてたもんな。」

「そうそう。」

「まあ。」

ペチャクチャおしゃべりの続く中、スープが注がれ、チキンが配られ、着席を促され…。

ヴィヴィアンは一言も発する事無く、ただ流れを追うだけで精一杯ではあったが、置いていかれているという感覚もなく、どちらかというとヴィヴィアンのために三人が止め処なく話しているように思えた。

そういうえば、饒舌で読書好きで、その他多少の生い立ちくらいしかエインの事は知らなかつたし、突つ込んだところまでエインについて教えてくれる者とも出会わなかつた気がする。だから、この会話は、エイン・アンダーソンという男について知るには、とても都合のよい内容だ。

そんな疑惑を知つてか知らずか、三人はお構いなく夕暮れまで話し続けた。

「あらやだ、もう外が暗くなつてるわ…。」
とエリーズが外に気付いた頃には、もうすっかり空は夜の体で、街にも明かりが灯つていた。

一同…というより主にヴィヴィアンを除く三人であるが…の話は中々尽きず、結局食事が終わつてからこんな時間までお喋りに勤しんでしまつた。

が、その割にテーブルの上の食器は綺麗に片付けられ、お茶がきちんと用意されていた。エリーズが場の流れを切らず紅茶の準備をしていたからであるが、誰一人その行動には気付かなかつたという事である。

「今日はもう遅い。泊まつてくだろ?」

アルフォンスが言うと、エインが苦笑した。

「それは悪いよ…。」

「お構いなく。お客様用のお部屋の準備はもう済んでいるから。」

エリーズが笑う。どうやら夫妻は、いつなる事を見越して全ての準備を整えてくれていたようだつた。

「どうせあとは、スコットランドに帰るだけなんだろ?」

アルフォンスが訊ねると、エインは「…まあ、そうだが…。」と歯切れの悪い返事をした。

「中々こちらにいらつしゃれないんですもの。積もるお話もあるでしょ? 私もヴィヴィとお話したいし。

ね? 教授。」

エリーズにも推され、エインはヴィヴィアンをちらりと見て、溜め息混じりに頷いた。

「悪いね。そつさせてもらひよ。」

「いいえ。お気遣いなく。」

エリーズは待つてましたとばかりに席を立ち、紅茶を淹れ直しに出て行つた。

ヴィヴィアンは口を挟めないので、ただ成り行きを見守つていた。エインと視線が合つても、どう反応してよいか判らなかつた。

「ヴィヴィは…。」

戸惑つ空氣を察してか、アルフォンスがヴィヴィアンに声をかけた。

「はい。」

「生まれも育ちもロンドンかい?」

「生まれは…、済みません、解らないのですが、育つたのは、ロンドンです。」

少し言い難そうに答えるヴィヴィアンを、エインがフォローした。「ヴィヴィはボクと同じだよ。」

エインの説明に、アルフォンスが「ああ。」と頷いた。

「気にしなくていい。少なくとも、この家中ではそつぱつた事にとやかく言う者はいないから。」

話したくなれば、別だが。」

柔らかく笑つて、アルフォンスが言った。

「有難う」ございます。

ロンドン郊外の孤児院にいました。たまたま学校へ通わせてくれるという方がいました。読み書きはきちんと出来る様教育は受けさせて貰えました。

その後、サンアッシュ教授をご紹介いただいて、暫くは施設の手伝いと、ロンドン内のお屋敷へ、シーズン区切りの契約でメイドのお仕事を…。

アンダーソン教授のお屋敷に勤めるお話は、一週間前に決まりました。

「そうかあ。

早めに帰つて落ち着きたかつただろう。申し訳ないね。」

「いえ…。大丈夫です。」

詫びられて慌てると、アルフォンスが何故か、何か含んだように微笑んだ。

そこには哀しみのよがり、愛おしさのよがり、計り知れない哀愁に似た感覚があるように思えた。

話はそこで突然途切れ、沈黙が訪れた。

久しぶりの静けさに、多少の居心地の悪さを覚える。

ドアが開いた。見ると、エリーズが新しい紅茶を持って来たのだった。

ポットからは湯気が立ち上る。

エリーズは、手早くエインとアルフォンスの分だけ紅茶を注ぐと、ヴィヴィアンを見て、

「夕飯の支度、手伝つていただける?」

と言つた。

「はい。」

ヴィヴィアンはすくつと立ち上がり、エインを見て、今度は何も言わぬ、エリーズについて部屋を出た。

相変わらずお喋りの絶えない夕飯を終え、夜も更けた頃、ベッドルームに案内された。

エインとは隣同士で、向かいは夫婦の寝室だった。宛がわれたベッドルームは、ベルトワーズ邸までの間に寝泊りした宿屋に似て質素ではあったが、きちんと整理されており、こじんまりとした大きさが逆に落ち着く。

「何か困った事があつたら、向かいにいるから遠慮なく声かけてね。

綺麗に糊を付けたシーツをベッドに起き、エリーズはヴィヴィアンに振り返った。

「有難うござります。」

部屋の脇にカバンを置きながらヴィヴィアンが礼を言うと、エリーズはランプと蠟燭、洗顔の水差しの説明だけして、早々に部屋から出て行つた。

独りになり、やつと自分が疲れている事に気付く。エリーズが早めに引き上げたのも、疲れが顔に出ていたからかも知れない。

ヴィヴィアンはベッドに腰掛け、ブーツの紐を緩めると、それを乱雑に脱ぎ捨て、そのまま倒れ込んで耳を澄ます。

賑やかなボルドーの街も、夜になると静まり返るものなのだろうか。音は然程も聞こえず、しんとした空気が耳に入つて来る。

ヴィヴィアンはそのまま目を閉じ、今日一日に得た情報を反芻した。

エインの旧友、アルフォンス・イトダ。妻のエリーズ。東洋の国から來たという彼と同じ名を持つ知人のアキ・イトダ。エインの友人だという、ロンドンでショップを営む女性、ベルトワーズ伯爵。サン・アッシュ教授とアルフォンスは知り合いらしい。

ベルトワーズ伯爵とも面識があるそうだ。

エインとアルフォンスは、アルフォンスがボルドー大学に入学する前に出会つたらしい。

食事中ふと出た話によると、アルフォンスはフランスへ来たばかりの頃にベルトワーズ邸を訪れ、学費の免除交渉の協力を求めたそだ。当時ベルトワーズはボルドー大学へ資金提供をしており、それがなりの発言権を持つていたから、だそうだ。ベルトワーズは、アルフォンスの学費を自分が工面するという話を自ら出し、その代わりに時折自分の書物集めの協力をするようアルフォンスに求めたそだ。あの『図書館』にあつた書物の一部は、アルフォンスが集めたもの、と言う事か。

アルフォンスはそれまでフランスは愚か東洋の二ホンという國から出た事がなく、当然一人については前以て知識を得る事もなかつた。

そして、兄弟にも親類にも自分の知る”イトダ”と同じ名はいないという事だつた。少なくとも、知人である”アキ・イトダ”とアルフォンスは似ても似つかぬ他人に見える。

そのアルフォンスが『図書館』へ出入りする中で、ベルトワーズ邸に『図書館』の書物の閲覧を所望したエインと出会い、意氣投合した、と言つていた。

そう言えば、エインは何をしているのだろう。隣の部屋からは物音が聞こえない。アルフォンスに部屋を案内されていたが、話声も聞こえないから、自分と同じように早々に独りになつたかもしれない。

エインに会いに行くべきか…？ そう思い、直後に否定する。一
体、何をしに…。

ヴィヴィアンはむくりと起き上り、裸足のまま窓辺に立つた。同じような高さの建物が並ぶので、ずっと向こうまで街を見渡せる。屋根の群衆の中に、ぽつりぽつりと大きな建物が頭を出す。大聖堂に、建設途中の宮殿、その向こうに見えるのはなんだらつ…。

思えば、ずいぶん遠くまで来てしまつた。

知らない土地で育てられ、知らない土地で働き始め、知らない土地で生涯忘れ得ぬ、最初で最後の出会いをした。

何に対しても無感情だった自分が、これ程までに傾倒する事がこの世にあろうとは、あの任務に着くまで思いもしなかったものだ。何とかして、この想いを遂げたい。仮令、この世界を裏切るとしても。

歩いている。

右手には小さなオイルランプを一つ持っている。
薄暗い道を行く。じめじめと空気は湿り、どこからともなく温く
体に纏わりつくようなねつとりとした風が吹いてくる。坑道のよう
な道。でこぼことした岩を掘り進めたようなその道は、意外に広く、
天井も高い。

かつかつと自分の足音だけが響き渡る。あとは風が唸り声を上げ
るだけで、何も聞こえない。

この道の先には、アレがある。

この旅が、また失敗した時に必要なものが。

あの人が隠した、大事なものが。

ずっと分岐点を探している。あのを守り切るために必要な方法
を探している。

コツ。

分岐かと思つていた道は、そうではなかつた。
悉く失敗し、また旅をしなければならなかつた。

これで終わりにしたい。

もう心が持たないから…。

これで最期にしたい。

だから、アレを探す。今まで一度たりとも触れよつと思わなかつ
たアレを。

アレに触れる事が、残された最後の可能性だから。

コツ…。

それなのに、いつも邪魔をされる。

正体は解らない。彼らがなんなのか、解らない。

だが、彼らはいつも人の人を傷付けるために現れ、消えて行く。彼らの正体が解れば、あの人を守れるだろうか。

「…」

足音がする。自分のものではない。

誰の足音…？

暗闇の坑道に響き渡る足音が、目の前で止まつた。気付けば少し広い空間に出ていて、ランプの灯りが足音の主を暗闇から少しだけ引き摺りだすように照らしていた。

…誰だ…。

無言で身構えると、足音の主が突如襲いかかつた。物凄い早さであつという間に目の前に現れたそれは、いつも人の人を襲う、アレだつた。

影。

黒い体に浮かぶ二つの赤い光は、目だろうか。人の形をしているのに、形を明確に捉える事の出来ない、それは正しく影と喻えるに相応しい。

影が手を突き出してきた。

寸でのところで避ける。目のすぐ横を、銀色に光るナイフがひゅっと風を斬る。そのままバランスを崩した。足が縛れ、体制を整える事が難しいと判断した瞬間、影が空いている手で首を掴んで来た。片手で大人の自分を持ち上げ、あらうつ事が首を圧し折るうとしている。

ぐうと喉が鳴る。肉が首の骨に擦れ、じゅくじゅくと気持ちの悪い音を立てる。恐怖と焦りに意識が飛ぶ。

「…あ…。」

やつと出した声に、遠退き掛けていた意識が一瞬戻る。首が折れ

るのを覚悟の上で、体を揺らして勢いをつける。脚を思いつきり振ると、幸運にも影の頭部に当たった。カラッと軽い金属が落ちる音がした。影が衝撃の反動で再度首を掴み圧つして来る。しかしあう一度脚を振り上げると、影は腕を大きく振り、自分は壁に向かって投げつけられた。

「ぐつ……！」

背中を強く打ち、呼吸が止まつた。咳き込もうとも、息が吸い込めない。

うつ伏せに倒れたまま動けない。

「う……く……つ。」

呻き声を出し、何とか呼吸を再開させようと試みる。

顔を上げると、落ちたランプの脇で影が同じように蹲つていた。頭部を抑えている。痛みを感じるのか。

そう思つていると、視界の端で、何かが光つた。銃だ。相変わらず呼吸すら満足に出来ない状態で、立ち上がる事も当然出来そうもない。だが、あれをどうにかして手中に入れたい。手を伸ばせば届きそうだ。

あれで、あいつを殺せば……。

ぐつと腕を伸ばす。少しずつ回復してきた呼吸のお蔭で、徐々に手に力が入る。上半身を起こし、腕で少し前に進み、腕を伸ばす。指先で地面を掴み、一ミリでも一センチでも腕を伸ばす。

そして、指先に銃が触れた。だが、次の瞬間。

目の前の銃を、何者かの足が踏み潰した。

はつとして見上げると、見慣れた顔が自分を見下ろし睨みつけていた。

その顔にはとてつもない怒りの表情が浮かび、嫌悪や憎しみと感じられるものを自分に向けていたようだつた。

全身を、哀しみと絶望が駆け巡つた。

この人を守るためにいる自分が、今、その人の嫌悪の対象になつてゐる。

それは、未だかつて経験した事のない絶望だった。

目の前が暗闇になつて行く。体が深く沈み、地面に飲まれている
ような感覚に襲われた。

痛みと絶望で意識が遠のく。

何故…。

あなたを守りうとしたのに…。
何故…。

走つている。

右手に持つ小さなオイルランプが、激しく揺れる。

薄暗い道を行く。じめじめと空気は湿り、どこからともなく温く
体に纏わりつくようなねつとりとした風が吹いてくる。坑道のよう
な道。でこぼことした岩を掘り進めたようなその道は、意外に広く、
天井も高い。

かつかつと自分の足音だけが響き渡る。あとは風が唸り声を上げ
るだけで、何も聞こえない。

この道の先には、アレがある。

この旅が、また失敗した時に必要なものが。

その人が、そして自分が、最後の可能性と信じた、大事なものが。
そして、それを求めてこの道を行く人の命を奪う、アレも…。
何度も失敗したか。

何度も間に合わなかつたか。

何度も、この道を走つたか…。

暗闇の向こうで、ビサツといつ音が聞こえた。次いで呻き声が擦
る。

ああ、間に合わない…。もっと早く…。

小さな灯りが浮かんだ。ランプが落ちている。

まさか…。

灯りに向かつて走り続ける。僅かな灯りに影が浮かんだ。
アレだ…。間に合わなかつたのか…？

走る。岩肌の陰に、あの人手が見えた。倒れている。
あ…。

何かが込み上げて来る。

喉が締め付けられる。

涙が溢れそうになる。

間に合つてくれ…。

足音に気付き、影がこちらを見て、すっと闇に溶けて消えた。
一步遅れてあの人下へ駆け寄る。

倒れるあの人を抱き上げ、首筋に触れる。

あ…。また…。

また間に合わなかつた…。

ぎゅっと抱き締める。

隙間から、腕が零れ落ちた。

名を呼ぶ。詫びる。繰り返し、繰り返し…。

あと何度も、この体を抱き起こせばいい…。

目が開いた。

その拍子に、涙が零れた。

夢を見て泣くなど、久しくなかつた気がする。

いつの間にか眠つてしまつたのか、窓に目をやると、外はまだ暗く、月明かりがほんのり部屋へ差し込んでいた。

ベッド脇のキャビネットに手を伸ばし、じらじらと眼鏡を探す。

指先に、眼鏡が触れた。

眼鏡を掴んで、ゆっくり起き上がる。

まだ残つている涙を拭い、もう一度窓を見る。

嫌な夢だが、繰り返し見る夢だ。

そして、失敗を繰り返さないために必要な夢だ。

ベッドから足を下ろし、縁に座つて窓を正面に見た。体が妙に疲れていて、思わず膝に肘を乗せ頃垂れた。

俺たちは、神様じゃない。

旧友の言葉が、脳裏を過ぎつた。

確かに神様ではない。自分を神だなどと思つた事もない。だが、神ではないからこそ、限界を知りたいのだ。もう、大切なものを失うのは嫌だ。

白い部屋。

この施設に従事する者はみな、この部屋をそう呼んでいた。

部屋に入ると席を指差され、座ると資料を渡された。

ぐねぐねと湾曲する柔らかい透明素材で出来たボードだ。特殊な電波を送ると文字、図形、ありとあらゆるもの表示してくれる。一時はホログラムなどというものを活用しようと黙々と動きもあつたが、このジエル素材が開発されてからというもの、ビジネス界に於いては擬似立体投影には誰も何の興味も示さなくなり、活躍の場は教育部門くらいのものであった。

部屋は内外で電波が行き来しないための防護壁が貼られている。通信システムが飛躍的に進歩をして尚、電波の遮断や違法傍受には原始的な方法を探っている現状に、SFマニアは指を指して笑いながら批難をし、科学者の卵たちはロマンを追う事をやめた。

防波壁は当然音も遮断する。だから極秘会議を行う際に主に使用されるのだが、入出すると少し耳がぼうつとるので居心地が悪い。その上、目の前にいるのが四つほど階級を跨いだ先にいる幹部で、室内には一人しかいないとなれば、居心地の悪さはこの上ない。

溜め息をそつと吐きながら、ボードに映る資料に目を通す。

「君に、本来のこの任務とは違う任務を並行して遂行して貰いたいと思っている。

ターゲットは、その男だ。」

視線を上げると、幹部の男は椅子に踏ん反り返つて自分を見ていた。

「ターゲットは三十年ほど前に旅立つた”チャクラ cakravartin

”の推薦メンバーの一人。大変優秀な科学者でな。”ヴァルティン cakravartin”のメンバーを決める際、真っ先に認証された。

君の任務は、そのターゲットを追跡し、排除する事だ。”

一瞬、驚く。

「排除…？」

「彼は最高国際法を犯した。

君は任務を遂行する傍ら、彼を見付け次第、排除する。」
排除。

即ち、殺せという事だ。

「遺体は、どうすればよろしいですか？」

「事故と見せかけ、自然処理させる事。

銃の暴発、強盗による殺害、転落死…。何でも良い。

彼は名も変えず、”現地”にすっかり溶け込み、活動している。

君が誘導し易い方法を探り給え。

その後、葬儀が執り行われ、遺体は埋葬される。何の変哲もない、一般市民として、な。」

惨い話だ。

自分が授かつた任務は、世間からは世界の秩序を護る英雄だの、立派だと謳われてはいるが、本質はただの暗殺者である。

人知れず他人の命を絶ち、世界に影響を与えないようにする。

表向きは、国際法を破り無断で”流れた者”の身柄を確保したり、任務を受けて”流れた者”の監視をするのが任務だ。

勿論、表立つた任務中にも、監視対象が明らかなる背徳行為を犯し、その影響が大きいと判断されれば、独断で対象を排除する事も任務の内ではある。

だが、大抵はその様な事態にならぬよう人選をし、行われている事である。そう言つた状況になる事は、珍しいとされている。

「ターゲットと遭遇出来そうな距離にいる人物のデータを、何人か揃えておいた。そこからターゲットの居場所を特定し、任務を遂行するように。

流れ先には、私の叔父がいる。彌りの深い東洋人だ。会えばすぐに判るだろう。

名は、コウ・イトダ。」

そう言つて、田の前の男が紙を数枚取り出して、渡して來た。今となつては、非常に価値のある素材だ。

紙には、たつた今男が言つた”ターゲットと遭遇出来そうな距離にいる人物”に関する事項が並んでいる。叔父と言つ、”「ウ・イトダ”の記述もある。

他に話はないかと男を見ると、男は一つ頷いて、「いきたまえ。」と言つた。

立ち上ると、手を差し出された。

「このような任務、君に与えるべきではないと、意見も出た。ここに残り、軍人として世界に従事して欲しいと嘆く者も多かった。

申し訳ない事をした。」

少し哀しそうな顔で、男が詫びた。

なんとも思つていらない自分には、何も響いて来ない言葉だ。

「お気になさいませんように。イトダ博士。」

そう言つて、いつも通りの無表情をさらりと無表情にした。

自分の知る”紙”とずいぶん異なるざらざらとした紙の書状を渡され、エディングバラ郊外にある屋敷へ向かう。

これから従事する、大学教授の屋敷だ。

本の虫、予言師、変人。

数知れず妙な謂れをされると噂を聞くが、コーモラスで頭の回転が速く、見た目以上に運動神経の良い、三十半ばの男性だという事だ。

名を、エイン・アンダーソンと言つ。

名を聞き、唇を噛み締める。

ここへ来て一年。やつと辿り着いたターゲット。

自分の任務は、このターゲットを排除する事だ。

エティンバラから歩きで行けそうだったので歩いて来だが、少し後悔した。屋敷は小高い丘の上に建ち、なだらかな登り坂が思いの外体力を奪つて行く。

普段から訓練をし、トレーニングを欠かさない自分の体でさえ、息が切れかけていた。

やつと屋敷に着いた時には、思わず鞄を地面に置いてしまつほどに疲れていた。

息を整え、扉を二度叩く。

暫くして、「はいはい」と軽い返事が聞こえた。

ポケットから招待状を取り出し、ドアが開くと同時に突き出した。
教授Aのお屋敷はこちらでしようか?」
プロフェッサー

抑揚も付けず、素つ氣無く訊ねると、出て来た男は一瞬驚き、「新しいメイドさんかな?」

と聞いて来た。

「サンアッシュ教授の」紹介で参りました。
ヴィヴィアン・トーマスと申します。」

名を名乗り、書状を下げるが、男と田が合つた。

「ようこそ。取り敢えず部屋へ案内しよう。」

男は自分に負けないくらいの素つ氣無い態度でヴィヴィアンを招き入れ、ヴィヴィアンの鞄を持ち上げた。

「あ…。」

ヴィヴィアンが慌てると、男は「いいよいよ」と言つて、一階奥の一室へ歩いて行つた。

背の高い、ほつそりとした体付きの男だ。綺麗なブロンドの髪を乱雑にオールバックにし、丸く小さな眼鏡をかけている。

「東向きの部屋だから、陽当たりは悪くないと思うよ。」

まだ部屋にも着かないうちから、部屋の事を話し始める。

「この家、ボクと君以外はいないから。

好きに使つてくれて構わないよ。

まあ、入られては困る場所もあるんだけど。」

「ちいさな向こうもせずに、男は言つた。そして、廊下の一番奥の扉の前で止まると、ドアを開けた。

中へ入ると、男の言つとおり、陽当たりは決して悪くなさそうな部屋だった。

「基本的には、食事の支度、掃除、洗濯、無理のない程度に雑用をして貰おうと思つていてる。

一階は、殆ど使ってないから、気が向いたら掃除でもしてくれ。食事の回数、時間は任せるよ。要る物があつたら、遠慮なく言つてくれ。」

空気が埃っぽいので、窓を開けながら男が言つた。そして、「それから……」と言つて、やつとヴィヴィアンを見た。

「噂は聞いてると思うけど、ボク、病的に本に熱中するから、声をかけても聞こえない事がザラなんだ。

気にしないで肩でも叩いて呼んでくれ。

呼び方は、なんでもいい。

でも、”田那様”とか”ご主人様”はやめてくれ。」

そう言つと、男は初めて笑つた。

寝付けないまま、もうそろそろ夜明けを迎える。ヴィヴィアンはベッドに横になつたまま、ずっと窓の外を見ていた。

懐かしい事を思い出した。

任務に就く事が決まつた時の事を。

これでも優秀な軍人として、将来の幹部候補と謳われていた。

だから、この任務に志願した時、顔も見た事のない知らない者から、ずいぶんと反対されたものだつた。それを押し切り、ここへ來た。

後悔はない。何も棄てるものがなかつたから。

何度も思つ。

そんな自分に、棄てられないものが出来るなどとは、思いもしなかつた事だ。

エインが初めて見せた、あの懐こい笑顔を思い出す。最初は何とも思わなかつたあの笑顔が、いつからかとても大切なものになつた。

そう言えば、いつからエインを襲うあの影は現れたのだったか…。思い出そうとすればするほど、妙な事に気が付いた。

疑問は瞬時に大きく膨れ上がつた。

心がざわつき、急に夜の闇が怖くなる。

最初に失敗した時、影など現れもしなかつた。あれは紛れもなく偶然に、そうなつたのだった。ではあの影は、いつから現れたのか…？

夜が明けてきて、空が白んできた頃、急に雷雨が降り出した。向かいのイトダ夫妻の寝室のドアが開く音が聞こえたので、ヴィアンは手早く顔を洗い、一通り身なりを整えて寝室を出る。キッチンへ向かうと、エリーズが朝食の支度を始めるところだつた。

「あら、おはよう。

早いのね。ゆっくりしていくつれていいのに。」

手伝いに来たと思ったエリーズは、ヴィアンににこりと笑つた。

「お手伝いがあれば…。

雨、ひどいですね。」

ヴィヴィアンが言うと、エリーズは仕込み始めたばかりのローンスープを手伝うよう指示しながら、窓の外を見た。

「ガロンヌ川が少し増水するわね。

船もこの雨じゃ出ないんじゃないかしり…。」「

「困りましたね…。」

「そうなつたら、もう一晩いればいいわよ。」

大した事ないよつて言つて、エリーズは発酵させておいたパン生地を成型し始めた。

エリーズがパンに夢中になつたので、ヴィヴィアンも暫し無言でローンスープ用の茹でたとうもろこしを漉す。

単純作業を繰り返していくと、思考が広がり、普段考えない事を考え始める。ヴィヴィアンは手を止め、エリーズを見た。

エリーズは無心にパンを捏ね直したり、指先で成型したりしている。ブレッドの成型が終わり、今はバターを挟み込んで三角に切り込んだクロワッサン生地を巻いている。

「…ご主人が、亡くなつた時の事、考えたりしますか…？」

突然のヴィヴィアンの問い掛けに、エリーズがふと顔を上げ、一瞬驚いた後、くすりと笑つた。

「考えなくもないわよ…。」

あの人気がいなくなつて、生きていけるかとか、死んでしまうんじやないかとか…。」

「そんな時、どうするんですか？」

「泣くの。思いつきりよ。」

エリーズが肩を竦めた。言葉に似合わず、顔には満面の笑みが浮かぶ。

しかし、そんな笑みをすぐに仕舞い、エリーズは淡く笑つて、パン生地を弄り始めた。

「でもね。」

その後、きちんと考えるのよ。

独りで生きていく方法を。」

「…。」

「愛してるからこそ、私も最後まで生きるわ。

きつと気が狂いそうなつてはいるだろうけれど、そこから這い上

がつた先に、何かがあると思うの……。」

エリーズの言葉に、ヴィヴィアンは俯いた。

思えば、普通ならそうなのだ。

絶望の余り死んでしまうか、蛻の殻のようになったとしても生き続けるしか道はない。

自分のように恵まれた者など、そういうものではない。

申し訳なくなつて、エリーズを見る事が躊躇われた。

その様子に、ヴィヴィアンが悩んでいると勘違いしたエリーズが、戸棚からチョリーの砂糖漬けの入つた瓶を取り出し、一掬いスプーンで掬つてヴィヴィアンに寄越した。

ヴィヴィアンはそつとスプーンを受け取り、ゆっくりチョリーを口に含む。

甘酸っぱい香りが体中に広がり、何故か強張つて固くなつた体が解れていく。

「愛なんて陳腐な言葉を使いたくないけど、でも、そこにあるのが本当の愛なら、その強さの分だけ希望もあるものよ。そして必ずそこに、絶望なんてものは存在しないわ。怖がらなくて、大丈夫よ。きっと……。」

言われて、また俯いた。

今度は、込み上げて来る涙を堪えるためだ。

雨は中々止まず、船の出港もままならず、もう一晩イトダ家に居座る事になった。

「こんな雨は初めてだよ」と言つて、アルフォンスが笑いながら港と家を行き来してくれたが、彼が行ったところで船が出るという事でもなく、状況はただ、雨が止むのを祈るばかりとなつた。

雨が降つてゐるだけならよいのだが、嵐が近付いているという。この状態で船を出せば、転覆するのは火を見るより明らかだつた。イトダ家の扉が叩かれたのは、そんな日の午後の事だつた。

エリーズがエントランスからエインを呼んだ。

一同揃つて出てみると、そこには一人の老人が立つてゐた。身なりをみるとなり、どこかの屋敷に従事する執事のようだ。随分困惑した表情をしている。

「ご無沙汰をしております。アンダーソン教授。」

老人が頭を下げる、エインはぱっと笑つて走り寄つた。

「クレリーさん！」

クレリーと呼ばれた老人は、嬉しそうに自分の手を握り締めるエインにふと笑つた後、すぐに顔を戻した。

「教授、お元気そうで何よりでござります。」

「クレリーさんこそ。」

言いながら、クレリーの困惑した顔に首を傾げる。

「…何か、困つた事でも…？」

「はい…。」

エインの問いかに、クレリーは即答した。

「まあ、立ち話はなんだから。」

エインの後ろで、アルフォンスが居間を指差し、「お茶でもどうぞ。」と言つた。

「そのような…。すぐお話も終わりますので。」

クレリーが被りを振ると、エリーズが歩み寄つて、「いけませんよ」と言つ。

「雨に濡れていますもの。風邪をひきますわ。

温かいお茶を用意いたします。休みながらお話をさつてくださいな。」

エリーズに言われ、クレリーは肩を落として了解した。疲れもあつたからかも知れない。比較的すぐに折れたのだつた。

「私はラ・ロシェル郊外にござりますハーブ農園を営むサジュマン家に遣えてあります、クレリーと申します。

サジュマン家にはご長男が産まれず、一昨年暮れに当主と奥様が相次いで亡くなつたのを期に、当主の遺言に基き、婿養子を迎える事になりました、ご長女のリュリュお嬢様とお隣のジルベルスタイル家のご長男であるポーロ・ジルベルスタイル様のご婚約も間近に控えています。

そこで、当主と生前からお付き合いの深い教授に、その婚約に関してお願いがござります。

エティンバラのお屋敷へお手紙を差し上げておりましたが、ちょうどボルドーのご友人のお宅にいらっしゃるとお聞きしましたので、失礼かとは存じましたが、このように参上した次第です。」

イトダ夫妻とヴィヴィアンのために前置きを入れつつ所用を一頻り話し、クレリーは紅茶を半分ほど一気に飲んだ。

「リュリュが駄々でも捏ねてるのかな？」

エインが笑いながら言つと、クレリーは微妙な表情を浮かべながら頷いた。

「当家では古来より、家を継ぐ者が必ず受けなければならぬといふ試練がござります。

その試練を、ポーロ様が拒否なさいまして……。」

「ならば婚約は中止でよろしいのでは？」

アルフォンスが当然とも言ひ顔で言つ。が、しかしも当然、クレリーは困惑した。

重い空氣の中、エインが「…まあ」と少し氣楽な声を出した。
「ボクはその試練について知つてゐるから言へるナビ、この時代にすら相応しい試練ではないよね…」

アレ、困るもの。」

「ね。」と言ひながらクレリーを見ると、同意してよいものか迷つたクレリーが俯いた。

「で、リュリュはボクに何をしろと？」

全てを見通しているかのように、エインがクレリーを覗き込んだ。
顔は相変わらず楽しそうである。

「はい…。

お嬢様は教授に、ポーロ様の代わりにその試練を受けて貰えないか、と…。」

クレリーも内心は、そんな依頼を受けてもらえるはずなかつと思つていたに違いない。

最後のほうは、耳を澄まさなければ聞こえないほどに小さな声で呴かれた。

そんなクレリーに、エインはにんまりと笑つた。

「無茶言うねえ、リュリュは…。」

「申し訳ございません。」

「ボクがその試練を受けたら、サジュマン家はボクのものになつてしまつじやないか。」

「…仰るとおりござります。」

「それを承知の上なんだね？」

「……左様でござります。」

つまり、リュリュはポーロとの婚約に乗り気ではないという事だ。

そこまで聞いて、エインは腕組をして踏ん返り返つた。

「いよいよ受けよつ。」

そう言いながら立ち上がったエインの返事に、クレリーのみならず、その場にいた全員がエインの顔を見た。

「ヴィヴィアンですら、驚いてエインを見た。

「この雨だ。いつ出ても同じだろ？」

馬車は右湾に停めてあるんでしょう？

「…はい…。しかし…。」

「大丈夫。ボクら大した用事もないし。」

腰に手を当てて、エインが笑った。そしてヴィヴィアンを見て、「ヴィヴィには悪いね、まだゆっくり出来そうもない。」

と苦笑する。

「お気になさいませんように。」

仕方なく、そう言つ。

肩を竦めて呆れたエリーズが、窓の外を眺めた。

「ねえ、もうそろそろ雨も弱まりそうなのよ。

お食事してから出発にしてくださいない？ 大人数分作つてしまつたし。」

「うん。それがいいな。」

と、アルフォンスも頷いた。

「悪いね。」

エインもすっかり悪気がなさそうに言つた。

「ヴィヴィ、お手伝い、お願ひ。」

「はい。」

エリーズに言われ、ヴィヴィアンが席を立つた。

女性一人が出て行くと、エインもまだ出発ではないので席に着き直し、そしてみなで黙り込んだ。

雨音が部屋に響く。

空気が再び重くなり、クレリーが申し訳なさそうにエインを見た。

「申し訳ございません、教授。」

「気にする事はないよ、クレリーさん。

元々ボクの仕事はそれだもの。

サジュマン家の試練は、邸の地下にある古い遺跡を使う。あの遺跡は、それはそれは貴重なものが、掘り起こしてはならないものだ。

でも、その調査はしなければね。

調査序でにこなすよ。

元はサジュマン伯に再三お願いしていた事だから、目的はどうあれ、あの遺跡に入れるのは嬉しい。」

「それが目的か…。」

アルフォンスが呆れた。

「勿論。ボクが金に目が眩むと思った？」

「…まさか…。」

言いながら、含み笑いをする一人に、クレリーはさらに申し訳なさそうに声をかけた。

「それと…。」

「？」

「…こちらに窺う際、耳にしたお話なのですが。」

「うん。」

「…ベルトワーズ伯のアンお嬢様のご容態が、昨夜急変なさつたとか…。かなりお悪いとの事でござります…。」

クレリーの言葉に、エインがすっと笑顔を棄てた。

表情を隠すように席を立ち、窓辺に立つて、一人に背を向けてた。

一瞬見えた表情は、相応しい感情を見出せないという、複雑な表情だった。

瞳からは光が消え、無感情に近い虚ろな顔だ。

「…エイン…？」

「うん。」

アルフォンスが呼ぶと、エインが素つ気無く返事をした。

アルフォンスはエインの本心を知っている。エインは今や頑なに否定をするが、アンは一度は、エインと心を通わせた女性であった。その相手が死の縁にいるとなれば、心も穏やかではなかろう。

「…そのうちまた、持ち直すだろ…。」

「…氣樂を装い切れていない声で、エインが言つた。

「いつもそうだつたから。アンは…。」

「…相当、悪いんだろ…？」

「だからなんだと言うんだ。」

エインが少し苛立つた声で答えた。

「アンが死んだら…、それこそお前の”旅”も終わりじゃないのか

…。

お前は、アンを生かすために”旅”をしてるんじゃないのか…？
そのために、”彼女”も犠牲にしているんだろう？

ならば行くべきじゃないのか！？

アルフォンスが責めると、エインが黙り込んだ。

「…”道”を変えたいなら、今すぐ行くべきなんじゃないのか…。」

「…。」

尚も黙るエインを見て、状況を理解し切れていないクレリーはおどおどとしながらエインに言った。

「…も、もし、ご事情で先にベルトワーズ伯のお屋敷へ向かわなければならぬのでしたら、そうお嬢様にはお伝えいたします。

勿論、それからベルトワーズ邸まで馬車を回す事も出来ますが…。」

「…大丈夫、クレリーさん。」

エインが静かに言った。

そして、アルフォンスに振り向くと、窓辺に腰掛け、笑つた。

「…オレ、自論は曲げない主義なの。」

アンはまだ死ない。

極力、変化の少ない道を探る。

それが、オレが出来る”世界”に対する唯一の讓歩だよ。」

従事する対象ではないとは言え、家主と執事とメイドが一同にテープルに着き、食事をする光景は、なかなか珍しい事ではあった。その珍しい食事を終えた頃には雨も弱まり、空の雲も薄まって來た。

再び雨脚が強くならないうちに、ヒュインは出発を決めた。

「悪かったね。居座つてしまつて。」

「いや。構わんさ。

またいつでも来てくれ。」

「待つてるよ。」と言つて、アルフォンスがエインに向かつて拳を突き出した。ヒュインはその拳に、自分の拳を合わせる。

旧友の者たちと決めた、さよならの挨拶だ。また、会ひ事を誓つ。クレリーは自分で馬車を出して來たようで、まだ止まぬ雨に濡れないよう、エリーズが厚手の大きな布を持って來た。

「被つていれば、少しば濡れずに済みますわ。」

「有難うございます。エリーズ様。」

にこりと笑うエリーズにクレリーは何度も頭を下げる。

ヴィヴィアンは、別れの挨拶をする四人を馬車の傍らで見つめていた。

ああして語り合つほど、語る事が見当たらなかつた。

そんな、馬車に添えられた部品のよう、ひつそり立つてゐるヴィヴィアンに、エリーズが気付いて歩み寄る。

「ヴィヴィ。」

そう言って、手を差し出す。

握る事に少し躊躇をしたものの、おずおずと握り返すと、エリーズはヴィヴィアンの手を強く握り締め、もう片方の手をヴィヴィアンの手の上に置いた。口元をきゅっと引き締め、眉を哀しそうに顰めている。

「また必ず会いに来て頂戴。

教授と一緒によ。

もう一度と会えない氣がしてならないの。」

その予感は、的中するかも知れない、ヒガイヴィアンは心の底で思つた。

「約束して頂戴。必ずよ。」

何も言わないヴィヴィアンの手を、エリーズはさらに強く握つた。

ヴィヴィアンは、暫しの熟考の後、エリーズの手を握り返し、

「…」心配なく。

と言つて頷いた。

見送るイトダ夫妻に手を振りつつ、ラ・ロシェルへ馬車を走らせる。

ラ・ロシェルは、一二世紀に都市特権を得た港湾都市だ。ビスケイ湾の入り江があるので、大西洋で漁を行う際の漁港としても重要な役割を果たす。百一〇から百五〇キロ圏内に、ボルドー、ポワティエが位置する。

一二九三年にイングランド軍などの襲撃を受けた事を境に、イングランドとフランスの関係が悪化。翌年にギエンヌ戦争が勃発する。その後プロテスタントの牙城となつたこの街は、海と山裾に挟まれたのどかな街から、背の高い防壁や弓、銃撃、監視に使用した高く頑丈な塔に囲まれた街へと姿を変えて行き、一六世紀後半のユグノー戦争に於いては、カトリック勢力の激しい攻撃を受けても堂々たる防御で街を守り通した。

サジュマン家はその街の郊外で広大なハーブ農園を営む、割かし古い家だ。

どういう経緯があつてか、偶然か、本邸の真下には古い地下墓地の遺跡があり、小耳に挟んだエインは、一昨年前に亡くなつた家主のリュリ・サジュマン卿に遺跡の調査を懇願していた。

「直接お許しを貰うのは、叶わなかつたな…。それが残念でならない。」

馬車の窓辺に頬杖を突いて、エインはぼんやりと呟いた。

「奥様も大変聰明で、優しく美しい人でね。

物知りの卿と奥様一人で、ボクの知らない事を何でも教えてくれた。

ボクにとつては、ベルトワーズ伯と同等に恩人と言つべきかな。

一人娘のリュリュは、優しいお一人に大切に育てられすぎて我娘になつてしまつたが、お一人の教えをきちんと守る賢い子だよ。」

「確かに、ヴィヴィより年下だったんじゃないかな」と言って、エインがヴィヴィアンを見た。

「アンと同じくらいでしようか?」

ヴィヴィアンが何気なく言つと、エインは一瞬顔を曇らせた。クレリーの報告の時、その場にいなかつたヴィヴィアンに悟られぬようになり、エインはすぐに表情を戻し、考え込むのを裝つて窓の外に視線を逃がした。

「うーん…。そうだね、アンと同じ年くらいだった気がするな。アンはあんな身の上だから少し特殊だが、リュリュは至つてシンプルで明朗な子だよ。」

エインは屋敷での出来事を思い出し、あの時ほど怖い思いはしないと、遠回しに言つ。

その口許に、ふと笑みが浮かんだ。

「お、雨が止んで来た。」

エインの言葉に、ヴィヴィアンも窓を開け、外を見る。

雲は薄くなり始め、空が白く光り始めていた。雨は霧雨のようこそりやからと舞つてゐる。

「止みそうですね。」

「ああ。

サジュマン邸に着くのは深夜になりそうだけじ、その頃までは止むだらうね。」

そう言つて、エインが無言になると、ヴィヴィアンも窓の外を眺めた。エインはそれを視界の隅で確認すると、独り、流れる風景に思考を委ねた。

一方の窓辺で、ヴィヴィアンも独り、ぼんやりと思つ。この風景も、何度目だろうかと。何度か辿つた道程だった。

結局通らなかつた時もあつた。

だから、自分が真に目指す道の先には希望があると、可能性があると、信じられるようになつた。

いつもいつもこの風景の向こうで、あの人の帰りを待つていた。
まだ雨雲の晴れぬ空を覚えている。

あの扉から、あの人気が現れた時の事を思い出す。

今回もきっと、同じようにまたあの扉から現れる。
…現てくれる…。

道が一つではないと解つた時、そこには希望もあつたが、絶望もあつた。

次は駄目かも知れない。

その恐怖は、道が一つであれ、複数であれ、変わらない。
どこで分岐するかわからない。何に因つて分岐するかわからない。
だから、行動一つ一つ、言葉一言一言が、賭けだ。
隣で、ごとごと何かが落ちた。

見ると、いつの間にか居眠りを始めたエインの手元から、一冊の本が落ちていた。

静かに拾い、題名を見る。

『シャングリ・ラ』

カレーに着いたあと、暇潰しに勧められた本だ。

ベルトワーズ邸への道すがら、エインがこの本を持っている筈がない事に気付いた。

何故持つてゐるのか、答えはまだ出ない。

だが、エインがこの本を持っている筈がないのだ。
何故なら、この本は…。

「ヴィヴィー！」

部屋の外で、エインが叫んだ。

早足で廊下へ出ると、エインがエントランスに大きなカバンを運びながら、ヴィヴィアンを見ていた。

「お呼びでしょうか。」

訊ねると、エインはカバンを足元に置き、腰に手を当てて「暫く、留守にするよ」とさりとと言つた。

「ちょっと仕事が出来てね。

一週間くらいで戻ると思ひ。」

「どちらへ？」

「フランスの、ボルドー。

ベルトワーズ伯爵と言つ、知人がいてね。

その娘さんから、頼まれ事の手紙を受け取つたんだ。

その用事を済ませに行つて来るよ。」

ベルトワーズ。

紹介人のサンアッチから聞いた事はある。

サンアッチの友人でもあつて、確か昨年暮れに亡くなつたと言つていたか。

娘がいたのか、と思いながら、ヴィヴィアンは無言でエインを見た。

「本当は連れて行きたいんだが。」

ヴィヴィアンの無言を、同行を求める様子だと勘違いしたエインは俯いて、一瞬だけ哀しそうに笑つたて、何かを呴きながらヴィヴィアンに背を向けた。

その声は余りに小さく、素早く発せられたので、廊下の端にいたヴィヴィアンにはきちんと聞き取れなかつた。

あの時、微かに少しだけ聞こえた言葉を、ヴィヴィアンはまだ覚えている。

『…迷うから…。』

間違いなかつた。エインはそう呟いた。

意味は解らない。恐らく聞き取れなかつた部分と組み合わせなければ、この言葉の意味など理解出来ないだろ？

だから考えないようになはしている。

だが、時折ふと思いつく。そして、つい考えてしまう。

あの時、エインが迷う事を恐れていた事。

エインは何を恐れていたのだろう？。

手元の本を見つめる。

ぱらぱらとページを撫で、最後のページのメモを見る。前に見たのと同じように、何か書いたらしく上から、それを隠す

ようにして、ぐちゃぐちゃと線で塗り潰してあつた。

微かに見える文字は『↙』以外に考えられない。

今まで、この本をエインから手渡された事はなかつた。

だが、この本の事は良く知つている。

アンに呼ばれて、ヴィヴィアンはアンの部屋を訪れた。

「お好きな椅子にお座りになつて。

お茶をお淹れしますわ。」

扉の前で部屋を見回すヴィヴィアンに、アンはそう言って、部屋の中央にあるソファセツトを指差した。そして、くるりと回つて窓の脇に置かれたティーポットから、湯気の立つ紅茶をカップに注ぎ出した。

言われたとおりに、ヴィヴィアンがソファに腰を下ろすと、アンがその前にティーソーサーを置く。そして、自身の前にも置き、ヴィヴィアンの向かいのソファにどさつと座つた。

「ご迷惑じゃありませんでした？」

「え？」

突然の問いかに、ヴィヴィアンが一瞬驚く。

「ヴィヴィアンは表情があまり変わりませんもの。お呼びした事、怒つてませんの？」

「いえ。全く。」

ヴィヴィアンが短く答えると、アンはぱっと笑顔を作つて、深く頷いた。

「良かったですね。」

私、このような体ですから、外出も満足に出来ません。ボルドーの街まで行ったのも、もう何年前になるか…。」

アンは身の上話を皮切りに、部屋にある色々なものを次々に取り出しては、見せたり語つたりしてくれた。呼んだ以上、退屈をさせまいという気遣いが垣間見えた。

話の合間には、ヴィヴィアンは生い立ちなどを訊ねられた。

「生まれてすぐに両親が亡くなりましたので、孤児院に引き取られて育ちました。」

そう説明すると、アンは困惑した表情を浮かべて話題を切り替えてくれた。

その後も取り留めのない話は続き、意外なほどあつといつ間に、時間は過ぎた。

そして話は、クリーブスが扉をノックしたのを合図に、終わった。

「お嬢様、そろそろお休みになりませんと。」

「まあ、もうそんな時間ですの？」

「残念ですわ、ヴィヴィ。」

アンが立ち上がり、ヴィヴィアンの隣に座り、手を握つてきた。

「ゆつくりお休みにならなければ。」

「明日またお話出来ます。」

ヴィヴィアンが言つと、アンはにこりと笑つて「そうですわね」と言い、クリーブスを見た。

「ヴィヴィをお部屋にお送りしてね。」

「承知致しました。」

クリーブスが頭を下げ、ヴィヴィアンが立ち上がった。

すると、アンが「あ、ちょっと待って、ヴィヴィ」と言い、慌て衣裳部屋へ向かった。何やら「そこそと部屋を漁り、「ありますわ」と言つて出て来たアンの手には、一冊の本があつた。アンはそれをヴィヴィアンに差し出し、

「差し上げますわ。我慢を聞いて下さったお礼です。」

と言つた。

表紙には『シャングリ・ラ』とあつた。

ヴィヴィアンは驚いて、少し眉を顰めながら、

「そのような…。」

と首を振つた。

「いいの。受け取つて頂戴な。

ヴィヴィにどうしても差し上げたいの。」

笑顔だが懇願する眼差しにそれ以上の抵抗は出来ず、ヴィヴィアンは素直にその本を受け取ると、「大事に致します」と言つてアンを見た。

アンはそれは満足そうに笑い、そして呟いた。

「大事にしてね…。」

そう。

あの”日”から、この本は自分の手元にある。

この旅が始まったとき、この本はエインの屋敷の白室に置いて来た事も覚えている。

では何故、この本が今、ここにあるのか。

自分の手元にある以上、この本は”ここ”には存在しない筈なのだ。

なのに…。

「じそじそ」とエインが起きたので、ヴィヴィアンははつとして本を閉じた。閉じた時、ぽんと軽く音が立つてしまい、耳聴いエインが

ちらりとヴィヴィアンの手元を見た。

「ああ、すまない。

落としてしまったのか。」

「いえ……。」

差し出されたエインの手に、ヴィヴィアンは本を置いた。

エインは本を切ない眼差しで見つめ、愛でながら、語り始めた。

「この本はね……。」

「はい。」

「ボクの大切な人の物でね……。」

「…贈られた物ですか？」

言いながら、ヴィヴィアンは即座に、アンを思い浮かべる。だつてこの本は、自身がアンから貰つたものの筈だからだし、仮に”何か間違いが起きて”、”ここ”にもう一つのその本があつたとしても、やはり元の持ち主はアンであると思つたのだ。

「いや。

何と言つか……。」

珍しく、エインが口籠つた。

「受け継いだもの……？」

違うな。

言つなれば、その人の存在そのもの、かな……。」

「…？」

はつきりと語る事に躊躇いがあるのだろう、エインはわざと本来の意味とは遠い言葉を探している様だった。

「…大切な人。以前聞かせて下さつた方の事ですね。」

「うん。

ボクが人生でただ一人、愛した人だ……。」

「…生かす方法を探している……。」

「…うん。」

「そうだね」と言つて、エインは何故か哀しそうに笑つた。

ヴィヴィアンはその笑みに、ただならぬ感情が溢れた。確かめね

ばならぬと思つた。

そこには一つの下心もない、純粹に従事する者としての忠誠的なものしかない。

「教授。一つ、窺つてもよろしいですか？」

「うん？」

改まつてエインを見据えるヴィヴィアンに、エインはまるでこれから問われる事を見透かしているような静かな目を向けた。

「教授の大切な方。

”アン”でよろしいですよね？」

そうであれば、ヴィヴィアンにとつてアンも”護るべきもの”になる。

エインを護るためにには、その周りのものも護らねばならないかも知れない。

ヴィヴィアンの率直な問いに、エインは少しの動搖も見せなかつた。やはり、問いは予想の範疇だつたようだ。

エインは暫くヴィヴィアンを見つめた後、妙に大人びた微笑みを浮かべて小さな溜め息を吐くと、そのまま何も言わず窓の外に目をやつてしまつた。

ヴィヴィアンは答えを強要する事無く、それを”正解”と捕らえて独り納得した。

うとうとと居眠りを繰り返し、深夜過ぎにはラ・ロシェルの街灯
りがはつきり見て取れる距離まで来た。

その頃には、やや疲れつとも、繰り返した居眠りの所為で眠り込
む事も出来ず、エインもヴィヴィアンもぼうつと夜の闇を見つめて
いた。雨はすっかり止み、薄雲の向こうにぼんやりと月が浮かんで
いる。

馬車を操るクレリーは、トンプソンやワインストンと違つて道中
一言も声をかけて来なかつた。

気になつたエインが前方の覗き窓を開けると、そこでやつとクレ
リーが声を発した。

「もうそろそろでござります。」

「うん。体は大丈夫ですか？ 随分雨に濡れたでしょう。」

「ええ、大丈夫です。ご心配有難うございます。」

イトダ博士の奥様のお心遣いのお蔭で、雨も苦ではござりません
でしたよ。」

そう言つて笑うクレリーを、窓の隙間からヴィヴィアンが驚いた
表情で見つめた。

”イトダ博士”…？

今、クレリーは確かにそう言つた。

だが、エインとクレリーは何を気にする様子もなく、会話を続け
ていた。

やはりアルフォンスは、自分の知るあの”イトダ博士”的叔父と
いう人物だろうか…。そうであれば、”博士”と呼ばれるのも納得
が行く。自分の追う…、否、”追つていた”エインを始めとする”
c a k r a v a r t i n”のメンバーは、全員があの施設に所属す
る博士号の資格を持つ研究員から選出されているからだ。
ただ…。

クレリーは自分の知る限り、"ここ"の人間である。

事情でも話さない限りは、エインたちの素性など知る由もないだらう。

エインたちが自らの素性を明かすとは、考え難い。
単に言い間違えか。さもなくば、エインたちがふと仲間内で"博士"と言っていたのを、クレリーが鵜呑みにしただけかも知れない。
訳を尋ねるのは危険すぎる。

気にはなるが、ヴィヴィアンは、これはこのまま流すべきだろうと結論付けた。

「やっぱり夜中になってしまったね。」

窓を閉めながら、エインが席に戻った。

「雨が止んで、良かったですね。」

「うん。ボルドーからこの辺りは、少し土が軟らかいんだ。

雨がずっと続いたら、馬車も速度を少し落とさなきゃいけなかつただろう。

「運が良かつた。」

「教授もお疲れでは……？」

「ん？ うん。」

まあ、オジサンだしね。」

そう言つて、エインはケラケラと笑つた後、ヴィヴィアンを見て「済まなかつたね」と言つた。

ヴィヴィアンが首を傾げると、エインは淡く微笑んで、「ずっと引き摺り回してしまつているからね。」

ロンドンを出てから、休む暇なんてあまりなかつたし。」

「怪我もしてしまつたしね……」と言つて、ヴィヴィアンの脇腹を見る。

「まだ痛むかい？」

「いえ、痛みはもうありません。それほど深い傷でもありませんでしたし。」

怪我は私の不注意です。申し訳ありませんでした。

それに、ベルトワーズのお屋敷で、十分ゆっくりさせて頂きました。

私の事は、ご心配なさいませんよ。」

そう淡々と答えるヴィヴィアンを、エインは面白そうに見つめた。

「疲れたら、言いなさい。」

「はい。」

ヴィヴィアンが素直に頷くと、エインは満足したのか、背凭れに凭れて目を閉じた。

雨はすぐに止み、雨上がりのぬかるんだ道を、馬車は三時間ほど走ったのち、最後にガタガタと大きく揺れて、停まった。

軽く眠っていたエインとヴィヴィアンは目を醒まし、次いでエインの側のドアが開いた。

「到着いたしました。」

「お疲れ様でした。」

エインは肩を揉みながら馬車を降りると、ドアの前で大きく伸びをした。

そして、ふうと溜め息を吐き、後ろでエインがどくのを待つていたヴィヴィアンを振り向き、手を差し出す。

ヴィヴィアンが躊躇いながらも自分の手を乗せると、足を地面に下ろす。その時、片手にも拘らずエインが体付きに似合わぬ力でヴィヴィアンを支えたので、ヴィヴィアンはまるで羽根でも生えたかのようにふわりと着地した。

「…ありがとうございます。」

「はいはい。」

礼を言つヴィヴィアンに、エインは軽ひやかに言いながら首を向

けた。

すっかり闇に溶けて見難いが、馬車の前には蔓の絡まつた大きな

鉄の門が建ち、その向こうには大きな屋敷が見えた。

ベルトワーズ邸と違い、大きさこそ比べ物にならないがボルドー市内の建物に良く似たクリーム色の壁をしていて、緑の草木が良く似合う屋敷だった。

エインは屋敷へクレリーとヴィヴィアンを置いて、さつさと歩いていってしまう。

如何にも、来慣れている、という躊躇いのなさだった。

クレリーも構わないと言う感じで、ヴィヴィアンを誘導する。

「さあ、夜風で冷えます。

お屋敷へご案内いたします。」

「ありがとうございます。」

ヴィヴィアンはクレリーに続いて屋敷へと向かった。一足先に、エインは門を開けて敷地へ入っている。

後ろで馬車が動く音がした。振り返ると、いつの間にか来ていた従者らしき者たちが、屋敷の横にある納屋へ馬を戻しにかかっていた。

「夜遅くなってしまい、申し訳ございません。」

謝りながら、これまたいつの間にかエインを追い抜いたクレリーが、屋敷の扉を開けた。

物音を極力抑えるように、そつと開けた扉の向こうに、申し訳程度に炎の灯つたオイルランプが見えた。

促されて屋敷へ入ると、エントランスは吹き抜け天井の広々とした造りになっていて、大きな階段と、目の前に置かれた巨大な陶の花瓶が、闇の中で異様な存在感を醸し出している。花瓶には溢れんばかりに花が生けられており、日中ならばその豪華さに圧倒されたであろう事が、影からも窺えた。

ヴィヴィアンが感心したように花を眺めていると、気付いたクレリーが、

「それは、リュリュお嬢様が手入れをされている花瓶でござります。」

と説明してくれた。

「毎日花を入れ替えているのですか？」

「いえいえ。

花も生けて二日ほどは美しく生き生きと咲きますので、リュリュ様も花の様子を見ながら、一つ一つ入れ替えているのですよ。」

ヴィヴィアンの問いに、クレリーは案内のためにオイルランプに火を入れながら説明した。

「奥様が生きておいでの頃は、リュリュと奥様と一人でやっていたんだよ。」

花瓶を裏側から眺めていたエインが付け加えた。

「素敵なご趣味ですね。」

素直にそう思つて言つたヴィヴィアンに、クレリーは我が事のように満面の笑みで礼を言つた。

「さあ、暫くお使いいただくお部屋へ」案内いたします。
お客様には大変失礼になりますが、リュリュ様は就寝中でござりますので、物音にはご注意いただけますと……。」

「リュリュは寝起き最悪だからね。」

エインが言つと、クレリーが苦笑しながら歩き出した。

クレリーに付いて行くと、三階へ通された。

東角部屋はリュリュの自室で、その隣は亡きサジュマン夫妻の寝室だという説明を受けながら、エインはその隣、ヴィヴィアンはその隣の部屋を宛がわれた。

各々部屋に入ると、馬車から荷物を運んで来た従者がやつて来て、部屋の説明をしてくれた。

一通り案内され、終わるとクレリーがまずヴィヴィアンの部屋を覗き込み、

「今夜は遅うござります。」ゆっくりお休み下さい。」

と言つてドアを閉めた。

言葉は柔らかいが、問答無用で「もう寝ろ」という事のようだ。ヴィヴィアンは、髪を解きながら廊下の外の様子を伺つてみた。

エインにも同じ事を言つてこるのが聞こえる。

「それでは…。」

そう言つて、引き上げようとしたらしいクレリーを、エインが止めた。クレリーの声と異なり、エインは声の大きさを絞つて、うで、少々聞き取り辛い。

「ああ、クレリーさん。」

「何で『じぞこましょう?』

「アンについて、何か情報が来ていたら、教えていただけますか。」

「承知致しました。」

ただいま、ベルトワーズ邸へ遣しを出しております。

何かありましたら、直ちに戻るよう、言つけておりますので…。」

「

「ありがと。」

ボクの都合なのに、申し訳ない事です。」

「とんでもございません。」

教授には、亡き主も、お嬢様も、私たちも、お世話になつてありますから、お困りの事があれば、何なりとお申し付け下さい。」

「ありがとうございます。とりあえず、暫くはお世話になります。」

「はい。」

お休みなさいませ。」

「おやすみ。」

その後、ドアが閉まる音がした。

ヴィヴィアンは足音を殺し、ドレスを脱いでベッドに倒れ込んだ。アンに何かあつたのだろうか…。

ふと、馬車の中でのエインを思い出す。

そういえば一瞬だったが、アンを話題に挙げた時、エインが表情を暗くした時があつた。無関係ではなさそうだ。

だが、それならば、その時に教えてくれそうなものだ。と言つ事は、少なくとも自分には伝えるべき事ではないと判断したのだろう。ならば、訊ねる事はやめた方が良かう。

ヴィヴィアンはそうと結論をつけて、目を閉じた。

馬車では昼眠りこそすれど、あまり深く眠り込む事が出来なかつたので眠くないと勘違いしていたが、ベッドに横になると途端に眠気が襲つて来た。

疲れているのか…。

明日、朝疲れた顔をしては、エインに心配をさせる。アンの事もあるから、せめてそれ以外で無用な心配をさせるのは憚られた。きちんと休もう。

ヴィヴィアンはそのまま、眠りに着いた。

まだか、と、扉が開くのを待つていてる。
何もなればいい。

ここは大丈夫だと、あの人は言つていた。
だから、この扉が開くのを待つていてる。

握り締めた祈る手が痺れ始めた時、扉が開いた。

あの人は、扉が開く瞬間、とても険しい顔をして俯いていた。まるで、何かに怒つてゐるようだった。

だが、あの人はこちらを見るなり優しく微笑み、言つた。

「……。」

瞼が重い。

何とかこじ開けると、目の周りに塵が溜まつてゐるのが解つた。
擦り取りながら起き上がる。

体も重い。

ヴィヴィアンは、久しぶりに疲れの取れない睡眠をしたと思つた。
今、何時だろうか。

窓から差し込む光は柔らかく、カーテンを開けると薄雲がかかつてゐた。雨は降りそうにないが、晴れそうにもない。
そういうえば、いつも、こんな天気だった気がする。

部屋を見回し、洗面道具を見つけたので顔を洗うと、幾らかすつきりはしたが、まだどことなく、何となく、何かが拭い去れずに頭に残つていた。

ヴィヴィアンは溜め息を吐き、序でに深呼吸をした。

ここでの用事は、早く終わる筈だ。

その時、道はどちらへ別れるか……。

否、すでに別れているかも知れない。

如何なる道に別れていても、これで最後にしたい。

でも、最後ならば、望みどおりであつて欲しい。今までの悲しみ

が、無駄にならぬよう」。

ヴィヴィアンが窓辺に立つと、同時にドアがノックされた。

振り向き、「はい」と返事をすると、「お田覚えですか」とクレリーの声がした。

ヴィヴィアンがドアを開けると、クレリーが疲れた様子など何も感じさせない穏やかな笑みを浮かべて立っていた。

「おはようございます。

朝食のお支度が整いました。」

「あ、ありがとうございます…。」

「この家でも、結局客人扱いであった。ふと自分が”ここ”ではメイドである事を忘れそうになる。

「教授は既に食堂でお待ちです。どうしてもヴィヴィアン様がお出でになるまで食事は始めないとおっしゃつております。」

おかしそうに、クレリーが笑つた。

「すみません。そのような時間なのですね。」

「いえ。まだお休みになられていても構わないようなお時間ですよ。ちなみに、まだ八時を迎えておりません。」

の方は、早く遺跡調査に向かいたくてそわそわとしていらっしゃるのでしょうね。」

そう言われて、合点した。

「支度は済んでおります。」

ヴィヴィアンが言つと、クレリーが頷いた。

「それでは、参りましょ。」

クレリーの後に続き、一階へと降りる。

エントランスに差し掛かると、昨夜闇の中でも圧倒的な影姿を披露していた大花瓶が目に飛び込んできた。やはり、日の光を浴びた中でも、その姿は圧巻だった。そして、調和の取れた飾られた花々

の美しさに思わず目を奪われる。

階段途中で足を止め、暫し見惚れないと、気付いたクレリーが振り返つてふと笑つた。

「如何でしょうか?

夜の闇の中とは、当然ながら起きも違いましょう。」

「ええ…。

素晴らしいですね…。

こんなに素晴らしく活けたお花を見るのは、初めてです…。

そう言つて、ヴィヴィアンはどきりとした。

”初めて”…?

そうだ、この光景は初めて見る。

あの扉の記憶がある以上、この屋敷へも”来ている”筈だし、思い返せば見覚えもある。

だが、この花は…。

この花を見るのは、初めてだ…。

やはり道は変わつていたか。

あとは、どちらに変わつたかだけだ…。

ヴィヴィアンが無意識にきゅっと唇を噛むと、クレリーが「冷えますか?」と心配した。

「い、いえ。

済みません。教授もお待ちですね。」

慌てて、ヴィヴィアンが階段を下り、クレリーに駆け寄ると、クレリーはにこりと笑つて食堂へと歩き出した。

通された食堂では、既に席に着いていたエインが詰まらなぞうに頬杖を突いてだらけていた。

が、ヴィヴィアンを見るなり、ぱっと起き上がり、満面の笑みを浮かべる。

「おはよつ。」「

「おはよつじやこます。

お待たせしてしまつて、申し訳ありません。」

一応謝罪をすると、エインは手をひらひらさせて「「「めんどくせん」と謝り返してきた。

「クレリーにはああ言つたけど、まさか呼びに行つてくれるとは思つていなくてね。」

クレリーが気を利かせすぎたらしい。

食堂に待機していたメイドが、エインの真正面にある椅子を引いたので、ヴィヴィアンは素直に座り、姿勢を正した。

「リュリュはもうそろそろ来るよ。

「あの子は朝早くてね、起きてすぐに馬を走らせに行くんだ。」

「乗馬をされるのですか。」

「幼少の頃から、馬好きの奥様の施しを受けてね。

かなりの腕前だよ。」

「教授も、乗馬はお上手なのですよ。」

エインとヴィヴィアンの会話にて、食事を運んで来たクレリーが加わつた。

ヴィヴィアンがエインを見ると、エインは「その話はナイショだ」と言つたのに、と苦笑した。

「リュリュに比べたら大した事ないからね。

それに、ホラ、ボクは体動かすの似合わないでしょ。」

くすくすと笑うエインの前にポタージュの皿を置きながら、クレリーは一言「ご謙遜を」と言つて話を切つた。

次いで、メイドたちがチキンソテーとパンを傍らに並べる。

「コーンポタージュと、チキンのハーブ焼きをご用意致しました。

バタールとメティユはリュリュ様がご用意したものです。」

「リュリュの手作りパンか。当たり前だが、久しぶりだ。」

並べられたバタールとメティユは焼き立てらしく、湯気を立てている。ほんのりとバターと、小麦粉の香りが鼻を掠める。メティユ

からはさらに、ライ麦の香りもしてくる。

そこへ、食堂の扉が開いた。

「あー、おはようございます。」

はきはきと切れの良い声がした。

振り向くと、パンツルックの少女が一人、鞭を持って立っていた。ふわふわとしたわわなブロンドの髪を勝気に結い上げている。

「お嬢様、お着替えなさってからいらっしゃれば宜しいものを…。」

クレリーが少女の姿を見て、慌てて言つ。

なるほど、彼女がリュリュのようだ。

ヴィヴィアンが見つめていると、リュリュは大きな目をさらに大きくして、ヴィヴィアンとエインを交互に見た。

「珍しいです事。エイン様が女性をお連れになるなんて。てつくり、女性にご縁のない方だと思つてましたのに。」

「お嬢様！」

遠慮なしに言葉を並べるリュリュを、クレリーが嗜めた。

「ああ、大丈夫、クレリーさん。お気になさらず。」

「そうよ。」

エインのフォローも、リュリュの同意で形無しになる。だが、言葉のキレとは裏腹に、リュリュからはその行いを赦せる何かが感じられる。

「もう少しゆづくり休んでいらしてもよろしかったのに。」

「歳だから早いんだよ。」

リュリュが一応気を遣うと、エインは肩を竦めて「冗談を言つ。」

「エイン様はそうでしょうけど。」

エイン様、お気付きになりませんの？

そちらの女性は少し疲れていらっしゃるようですのよ。」

そう言つてリュリュがヴィヴィアンを見たので、エインは少し驚き、ヴィヴィアンは慌てた。

確かに寝起きは疲れてはいたが、言つ程のことではなかつたし、エインに余計な気を遣わせたくなかつた。

「い、いえ。済みません。疲れている訳では。」

「そうですの？ 隨分口数が少ないので、お疲れなのかと。」

そこで判断されたのではたまらない。

ヴィヴィアンが微かに困惑すると、エインが笑いながら、リュリュに圧倒されているだけだよ。」「

とフオローした。

「あら、私お喋りすぎました？

「ごめんなさい、気を遣わせてしまつたかしら？ 先にお食事なさつて。着替えてまいります。

今日は馬の「機嫌が良くなくて。」

ぱつぱつと手早く話題を切り替え、リュリュは腰を少し捻つてエインとヴィヴィアンに背中を見せた。

馬のご機嫌が悪かつた所為で、どうやら落馬しかけたようだ。背中が少し汚れていた。

その汚れを見せて、ふうと溜め息を吐くと、リュリュは会釈をして食堂を出て行つた。

嵐の過ぎ去つたかのように一変してしんと鎮まり返つた食堂に、クレリーの申し訳なさそうな声が響く。

「お騒がせを…。

「どうぞ、お食事をお召し上がり下さい。」

クレリーに言われ、食事を始める。

ハーブ農園であるからこそその多様なハーブを使っての味付けと、肉類の多さがベルトワーズ邸で食した料理とは大分違つたが、見た目ほどに脂こくないチキンソテーとリュリュのパンはとても素晴らしい。

加減してくれたのか手頃な量であったので、リュリュが着替えを終えて戻つて来た頃には、一人の皿は空になつていた。

「如何でした？」

「相変わらず、リュリュのパンは美味しい。」

エインが率直に言つた様子でリュリュがふふんと

笑った。

「でしょ? ？」

「そちらの…。」

ヴィヴィアンにも同意を求めようとしたリュリュが、一呼吸止まつて「…お名前なんて仰るの?」と言った。

「ああ、すまないね、リュリュ。

「こちらはヴィヴィアン。ボクの助手をお願いしている。」

「助手の方ですの。」

そう言って、リュリュが手を差し伸べたので、ヴィヴィアンは立ち上がりてその手を握り返す。

「ヴィヴィアン・トーマスです。」

「リュリュ・サジュマンと申します。リュリュと呼んで下さいな。まったく、エイン様の助手なんて、この世で一番大変なお仕事でしてよ。」

リュリュがエインをからかうと、食後の紅茶を運んで来たクレリーが、また「お嬢様!」と嗜めた。

「お客様に何という事を。」

「いいじゃないの。本当の事ですもの。」

「ねえ? ヴィヴィアンもそう思いません?」

同意を求められ、思わずエインを見る。エインは面白そうに笑いながら、こちらを見ていた。「どうどもおめでたばよい」。そんな表情だ。

きっと、リュリュの性格を理解しているからだらう。

「まだ…、助手になつたばかりですの…。」

ヴィヴィアンが差し障りのない答えをすると、リュリュは氣の毒

そうに眉間に皺を寄せた。

「これからご苦労なさるのよ。」

困った事があつたら、何でも相談してくださいな。」

そう言って、リュリュはぎゅっとヴィヴィアンの手を握り直し、しかしごく手を離し、自分の席に着いた。

次々ページを捲るよう¹に展開するリュリュを、ヴィヴィアンは暫く呆然と見つめ、理解した。

「優しいお二人に大切に育てられすぎて我慢になってしまつたが……」

有無を言わせぬ言動に、止まらない展開。自分のペースを維持するために必要不可欠な要素である。

だが、これが嫌味になら²るのは、偏に両親の教えが大きかろうと思われる。

踏み込んで赦される境界線を理解している雰囲気なのである。そのリュリュは、エインと話しながら目の前に運ばれた食事に手を伸ばしていた。

「……婚約者のポーロがどうしても遺跡に入る事を拒みますの。」

どうやら、早速クレリーが持つて来た話を始めているようだ。

ヴィヴィアンも、席に着き、話に耳を傾ける。

そういえば、ポーロが拒んでいるのは、『家を継ぐための試練』ではなかつたか。

「あそこに入らないと、『試練』は受けられないのは知つているのかな？」

「知つてますわ。お話してありますし。

元々、それを承知した上での婚約でしたもの。」

「……気が変わつたかな……？」

ふむと溜め息を吐いて、エインが腕組をした。

「そうならそれで構いませんの。でも結婚はする気なんです。

ポーロは、『試練』の内容が嫌なのですわ。」

「まあ、解らないでもないけど。」

そう言つて、エインが笑うと、また食堂の扉が開いた。

「おや……。」

入つて来たのは若い男性で、エインを見るなり不審者を見るような視線を向けた。

その表情を見たりュリュは、間髪入れずに

「失礼ですわよ。」

と言つた。

「こちらは?」

「以前にお話しましたでしょ?」

エティンバラのアンダーソン教授です。」

リュリュが簡素な説明をすると、男性は「ふうん」と言つてエインを

見た。

「ようこね。

ポーロ・ジルベルスタインと言います。」

「お邪魔していますよ。

キミのお話も窺つています。

遺跡には入りたくないとか。」

相手をポーロだと知つて、エインは早速本題を投げつけた。

「当たり前でしょ?」

「あんな”試練”、誰も受けたくないですよ。あれは拷問ですよ。」

「言いたい事は解りますけど。」

リュリュにしたのと同じよう、エインは少しひそりと笑つた。

同意に気を良くしたのか、ポーロは大袈裟に腕を広げて「でしょう!?」と声を上げた。

「でも…。

キミはそれに同意してたのでしょ?」

エインが笑みを消さずに静かに言つと、ポーロは少し身を引いて、口を尖らせた。

「確かにそうですけど。

後々どうにでもなると思つたんですよ…。

こちらの夫妻もなくなつたし、この辺りでそのよつたな慣わし自体をやめさせようと思つたのです。」

「ま、言い分は解りますけど。

サジュマン卿は、ここを継ぐ者には絶対に遺跡に入つて貰わなければならぬと思つていたようだし、亡くなつたとは言え、そのご

意思を簡単に棄てる訳にも行きませんね。」

エインが俯いた。

「エイン様は『いいからしたと言つた事は、お抜けして下さるといつて下さいう?』

然も当然と言つよつて、リュリュがエインをちらつと見た。

エインはにやりと笑つて、

「まあ、そうだけじ。」

と言い、足を組んだ。

「ボクが”試練”を受ける以上、それを果たした時は、サジュマン家はボクのものだと承する事が条件かな。」

その言葉に、ポーロは「な、何を言つんです!?」と驚き、リュリュは「当然ですね」と言つた。

ポーロがリュリュに詰め寄る。

「何を言つてゐんだ、キミは!?

僕と結婚しないといつ事か!?

「違いますわ。

”試練”を受けた以上、この家がエイン様の物なのだと承するだけです。

不都合がありまして?」

「不都合つて…。僕たちは家を手放す事になるんだぞ?」

だから僕は、下らない”試練”などもう棄ててしまえば言つていいんだ。」

「ああ…。」

ポーロの声に、エインが自分の声を被せて遮つた。

「誤解しているようなので説明をしようつか。

ボクは別に、この家が欲しいと言つてゐる訳ではないよ。

ボクが”試練”を受けた。だからボクはこの家を継ぐ資格を持つている、と理解しろといつ事。」

幾許か遠慮をしてゐるような遠回しなエインの説明に、ポーロの

眉間の皺が深くなる。

「解りませんの？」

”試練”はエイン様が受けたのだから、本来この家を継ぐ資格を持つのはポーロではなく、エイン様だと自覚するべき、という意味ですわ。」

リュリュの補足にやつと理解をしたポーロは、逆立ちしていた眉を今度はハの字に下げ、動搖した。

「あなたには本来、家を継ぐ資格がない、といつ自覚をして欲しいのですわ。

その上で、私はあなたと結婚するのですわ、ポーロ。

ポーロは知らないでしようけど、この家は、とても大切なものを護るためにあるのです。

”試練”はその、大切なものを見、それを自覚するために行われるものだと、お父様は言つていました。

「それを断る以上は、無資格者だと自覚をするのが、先代への敬いだと思つよ。」

「……。」

押し黙ってしまったポーロに、エインはふと笑つた。

「そんなに深刻な話でもない。

さつきも言つたけど、ボクはキミの言い分にも理解を持つてはいる。

でもね、人の意思とこつものは、そう密々く無下にしてはいけないものだよ。」

諭すようにエインは言つて、さらに口の端を上げた。

「さて。」

この”試練”は日を選ぶようなものじゃないから、リュリュの食事が終わったら、早く済ませてしまおう。リュリュは、ボクに同行しなければならないよ。

「存じてますわ。お待ちくださいね。」

リュリュはそう言つと、それまで止めていた食事を再開した。

三人のやり取りを聞きながら、端で蚊帳の外だったヴィヴィアン

は、思い出していた。

あの扉から出て来たあの人ガ、それから暫く、利き手である右手を使わなかつた事を。

異変に気付いていたのに、歩み寄る事をしなかつた事を。素知らぬ振りがその後の道をさらに別けるのだとしたら。あの結果を招くのだとしたら…。

今度は、あの人手に触れてみよつ。

そう思った。

急かされ慣れているのか、元々早食いなのか、リュリュはあつという間に食事を終え、十分ほど一休みをしたあと、クレリーを呼びつけた。

今日何が行われるかは当然承知しているクレリーは、二つのオイルランプと予備の蠅燭、フード付きのケープを持って食堂に現れた。クレリーがケープをリュリュに手渡すと、リュリュはケープをはらりと羽織いながら、

「参りますわよ。」

と言つて、すたすたと歩いて行つてしまつた。

ベースに慣れているクレリーとエインも構わず後に続き、まだ慣れていないヴィヴィアンと、何故か挙動不審のポー口はその後に着いた。

先頭のリュリュは真つ直ぐエントランスへ向かうと、階段の脇にある小さな扉を指差した。

「クレリー。」

呼ばれたクレリーが、扉に鍵を挿し込み捻ると、その見た目にそぐわぬ重い音が響いて錠が開いた。

「物置じやなかつたのか。」

ポー口が言つた。屋敷に出入りしているポー口にすら物置と思わ

れていたその扉は、一見すると壁と同化して、エインとビガイヴィアンも気付かなかつた。

少し得意げにリュリュが扉を開ける。

「遺跡への扉です。

ここからはずっと階段を下ります。クレリー、暗いのでランプをお願いね。

しつかりした階段ですけど、足元にお気をつけあそばせ。」

そう言って、クレリーが灯りを点ける前に、リュリュは階段を下り始めた。足取りを見る限り、慣れている様子だつた。

「どうぞ。」

クレリーも、灯りの点いたランプをエインに手渡すと、もう一つを持つて駆け足でリュリュを追つ。彼もまた、慣れている様だ。

「行こう。」

エインを先頭に、ヴィヴィアンとボーロも続く。

中は円柱の内側のように円形に掘られた空洞が下へと続き、遺跡への道の割りに清新しつかりとした階段が、螺旋状に伸びていた。

下を見ると、リュリュは既に三つほど螺旋を下つた先にいて、漸くクレリーが追いついたところだつた。

ひんやりとした風が吹き上がり、時折ドレスを揺らす。

風があると言う事は、この階段以外にも出入り口があると言つ事だろうか。

楽しそうに階段を下るエインの後姿を眺めながら、ヴィヴィアンとボーロは無口で着いて行つた。

やがて、「到着しましたわ」というリュリュの声が聞こえた。

見下ろすと、階段終わりにリュリュが立つて、こちらを見上げている。

徐々に下る階段の隙間から、リュリュの皿の前を見ると、重い鉄製の扉がどんと立つていて。

エインたちが到着すると、リュリュは説明を始める。

「入り口はここです。

出口が、別の場所にあります。

場所はクレリーが存じておりますので、教授と私が入つたら、ポートヴィヴィアンはそちらで私たちをお待ちくださいね。

教授、準備はよろしくて?」

リュリュがエインを見上げて訊ねた。

「どうぞ。」

エインがランプをリュリュに向けて翳しながら答えた。

「では、行つて参ります。」

「お気をつけて。」

クレリーがリュリュに鍵を一つ渡し、頭を下げて一步退くと、リュリュは慣れた手付きで鍵を開けた。扉の向こうには深い闇が広がり、寸分先も見えぬほどだつた。

が、リュリュは躊躇いもなく暗闇の中へと歩き出す。エインはエインで、ここにこと笑いながら歩き出し、ヴィヴィアンに振り返つて「行つて来るよ」と言つと、扉を閉めた。

クレリーは暫く扉の向こうから聞こえる足音に耳を澄ませたあと、合鍵らしいもう一つの鍵で扉を施錠した。

「さあ、私どもは出口でお待ちしましょ。」

「鍵、閉めちゃつていい訳?」

まだ何故かおどおどしているポーロが、クレリーの袖を引っ張つた。

「はい。ここへ入つたら何があつても、出口から出なければなりません。」

それが、ここへ入るための条件でござりますから。」

「でも、もし入つてすぐに何かあつたら……。」

「致し方ございませんでしょ。」

そういうルールでござります。」

「ルールつて……!」

下らん。だからこんなもの埋めてしまえばいいと……。」

「ポート様。」

若干取り乱したポートの声を、クレリーがぴしゃりと遮った。

「ここへ入る者は、本来”見てはいけないもの”を見る。

そのために、捷を護れぬ者は生きてここを出てはいけない。

これが、このサジュマン家の慣わしでござります。

アンダーソン教授も、それをよくよく承知の上で、此度の我侭をお聞き入れ下さったのです。」

「見てはいけないもの”つて……なんだよ……。」

ポートはそう言つと、ヴィヴィアンを見た。

ヴィヴィアンは表情一つ変えない。元々だが、今回に関しては理由がある。

「何で、あんたもそんな何ともない顔してるんだ……？」

「……。」

理由はあるが、それを口に出して良いかは解らない。どうしようか思案した挙句、ヴィヴィアンは一言、

「お戻りになると信じてありますので。」「
と言いつた。

クレリーの案内で屋敷を出、三人は屋敷の北側にある石造りの古い建物へ向かつた。

出たちは小さな教会だが、十字架が立つてゐる訳でもなければ、神々の像もない。

サジュマン家の敷地の端にあるようで、屋敷から三十分は歩いた。苔生した石のレンガを積み上げて作った背の高い壁に囲まれ、建物はひつそりと建つていた。

クレリーはジャケットのポケットに入れた鍵束を出し、一番小さな鍵を掴むと、それを扉の前に張り巡らされた太いチエーンを解くための鍵に差し込んだ。チエーンは建物の側面の壁に端が埋め込まれ、外開きの扉が不用意に開けられないよう、扉の前を両手で塞ぐように回されている。

開錠されると、チエーンはどさりと地面へ落ちた。

「ポーロ様、大変申し訳ない事ですが‥。」

と言つて、クレリーがポーロに振り返つた。

先程クレリーに窘められ、ヴィヴィアンの一言を受けてすっかり意氣消沈してしまつたポーロは、意図を察して石の扉を手前に引いた。かなり重みがあるので、ポーロは足を踏ん張り、両手を添えて扉を引っ張る。

「ず、ずずず‥」と石と石の擦れる音を立てながら、扉は少しづつ開いた。

人一人通れる隙間を開けて、ポーロがクレリーを見る。

「有難うござります。」

そう言つて、クレリーは中へ入つた。

ポーロが譲つてくれたので、ヴィヴィアンが次に入る。

中は見た目通りに狭く、何の装飾も施されていない、ただの石の箱のようだつた。

明り取りのために少しだけ開けられた天井付近の窓から、申し訳程度の日光が入るだけで、ランプを点けないと暗くて何も見えなかつた。

クレリーがランプに火を灯すと、漸く物が判別出来る程度に、ぼんやりと明るくなつた。

「こちらの祭壇の下から入つた通路の奥に、内側からしか開かない扉がござります。

あの遺跡は真つ直ぐここへ道が続いております。突き当たりにあら階段を昇ると、ここに出るのでござります。」

ゆつくりとクレリーが説明した。

「内側からしか開かない？」

ポーロが問うと、クレリーは「はい」とこやかに頷いた。

「内側から施錠されております。鍵は入り口の扉と同じ鍵でござりますので、今お嬢様がお持ちの鍵で開くようになつております。」

説明を受けて、ポーロは祭壇をぐるりと周つた。

その表情は何か言いたげではあつたが、敢えて口には出せなかつた。

「さあ、参りましょ。」

クレリーはそう言つと、祭壇の裏へと周る。

祭壇の裏の床には、小さな木の扉があつて、それを開けると地下へと下る階段があつた。

その階段を、クレリーに続いて下ると、屋敷の地下と同じような地下空間が広がつていた。

屋敷の地下より若干きちんと壁などが施されていて、といひどいろが崩れている。

階段の向かいの壁には、屋敷の地下にあつたのと同じ、鉄の大きな扉があつた。

「あそこから出て來るのか。」

「左様でござります。」

鍵は内側から施錠してござります。」

ポーロはそれを聞いて、疲れたように、崩れた少し大きめの瓦礫に腰を下ろした。

ヴィヴィアンはそんなポーロを横目に見つつ、扉を注視した。

そうだ。間違いない、この扉だ。

記憶では、あの人…、エインはこの扉を開けて出て来る。

その時、真っ先にすべき事を考える。

エインは傷を負つて出て来るはずだ。

その手を握る勇氣があるか。

それだけが、問題だ。

今まで、触れる事など赦されなかつた。

誰に咎められた訳ではない。ただ自分の中で、そういうルールを作つてしまつただけだ。

何故ならエインは、エインが心を赦した、たつた一人の彼の愛する人のものであり、自分が触れてはいけないものだからだ。

だがその拘りが、その後の結末を決めるなら、そのルールは打ち破らねばならない。

中は冷える。

クレリーが用意したケープのお蔭で、リュリュは冷えずに済みそうだったが、自分はどうしようもない。

せめても、と、捲り上げていたシャツの袖を下ろした。ジャケットも持つて来れば良かつた。

「いつも、ここは寒いですわ。」

カツンと甲高いヒールの音を響かせて、リュリュは堂々と歩いている。

「そんなに頻繁に来ているのか。」

エインが呆れて言うと、リュリュは少し口を尖らせ、俯いた。

「見て置きたかったんですの。」

「ポーロのために、かい？」

エインが続けると、リュリュがぱつと顔を上げた。ランプ一つの明かりでは十分な光量はないが、それでもリュリュの頬が赤くなつたのは見て取れた。

「ちつ……」

「違わないとは言わせないよ。」

尚からかうエインを、リュリュが睨み付ける。が、すぐに俯いて、無言になつた。そのまま一步、エインの前を歩く。

なるほど、とエインは思う。

両親への敬意として、この”試練”は受けなければならない。だが、ポーロの気持ちも汲みたい。

彼を何とも思つていらないのならば、自分を呼び付けてまで両親の言い付けを守る事はしないだろう。どうにか”試練”の本質を回避して尚、”試練”をクリアする方法があるなら、それを見出したかつたのだろう。

だが、結局大した方法も見付からなかつた。自分を呼んだのは、最後の抵抗、という訳だ。

「私だつて……」

この”試練”が少し『おかしい』事は承知しますわ。」

リュリュが呟いた。

「あんな方法で”烙印”を身に宿す事で家を継ぐ事の証明にするなんて、まともな事ではないですもの。でも、お父様もお母様も、それを守つたのでしょうか？」

小さな頃、父の手のひらに傷を見た事、思い出しましたの。父が守つた事なら、”試練”の理由を知らなくても、それは必要な事だと信じられますわ。」

「そうでしょう?」と、リュリュが問いかけた。

「信じると言つ事は、無防備になると考へるからね。勇気の要る事さ……」

エインの言葉に、リュリュが頷いた。

「そうですね。

でも、本当は違うんです。」

前を歩くリュリュが立ち止まつた。

「違うんですわ。

信じじると言つ事は、決して無防備になる事では、ないのですわ…。

「 そう言つて、リュリュがエインからランプを取り、一步踏み出した。

ランプの明かりで照らされた先は行き止まりになつていて、入り口と似ても似付かぬ黒い色の不思議な素材で出来た大きな扉があつた。取つ手はなく、その位置には奇妙な形が彫られた円柱状の金属が出つ張つている。

「お父様は、この扉を守るために、あの”烙印”を背負つたのですわね。」

扉を見上げて言つリュリュに、エインが静かに頷いた。リュリュはそれを振り向きもせず、感じていた。

「教授は何もかもご存知ですね？」

「この扉の先に何があるかも。」

父が…、何者かも。」

背を向けたままのリュリュに、エインは再度頷いた。知つているとも。

何もかも。

エインの無言が意味する答えを察したリュリュが、ランプの蓋を開けた。風で揺れる炎を、扉の金属の出つ張りに翳した。

金属は見る見る赤くなり、熱を帯びた。

それを確認して、リュリュがエインを振り返る。

「父は、申しておりました。」

この先にあるものは、あなたのためにあるものだと。

あなたの手に渡すために、祖父から受け継いだ秘密なのだと。

祖父からの手ではなく申し訳がないけれど、あなたにお返し致し

ます。」

リュリュはそう言つて、顔を歪めた。

「父はこの先にあるものがあなたの手に渡る事を拒んだ。何故かは解らないけれど、それがあなたのためだと言つていました。」

諦める事が、運命を受け入れる事が、人にとっては幸福なのだと。でも、エイン様。

私は何も事情を知らないけれど、この先にあるものがあなたのものなら、それはお返しなければならないと思うのです。

本当は、父のお詫びをポーロにさせたかった。

でも、ポーロには何の関係もない事ですものね。ならば私がとも思いましたが、ここを見て、その勇気も沸かなかつた。

こんな方法しか思いつかなかつた事、許して下さい。」

そんなリュリュに、エインは苦悶の表情を見せて俯いた。

「済まない……。」

たつた一つ、我慢を叶えるために、それを繰り返すたびに、犠牲が増える。

解つていた事だが、どうしても諦める訳に行かなかつた。この屋敷に通つたのも、真の目的は遺跡の調査やこの先にあるものではない。

必要のない傷を負つた、サジュマン卿へ頭を下げるためだ。

屋敷を訪れるたび、サジュマン卿は小言こそ言つたが、それ以上の事は言わなかつた。

恨みの一つも言つてくれれば、と思つては、それが甘えだと自覚を繰り返した。

なれど、この先にあるものも必要なものに変わりはない。

この恩は、リュリュに返すべきだ。彼女が、知りたい事を語るという事で。

エインは赤く熱した鉄の円柱を、右手でぐいと押し込んだ。触れる瞬間、じゅ、と厭な音がして、厭な臭いが発つた。リュリュが後ろで息を飲んだのが解つた。だが、リュリュは何も言わず、エイン

を見つめていた。

円柱が十分窪んだ事を確認し、エインは今度は左手を扉に添え、両手で扉を押した。両開きの扉は、カツンといつ姿に似合わぬ軽い音をどこからか響かせて、開いた。

扉の隙間から、リュリュにひとつは嗅ぎ慣れない、エインにひとつは懐かしい臭いが漂う。

すんと鼻を掠める油の臭い。

扉を十分に開け、中へ入るエインに続いて、リュリュも辺りを警戒しながら入った。

狭い部屋の暗闇の中に見えるのは、見た事のない物体。丸みを帯びたそれは、それが何か理解をしなくとも、美しいと感じる形をしていた。

「キミのお父様はね……。」

エインは懐かしそうに部屋を周った。壁沿いに置かれた棚は、扉と同じ材質で、つるりとして、明かりを灯すと汚れ一つない真っ白な色をしていた。その棚すら、エインは愛おしそうに撫でている。

「ボクの親友の息子なのさ。」

「…え？」

父が親友の息子と言う事は、親友は祖父になる。有り得ない事ではないだろうが、リュリュは不思議な印象を持つた。

「ボクらは遠いところから旅をして、”ここ”へ辿り着いた。

ボクらは一つのチームを成していて、名は”cakravart in”。意を”輪を動かすもの”、即ち”世界を照らす太陽”と言う。

とある事情で様々な”場所”へ旅立つ事を命じられた、”元の場所”では親友同士だったボクたちは、その使命を果たすために”ここ”に辿り着き、使命を全うするために生きて来た。

だが…、その中で一人、使命から外れ、私欲を追い求める裏切り者が現れた。

その私欲は、”世界を乱す”禁忌だった。

だから、キミのお祖父様を始め、チームの面々はそれを止めようとした。諭そうと思つたんだ。

でも、裏切り者は誰の言葉も聞き入れなかつた。

彼らは反対もしたが、同情もしてくれた。

だから、最期の理解として、その私欲を叶えるために必要なものを、隠しておいてくれた。』

「それが、ここにあるものですね、エイン様？」

「うん。」

短く頷いて、エインが棚の上にあつた小さな何かを摘み上げた。エインはそれを、丁寧にハンカチに包むと、ポケットに入れた。

「エイン様。」

リュリュの呼びかけに、エインが振り向いた。

「エイン様の”夢”は叶いますの？」

その表現に、エインが少し驚いた。

リュリュはふと笑つて、エインに歩み寄つた。

「祖父から聞いてます。」

『自分には、その生を全て擲つてでも叶えたい”夢”を持つている親友がいるんだよ』つて。

その方は、たつた一人の女性のためにこの世界を敵に回したそうですのよ。

でも、それにはそれだけの価値があるつて…。

詳しく述べ下さらないのに、祖父はいつもその話をして、大威張りでしたのよ。』

「…「ウガ…？」

エインが思わず呟くと、リュリュはぱつと笑つて、
「ええ。やつと祖父の本当の名前がわかりましたわ。
やつぱり”「ウ””とこつのですね。」

「あ…。」

してやつたりという顔で笑うリュリュに、エインが焦つた。

「誰にも言ひませんわ。」

今、”エイ”にいる”コウ”様にも。「…な…。」

益々焦るエインに、リュリュは人差し指を唇に当てて見せた。

「祖父からこれも聞いてます。」

『この世界には、もう一人の私がいるんだよ。歳は違つけどねつて。』

「…。」

「何の話かは相変わらず解りませんわ。だつて、祖父が話していた”親友”が、エイン様だなんて、今知りましたもの。でも”コウ”という名の祖父と歳の違う方がいらして、その方もエイン様の親友のなんですね。」

そしてその方は”もう一人の祖父”なんですね。

合つてます?」

楽しそうに訊ねるリュリュに、エインは暫し呆然としたあと、苦笑した。

「コウ。」

「コウ・イトダ。」

リュリュの、何事も楽しもつとする性格は、コウそつくりだ。

懐かしい。

”ラ・ロシェルのコウ”は、自分の面影を残しておいてくれたに違いないと思った。

後にやつて来る、^{エイン}自分のために。

少し、息が詰まつた。リュリュの前では恥ずかしいので、棚を見る振りをして背を向ける。

息を整え、そこまで知つてゐるなら、と、エインは話し始めた。

「ボクは、キミのお祖父様を”ラ・ロシェルのコウ”と呼んでいる。理由は、ボルドーにも”コウ”がいるから。」

ボクが直接知つてゐる”コウ”は”ボルドーのコウ”だが、”ボルドーのコウ”と”ラ・ロシェルのコウ”は”同一人物”なんだ。

”ラ・ロシェルのコウ”は、ちょっとだけ早く”ここ”へ来たた

めに、”ボルドーの「ウ”と歳が異なつてしまつた。

「難しい話ですね…」

同一人物なのに、一人いるんですね?」

「正確に言つと、完全に同一な訳ではないんだけどね。」

「益々ややこしいですわ。」

「理解は出来ないだらうと思つよ。そこまで詳しい事を、ボクも話す事は出来ないしね。」

ただ、”ラ・ロシールの「ウ”であるお祖父様から總ての事情を聞かされていたキミのお父様は、”烙印”を背負うせいで、結果としてボクを恨んだらうし、ボクがしている事の本質を理解してもいただろう。

「ここへボクを踏み込ませまいとしたのは、お父様がした正しい選択だ。」

キミが氣にする事でもないし、背負う事でもない。

ボクが、キミたちに膝を付いて謝らなければならぬ事なんだ。未だ背を向けたままのエインの内心を、そこで漸く悟つたリュリュは、エインに一步だけ近付き、言つた。

「もう、祖父も父もおりませんわ。」

だから、謝罪の必要もありませんの。

でも、エイン様はそれでは氣が済みませんのね。ならば、教えてください。エイン様の”夢”を。

父や祖父が反対をしながらも同情したという”夢”を。」

リュリュが言つと、エインが振り返つた。視線を交わせると、リュリュが興味本位ではなく訊ねている事に気付く。

「私も、この家の者ですわ。」

祖父もクレリーも、そして父も、何度もエイン様に助けられたと言つていました。

何をして頂いたか解りませんけど、でも父が、エイン様がここを訪れる事を拒んだ事で、そのご恩を仇で返す行為をしたと思つています。

そしてエイン様は、父が手のひらの傷を負つて、エイン様のためのものを守らなければならなかつたといふ事実を後ろめたく感じていらっしゃる。

この時点でお相子じゅありません?

少なくとも、私にはお相子か、エイン様から頂いたご恩のほうが大きいくらいですわ。

でも、エイン様はそれでは納得されないのでしょ?
だから、教えてください。

エイン様の”夢”を。

それでお相子にしません事?」

悪戯っぽく笑つて、リュリュが言つた。

やや強引な思想ながらも、精神的並行を取り戻すには結構よい案ではないかと、エインは感心していた。

ただ、言い出すには、少し躊躇いがある。

照れ臭さと言つ名の……。

暫し考えたが、リュリュもコウも言い出したら聞かなかつた事を思い出した。リュリュがこの提案をした時点で、話さねばならない事は決まつたも当然に思えた。

エインは俯いて苦笑し、静かに言つた。

「ボクの”夢”。

それは、”この世界でたつた一人、心の底から愛した人を生かす方法を見付ける事”だよ。」

「誰ですの、その方?」

その先が最も話し難い。だがリュリュの視線は逸らせぬほど真つ直ぐにエインに注がれている。

エインは鼻から思い切り息を吸い込むと、ぼそりと蚊の鳴くよくな声で囁いた。

その名は、美しく、可憐な……。

「……アン……。」

一度目は、何事もなく出て来たように見えた。

一度目に、様子がおかしい事に気が付いた。

三度目と四度目は、扉を訪れる事無く。

五度目に、初めて傷の事を知った。

六度目もまた、扉を訪れる事はなく。

七度目、触れようとして、諦めて…。

八度目…。

何度も通つた道だ。可能性を一つずつ潰していくば、いつか希望に結び付くかも知れない。

長く、永く夢見た希望に。

今か、未だかと帰りを待つ。

ここは大丈夫だと、あの人は言つて…、否、今回は言わなかつた。だが、大丈夫だろうと思う。

何事もなく、この扉は開くはずだ。

エインが、手のひらに傷を負う事を除いて…。

扉から少し離れた場所で瓦礫に腰を下ろして、ヴィヴィアンは扉をじつと見つめていた。

二人が入つてそろそろ一時間になる。

地上でも屋敷からここまで三〇分であれば、地下も同じか、それよりは距離もあるう。あと三〇分は、出て来ないと思つていた方が気が楽か。

そう思つと、返つて気が急いた。

何もない。大丈夫だと信じれば信じるほど、不安も大きくなる。まさか、この扉から出て来ないなどという事は…。

有り得なくはない。自分はあの扉の向こうに何があるのか、知らなかつたらだ。

早く…。早く帰つて来て欲しい。

そう思つた時、がちゃりと大きな音を立てて、鍵が開いた。

呆けていたポーロは驚き、クレリーは微動だにせず静かに扉を見、ヴィヴィアンは待ち焦がれていた想いから咄嗟に立ち上がった。

徐々に開く扉の向こうに、扉を押し開けるエインの姿が見えた。俯きがちに、ただ一心に扉を押すエインの表情は、ヴィヴィアンの記憶どおり、何かに対する怒りを押し殺しているようだった。だが、ヴィヴィアンにとっては、そんな事などどうでもよかつた。扉が完全に開き、リュリュを先に地下部屋へと出したエインに、ヴィヴィアンは走り出し…。一歩進めたところで、足を止めた。止めたのではなかつた。止まつてしまつたのだ。

体が言う事を聞かなかつた。

傷の手當に必要な薬品を前以て準備するわけに行かなかつたから、手にハンカチだけを握り締めていた。

エインは右手を握り辛そうにしている。

傷を負つてゐる…。

手當てを…。せめてこのハンカチだけでも。そう思うが、足が動かなかつた。

蟠りは残る。自分のものではない人。その人に触れる事。本当に、触れてしまつていいのだろうか。どうしても、躊躇いがあつた。

触れることで、道が逸れはしないか…。

両手を胸の前で組み握り締め、無表情ながらも困惑した表情を浮かべるヴィヴィアンがふと目を移したポーロとリュリュは、不自然な距離を置いて立つっていた。

何故だ。

そう疑問に思つと、途端に足が動いた。

一歩。三歩。

先程の硬直が嘘のようになり、足が軽い。まるで当たり前の事のようにな、真っ直ぐエインに向かつて動いていく。

近寄るヴィヴィアンに、エインが気付き、微笑んだ。

そして、記憶にある言葉を囁つ。

「ただいま。」

一度田は、言わなかつた。

一度田は、照れくさそうに、言つた。

五度田と七度田は、大袈裟に両手を広げて、言つた。

そして、八度田は。微笑んだ。

ヴィヴィアンは歩みを止める事無くエインに歩み寄り、空いている左手でエインの右手を取ると、ゆっくりと手のひらを見る。火傷。それも、かなりの重度のものだ。

炎症を通り越し、皮が焼け爛れ、肉が見えてしまつてはいる。血が滲み、一足早く水脹れを起こしている箇所もある。

そしてその傷は、何かの模様にも見える。

無言のまま、唇をきゅっと噛み締めて傷を見つめるヴィヴィアンを、エインは何も表情を変えず見下ろし、微笑んでいた。

ヴィヴィアンはそつとハンカチをエインの手のひらに乗せ、ズレ落ちないよう指の間に通しながら巻き付けた。

「ありがとう。」

「…いえ…。」

礼を言つエインに、ヴィヴィアンは素つ氣無く言つ。

素つ氣無いつもりはないのだが、どの感情を声に乗せるか、躊躇うのだった。

エインはそれを理解している。

だから、何も言わずに微笑んだままだ。

その二人を、リュリュが振り返つて見ていた。リュリュの視線にヴィヴィアンが気付き、エインから手を離すと、一步下がる。

「屋敷へ戻りましょ…。」

傷の手当をしなければ。

「そうだね。」

後ろで、ガタンという音が響いた。エインとリュリュが出て来た扉を、クレリーが締めたのだった。その後、扉の内側から、カチ

ヤリと音が続いた。

「どうやら、扉を閉めると自動で鍵がかかる仕組みになつてているらしい。

「へむらへく。」

施錠を確認し、クレリーが一同を誘導する。

祭壇裏への階段を上がり、廃れた小さな建物を出ると、クレリーがチヨーンを元に戻した。

空を見上げると、まだ空の色は青々としていた。随分地下にいた気がするのに、然程地上の時間は変わっていない様子だった。

疲れているのか、屋敷までは誰も、リュリュですら口を利かなかつた。

屋敷に戻り、各自部屋へと散ると、クレリーが一部屋ずつ周り、様子を伺いに来た。

「お食事はどうなさいますか？ お疲れのようでしたら、お部屋へお運びいたしますが。」

ヴィヴィアンのところへもやつて来て、そう言つと、クレリーはジヤケットのポケットから火傷用の軟膏の容器と何枚かのガーゼを取り出し、ヴィヴィアンに差し出した。

「教授のご様子が気になるようでしたら、傷の手当てをして差し上げてはいかがでしょう？」

クレリーも扉から出て来た時のエインの様子を気にしたようだつた。

ヴィヴィアンが容器を受け取るのに困惑つて居ると、クレリーはふふと笑つて、

「教授は私どもにはあまりご自分の心のお話をされません。でも、ヴィヴィアン様は別のようで」「やれこますよ。」
と言つた。

他人と自分との対応の違いに気が付いていない、ヴィヴィアンが首を傾げると、クレリーはさらに面白そうに笑つた。

そして、容器をベッドのサイドテーブルに置き、

「教授は『昼食を食堂でお召し上がりになるようです。ヴィヴィアン様のお食事も、一緒に『用意いたしました』と言つて出て行つた。」

ヴィヴィアンは容器を暫く眺め、クレリーの言葉を反芻した。

自分にだけ…？

そんな事はなかろう。自分より遙かにエインの事を知つてゐる人間は幾らでもいる。

ヴィヴィアンは容器を手に取ると、指先で弄つた。

あの火傷を思い出す。

あれでは、早めに手当てをしないと、あつと/or>う間に皮膚が壊死してしまつて、痕も消え辛くなつてしまふはずだ。

そう思いながら、ベルトワーズ邸で見た、エインの絵を思い出す。素朴で、可愛らしい絵だと思った。

傷の様子を知つた今、あの絵を描く手が、エインの手が傷付くのは、耐え難い。そして、エインが痛みを堪え続けるのも。

ヴィヴィアンは大事を覚悟でもした様に意を決して立ち上がり、隣のエインの部屋のドアをノックした。

だが、中からは返事は愚か、物音一つ聞こえて來ない。

眠つてしまつたのだろうか。それとも、クレリーが去つて、ヴィヴィアンが廊下に出る間に、部屋を出てしまつたのだろうか。

ヴィヴィアンは思案し、もう一度ノックをした。

が、やはり何の返答もなく、ヴィヴィアンは仕方なく溜め息を吐き、踵を返した。

すると、慌てたように、「はい！」と大声で返事をするエインの声が聞こえた。

エインはバタバタとドアを駆け寄ると、勢いよく開けた。ヴィヴィアンはドアにぶつかりそうになり、慌てて後ろへ飛び退いた。

「ああ、ごめん、ヴィヴィ。当たつてしまつたかい？」

「…いえ、大丈夫です。」

やはり眠つていたのだろうか。心なしか、声が籠つてゐる。

「傷の手当てをと思いまして…。」

ヴィヴィアンが言うと、エインはぱりと笑って、ヴィヴィアンを部屋の中へ招いた。

エインの部屋はヴィヴィアンの部屋より少し広く、ベッドと窓の間にソファと小さなテーブルがあった。

エインは、ヴィヴィアンにソファに座るよう言い、自分は向かいのベッドに座ると、ハンカチを片手で解き始めた。早足で駆け寄ったヴィヴィアンが手を添えると、エインは自分の手を引いて、ヴィヴィアンを見上げる。

「クレリーさんが、ご様子がおかしいと気になさっておりました。」ハンカチを解き、傷を見る。傷はかなり化膿して、ずるずるになつていた。もう、模様に見えた火傷の痕も明確ではない。

ヴィヴィアンは洗面台でガーゼ一枚濡らすと、エインの足元に膝を付いて傷を丹念に拭いた。

「ボク？ おかしかつた？」

「はい。」

「…傷が、痛んだんじゃないかな。」

あからさまにとぼけるエインを、ヴィヴィアンが無言で見上げた。その反応に、エインは暫し苦笑し、少しだけ姿勢を崩した。

「…リュリュが、ポーロと結婚しないと言い出したんだ…。」

「”試練”を受けなかつたからですか？」

「いいや。元々、リュリュもポーロに”試練”を受けさせつゝもりはなかつたんだよ。だからボクを呼んだんだ。」

でも、あの扉を出る前、少し話し込んでいたら、気が変わつたらしい。

「…。」

「困つたもんだね。」

「…それだけですか？」

簡素に話しあつたエインを見もせず、ヴィヴィアンが訊ねた。それだけが原因ではあるまいと思ったのだった。

手元ではずっと、淡々と手当りが続けられている。

当然、きちんと話すだろう。そんな風に考えている様子に見えた。

エインはまた苦笑して、窓の外を見た。

初夏らしい、青々とした空が見える。

「ボクに、この家を継いで欲しいんだそうだ。」

エインがぼそりと呟いて、ヴィヴィアンの手が一瞬びくついた。

「理由は話せない。

勿論ボクはそんなつもりはない。

リュリュも当初はリュリュはポーロと結婚するつもりでいたから

ね。

「でも、話をしていく、気が変わったんだそうだ。」

「…。」

ヴィヴィアンが無言でいると、その意味を汲み取ったエインが続けた。

「理由はね、ボクが”試練”を代行した理由に因る。だから、詳しくは話せないけどね…。」

そう言って、エインが目を細めた。

「みな、ボクをここへ引き止めようとする。

”決まり”を護る事、運命に逆らわない事を諭すんだ。当たり前だし、解つてる。

気持ちも解るが、でも何で、みんなして結論が同じなんだうね?

エインが呟くと、ヴィヴィアンが手を止めた。一通り、手当りが終わつたのだ。

だが、ヴィヴィアンはエインの足元にしゃがんだまま、動かなかつた。

昔、エインが同じ事を吐き棄てるように呟いた事を、思い出していた。

一度目。

その日、エインもヴィヴィアンも、ただ穏やかにエディンバラのアンダーソン邸で過ごしていた。

とても良く晴れていて、仄かにそよぐ風が心地好い日だった。

普段は一人で出かけてしまうエインだったが、珍しくヴィヴィアンを連れて行きたいと、フランスのラ・ロシェルへ共に行き、ちょうど昨晩帰つて来た翌日だ。

エインは自室に籠り、いつも通り本の山に埋もれ、ヴィヴィアンは屋敷中を掃除して周つていた。

アン危篤の報せが届いたのは、そんな時だった。

屋敷内の掃除も終わり、庭の手入れをとヴィヴィアンがエントランスを出た時、一人の中年男性がやつて來た。

「アンダーソン教授は、『在宅でしょうか。』

「…おりますが。」

ヴィヴィアンが不信な顔で答えると、男性は帽子を取り、「ベルトワーズの使いの者です」と言つた。

ベルトワーズ。確かに先日エインが所用で呼ばれた家ではなかつたか。

そう思い、男性を中に入れると、エインの自室をノックした。

「教授。」

「んー？」

部屋の中から、エインのお氣楽な声が聞こえる。

「ベルトワーズ家のお使いの方がいらします。」

「…なんだつて？」

それだけの言葉で事態を把握したのか、一変して神妙な声に変わつたエインが、強張つた表情でドアを開けた。ヴィヴィアンがエントランスの男性を見ると、ドアの影からエインもエントランスを覗き、眉間の皺を深くした。

エインはゆっくりと男性に近付くと、「ウインストンさん」と男

性に声をかけた。男性の名は、ウインストンというらしい。ウインストンはエインを見、「ああ、教授…」と泣きそつた声を出した。

「お便りよりも、こちらへ窺つた方が早いとクリーブスさんに言われて参りました。

お嬢様が、アンお嬢様が…。」

わたわたとエインの腕を掴んで言つ男性を、エインは体を硬直させて見つめていた。

「アンが…、どうしたつて…？」

「ご様態が急変しまして…。」

今、医者を留めて経過を見守つております。

医者は、そう長くはないだらうと…。」

それを聞いて、エインがウインストンの腕を掴み返した。

「それは…、本当なんだな？」

「はい。」

熱が引きませんで。うわ言の様に教授のお名前を呼んでいらっしゃいます。

教授、お嬢様の近くに…。」

ウインストンが言つと、エインはヴィヴィアンに振り返つて、「ちょっと家を空けるよ」と言つた。

言葉とはまるで整合性の取れぬ、焦りに満ちた声だつた。

「はい。」

エインは必要最小限の荷物をカバンに詰め、早々にウインストンとフランスへ向かつた。

ヴィヴィアンはその後一週間ほど、エインを屋敷で待ち続けた。

この頃のヴィヴィアンは、エインにほんのりとした愛情を持つていた。

エインは大変頭が良く、物知りで、物静かで、一見すると落ち着きはなさそだが、ふと見せる表情や仕草に品の良さが垣間見えた。読書に没頭すると数日かけてのめり込む勢いであったが、それ以

外ではヴィヴィアンの事を丁寧に気遣い、色々な話を聞かせてくれた。

元来話し始めると止まらないエインであつたが、自身の事は余り語らなかつた。自身が考へてゐる事も、無暗に口にはしなかつたため、周りから変人だとか、変わり者だとか言われるのも、それが所以であると思われた。

だが、ヴィヴィアンには、ぼそりと小さい頃の思い出を話してくれたり、今どういう気持ちかを述べてくれた。

そうしていつるうち、心が解れた。

開け広げに見せて来るエインの心に、自分も应えねばと思い始めたのだった。

それは、愛情に他ならない。

恋だとか、そういうしたものではなく、もっと根本的な、人間愛に近かつた。

エインが笑つていれば幸せだった。

だから、悪い知らせが入つたり、悪い発見をしたりして機嫌が悪かつたりすると、途端に不安になつた。

他人にここまで感情を揺さぶられるのは、生まれて初めての経験だつた。

エインとの接触は、ヴィヴィアンにとつて特別な意味を持ち始めていた。

だが、任務を棄てる訳にいかなかつた。どこかで、その任を果たさねばと思っていた。

彼にどんな感情を抱こうと、自分は彼を”排除”、即ち殺すために”ここ”へ来た。彼は、重大な罪を犯した”犯罪者”であつた。

しかし実際のところ、ヴィヴィアンは彼がどのような罪を犯したのか、知らなかつた。

知る必要のない事だから、イトダからも聞かなかつた。

ただ、国際法と定められ、対象を排除するレベルの犯罪と言えば、凡そ二つほどしか思い当たる事がなかつた。

それは、
”時間を無断で遡る”か、
”歴史に影響を及ぼした”場
合だ。

ヴィヴィアンは、”時間の約束”と呼ばれる”時間に関する定義”が定められた年から約一〇〇年後の一九八五年に生まれた。

生まれて間もなく軍部によつて試行された実験設備の事故に両親が巻き込まれて死に、親類がいなかつた事から孤児になつた。両親が軍関係者故、ヴィヴィアンはすぐに軍の孤児院に引き取られた。そこで軍人に必要な知識と知恵を始めとしたあらゆる事を身に付けさせられ、國家が定める一五歳という成人年齢を向かえた年、何の選択肢も与えられないまま軍に所属した。

ヴィヴィアンは優秀な軍人だつた。

判断力に優れ、ずば抜けて高い記憶力と応用力、そして研究者にも引けを取らない知識量を駆使した部隊統率術は、現役軍幹部に大変気に入られた。

即、幹部候補へ名を連ねたが、快く思わないベテランや男尊女卑思想に漬かつたライバルたちの妨害を受け、元より乗り気でなかつた事もあり、幹部候補を辞退し、”時間管理部”という部隊への配属を希望した。ここなら何の厭なものもなさそうだったから、という単純な理由による選択だつたが、結果として目論みは当たり、この部隊で軍人としてではあれど、割かし気楽な人生を歩む事となつたのであつた。

”時間管理部”は、歴史の監視を行う。

一七九九年。時間に於いて、画期的な発明がついに完成を遂げた。時間を探る事に成功したのだつた。

それから約一〇〇年間の長期に渡り、その理論と発明を使用した実験を元にあらゆる観察をした結果、どうやら時間はある一定の法則に従つてループしているらしいという事が解つた。

この発見により、歴史を見直し、今の時点で不都合の生じている事項について、”歴史を大幅に変えない過去の事項”を修正する事

で解消しようつと言つ国際的な計画が発足した。

一五〇〇年付近から本格的に上昇し始めた地球の気温により、ヒトは”ハウス”と呼ばれる特殊素材で作られたドーム内に街や国を作る事で、生物の生態を維持して来た。一〇世紀以降、人が目指した宇宙では、”ヒトらしい生活”が望めなかつたためだ。ヒトには、地球の重力が必要だつたのだ。だが、一方では着々と資源も枯渇し始め、生命滅亡への懸念がより身近に生じるようになり、せめてもの抗いとして、ヒトは過去に遡り、歴史の修正を試みたのだった。結果が出るものとそうでないものこそあれ、総合的に見ると予想を八割ほど満たした結果を認めたヒトは、本格的に歴史の調整に入つた。

その任を背負つた者たちが過去へと”流れた”のが、ヴィヴィアンが生まれる凡そ三〇年前。

”cakravartī”と銘打たれたその一行は、エイン・アンダーソンを筆頭に合計十名の科学者と研究者を集め作られた集団で、”輪を動かすもの”、”世界を照らす太陽”と言つ意の通り、滅亡間近の全生命の希望であつた。

しかし、全の希望は総ての一の希望とはならない。

この試みを実施するに当たり、一番の懸念事項とされた『私欲に走り、歴史を混乱させるべきではない』という”時間の約束”的の基本第三条がある。この条項は一般的に”国際法”と言われる条項の一つで、最も守るべき条項とされていた。

後に関係者の隠語で、リグ・ヴェーダに登場する大蛇の名で、”障害”を意味する”ヴリトラ”と呼ばれる事となるエインは、この”国際法”を犯した事により、ヴィヴィアンが”時間管理部”に所属した年に、指名手配された。

手配がここまで遅れたのには理由がある。

過去へ”流れた”者の行動は、歴史を追う事でしか把握する術がなかつた事が原因だつた。これは未来である”現在”に戻る事が出来ないのでなく、過去に戻ると未来が存在しないためであつたの

だが、この危険を冒しても歴史の調整は急務であり、そして、これは『国際的』と言う割りに、一般人には知らされる事のない計画でもあつた。

事故を装い、エイン・アンダーソンをこの世から消すという任務。それはエイン・アンダーソンという少しだけ名の知れた研究者が、ただ事故に遭つて死んだだけの歴史が刻まれるだけの事だ。だが、果たして何を犯したのか知れないエインではあつたが、エインとの交流を重ねたヴィヴィアンにとつて、エインは最早犯罪者ではなかつた。

ただ書類上そうなつてゐるだけで、エインはただの、エイン・アンダーソンだつた。

そうなると、任務遂行に躊躇いが生まれた。

エインを生かしたい。だが、いずれ任務を怠つた事が知れば、未来から自分の代わりにエインを殺すための人間が”流れ”来るだけだ。

どうしたら良いか、結論など出なかつた。

ワインストンが屋敷を訪れ、エインが手早く荷造りをしてフランスへ旅立つて、一週間が過ぎた。

エインの帰りを待つ日々。

思えば、旅に出る事が多かつたエインを、いつも待つていた。最初は、任務のためだけに。

それがいつしか、本来言葉通りの”帰りを待つ”という意味を含むようになつた。

無事に帰つて來ると、心の底が安定した。

『アン』。

”ここ”へ来てベルトワーズの名を聞いた後、エインの帰りを待つ間に、アンについては調べた。

アン・ベルトワーズ。ベルトワーズ伯の一人娘で、生まれつき心臓の病を患つてゐるといふ。

ベルトワーズとエインは深い交流があるそだから、娘とも何度

も顔を合わせている事だろう。

そのアンが危篤だという報せ。それに対するエインの様子で、どのような関係かは想像に難くない。

ヴィヴィアンは自室の窓辺に座り、想いに耽る。

アンに何かあつたら、エインは哀しむだらうか。

そうなのだとしたら、アンには持ち直して欲しい。

エインが、笑つて帰つて来るといい…。

だが、そんなささやかな願いは虚しくも叶わず、エインは憔悴しきつた様子で屋敷へ戻つて来た。

フランスへ出てから、一週間後の事だった。

エインの憔悴振りは筆舌し難い程で、ヴィヴィアンはエインが帰つてから数日、声をかけられずにいた。食事だとか、買い物だとか、必要最小限の会話こそあれ、それ以外はエインが口を開かぬ限り、言葉を交わす事もなかつた。

しかし、ある夜、寝付かれず水でも飲もうと深夜に起きて廊下に出たとき、エインの部屋のドアが半開きになつていて、光が漏れて、廊下をほんのり照らしている。

ヴィヴィアンは足音を殺して部屋の中を眺めた。

部屋の中では、エインがオイルランプを点けたまま、床に座り込んでいた。周りを本の山に囲まれ、エインは何かを探す様にページを捲つていた。

足元には何かをメモしたのか、雑多に丸められた紙が散乱している。

どうにも気になつてもつとと一歩踏み出したとき、勢い余つてドアを少し蹴つてしまつた。その音に、エインが驚いてドアを見上げた。

「ヴィヴィ…？」

誤魔化しても仕方がないので素直にドアを開くと、エインが苦笑していた。

「「めん。」

何の謝罪か、エインが詫びた。

「眠れないのですか？」

ヴィヴィアンが訊ねる。眠つていなければ今夜だけではなさそうだった。ここ数日、まじまじと顔を見ることがなかつたので気が付かなかつたが、エインの目元には深々とくまが出来ていた。

「…少し、お休みになられた方が…。」

「そうだね…。」

そう言いつつも、エインはページを捲る手を止めなかつた。平静を装つてはいるが、その横顔には明らかな焦りが窺えた。何を探しているのか…。

「探しものでしたら、お手伝いいたしましょうか…？」

ヴィヴィアンが声をかけると、そこでエインはページを捲る手を止め、ヴィヴィアンに座るよう促した。ヴィヴィアンがエインの斜向かいの本の山の隙間に腰を下ろすと、エインはやつと、本を床に置いた。

「ヴィヴィ…。」

俯いて呼ぶエインの声は弱弱しく、ヴィヴィアンに縋つてこように聞こえた。

「はい。」

「命なんて要らないと思つ程の物を失つてしまつたら、どう生きていつたらいいんだろ。」

「…。」

「掬い上げて零れ落ちた水みたいに、もう一度と戻つて来ないものを失つたら、どう生きて行つたらいいんだろ。」

「…いつも通り、生きていくしかないのではないでしょか…。」

「いつも通り…？』

「…はい。」

手に入るものは、いつか失うものだと思います。

執着すれば、するだけ虚しい思いをするだけかと…。」

淡々と答えるヴィヴィアンに、エインが笑つた。

「キミは無機質だな。」

「…希望がないだけかと…。」

「…うかな…。」

…逃げていいのでは、ないかな…。」

エインがぼそりと呟いた一言に、ヴィヴィアンは胸がきゅっと縮
またのを感じた。

”逃げていい”…?

「失うという恐怖から、逃げていいだけなんぢやないのかな…。
どうしても手に入ってしまう。手に入ってしまえば、愛おしくな
る。」

ならば、いつか独りになるのなら、始めから独りの方がいい。
いつか死んでしまうなら、始めから生まれない方がいい…。
でも、そんなのは、哀しくないか…。」

「…。」

「理論だという事は理解出来る。」

愛する者が死ぬからと呟いて、自分自身も死んでしまってはどう
しようもないし、何も生み出さない。

だが、それを願つて何がいけないのだろう。

あの時こうすればよかつた、こうなった時こうすればよかつたと
溢れる悔しさに抗つて何がいけないのだろう。

アンは、”生きる”事は”決まり”だと呟いた。

ボクは生き続けなければならないのだと。それがボクが生まれて
来た”決まり”なのだから、”従わなければならぬ”のだと…。」
握り締めて話したくなるようなものを手に入れた時の至福感
と、それに付随する、対極に位置する失ったときの喪失感。

対象への想いが強ければ強いほど、その差は開き、埋める事も出
来なくなってしまう。

それでも、空いた穴などないかのように生きるのが、結論だと思
う。

さもなくば、残された道は自死しかなくなってしまう。

しかし、ヴィヴィアンには解らない。

何故なら…。

「…私は…。

そこまで何かを愛したり、求めたりした事がありません…。」

その言葉に、エインがはつと顔を上げた。

「人を愛する事がどういう事か、どのような感情を抱く事で、どのような損失感を伴うものなのかも解りません。

だから…、教授のお気持ちは、解らないのです。

でも…。」

でも…。

「でも…？」

「それでも…、いつも通り、生きていく事が結論だと思います。」

ヴィヴィアンは、エインを真っ直ぐ見た。

人を真っ直ぐに見つめる事は、自然といつでも出来る事だった。

それが、アンがこのようになつてから、エインをこんな風に見る事は出来なかつた。

今まで出来なかつた分を注ぎ込むように、エインを見据える。生きて欲しい。

酷な願いでも、あのエインに戻つて欲しかつた。

エインは暫し、ヴィヴィアンに甘んじて見射抜かれ、やがて、俯いて自嘲気味に口の端を上げた。

「何故、みんなして結論が同じなんだろうね…。」

懐かしい記憶。心が揺れる記憶…。

あの時のエインを、ヴィヴィアンは忘れた事はない。

あの姿を見、生まれて初めて他人に『生きて欲しい』と言つ感情を抱いた。

他人が生きようが死のうが、総てを自然の摂理と諦めていた自分

が、と思うと、自身の変わり様に激しい動搖もした。

あの感情が、総てを決めたのだ。

時を流れ、エインが生きる事だけを追い求めて来た。

何度もやつても、それは叶わなかつた。

でも、諦めるという選択肢はなかつた。

だが、これが最後だ。どう結論が出来ても、もう流れる事は出来ない。

だからこそ、あらゆる可能性に賭けたい。

エインが生きるためなら。

見上げると、エインがヴィヴィアンを不思議そうに見下ろしていた。

随分長い事、物思いに耽つてしまつていたようだ。治療は終わつているのに、手も添えたままで、エインからすれば、ヴィヴィアンはずつと放心しているようになつに見えたに違いない。

「申し訳ありません。」

ヴィヴィアンはそう言つと、すつと手を離し、足元に散らばつた古いガーゼや汚れた布を拾い、立ち上がつた。

一方で、つまらぬ愚痴で、ヴィヴィアンに不要な気遣いをさせてしまつたのかと心配したエインは、腰を上げてヴィヴィアンと真正面で向き合つた。

「すまないね。変な話をして。」

申し訳なさそうに俯くエインに、ヴィヴィアンの心がさらに揺れだ。

違う。何でもいいのだ。何でも話して欲しいのだ。
あなたが笑うなら、何でも言つて欲しいのだ…。
なのに、その一言を言つ事が出来ない。

「お気になさいませんように…。」

そんな言葉しか言つ事が出来ない自分が、悔しい。

思い返して、感情が溢れてしまつたように胸が締め付けられた。平静を裝つてエインの部屋から出たヴィヴィアンは、逃げるよう自室に戻り、駆け込んだ勢いのままベッドにうつ伏せに倒れこんだ。

走馬灯のように脳裏を過ぎる過去の記憶に、今までにない動揺をしている。

護れなかつたあの時。後悔に苛まれたあの時。

間に合わなかつた『あの時』も、気付けなかつた『あの時』も、護り切れなかつた『あの時』も…。

どの時も、ヴィヴィアンにとつて、哀しく棄ててしまいたい記憶でしかない。

特に一番最初の記憶は、消してしまえるなら命も惜しくないほどに、悔しい記憶でしかない。

思い出すたび、体が粟立つ。

それは、この手でエインを殺してしまつた記憶だ…。

アンが亡くなつてから、何度も何度も夜中にエインの部屋の様子を伺つては、起きているエインと言葉を交わした。

神様とか、運命とか、そう言つた、人の介在し得ない叡智や意思の存在などは、お互い信じてはいない。

ただ、とにかく何でもいいからこの悲しみから解放されたいエインの言葉を聞き、同情するではなく前に進める切欠を作りたかった。何を調べているのか、エインはずつと本を読んでいた。

日中も声をかけるが、やはり起きていて、本を読んでいる。

食事も始めの内は気が進まないと食べずに過ごしていたが、数日

すると少量は口に入れてくれるようになった。それでも、時間が惜しいのか、すぐに手を止め、本に目を移してしまう。

見る見る痩せ細つて行くエインをどう扱つていいのか解らず、ヴィヴィアンも手探りで毎日を過ごした。

やがて季節が変わり秋を迎えた頃、屋敷に来客があつた。

男性で、名は聞かなかつたが、エインの旧友と言つて取り次ぐと、エインは男を部屋に入れ、何をしているのか数時間後、帰つて行つた。

一度切りなら何も思わなかつただろうが、その来客は毎週、決まつた日、決まつた二時という時間に訪れた。

エインも特に警戒する様子も見せないので、ヴィヴィアンも疑問に思いこすれ、深く追求する事はしなかつた。

男性はいつも、帽子を口深に被つていて、少し肌寒いエティンバラの秋の装いとしては至つて自然な黒いコートを、襟を立てて着ていた。だから、顔を見た事は一度もなかつた。唯一見えるのは、口許だけだ。輪郭すら、巧く隠している。

辛うじて声だけは発するが、エインと同い年か、それ以下のようだつた。

そんな事が続いた冬直前のある日、数度目の訪問で、男性がヴィヴィアンを見た。

暫く無言でヴィヴィアンを見るので、居た堪れずに何かと訊ねると、男は少し間を開けて言つた。

「何故、役割を果たさないのです?」

「…！」

「あなたがやらないのなら、私がやりますよ。」

男は静かに、ゆっくりそう言つた。

ヴィヴィアンの体が細かく震えた。自分の事を知つてゐる。エインの事も知つてゐる。

ただの知人などではない。

「…あなたは…、施設の…?」

「そうです。

と言つても、私は『教授の時間の方』ですけど。』

エインがいた時代。五〇年前の施設の…。

「… „cakravartin“…?」

エインの時代もヴィヴィアンの時代も、時を流れる事を許された者は限られる。エインの時代なら特にだ。』 „cakravartin“ 以外に、有り得ない。

だが、そんなヴィヴィアンの思惑は、すんなりと否定される。「いいえ。

いい線を行つてますが、私はそれに含まれません。』

男はそう言つて、口許だけで笑つた。

「…どちらかと言つと、あなたの立場に近いんですね。』

ヴィヴィアンは身構えた。

自分の立場に近い。その言葉が意味するのは、少なくとも自分の認識の中では一つしかない。

『エインを罰するため流れた者』だ。

だが、自分が知る限り、エインがいた時代にそのような役割を担う者はいなかつた筈だ。

記録にないだけなのだろうか。だとしたら、何故なのだ…?

さらに、エインの時代の者ならば、そもそも自分の存在を知る筈がない。

「身構える必要はありません。

私はあなたを監視している訳ではないし、エインを殺しに来ている訳でもありません。

私の事はじきに解るでしょうから今は言いませんが、ちょっと気になりますね。』

男性はそう言つと、口許の笑みを消した。

「気を付けなさい。

あなたが思つてゐるほど、時間の流れは穏やかではない。』

男性の言葉に、ヴィヴィアンは眉を顰めた。そんなヴィヴィアン

に、男性はふと笑いかける。

「一粒の雫が水面に与える影響は大きい。

あなたが望めば、道はそちらへ通うかも知れません。

エインを護るのも、殺すのも、あなたの心次第…。」

男性はそう言つて、帽子を軽く摘み上げ、それを挨拶代わりに屋敷を去つて行つた。

ヴィヴィアンは、男性が去つた後もその場に立ち尽くした。

『エインを護るのも、殺すのも、心次第…。』

自分が望めば、必ず殺さずに済む道が拓けると言つのだろうか。だとしたら、縋り付きたい。

エインが、生きる道があるのなら…。

翌週、変わらず訪れた男性は、先週の事などなかつたかのように、いつも通り屋敷を訪れ、ヴィヴィアンには目もくれずに誘導されたエインの部屋で数時間過ごした後、帰つて行つた。

ヴィヴィアンは声をかけようと思つたが、男性の素つ氣無さに先週の会話の現実味が薄れ切つてしまい、声がかけられなかつた。

翌週も、その翌週も…。男性は規則正しく屋敷を訪れ、ヴィヴィアンも男性を見るなり無言でエインの部屋へと通す。繰り返し、繰り返し、こんな日を毎週過ごすつち、ヴィヴィアンもそのうち男性に声をかける事を諦めた。

円日はだらだらと、そして淡々と流れ、エインの様子も変わらぬまま、そして男性の訪問目的は明かされぬまま…、気付けば半年が過ぎようとしていた。

その間、特に変わつた事もなく、ただ時間だけが過ぎて行つたように戦つ。

否、違つ。

その時は、そう思ひたかつただけなのだ。

『気付かなかつた』だけだと…。

さらに幾月か過ぎ、そろそろ冬の気配を感じるよつになつた頃、屋敷を訪れた男性が、ヒントランスでの田と回じよひより、ヴィヴィアンに声をかけた。

「…心は決まりましたか？」

「…。」

不意に声をかけられたので驚き半分、そして質問の意味を捉えきれず戸惑い半分、ヴィヴィアンが田を見開いたまま無言でいると、男性は口許でふと笑つた。

「宜しいでしょ…。」

あなたの心はわかりました。
エインの心もわかりました。

従つて、私は今日、役目を果たさねばなりません。」

「役目…？」

「ええ。」

男性は一つ頷いて見せると、ヴィヴィアンに外に出るよつ促した。男性に続いて、屋敷の裏手へと回る。屋敷のある丘の周辺は、整備されたとは言えまだ森が広がつている。

男性は森へとずんずん歩いていく。昼間だが、森の中に入れば木漏れ日のみで、辺りは暗い。ヴィヴィアンは足元と男性の背中を交互に見ながら後に続いた。

やがて、男性が足を止めた。

そこは森の中だが数本木が倒れていて、小さな広場のよつになつていた。

時折人が来るのか、パイプ煙草の吸殻が落ちていた。

ヴィヴィアンが何用かと男性を見つめると、男性はヴィヴィアンに振り返つてこう言った。

「いつか、お伝えしましたね。」

私は、あなたと似た立場にある、と。」

「…ええ…。」

「その意味をお教える時が来たようなのですよ。」

「…？」

男性はそう言って、外套のポケットに手を突っ込んだ。

「この世の摂理をこの存知ですか？」

唐突に問われ、ヴィヴィアンは口籠りながら「いえ」とだけ答えた。どう答えたものか、難しい質問だ。如何様にも答えられるが、そもそも答えなどない質問だからだ。

「私は、その摂理を守る役目を担う者です。」

「”摂理を守る”…？」

「ええ。

ヴィヴィアン。

この世にはね、守らねばならない事が沢山ある。

”そう定まつた”その口から、”それ”はいつどのよくな状況にあつても、”そう”でなければならぬといつ決まりの元に、ね。

「…。」

「ヴィヴィアン。

「ご存知ですか。あなたはひとつあつても、”トインを殺さねばならぬ”事を。」

ヴィヴィアンが目を見開いた。殺さねばならぬとは、ひとついう事だ…。

「どうこう…事です…？」

「ご存じないのも仕方のない事ですね。私はそれであなたを責めた
りはしない。

でもね、私以外の人は、知らないからとあなたを赦せる立場には
い、という事です。

歴史はね、何が何でも、エインが死ななければならぬのです。

「…どうこう事です！」

「どうもこうもないのです。そうしないと、歴史が歪むのです。」

「それは、”cakravartin”だからですか！？」

歴史が歪む。そもそも、歴史を変えようとしているのだから、そ

うなのだろう。そしてそれならば、エインの他もその対象のはずだ。だが、男性は不適に口許で笑つた。

「ちょっと違います。

”^彼Cakravartī”が時間を流れる事も、彼らが歴史を少し変える事も、すべて決まっていることです。だから何の影響もないのです。」

「何故です！？」

歴史を歪める者たちには違いない筈です。」

「理論上はね。

でもね、ヴィヴィアン。

この世には時間の”筋”と呼ばれるものがあつて、その中を流れる時間はこれから終わりまで定まっているのです。そして、エインはその決まりを変えようとしている。これは由々しき問題だ。」

「…どうこう…事です…？」

「詳しく述べません。

が、ヴィヴィアン。私からあなたに、エインを殺さぬ選択がある事はお伝え出来ます。」

「…！」

「知りたいですか？」

知りたい。エインが生きる道があるなら、何でもいいから…。

ヴィヴィアンが頷くと、男性はそれは愉快とにんまり笑いながら、肩を揺らした。

「それはね、ヴィヴィアン。

エインの”対”であるあなたが、死ぬ事です。」

「…なッ…！」

「対…？」

「対”とはなんだ？

自分がエインの”対”？

「対…？」

「そう。”対”です。

宇宙の成り立ちをご存知ですか?」

「…」

宇宙の成り立ちなら、小等部の頃に少しだけ習つた。極小さな物質から、莫大なエネルギーの放出があつた。エネルギーは一秒という間に物質同士がぶつかり合い、混ざり合い、消し合い、今の宇宙や人類を形成するための物質を作り上げた。その後は冷えながら膨張の一途を辿つてゐる。

それが何だというのだ。

「ごく小さな物質から産まれたエネルギーに含まれる物質には、”対”となる反物質が存在する。

これらがお互いを消し合い、残つた物質、残りカスが私たちを作り上げた。

実はね、これはすべての”事象”にも当て嵌まる事が証明されたのですよ。」

ヴィヴィアンが眉間の皺を深くした。

その研究については知つてゐる。元の世界で聞いていたし、実際研究に携わつた者も、研究所にいた。

だが、ヴィヴィアンの世界では、それについては証明出来なかつた筈だ。

ならば目の前の男は、ヴィヴィアンの世界よりも”後”の世界から流れ來た事になる…。

「私が…、教授の”対”…。」

「そう。”対”です。

「相反する”対”のものは、同時に存在出来ない。お互い消し合わなければならず、そしてどちらかは必ず残る。

あなたの世界では証明されなかつた事ですが、人は摂理としてそれを無意識に知つてゐる。

あなたに任を下した”の人”は、無意識にあなたが”エインの対”である事を知つてゐたんですよ。

否、これでは少し語弊が生じるな。言い換えましょう。

”Hインが生きているという事象”と”ヴィヴィアンが生きているという事象”が”対”、なんですよ。

だから、あなたがエインの元を訪れるのは決められた事であり、そして…。」

エインを殺す事も、否、”エインが生きているという事象が打ち消される事”も、決められた事と言う事か…。だから、Hインを生かしたいのなら、対である自分が生きている事象を消せばいい、と…。

「…。」

「納得出来ました?」

「…それが真実かどうかは解りませんが…。」

でも、何故かこの男性は、嘘は吐いていないと思った。語られている事は真実であり、唯一の道なのかも知れない、と。

「私が来なければ、教授と消し合ひの事はなかった、という事ですか…。」

「ええ。でもそれも不可能でした。

何せ、あなたがここへ来る事は、決まった事でしたので。」

「…。」

いざれ、どちらかが消えねばならない宿命だつた。そういう事か。

「私が死ねば、教授は生きられるのですか? 楽え、その意志がなくとも。」

それが重要なのだ。

「そうですね。

彼は自死を選ぶようなタイプではないので…。」

『エインを護るのも、殺すのも、心次第…。』

なるほど。自分が死ぬか生きるか、その心次第と言つ訳だ。ヴィヴィアンの口許が緩んだ。

提示された可能性の皮肉さに、思わず笑ってしまったのだ。

そして、それでは意味がない事にも、笑わずにおれなかつた。

そう、意味がない。

エインに生きる意志がなければ…。

ならば…。

「ならば…。

私はまだ、教授を殺す訳に参りません。自分が死ぬ訳にも。」

「ほう？」

それは困りました。

そろそろタイムリミットなんですね。」

男性がポケットから手を出し、外套の胸ポケットに入れた。ヴィヴィアンが、無意識に右足を微かに引く。

「タイムリミット？」

「ええ。

そろそろね、エインかあなたが死ぬときなので…！」

言い終わらぬうちに、男性が素早く銃を握った手を外套から抜き、ヴィヴィアンを狙い撃つて来た。

「…ッ！」

辛うじて引き金を引く前に弾道から体を避けたが、狙いは正確で、一瞬でも反応が遅ければ撃たれていただろ。ヴィヴィアンの背中を冷や汗が流れた。

男性はヴィヴィアンを見て、すうと息を吸い込んで笑った。

「ほほう。噂通り。

満足げな晒いに、ヴィヴィアンが顔を顰めた。

今の銃は、ヴィヴィアンのいた世界で開発されたものだ。火薬による実弾を使用した旧タイプの銃を基本に、特殊火薬を採用し、弾速が三倍になる改良を施した。

軍でも基本装備として支給されるハンドガンだ。当然、ヴィヴィアンにも支給された。

だが、エインの時代から来たと言つのに、何故この男がそれを持つているのか。

彼の言つた事は嘘で、本当はヴィヴィアンと同じか、それ以降の

時間から流れで来た者なのでは…。

ヴィヴィアンが思考を巡らせていると、男性は一層晒つた。

「さあ、ヴィヴィアン。

あなたも銃を出しましょう。

それで私を狙いなさい。

あなたなら、この私を狙い誤る事はないでしょう?」

挑発的な言い草に、ヴィヴィアンが苛立つた。

こんな事で苛立ちを覚える性格ではないと自覚していたので、同時に驚いてもいた。

エインと自分に関する理論に、動搖しているのだと思った。

「さあ…。」

なお挑発する男性に唆された訳ではないが、ヴィヴィアンはゆっくりしゃがむと、スカートを裾から小さく捲つて手を入れた。銃は常に、膝下に添えてあつた。“いつ”、“何”があつてもいいように。

指先に冷たい金属が触れた。慣れた手つきでそれを握ると、立ち上がりながら取り出す。

男性と同じ銃。

その銃口を男性に向ける。

黒光りした銃は、きらりと光りながら男性を捕らえた。一方で、男性の銃はどことなく薄い色をしていた。素材が少し違うのかも知れないと、ヴィヴィアンは無意識に推測する。

「そう、それでいい。」

男性は満足げに言ひつと、ヴィヴィアンに向けていた銃口を外し、両手を横に広げた。降参のような素振りだが、まるでヴィヴィアンを馬鹿にしたような態度に見えた。

「さあ、引き金を引きましょう。

それで私を撃つのです。それで総て解決です。」

何が、総てなのか…。

何が…、解決するといつのか…。

何も解らなかつた。

だが、不思議とこのとき、ヴィヴィアンは“この男がいなくなれば、エインとの理論は崩壊する”ような気がしていた。

後に思い返しても、何故そう思つたのか解らない。

だが、この思いは強かつた。

ヴィヴィアンはほんの少しだけ躊躇いながら、引き金にかけた指に力を入れた。

ぐ……。

力を入れるたび、撃鉄が動く鈍い音がした。

ヴィヴィアンの鼓動が早くなつた。こんなに構えた銃を撃つ事を躊躇つた事は、今までなかつた。

だが躊躇いこそれ、ヴィヴィアンの思い自体に躊躇いはなかつた。

そして……。

ふと、我に返つた。
心臓が、ぱくぱくと震えている。指先は冷たくなり、脂汗を搔いていた。

ヴィヴィアンは体を起こすと、ベッドの縁に座つて頭を抱えた。長い長い回想を経て、信じられないものを思い出した。

信じられない……。

何故……。

ヴィヴィアンは両手の平を見て震えた。

あのあと……。

ヴィヴィアンは引き金を引いた。

撃つ直前、急に怖くなつて目を瞑つた。

だが、狙いは狂わず銃弾は男性目掛け、真っ直ぐ撃ち出されたのだつた。

銃鉄が、銃針を叩く音が聞えた。今でもその音を覚えている。

その直後、重く苦しげな呻き声が聞えたのだ。

ヴィヴィアンはゆっくりと目を開けた。そして愕然とした。

そこには、エインがいたのだった。

エインは男性を庇うようにして立ち、銃弾を受けて前屈みに崩れ落ちるところだった。

ヴィヴィアンの血の気が一気に引いた。

何故…。

何故、エインが…。

手から銃が毀れ、どさりと草上に落ちた音で、膝の力が抜けた。

ヴィヴィアンが崩れ落ちると同時に、エインがうつ伏せに倒れた。

そして、そのまま動かなかつた。

男性はにやりと笑つたまま、エインとヴィヴィアンを交互に見ていた。

男性の思惑通り、エインは死んだ。”対”である、ヴィヴィアンの手に掛かつて。

総ては決められた事。この世の摂理…。

頭の中で、男性の声が響いた。

ヴィヴィアンは顔を手で覆つた。

違う。

何が”決まり”だ。

あのときそう思つて、睨み付けた男性は、帽子を少しだけくいと上げ、暑そうに外套の襟を少しだけ開けた。

その瞬間見えた男性の顔。

顔下半分しか見えず、光の具合ではつきりとは見えないが、特徴的な顔…。

掘りが深い…。

「…イトダ…。」

間違いない。

あれは、”イトダ”だ…。

そして声を思い返して気付く。
あの男の正体は…、アルフォンス・イトダ。

エインとヴィヴィアンはぐつたりとしながら、馬車に揺られていた。

今朝がた、ラ・ロシェルのサジュマン家を挨拶もそこそこに出発し、サジュマン家の従者が操る馬車で、ボルドー郊外へ引き返しているところだつた。

行き先は、明らかにベルトワーズ邸だつた。

理由は聞かされていなかつたが、エインが戻ると言つ以上、ヴィヴィアンにとつて特別な理由は要らなかつた。

出発前、リュリュは何ら変わらぬ様子でエインとヴィヴィアンを見送つてくれた。昨夜の話を聞いた後だつたので、少少首を傾げたが、リュリュの性格上、聞いていたほど深刻な様子で話された訳ではなかつたのかもしれない、と一人納得したのだつた。

ポーロの見送りはなかつたが、今朝発つ事は予定になかつたので、仕方がなかつた。

リュリュとの事や、何より昨夜思い出したイトダの事…。訊ねた事はそれなりにあつたが、どう切り出してよいものか、そもそも切り出してよい事なのか、判断がつかなかつた。

エインも連日の移動で疲れているのか、道中は無言だつた。

そんな馬車の中と対照的に、外は快晴だつた。やや薄い色だが青空が広がり、海の方に少しうつすらと雨雲のような筋が見える以外は、見渡す限り雲一つなかつた。

エインもヴィヴィアンも、顔を背けるようにお互い逆側の窓の外を眺め、馬車の揺れに身を任せていた。ボルドー市内を経由して、元来た道を郊外へ走る。

そして夜深く、ベルトワーズ邸に辿り着いた。

戻る方が手頃なのか、気持ち的な問題なのか、来た時よりもスムーズに着いた印象だつた。

サジュマンの者が報せを入れておいてくれたのか、馬車の音を聞きつけ、屋敷の前にクリーブスが立つていて、出迎えてくれた。

エインはよいしょと馬車を降り、ヴィヴィアンに黙つて手を差し伸べた。ヴィヴィアンも黙つてエインの手に自分の手を乗せ、馬車を降りる。

サジュマンの従者が馬車の荷台から荷物を下ろすと、ベルトワーズのメイドたちがそれを屋敷へと運んで行つた。そのあとすぐにエインとの挨拶を済ませ、引き返そうとする従者を、クリーブスが止めた。

夜道は危険なので朝を待つて発つようと、従者は素直に従つた。

従者が馬車を納屋へ納めに行くのを見届け、クリーブスはエインとヴィヴィアンを屋敷へ案内した。数日前までいたというのに、何だかとても久しぶりに訪れたような、奇妙な気分がした。屋敷は時間のせいもあるつゝ、鎮まり返つていて、ヴィヴィアンたちの足音が妙に響いた。

クリーブスが声を殺し、「お部屋は先口と同じ場所を」と用意しております」と言つて、各部屋へ案内してくれた。

「今夜はもう遅うございます。お嬢様もお休みになられておりますので、お一人もどうぞお休みください。」

扉の前の廊下でクリーブスがそう言つと、エインが首を振つた。

「クリーブスさん、今からアンと話せませんか。」

エインの申し出に、クリーブスは困つた顔をし、首を振つた。

「だいぶ衰弱しておられます。あまりご無理は…。」

だが、エインは食い下がつた。

「お願いします。」

「しかし…。」

「どうか。」

今話しておかないと…。」

エインがそこで、言葉を切つた。その先は、ヴィヴィアンにも、

勿論クリーブスにも解らない。

クリーブスは暫し考え込んだ後、「少しだけ。五分程度でよろしければ」と言つて、アンの部屋へと二人を連れて行つた。アンの了承を得て來ると言い、部屋に入つたクリーブスを待つ間、ヴィヴィアンはエインの背後でその背中を見つめていた。

エインの様子が、いつもと違つ事を感じていた。

ただ、知らぬ雰囲気ではなかつた。

それは、アンが死に、屋敷へ帰つて來た時の、あのエインだ。普段のエインなら、否、自分の知るエインなら、このよくな無理は言わない気がした。何か予感がするのだろうか…。

ヴィヴィアンがそう思つてはいるが、クリーブスが戻つて来て、二人をアンの部屋へ招き入れ、ベッドで休んでいるからと言い、部屋を出て行つた。

エインは何も言わず部屋の階段を上がり、ベッドへ向かつた。ヴィヴィアンは着いていくか行くまいか迷つたが、ここにいる以上、どちらも変わらない気がしたので、五歩ほど離れてエインの後に続いた。

ヴィヴィアンが階段を上がり切つたところで、エインがベッド脇に椅子を添えて座つた。ヴィヴィアンの位置からは、寝ているアンの表情は、天蓋のレースにも阻まれ十分には見えない。

「…」

座つたエインは無言のままだが、暫くして、シーツが擦れる音がした。

「…教授…」

聞え来るアンの声は、数日前、声を交わした時の記憶とは程遠く、

擦れて乾いていた。

「夜遅く、申し訳ありません。」

「いえ…。いいのです。」

きっと、お気付くなつたのでしょうか…?」

「…ええ。やつと気が付きました。」

「

「…良かつた…。」

アンのくすくすという笑い声が聞こえた。

「父が、何より望んでいた事ですわ…。」

教授には、複雑でしううけれど…。」

「…そうですね…。酷な運命だと思いますよ…。」

溜め息混じりに、しかし満更でもなさうにエインが言つと、アンはまた笑つた。

長く長く、耳を擦るように笑い…、そしてすうと、息を吸い込んだ。

「…有難う、教授…。」

アンの言葉に、エインが首を振る。

「最初は信じられない運命でしたのに。でも、やつと受け入れられますわ…。」

『運命は変えられない』、『変えてはならない』。それが『決まり』…。

『決まり』…。

階段脇に佇んで、静かに一人を見守るヴィヴィアンは、この言葉をもう一度頭の中で反芻した。

抗う事が出来ないのか、それすらわからないもの。思い出した記憶の中で、イトダが言つていた事を信じるなら、すべては決まった事。この世の摂理…。

アンは、それを受け入れると言つ。

唇を噛み締めると、アンがエインに手を伸ばした。エインもそれを、黙つて握る。

「…有難う…。」

消え入る様に呴いたアンに、エインは小さく頷いて微笑んだ。そしてすぐに俯き、動かなくなつた。それを見て、ヴィヴィアンは悟つた。アンが、死んだ事を。

クリーブスも覚悟をしていたのだろうか。

あの後すぐに報せに行つても、特別驚いた様子を見せなかつた。

ただ、ほろりと一つ涙を流し、背を向けるだけだつた。

部屋を出るよう言われ、エインとヴィヴィアンは無言でアンの部屋を出ると、クリーブスが連れて来た数名のメイドとともにアンの部屋に籠つた。

一階からは忙しなく、しかし極力物音を殺して人が動き回る物音が聞えた。

その中で、エインとヴィヴィアンは、邪魔にならぬよう宛がわれた部屋へ戻つた。

ヴィヴィアンはベッドに腰掛け、窓を見た。

閉められた厚手のカーテンの隙間から、薄明るくなつた空が見えた。もうそろそろ、夜が明けるらしい。外で馬が鳴いたので、誰かが馬車を用意しているのだと思った。

立ち上がり、カーテンを開けると、ベランダにエインの姿が見えた。

窓を開け、外に出ると、エインが振り向いて淡く笑つた。

「寝なくて大丈夫かい？」

「はい。教授もお休みにならぬのですか？」

「うん。移動中、思いの外きつちり眠つたようだからね‥。」

朝の冷たい風が横切つた。記憶より冷たい。

森の向こうが、キラキラと輝き始めた。もうすぐ日が昇る。

この世で何があろうとも、日は昇るし、夜は訪れる。

誰かの心中では、これは非情な事であり、誰かの心中では、これは希望であり‥。

あんなに恐怖したアンの死。死に顔すら見ていないヴィヴィアンだが、哀しみは、思つていたよりずっと大きかつた。

ただ、涙を流すほどの哀しみでもなく、ヴィヴィアンはその中途

半端さに、無慈悲を感じていた。穏やかにいるエインに、後ろめたい気持ちもある。エインにしてみたら、ヴィヴィアンの今の心情を知れば、怒りの対象となつても不思議ではない。

が、考えに反して、エインは冷静なようだった。

「ヴィヴィ…」

「はい。」

「実は…」

「それほど哀しくない。」

ゆつくりと話すエインは、遠く地平線を見つめている。視線の先で、日の光が溢れた。

「冷たいと思うかい？」

どう思われようが構わない。そんな淡々とした口調に、ヴィヴィアンは朝日に目を細めながら、内心胸を撫で下ろす。

「いえ…」

でも、自覚をしていないだけ、といつ事も…。」

取つてつけたようなフォローになつたが、エインは構わず笑つた。

「… そうかなあ…。」

言いながら、いつまでもくすくすと笑う。その様子は、笑いながら自問自答しているようにも見えるし、ずっと笑うほど可笑しな言われだと思つたようにも見える。

空しさのようなものすら感じる長い笑いをし、エインがふと黙つた。

「実際のところは、ほつとしてるんだよ…。」

横顔からは笑顔は消えないが、声色は全く笑えないとあからさまに訴えていた。

「無益な『決まり』から解放されて、ね…。」

『決まり…』

「アンが、昨夜おつしゃつた事、ですか。」

「そう。

伯爵から、アンへ伝えられていた『決まり』事。

それからやつと解放された……。

アンが、死んだ事でか……。

「結果として、『決まり』に沿つ事になつたけどね。」

「……？」

あまりに含んだ表現をするので、ヴィヴィアンが眉を顰めると、エインが小さく首を振つて「ごめん」と詫びた。

「妙な話は止めよつ。今日は、アンをゆっくり偲ばなければ。」

滔々と溢れる朝陽が、視界に収まる世界のすべてを照らす。

今日は哀しい日だと呟つのに、ここを訪れて一番の清清しい空模様だった。

その景色が余りにも皮肉で、ヴィヴィアンは喉元が締め付けられる思いがした。

「そうですね……。」

ヴィヴィアンはそう呟いて、世界をゆっくりと睨み付けた。

昼過ぎ。

アルネスト・ベルトワーズの遺書の証人である弁護士のバージル・ブリアンが屋敷を訪れた。

今朝方、ベルトワーズの使いがボルドーまで迎えに行つたのだ。バージルは先日エインが出した書簡を受け取つた日から、近いうちにベルトワーズ邸を訪れる予感がしていたそうだ。

バージルとエインはベルトワーズ邸で一度会つた事があった。

「やあ、エイン。

「こんな形で再開を果たすのは、残念だよ……。」

「ご無沙汰しています。バージル。

是非また伯爵とアンと四人で会いたかったのに、残念だ。」

エインとバージルは歳もあまり変わらず、初見から妙に打ち解けたのだった。だから、もう一度会いたいと思っていたお互いであつたが、それがベルトワーズ家の財産整理の場になるとは、夢にも思わなかつた。

「何の悪戯だらうな……。」

バージルが溜め息混じりに言い、クリーブスを読んでベルトワーズの書簡を開けさせた。

アンの他に子はおらず、この時代にしては珍しく隠し子すらいないベルトワーズの遺書により、既に家の財産相続についてはエインと決まつてゐる。その内訳の確認と、今後これをどうするか、屋敷にいる使用人の今後についての話し合いを、そこでする事にしたらしい。

ヴィヴィアンは同席する訳に行かなかつたので、クリーブスや屋敷のメイドたちの手伝いをする事になつた。

エインの屋敷を訪れてから、漸く本職であるメイドの仕事をした気がした。

手伝いは主に、今夕執り行われる予定のアンの葬儀の準備だった。クリーブスに言われ、数名のメイドと共にアンの着替えと化粧の手伝いをする。

涼しい気候のため、遺体の安置はそのまま部屋を使っている。昨夜訪れた時そのままベッドに横たわるアンだが、ここへ舞い戻つてからアンを見るのは初めてだつた。

アンは記憶と寸分違わず白く、細かつた。濃いブラウンの髪は美しい色をしているのに、生氣を感じない。部屋着は白いシンプルなイブニングドレスではあるが、体にまるで合つていらない。

ヴィヴィアンが知つてゐるアン、そのままだつた。

強いて違う点を挙げるなら、肌の色が死人の色なだけだ。

それ以外は寧ろ、生前に見て感じていた違和感を感じないほどに、当たり前に『アン』としてそこについた。

そう思い、ヴィヴィアンははつとする。

アンは、"生きているのが似合わない"女性だつたのだ…。

カーテンを引き、薄暗くなつた部屋の中で、メイドたちが丁寧にアンの体を起こしたり、倒したりしながら、イブニングドレスを脱がせた。ヴィヴィアンも体を支える役として寄り添つが、アンは大きなガラス人形のようだと思つた。

露わになつた体は服の上からでは想像も出来ぬほどに瘦せて、目も当たられぬほどだつた。折ろうと思えば、ヴィヴィアンでも折れると思うほどだ。

このガラス人形が、頻りに拘つた『決まり』。

エインをやつと解放した『決まり』…。

最初はアンやエインが言う言葉のとおり、アンとエインの婚姻に拘るものだと単純に捕らえていた。

だが、今は違うと氣付いている。

知りたかつた。

そこに、自分が求める答えもある氣がするからだ。

ヴィヴィアンが支えるアンの体の向こうで、メイドの一人が一着

のドレスをクローゼットから取り出した。メイドはアンにふわふわのパニエを穿かせると、取り出したドレスを着せた。

真っ白の、ウェディングドレス。

時々小声でアンの昔話をするメイドたちが教えてくれたといひに因ると、これは五年前、エインがこの屋敷を訪れ、ベルトワーズが婚姻の話を持ち出した後日に、アンがベルトワーズにせがんで作りたドレスだそうだ。

だが、エインが首を縦に振らなかつたため、作つて一度も着る事無く、クローゼットに仕舞いこまれた。

アンの身支度係を務めていた別のメイドの話では、アンはクローゼットで衣装を選ぶたび、このドレスの前で溜め息を吐いていたそうだ。

不憫だと思いつつ、エインへの婚姻の話が余りにも無理矢理だつた事もあり、誰も同情はしなかつた。ただ、アンは不憫だ、と皆が思つていた。

そんな話を聞かされながらの手伝いは、ヴィヴィアンには少し苦痛だつた。

メイドたちも宛て付けている訳ではなく、ただ昔話をしているだけだが、ヴィヴィアンの耳には我が事のように心に突き刺さる話だ。アンは、エインが愛した女性だ。

愛していたのなら婚姻の話を断つた事実は矛盾にもなるが、そこはエイン個人の都合もあるう、何も責める点はない。それに、エインはアンには丁寧だつたと感じてゐる。

いつしか問うたとおり、エインはアンを愛してゐたに違ひなかつた。

だから、こんな事態になつて、こんな話を聞かされて……。

ヴィヴィアンには消化し切れぬ思いが止め処なく湧き起こり、胸の内を駆け巡つた。

そんな内心を抑えながら、淡々と手伝つていた着替えが終わつた。元通りにベッドに綺麗に寝かせ、最後にドレスの裾を整える。

ほうと、様々な思いを乗せて溜め息を吐くメイドの脇で、ヴィヴィアンは一人、ただただ重い溜め息を静かに吐き出した。

見つめるアンは、ただ白く、白く…。

そして、今までで一番、美しく見えた。

その事も、遺る瀬無さを助長した。

アンのイブニングドレスを畳んでいたメイドが、「戻りましょう」と声をかけた。

みな、ぞろぞろとアンの部屋を後にす。ヴィヴィアンはみなに続いて最後に部屋を出たが、何故か後ろ髪を引かれた。

廊下の途中でクリーブスに会い、エインからの言伝を聞いた。

「疲れているだろうから、夕方まで部屋で休みなさい。」

正直、有り難かった。

淡々と過ごしてはいるが、連日の移動と中途半端な緊張で、珍しいと自分で自覚するほどに疲れていた。

ヴィヴィアンは素直に従い、部屋で休ませてもう一つ事にした。考えたい事も山ほどある。

暫く、独りで静かに過ごしたかった。ベッドに横になり、天井を見上げる。

「…」

数日前は気が付かなかつたが、綺麗な金の刺繡の施された天井だつた。金糸が、時折揺れる蠟燭の炎できらめいた。何故蠟燭が灯っているかは、どうでもよかつた。

アンが死んだ。

エインの愛した、アンが。

アンが死ぬのは、これで何回目だろう…。

そのたびに、エインが哀しむのを見て來た。もう懲り懲りだと思つた。

だから規律を破り、任務を放棄して、何度も何度も旅をしている。何度も何度も繰り返した。

だが、何度もアンは死んだ。

そして、エインは哀しんだ。

アンを初めて見たのは、三度目の時だった。

エインはそれまで、アンの元へ同行させてはくれなかつた。

三度目に初めてアンに会い、その翌週に亡くなつた。何故、ベルトワーズの屋敷を訪れたのかは、今でもヴィヴィアンには解らない。ただ、エインが来いと言うのでついて行つた。

到着翌日、ヴィヴィアンはアンに呼び付けられた。

部屋を訪れると、アンはヴィヴィアンに一冊の書物を寄越したのだった。

「ヴィヴィにどうしても差し上げたいの。」

そう言つて手渡されたあの『シャングリ・ラ』。

エディングバラを出る時、あの本はエインの屋敷に置いて來た。だから、エインがあの本を持つてゐる筈がなかつた。

書物だ。多數発行されたものだから、この世にいくつもあるのは解つてゐる。

だが、そうではない。

あれはどうあっても、この世界にある筈のないものだった。

あれはどう見ても、自分がアンから受け取つた本だからだ。

何故、それをエインが持つてゐるのだ。

世界には、同じものは同時に存在しない。それが『決まり』なのだ。

ヴィヴィアンがこの世界にあの本を持ち込んだ時点で、この世界に元々あつたあの本は消えてしまつ。

これは、あの日、あのイトダと思しき男が言つていた『この世の理』に基づく理論だつた。

物質と反物質がお互いを消し合つついに、物一つ一つも、お互いを消す。だが、物体の場合、物質の理論と少しだけ異なるのだった。それは、世界にある物は、いずれもどちらか一方が必ず残るという事だつた。

ヴィヴィアンが元いた時間ではまだ解明されていない理論だつた

が、観測はされていた。

だから、エインがあの本を持っている筈がないのだ…。

解らない。

自分が見落としている事があるのか、それとも自分では判別の付かない事があるのか。

八度目…。

何もかもが、今までと少し違った。

自分が取る行動は当然だが、エインやアン、リュリュ、クリーブスも、クレリーも…。誰もが今までと少しすつ違った。

変わりかけている…。

語弊があるが、そんな感覚だ。

これが、希望に続く変化なら良い。

もし『シャングリ・ラ』もがそれに当て嵌まるのなら、今すぐ考えるのを止めるくらいだ。

何度も願った事を、また思つ。

生きて…。

仮令、共に生きられなくとも、エインだけは、生きて欲しい…。もう失うのは、嫌だ…。

「伯爵が粗方整理をしてくれてたんだね。」

バージルから受け取った遺産内訳の資料を眺めながら、エインが呟いた。

言葉通り。

自分とアンに何かあつた時のために、殆どすべてが無条件でエインにその権利が譲渡されるよう、法的に有効な書類をきちんとまとめていてくれていた。

バージルも頷いて、「君がすべき事は驚くほど少ないよ」と言つた。

「あとは、今夕の葬儀さえきちんと執り行い、アンの埋葬が終われば、君の役割も終わる。」

「何もかも、計算どおりなんだうな……。」

「だと思う。」

「で、君はどうするんだ？」

「まだ続けるかい？」

「……。」

「……そろそろ……、終わらせたらどうだう……。」

「一度目に会つたとき、お互い自然と素性を明かした。」

何か感じるものがあつたのかも知れなかつたのだが、秘密明かしは本当にすんなりと行われ、そして、お互いが同じように時間を流れて来た事を知つた。

だから、エインが繰り返し流れ続けている事も知つていて。バージルが他の者と違つるのは、それを咎めない事くらいだ。

「正直なところ、疲れたんじゃないか……？」

「俺なら、もう……。」

言いながら、エインの顔を伺い見る。よく掛けないものだと感心していた。

それ以外、目の前の男に思う事はなかつた。

「……今回が、ラストなんだ……。」

「……。」

「……どういう結果が出てもね……。」

「それは……、どういう……？」

意味が解らざる訳ねると、エインが視線を書類からバージルに移し、ふと笑つた。

「もう、流れられない。」

「……？」

「物理的に不可能だ。」

「舟”が動かない。」

「……動かない？」

「処理に必要な燃料がない。」

流れ来るものは、体一つで旅をする訳ではない。誰が名付けたのか、至極お手本通りの”舟”と言つ名の転送装置を使用する。古来よりお約束事とされて来た手段だ。

ただ、元より帰らない事を前提になっていた旅だ。何度も装置を使う事は想定されずに設計をしているため、燃料は元の時代のものを使用し補給は効かない。積載量も、到着後、暫く記録システムなどの装置を使用するための分を含め、約九回分となつていて。八回目の旅。最初の一回は、勿論”ここ”へ来るために消費した。もう残つていない。

「…。」

これで最後。

諦めるか否かという選択すら、エインには残つていない。

そう思うと、大層複雑な心境であろうとバージルは思った。

「エイン…。」

心配になりバージルが声をかけると、エインはくすくすと笑つて、バージルを見た。

「心配する事はない。」

元々、終わりの見えた旅だつたから…。

まだ、俺が求めた結末が出ないと決まつた訳じゃないしね…。

「だが…。」

言いかけて、やめた。

何を言つても、実感の出来ない、寄り添えない同情にしかならな
いからだ。

そんな気持ちを知つていてるエインは、さらに笑顔を作つた。

そしてソファを立つて、ベルトワーズのデスクに腰を下ろす。

”運命”や”決まり”は、異次元に違ひというのが俺の持論だ。そこに在ると解らなくとも、理論上はそこに在る。

でも、同時に理論が通じない物もある。

俺の望みは”箱の中の猫”ではないが、”箱の中の猫の理論”に

因つて叶う確率もまだある。

最後まで、やるだけさ…。」

「それで駄目だつたら、自分の運の無さを呪つだけだよ」と呟つて、エインは笑つた。

エインの夢を聞いたとき、"まさか"とも思つたし、"馬鹿な"とも思つた。

だが、それと同時に、この対極にある"もしかして"とこつ思いもあつた。

いつしかそれは"そつなつて欲しい"といつ自分の望みになり、願いになつた。

だから、エインを追う者が現れたと知つた時も、エインを護る事しか考えなかつた。

物理的に護衛をする事は不可能なので、情報を明かさない、くらいしか出来ないが、この世界ではそれ以上の身の守り方は無いに等しい。

「出来る事があつたら、言つてくれ…。」

この言葉をかけるのが、精一杯だ。

非力と言つ言葉が致し方のない言葉だと知つたのは、この世界に来てからだ。

だが、エインはこんな一言にも「有難う」と笑いかけてくれる。「取り敢えず、相続に關してはこれで手続きも終わり。

晴れてこの家は、正式にエイン・アンダーソンの物になつた。」

「ありがとう。」

「で、どうするんだ?」

「ん?」

エインが首を傾げた。

「ん? じゃないよ。」

ベルトワーズ伯だつて、何の理由もなく君にこの屋敷を譲えた訳じゃないだろ?」

「ああ、そうだね。」

それについては、これからゆっくり探す。
と言つても、田星は付いてるけどね。」

「？」

今度はバージルが首を傾げる。

エインは面白そうに肩を揺すつて笑うと、壁に飾られた一枚の肖像画を繫々と見つめた。ベルトワーズの肖像画だ。威厳と優しさを兼ね揃えた内面と、それが溢れた表情が、油絵によつてキャンバスに浮き上がる。

「この人がわざわざ遺してくれたもの。
総てに意味がある。

そこに、必ず、ヒントがあるはずだ……。」

口酸つぱく繰り返し諭して来た恩人が遺した物。

そこには、自分が欲しいものの答え、今まで逃げていて出来なかつた事をやるチャンスが、ある……。

夕刻。

空は橙色に染まり、遠くの木々が黒く翳つた頃、アンの葬儀が始まった。

急な事であつた割に、屋敷には多くの友人が訪れたが、いずれもベルトワーズ伯の友人で、アンの友人は少なかつた。外に出る事のなかつたアンには、友人を作る時間もなかつたのだった。

屋敷で各々アンに別れを告げ、この辺りの農場や従者たちが集まる教会の裏手にある墓地へ、アンを運ぶ。

友人は少なかつたが、いずれも心の通つた親しい者によつて、みな飾りではない涙を流して嘆いていた。

少少変わつたところはあつたが、優しいアンだつたから、その心に触れた者には、深く愛されていたようだ。

屋敷の従者たちもおいおいと泣き、アンとの別れを惜しんだ。その様子を、ヴィヴィアンは少し遠くで離れてみていた。

物見ではなく、居場所を見出せなかつたのだ。

アンに縋り付いて泣くほどアンと親交があつた訳ではないが、哀しくないというほど感情がなかつた訳でもない。だから、遠くでひとつそりアンとの別れを嘆くのがよいと思つたのだ。

だが、そうでないはずのエインまでも、ヴィヴィアンの隣で、葬儀の様子を見ていた。

アンの葬儀には何度か参列していたが、エインのこの反応は、"初めて" だつた。

愛する人が亡くなつたとあれば、目の前の参列者たちのように泣いてもよさそうだつたが、"今回" エインはそれをしなかつた。

何故かは解らないが、問う事も出来ず、ヴィヴィアンは隣のエインを気にしながら、葬儀を見守つた。

棺を埋め終え、墓標が掲げられると、参列者たちは次々花を添え

た。墓標はあつという間に花に覆われ、墓地の中でアンの場所だけが、花畠のようになつた。

参列者たちは花を添えると墓標に口付けをし、去つて行つた。

エインとヴィヴィアンはそれを最後まで見届け、最後の参列者が去つた後、やつと墓標に歩み寄つた。

脇にいたクリーブスから花を受け取り、添える。

そこでやつと、哀しみがとうとうと流れ出た。

喉元に込み上げる涙を抑える必要もなく、ヴィヴィアンは無表情のまま、一滴だけ涙を流し、それを指先で拭つた。

エインは花を置いた後も暫く墓標の前にしゃがんでいた。まるで、アンに何か話しかけているようだつた。

邪魔せぬよう、二歩ほど離れてエインの背中を見つめた。

長い長い沈黙が続き、ずいぶんと陽も落ちたところで、やつとエインが立ち上がつた。ヴィヴィアンを振り返り、「すまないね、待たせて」と詫びる。

「いえ…。」ヴィヴィアンはいつもどおりに返事をした。

エインが傍らのクリーブスに目配せをすると、クリーブスはヴィヴィアンとエインを交互に見、「どうぞ」と手で教会を示し、歩き出した。

続いて歩いて行くと、教会の前に馬車が停まつてゐるのが見えた。屋敷からここまで徒歩で来たので、迎えに来てくれたのだろう。

エインとヴィヴィアンは無言で馬車に乗り込み、少しの間、揺られた。

屋敷までは、徒歩なら一〇分ほどだったので、馬車なら数分だろう。夜闇ですっかり見えなくなつた窓の外の風景をぼんやりと眺める暇もなく、屋敷に着いてしまつた。

いつものように、クリーブスが馬車のドアを開け、エインが降り、差し出されたエインの手を借りて、ヴィヴィアンが降りる。クリーブスに続いて屋敷へ戻り、一階の廊下で別れる。

何度も何度も繰り返してきた事と、初めて見る光景や仕草…。

ヴィヴィアンはベッドにへたと座り込み、そのまま倒れた。

長く長く旅をして来たから、時折、記憶が曖昧になる。

初めて見る筈の事が、”以前”にもあつた気がしてくる。記憶と感覚を頼りに、判断をしたり、選択をしたりする。

忘れている事も、幾つもある。日々の暮らしを事細かにメモする事は不可能に近い。人の声や顔も、すべて覚えられる訳ではない。

イトダの例がその最たるものだ。

今回の旅でイトダの声を聞いても、あの田聞いたあの男の声とは気付けなかつた。

そういうえば、イトダと会うのは今回が初めてだ。初回のあの男を除いて、今まで一度もイトダとは会わなかつた。エインの旅に同行するようになったのは一度田からだが、イトダとは一度も会わなかつたのだった。エインも旅に出ることにヴィヴィアンを連れた訳ではなかつたから、ヴィヴィアンが同行していない時にイトダと会つていたのかも知れない。

イトダの事を思い出した事で、少なくとも、一度田のよつな思いはしなくとも済みそうな気がした。自分の手で、エインを殺してしまうような事態には、ならない気がした。

そして先日見た夢。

あれは、どこだつただろ?。

あの地下道と思しき薄暗い岩の道。どこからどう入つて…、否、

それ以前に、何故あそこへ向かつたのかすら、思い出せない。

あれは、どこなのだろう…。

考え込んで田を閉じると、何かに吸い取られるように、意識が途絶えた。

歩いている。

右手には小さなオイルランプを一つ持つてゐる。

薄暗い道を行く。じめじめと空気は湿り、どこからともなく温く体に纏わりつくようなねつとりとした風が吹いてくる。坑道のような道。でこぼこした岩を掘り進めたようなその道は、意外に広く天井も多い。

かつかつと自分の足音だけが響き渡る。あとは風が唸り声を上げるだけで、何も聞こえない。

この道の先には、アレがある。

この旅が、また失敗した時に必要なものが

あの人が隠した、大事なものが。

ずっと分岐点を探している。あの人を守り切るために必要な方法を探している。

コツ。

分岐かと思っていた道は、そうではなかつた。悉く失敗し、また旅をしなければならなかつた。

これで終わりにしたい。

もう心が持たないから…。

これで最期にしたい。

だから、アレを探す。今まで一度たりとも触れようと思わなかつたアレを。

アレに触れる事が、残された最後の可能性だから。

「コツ…。

それなのに、いつも邪魔をされる。

正体は解らない。彼らがなんなのか、解らない。

だが、彼らはいつもあの人を傷付けるために現れ、消えて行く。彼らの正体が解れば、あの人を守れるだろうか。

「う……。

足音がする。自分のものではない。

誰の足音…？

暗闇の坑道に響き渡る足音が、目の前で止まつた。気付けば少し広い空間に出ていて、ランプの灯りが足音の主を暗闇から少しだけ引き摺りだすように照らしていた。

…誰だ…。

無言で身構えると、足音の主が突如襲いかかつた。物凄い早さであつという間に目の前に現れたそれは、いつもある人を襲う、アレだつた。

影。

黒い体に浮かぶ二つの赤い光は、目だらうか。人の形をしているのに、形を明確に捉える事の出来ない、それは正しく影と喻えるに相応しい。

影が手を突き出してきた。

寸でのところで避ける。目のすぐ横を、銀色に光るナイフがひゅつと風を斬る。そのままバランスを崩した。足が縛れ、体制を整える事が難しいと判断した瞬間、影が空いている手で首を掴んで来た。片手で大人の自分を持ち上げ、あらう事が首を圧し折ろうとしている。

ぐうと喉が鳴る。肉が首の骨に擦れ、じゅぐじゅぐと気持ちの悪い音を立てる。恐怖と焦りに意識が飛び。

「…あ…。」

やつと出した声に、遠退き掛けていた意識が一瞬戻る。首が折れるのを覚悟の上で、体を揺らして勢いをつける。脚を思いつき振りると、幸運にも影の頭部に当たつた。カラーンと軽い金属が落ちる音がした。影が衝撃の反動で再度首を掴み圧つして来る。しかしあつ一度脚を振り上げると、影は腕を大きく振り、自分は壁に向かって投げつけられた。

「ぐつ……」

背中を強く打ち、呼吸が止まつた。咳き込もうにも、息が吸い込めない。

うつ伏せに倒れたまま動けない。

「う……く……つ。」

呻き声を出し、何とか呼吸を再開させようと試みる。

顔を上げると、落ちたランプの脇で影が同じように蹲っていた。頭部を抑えている。痛みを感じるのか。

そう思つていると、視界の端で、何かが光つた。銃だ。相変わらず呼吸すら満足に出来ない状態で、立ち上がる事も当然出来そうもない。だが、あれをどうにかして手中に入れたい。手を伸ばせば届きそうだ。

あれで、あいつを殺せば……。

ぐつと腕を伸ばす。少しづつ回復してきた呼吸のお蔭で、徐々に手に力が入る。上半身を起こし、腕で少し前に進み、腕を伸ばす。指先で地面を掴み、一ミリでも一センチでも腕を伸ばす。

そして、指先に銃が触れた。だが、次の瞬間。

目の前の銃を、何者かの足が踏み潰した。

はつとして見上げると、見慣れた顔が自分を見下ろし睨みつけていた。

その顔にはとてつもない怒りの表情が浮かび、嫌悪や憎しみと感じられるものを自分に向けていたようだつた。

全身を、哀しみと絶望が駆け巡つた。

この人を守るためにいる自分が、今、その人の嫌悪の対象になつてゐる。

それは、未だかつて経験した事のない絶望だつた。

目の前が暗闇になつて行く。体が深く沈み、地面に飲まれているような感覚に襲われた。

痛みと絶望で意識が遠のく。

何故…。

あなたを守る「うとしたの」…。

いつの間に眠ってしまったのか。

最近、眠ってすぐに目を醒ます事が多…。

かけたままにしてずれた眼鏡を直し、起き上がる。屋敷へ戻つて、ベッドに座つた途端に眠気に襲われた。抗い切れず横になつた瞬間に眠つたのだろう。

主を失つた屋敷はしんと鎮まり返り、窓の外の森から、虫の鳴く声が聞える。虫の音からすると、朝、かなり早い時間であろう。部屋の中も、カーテンの隙間から見える空も暗い。

エインはゆっくりとベッドの縁に座り、耳を澄ます。

何も聞えない。

まだ従者すら動き出す時間ではないのだろう。

昨夜の、バージルとの会話を断片的に思い出し、反芻する。

もうすぐ、魘され続けた夢の一つが終わる。何度も何度も繰り返し、見た悪夢の一つが終わる。

そうして一つずつ悪夢を超えて、確かめて行くしかない。地道で、非力に打ちひしがれる道のり。

救われる事があるのか、それすら解らぬ旅。

そして、確実に終わりの見える旅…。

あと少し。あと少しで、終わる。

眠氣から醒めてしまつた脳は、自分でも驚くほどに鋭く辺りの様子を取り込んでいる。

しんと「う空氣の音すら聞える。

表で何かが土を蹴つた。馬だろうか。厩舎は屋敷からずいぶん離れた場所にあるはずだが、他に何も聞えぬ今、そんな微かな音すら耳に入つて来る。

腰掛けっていたベッドの縁の感触が、急に気持ち悪くなつた。立ち上がり、カーテンを少しだけ開ける。まだ空は暗く、太陽が昇る気配もないが、空気が澄んでいるので朝はもう間もなくのようだ。

窓辺は寒く、それがさらに精神を研ぐ。

屋敷の中の人の気配、まだ眠っている人の気配を感じる。誰かが目を醒まして、ベッドの上で伸びをした気配。誰かがベッドから立ち上がり、のそのそと身支度を始めた気配。今日の天気を確認するため、カーテンをそつと寄せる気配…。

その中に、あの人の気配がない事に気付いた。
いない。屋敷に…。

まさか。

悪夢を思い出す。

まさか、あの場所へ…？

足音を殺し、隣の部屋へ向かうが、やはり気配はない。

いない。

あの場所へ行かなければ。

あの、花の咲き乱れる庭の…。

あの人気がここに来た理由。

あの時は解らなかつたが、今なら自分にも解る。

花の咲き乱れる庭の、このベルトワーズの別邸。遠くから潮騒が聞え、潮の香りが胸焼けするほどに漂つこの屋敷の地下には、秘密の部屋がある。

別邸の、普段は誰もが目もやらない部屋。位置が悪すぎて、納戸

と思われていいその部屋は、ベルトワーズの書斎だ。朝陽がまだ登らず暗いままの廊下を、そこへ向かって歩く。

扉を開けると、埃と黴臭い空気が舞う。他の部屋に比べるまでもなく、ここは意図的に掃除がされていない。執事のクリーブスも、この部屋に立ち入る事すらないのだろう。それはベルトワーズの言い付けなのかは解らないが、明らかに数年の間、誰も立ち入らず、ここは締め切つたままだったようだ。

窓のない部屋。

蜘蛛が巣の張つた本棚。
埃で真っ白になつた机。

その足元に、秘密の地下室への入り口がある。

しゃがみ込んで床を撫でると、一箇所だけでつぱりがあった。ぐいと引っ張り上げると、床の一部が持ち上がり、ぶわと音を立てて空気が隙間から見える闇へ吸い込まれて行つた。ぽかりと空いた、床穴。

急な階段は、ただ土や石を掘り削つただけの雑多なものだつた。ヴィヴィアンは部屋を見回した。穴の中は暗いので、灯りが欲しかつた。

一三度見回すと、書棚の片隅に埃を被つていないオイルランプが見えた。部屋には人が出入りした痕跡などないのに、このランプだけが綺麗なままだつた。やや不審に思いながらも、屋敷をうろうろとする事も出来ないので、致し方なく手に取り、ポケットに忍ばせておいたマッチで火を点す。

そして穴の階段をゆっくりと下り始めた。

暗闇の中を、ひたすらに歩く。

右手には小さなオイルランプを一つ持つている。

薄暗い道を行く。じめじめと空気は湿り、どこからともなく温く体に纏わりつくようなねつとりとした風が吹いてくる。坑道のような道。でこぼことした岩を掘り進めたようなその道は、意外に広く、天井も高い。

かつかつと自分の足音だけが響き渡る。あとは風が唸り声を上げるだけで、何も聞こえない。

この道の先には、アレがある。

この旅が、また失敗した時に必要なものが。

あの人が隠した、大事なものが。

ずっと分岐点を探している。あのを守り切るために必要な方法を探している。

コツ。

足音に耳を傾け、過去を思い耽る。

分岐かと思っていた道は、そうではなかつた。

悉く失敗し、また旅をしなければならなかつた。

これで終わりにしたい。

もう心が持たないから…。

これで最期にしたい。

だから、アレを探す。今まで一度たりとも触れようと思わなかつたアレを。

アレに触れる事が、残された最後の可能性だから。

コツ…。

それなのに、いつも邪魔をされる。

正体は解らない。彼らがなんなのか、解らない。

だが、彼らはいつもあの人を傷付けるために現れ、消えて行く。

彼らの正体が解れば、あの人を守れるだろうか。

暗闇の中、確信を持つて走っている。

右手に持つ小さなオイルランプが、激しく揺れる。
薄暗い道を行く。じめじめと空気は湿り、どこからともなく温く
体に纏わりつくようなねつとりとした風が吹いてくる。坑道のよう
な道。でこぼことした岩を掘り進めたようなその道は、意外に広く
天井も高い。

かつかつと自分の足音だけが響き渡る。あとは風が唸り声を上げ
るだけで、何も聞こえない。

この道の先には、アレがある。

この旅が、また失敗した時に必要なものが。
あの人気が、そして自分が、最後の可能性と信じた、大事なものが。
そして、それを求めてこの道を行くあの人命を奪う、アレも。
何度も失敗したか。

何度も間に合わなかつたか。
何度も、この道を走つたか。

暗闇の向こうで、ざさりといつ音が聞こえた。次いで呻き声が擦
る。

ああ、間に合わない……。もつと早く……。

コシ……。

不意に足音がした。自分のものではない。

誰の足音……？

暗闇の坑道に響き渡る足音が、目の前で止まった。気付けば少し
広い空間に出ていて、ランプの灯りが足音の主を暗闇から少しだけ

引き摺りだすように照らしていた。

「誰だ？」

無言で身構えると、足音の主が突如襲いかかった。物凄い早さであつという間に田の前に現れたそれは、いつもある人を襲う、アレだった。

影。

黒い体に浮かぶ二つの赤い光は、目だろうか。人の形をしているのに、形を明確に捉える事の出来ない、それは正しく影と喻えるに相応しい。

影が手を突き出してきた。

寸でのところで避ける。田のすぐ横を、銀色に光るナイフがひゅつと風を斬る。そのままバランスを崩した。足が縛れ、体制を整える事が難しいと判断した瞬間、影が空いている手で首を掴んで来た。片手で大人の自分を持ち上げ、あらう事が首を押し折ろうとしている。

ぐうと喉が鳴る。肉が首の骨に擦れ、じゅくじゅくと気持ちの悪い音を立てる。恐怖と焦りに意識が飛ぶ。

「あ…。」

やつと出した声に、遠退き掛けていた意識が一瞬戻る。首が折れるのを覚悟の上で、体を揺らして勢いをつける。脚を思いつきり振ると、幸運にも影の頭部に当たった。カラッと軽い金属が落ちる音がした。影が衝撃の反動で再度首を掴み圧つして来る。しかしう一度脚を振り上げると、影は腕を大きく振り、自分は壁に向かって投げつけられた。

「ぐつ…！」

背中を強く打ち、呼吸が止まった。咳き込もうにも、息が吸い込めない。

うつ伏せに倒れたまま動けない。

「う…、く…。」

呻き声を出し、何とか呼吸を再開させようと試みる。

顔を上げると、落ちたランプの脇で影が同じように蹲っていた。頭部を抑えている。痛みを感じるのか。

そう思つてゐると、視界の端で、何かが光つた。銃だ。相変わらず呼吸すら満足に出来ない状態で、立ち上がる事も当然出来そうもない。だが、あれをどうにかして手中に入れたい。手を伸ばせば届きそうだ。

あれで、あいつを殺せば……。

ぐつと腕を伸ばす。少しづつ回復してきた呼吸のお蔭で、徐々に手に力が入る。上半身を起こし、腕で少し前に進み、腕を伸ばす。指先で地面を掴み、一ミリでも一センチでも腕を伸ばす。

そして、指先に銃が触れた。だが、次の瞬間……。

激しく揺れる視界の中で、小さな灯りが浮かんだ。ランプが落ちている。

まさか……。

灯りに向かつて走り続ける。田指す僅かな灯りに影が浮かんだ。

アレだ……。

また間に合わなかつたのか……？

走る。

岩肌の陰に、人の手が見えた。倒れている。

ああ……。

何かが込み上げて来る。

喉が締め付けられる。

涙が溢れそうになる。

間に合つてくれ……。

足音に気付き、影がこちらを見て、すっと闇に溶けて消えかけた。

「待て……！」

切れ切れの呼吸に無理をさせ、影に怒鳴りつけると、影がぴくり

と止まつた。

同時に、足元でざりと土を引っ搔く音がした。
影を視界に収めたまま、足元をちらりと見ると、倒れた手が落ちた銃を握んでいた。

影を殺そうとしている。

それではいけない…。

そう…。それではいけないのだ…。

だから…。

目の前の銃を、何者かの足が踏み潰した。
はつとして見上げると、見慣れた顔が自分を見下ろし睨みつけていた。

エイン…。

その顔にはとてつもない怒りの表情が浮かび、嫌悪や憎しみと感じられるものを自分に向けていた。

全身を、哀しみと絶望が駆け巡った。

彼を守るためにいる自分が、今、彼の嫌悪の対象になつていて。それは、未だかつて経験した事のない絶望だつた。

目の前が暗闇になつて行く。体が深く沈み、地面に飲まれているような感覚に襲われた。

痛みと絶望で、ヴィヴィアンの意識が遠のく。

何故…。

あなたを守るひとしたの…。

何故…。

違う…。

それではいけない…。

倒れているヴィヴィアンは、絶望の色に溢れた瞳で自分を見上げている。

言葉では、説明出来ない。

でも、それではいけないのだ…。

その時、自身がどんな顔でヴィヴィアンを見下ろしていたのか、エインは自覚していない。

ただ、ヴィヴィアンの何故と問い合わせる表情で、胸が締め付けられた。

やがて、ヴィヴィアンが気を失い、ぐつたりとしたところで、エインは影に視線を戻した。

影は何も言わず、だが、憂いと悲しみを帯びた表情でエインを見ていた。

その顔はあまりに見慣れていて、そして美しくて…。

何より、自分の…。

「君がいる限り、ヴィヴィアンは生きられない…。でも、俺には君は殺せない…。」

殺せる訳がない。

目の前の影は、間違いなく、自分の…。

エインが苦渋の表情で睨み付けると、影は少しだじりつき、そしてゆっくり闇に解けて消えた。

足音も立たず消えた影は、やがてそこにいた気配すら完全に消し去ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5701q/>

教授とシャンバラの時計

2012年1月13日14時48分発行